醉顚只要裝風景。(四)　醉顚只要す風景を裝ふを、
莫向人前自洗磨。　人の前に向つて自ら洗磨すること莫れ。

贈張旭詩に、興來書自聖、醉後語猶顚。【三】風景　風采の意。晉書の劉毅傳に、能令義士宗其風景。

【詩意】王維の詩に、醉歌田舍酒、笑讀古人書とあるが、我は藤の牀を擊つて拍子を取り、君は歌を唱へる、是れ我が醉鄉の歡樂である。さて、趙郎中は醉へば歌ひ、歌が畢ると、毎にいふ、明年は六十である、君を奈何せんと。口癖のやうにいふ。凡そ醉顚の餘は、只、風采を裝ふことが大切であるが、人の前に向つて、自ら洗磨するやうなことがあつてはならない。

畢、輒曰、明年六十矣。李太白の青山獨酌詩に、玳瑁筵中懷裏醉、芙蓉帳底奈君何。【三】醉顚　高適の

次韻子由與顏長道同遊百步洪相地築亭種柳

子由顏長道と同じく百步洪に遊び、地を相、亭を築き柳を種うるに次韻す

平明坐(五)衙不暖席。　平明衙に坐して席を暖にせず、
歸來閉閣閒終日。　歸り來つて閣を閉ぢて閒に日を終ふ。
臥聞客至倒屣迎。　臥して客の至るを聞いて屣を倒にして迎ふ。
兩眼蒙籠餘睡色。　兩眼蒙籠として睡色を餘す、
城東泗水步可到。　城東の泗水步して到るべきも、
路轉河洪翻雪白。　路河洪に轉じて雪白を翻へす。
安得青絲絡駿馬。　安んぞ青絲駿馬を絡ふことを得て、
蹙踏飛波柳陰下。　蹙踏して波を飛ばす柳陰の下、
奮身三丈兩蹄間。　身を奮ふ三丈兩蹄の間、
振鬣長鳴聲自乾。　鬣を振つて長鳴して聲自ら乾かん。
少年狂興久已謝。　少年の狂興、久しく已に謝し、
但憶嘉陵繞劍關。　但憶ふ嘉陵の劍關を繞るを。
劍關大道車方軌。　劍關の大道車軌を方ぶ、
君自不去歸何難。　君自ら去らず歸ること何ぞ難からん。
山中故人應大笑。　山中の故人應に大に笑ふべし、
築室種柳何時還。　室を築き柳を種るて何れの時か還らん。

【字解】【一】顏長道　宋史に、顏復、字長道、魯人顏子四十八世孫、父太初、以名儒爲國子監直講。嘉祐中、試中書第一、賜進士、元祐初、起太常博士、累遷中書舍人、兼國子祭酒。【二】百步洪　名勝志に、百步洪、在徐州城東南二里水中、亂石激濤凡數里。【三】相地　史記、周紀に、后稷相地之宜、宜穀者稼穡焉、民皆法則之。【四】平明　平旦といふに同じ。史記、留侯世家に、五日平明良往。一本に平生に作る。【五】坐衙不暖席　白樂天の喜鵲詩に、枕上休聞報、坐衙不暖席。【六】閉閣云云　漢書、汲黯傳に、黯多病、臥閤內、不出歲餘、東海大治。終日、一本に臥疾に作る。【七】倒屣迎　陳壽三國志、魏、王粲傳に、左中郎將蔡邕見而奇之、時邕才學顯著、貴重朝廷、聞粲在門、倒屣迎之。【八】蒙籠　郭璞、遊仙詩に、蒙籠蓋二山。文選に籠を蘢に作る。【九】泗水　九域志に、徐州泗水、今呼爲清河。【一〇】青絲絡駿馬　杜子美の詩に、青絲絡頭爲君老。【一一】奮身三丈　三國志注に、劉備乘馬名的盧、走墮檀溪中、(襄陽城西)溺不得出、備急曰、的盧、今日死矣、可努力、乃一踴三丈、遂得出。【一二】兩蹄間　史記、張儀傳に、秦馬之良、探前趹後、蹄間三尋、騰者、不可勝數。【一三】長鳴　戰國策に、楚國謂春申君曰、騏驥遇伯樂、俯而噴、仰而鳴、以伯樂之知己也、今、君獨無意使僕長鳴乎。【一四】嘉陵繞劍關　九域志に、嘉陵江在三果州。一說に、出大散關、南行劍門關、東向閬中、與涪水會。元和郡縣志に、劍關道、其山削壁千丈、下瞰絕壑、飛閣以通行旅。

【五】車方レ軌　漢書一、李左車説二成安君一曰、井陘之道、車不レ得レ方レ軌、騎不レ得レ成レ列。戰國策に、蘇秦説二齊宣王一曰、亢父之險、車不レ得レ方レ軌、馬不レ得二並行一。【六】應二大笑一　李太白の詩に、仰レ天大笑出レ門去。

【題義】此詩は熙寧十年六月、東坡が子由。顏復と同じく百步洪に游んで、地を相し、亭を築き、柳を種ゑた時の作である。紀昀いふ、突插二一波一、便有二生動之致一、此避レ平避レ板之意と。欒城集、陪二子瞻一遊二百步洪一詩に、城東泗水平如レ席、城頭遠山銜二落日一、輕舟鳴レ櫓自生レ風、渺渺江湖動二顏色一、中洲過盡石縱橫、南去淸波頭盡白、岸邊怪石如二牛馬一、銜レ尾舳艫誰敢下、役人出沒須臾間、卻立二沙頭一手足乾、客舟一葉久未レ上、吳牛回レ首良間關、風波蕩潏未レ可レ觸、歸來何事嘗二艱難一、樓中吹レ笛暮煙起、出レ城騎火催レ君還とある。

【詩意】夜が明けて、平旦、一たび役所に坐したが、席の暖まる間もなく、歸り來つて閣を閉ぢ閒に一日を終へた。氣も揚らず臥して居たが、客が來て、門に在ると聞いて、あわてて草履を倒に穿いて出迎へたのである。兩眼がおぼろげで、まだ睡氣が餘つて居る。徐州の城東を流れて居る泗水へは、歩いて到るべきも、路を河洪（百步洪）に轉じて、水中を渡る。亂石激濤、雪白を飜へして居る。どうか、青絲を駿馬の頭に絡うて、蹴踏して波を柳陰の下に飛ばしたいものである。昔、劉備は的盧と名くる愛馬に騎つて走つたとき、誤つて襄陽城の西、檀溪中に墜ちた。馬は溺れて出ることが出來なくなつた。劉備曰く、的盧よ、かくては今日死ぬるのだ、努力してくれと。言葉の未だ終らない內に、馬は一躍三丈、遂に出ることが出來たとある。馬の良いものは、前を探り、後を趺み、蹄の間三尋といふことである。どうか的盧のやうな良馬に乘つて、鬣を振つて長鳴し、聲も自ら乾くやうにありたい。併し少年時代の狂興も、今は已になくなつたので、ただかの嘉陵江の劍關を繞つて居る絕勝を憶ふのである。劍關の道、其の山は削壁千丈で、下は絕壑を瞰る。それで飛閣を架けて旅人を渡すということである。併し飛閣は大道をなして車は軌を方べて行くことが出來る。故に君は自ら去らないのである。去らうとすれば、何の難いことがあらうぞ。山中の故人も定めし笑つて居るであらう。百步洪に室を築いたり、柳を種ゑたりして、一體、何時還らうとするのであるか。

次韻李邦直感舊

李邦直の感舊に次韻す

駒騎傳呼出跨坊。　駒騎傳呼出でて坊に跨る、
簿書塡委入充堂。　簿書塡委入つて堂に充つ。
誰敎按レ部如二何武一。　誰か部を按ずる何武の如からしむる、
只許淸樽對二孟光一。　只許す淸樽孟光に對するを。
婉娩有レ時來入夢。　婉娩時あり來つて夢に入り、
溫柔何日聽レ還レ鄉。　溫柔何れの日か鄉に還るを聽されん。

【字解】【一】李邦直　李淸臣。字は邦直、進士に擧げらる。神宗、召して兩朝國史編修官となす。淸臣、少うして才名を負ふ。一日、往いて韓琦に謁す。其姪報じて曰く、大叔、方に睡る、客且つ去れと。淸臣因つて詩を壁に題していふ、公子乘レ閑臥二碧幬一、白衣老吏慢二寒儒一、不レ知夢見周公候、曾說當年吐レ哺無と。琦、之を

酸寒病守尤堪笑。
千歩空餘僕射場。

酸寒病守尤も笑ふに堪へたり、
千歩空しく餘す僕射の場。

欲レ得二佳壻一、無レ易二邦直一、巨源一、於レ是首肯、卒以歸レ之、故此感舊詩、有二入レ夢還レ鄉之戯一、又、長短句云、誰教二幽夢裏插二他花一、亦此意也と見ゆ。邦直の元配は韓氏、巨源の女は繼室である。【二】感舊　後漢書に、非人懷二感舊之哀一。【三】騶騎　廐御をいふ。漢、東方朔傳注に、騶、奉廐之御也、後以爲レ騎、謂二之騶騎一。【四】傳呼　前漢、蕭望之傳に、望之出入、蒼頭廬兒、下レ車趨レ門、傳呼甚寵。【五】出跨レ坊　跨は乃ち凌跨の跨。王注に出而騶騎傳呼、則凌二跨坊巷一、入而簿書塡委、則充二滿堂廳一。或はいふ、跨坊は、籠街の義と。籠街は、輿衞の盛を形容す。唐書、溫造傳に、舒元褒等言、元和時、中丞呵止、不レ過二半坊一、今乃至二兩坊一、謂二之籠街喝道一。【六】塡委　文選、劉公幹の詩に、職事煩塡委、文墨紛消散。【七】充レ堂　陸士衡、歎逝の賦に、居充レ堂而衍レ宇、行連レ駕而比レ軒。【八】何武　字は君公。官に居り、好んで士類を奬む。士、多く之に歸す。居る所、赫赫の名なくして、去て後、常に思はる。武、揚州刺史となりて、部を行り、九江郡守戴聖が不法の狀を得。聖、懼れて自ら免ず。後、武を朝に毀る。聖の子、賓客、盜賊を以て廬江に繫がる。武、心を平にして之を決し、死せざるを得たり。聖、大に慚服す。漢書、何武傳に、行レ部必先即二學宮一、見二諸生一、試二其誦論一、問以得失一、然後入二傳舍一、出レ記、問二墾田頃畝五穀美惡一、已廼見二二千石一、以爲レ常。【九】孟光　梁鴻の妻。狀、肥醜にして黑く、力、石臼を擧ぐ。鴻と共に霸陵の山中に隱る。李清臣本傳に、清臣自レ幼敏悟、韓琦以二兄子一妻レ之、則邦直元配爲レ韓、而巨源之女、爲二繼室一耳。【一〇】婉娩　婦容のおとなしく、しとやかな貌。禮、內則に、女子十年不レ出、姆教二婉娩聽從一。韓退之の詩に、孤遊懷二耿介一、旅宿夢二婉娩一。【一一】溫柔　禮、經解に、溫柔敦厚、詩教也。趙飛燕外傳に、飛燕進二合德一、成帝見二合德一曰、吾當レ老二此溫柔鄉一、不復效二武皇老二白雲鄉一也と。合德は趙飛燕の姉妹。前漢、成帝の時、趙飛燕合德の姉妹、一は后となり、一は昭儀となつた。【一二】酸寒　東坡の詩に、故人留飲慰二酸寒一。【一三】千歩僕射場　張建封は擊毬の戯を好む。韓退之は幕に佐たりしかば、書を以て之を諫む。韓退之の張僕射に贈る詩に、汴泗交流郡城角、斷場千歩平如レ削。

【題義】李清臣が感舊の詩に次韻したのである。紀昀いふ、語自流利、然無二出色之處一と。査愼行いふ、前六句、皆說二邦直一、結處則先生自謂と。

【詩意】昔を思ひ出すと、まことに感に堪へない。出でては廐御となつて傳呼し、坊巷に跨る。是を籠街喝道といふ。籠街とは、輿衞の盛なるをいひ、喝道とは行くに先を拂ふをいふ。又、入つては簿書が堂廳に塡充する。職事文墨の煩多なるを思はしめる。昔、漢の何武は揚州の刺史となつて、部を行つたとき、九江郡守戴聖の不法を知つた。聖は懼れて自ら免じ、後、武を朝廷に毀つた。聖の子の賓客が罪を以て獄に繫がれたとき、武は舊怨を思はず、心を平にして之を決したので、聖は大に慚服したといふ話がある。誰か部を按ずること、この何武の如からしめるものぞ。又、ただ許す清樽孟光に對するをといふ意は、李清臣が韓氏の女壻となつたことをいふのである。清臣の本傳に據ると、韓琦は其兄の子を以て清臣に妻はす、卽ち清臣の元配である。後、巨源の女も、清臣に歸したが、これは繼室である。清臣は甄福である。韓退之の詩に、旅宿夢二婉娩一とあるが、おとなしくしとやかな婦容が時あつてか來つて夢に入るであらう。前漢の成帝は、合德を喜び、謂ひて溫柔鄉となし、吾は是鄉に老いんと言つたが、今、清臣も故山の妻を夢み、何れの日か我が溫柔鄉に還るを聽されるであらうかと思はれるであらう。之に反して此の酸寒の病太守(自らを指す)は、尤も笑ふに堪へる。廣さ千歩もある平地の張僕射が擊毬の戯をなすに好い場所を空しく餘して居る。(韓退之の詩にも、孤遊懷二耿介一とあるが、思へば惜しいことである。)

與梁先舒煥泛舟得臨釀字二首

梁先・舒煥と舟を泛べて、臨釀の字を得たり　二首

彭城古戰國。孤客勸登臨。
汴・泗交流處。清潭百丈深。
故人輕千里。繭足來相尋。
何以娛嘉客。潭水洗君心。

彭城古戰國、孤客登臨に勸む。
汴・泗交流るる處、清潭百丈深し。
故人千里を輕んじ、繭足來りて相尋ぬ。
何を以てか嘉客を娛ましめん、潭水君が心を洗ふ。

【字解】【一】梁先　字は吉老、本集の李憲仲哀詞引中に見み。【二】舒煥　字は堯文、時に徐州教授たり。烏臺詩案に見ゆ。【三】彭城　徐州である。古の有莘氏の國で、春秋より唐末に至るまで、戰爭の多かつた地。漢の高祖・項羽・劉裕、皆、彭城に起つた。水經注に、彭城、殷大夫老彭之國也、於春秋爲宋地、成十八年、楚伐宋并之、以封魚石云云。名勝志に、秦始置彭城縣、屬泗水郡、漢高祖改泗水爲沛縣、又分沛郡立楚國、因置徐州。【四】汴泗交流　水經注に、泗水又南、淮水入焉、經彭城縣故城。名勝志に、泗水、源出山東泗水縣、南流過沛縣、東南合沛水、循城、東南淺淮。汴水自河南浚儀縣界、東流過蘭縣、至州城東北、與泗水合、二水匯而爲潭、極深、有龍居之。【五】清潭　李太白の贈楚司馬詩に、百尺清潭寫翠蛾。潭は淵。【六】輕千里　晉、嵇康傳に、呂安服其高致、每一相思、千里命駕。【七】繭足　繭は足胝をいふ。王注に、吳入郢、申包胥、走秦乞師、足皆生繭。戰國策に、蘇秦、足重繭、日百而舍、造外闕、願見於前、口道天下之事。【八】洗君心　李太白の詩に、君思顯水祿、忽復歸嵩岑、歸時莫洗耳、爲我洗君心。

【題義】東坡が梁先や舒煥と舟を泛べ、互に韻字を分つて詩を作つたとき、臨・釀の二字を得たので、此の二首が出來た。紀昀は前詩を評して十字渾成といひ、後詩を評して出手太快、結二句尤率といつて居る。

【詩意】此詩は梁先に與へたのである。彭城は古の大彭氏の國で、春秋時代から唐の末に至るまで、戰爭の多かつた地である。漢の高祖も、項羽も、南朝宋の劉裕も、皆、彭城から起つた。孤客は古を懷うて、登臨に勸む。泗水は源を山東に發し、南流して徐州に至り、東北、沛水を合せ、東南、淮水に達す。汴水は河南より東流して蕭縣を過ぎ、州城の東北に至り、泗水と合す。二水は匯（水流が廻旋する）して潭となり、深さ百丈、龍が居るといふことである。故人は情に厚く、千里を遠しとしないで、足に繭（足胝）を生じ、來つて相尋ねる。何を以て佳客を娛ましめよう。この清潭の水で、耳を洗はないで、君の心を洗ふやうに致したい。

老守厭簿書。先生罷函丈。
風流魏晉間。談笑羲皇上。
河洪忽已過。水色綠可釀。
君無輕此樂。此樂清且放。

老守は簿書を厭ひ、先生は函丈を罷む。
風流魏晉の間、談笑羲皇の上。
河洪忽ち已に過ぎ、水色綠釀すべし。
君此樂を輕んずること無かれ、此樂は清くして且つ放なり。

【字解】【一】厭・簿書　漢書、賈誼傳に、大臣特以簿書不報期會之間、以爲大故。簿書は、官府の錢穀記入をいひ、期會は、日限を定めて租稅を徵收するをいふ。【二】罷・函丈　禮、曲禮に、非飲食之答、則布席、席間函丈。鄭氏謂ふ、講問之答也と。

【三】風流魏晉間　魏・晉の間、士は清談を尚び、逢節を慕ひ、名教・吏事を視て俗と爲す。晉、樂廣傳に、天下言二風流一者、謂二樂王一爲二稱首一焉。【四】羲皇上　晉書、隱逸傳に、陶潛嘗言、夏月虛閑、高二臥北窗下一、清風颯至、自謂羲皇上人。【五】河洪　一に洪河に作る。

【詩意】此詩は舒煥に與へたのである。老いた太守の我は、物事に懶く、簿書の事務なども厭になつた。又、先生と弟子との席は、間に一丈の餘地を容れるといふは古からの禮法である。其の禮法も、兎角、煩はしいので罷めにした。凡そ魏晉の間は、士大夫の風が、清談を尚び、曠達を慕ひ、名教や吏事を俗の事となして之を卑しんだのである。言ひ換へれば、うるさい俗事を脫して世外に談笑し、太古羲皇上の人となつたのである。さて河洪も忽ち已に過ぎ去つて、紅塵なく、水の色は綠にして心地よく、酒を釀すことも出來る。君よ、此の塵外の樂を輕んじてはならない。此の樂は清くして且つ束縛がない。

次韻答二邦直子由一五首　韻に次して邦直・子由に答ふ　五首

簿書顚倒夢魂間。
知我疎慵肯見原。
閒作閉門僧舍冷。

簿書顚倒す夢魂の間、
知る我疎慵肯て原さるるを。
閒作門を閉ぢて僧舍冷かに、

【字解】【一】疎慵　疎懶といふに同じ。白樂天の詩に、世名檢束爲二朝士一、心性疏慵是野夫。【二】見原　原は宥す意。晉書、潘岳傳に、會二詔原一之。原宥と熟す、蔡邕の文に、雖レ見二原宥一、仰愧二先臣一、傷肌入レ骨。【三】閒作　班固、兩都賦序に、董仲舒・蕭望之等、時時閒作。謝靈運の詩に、臥レ病豐二暇豫一、翰墨時閒作。【四】僧舍冷　韋應物の郡齋詩に、惟我出レ塵意、賞愛似二僧家一。【五】忘懷　白樂天の詩に、臥レ枕一卷書、起嘗一杯酒、書將レ引二昏睡一、酒用扶二衰朽一。同じく晚庭逐レ涼詩に、引レ睡臥看レ書。【六】杯酒逢レ人共　白樂天の閒游卽事詩に、逢レ人共二杯酒一。【七】引レ睡　白樂天の詩に、臥レ枕一卷詩に、忽發二狂言一驚二滿坐一。【九】喙三尺　莊子、徐無鬼篇に、邱願有二喙三尺一。唐、馬異は盧仝交を結ぶ詩に答へて、與レ君俛レ首大時嘲レ之日、說レ事喙長三尺、判レ事手重五斤。【一〇】却須レ呑　東坡の自注に、邦直屢以レ此見レ戒。杜牧之の詩に、撩レ頭雖レ欲レ吐、到レ口卻成レ呑。

臥聞吹レ枕海濤喧。
忘レ懷杯酒逢レ人共。
引レ睡文書信レ手翻。
欲レ吐二狂言一喙三尺。
怕二君嗔一我却須呑。

臥して聞く枕を吹く海濤の喧すしきを。
懷を忘れ杯酒人に逢うて共にし、
睡を引いて文書手に信せて翻へる。
狂言を吐かんと欲して喙三尺、
君が我を嗔るを怕れ却つて須らく呑む。

「べし。」

駱賓王序に、忘レ懷在二眞俗之中一。【八】杯酒逢レ人共　白樂天の閒游卽事詩に、逢レ人共二杯酒一。【七】引レ睡　白樂天の詩に、臥レ枕一卷詩に、忽發二狂言一驚二滿坐一。【九】喙三尺　莊子、徐無鬼篇に、邱願有二喙三尺一。唐、馬異は盧仝交を結ぶ詩に答へて、與レ君俛レ首大時嘲レ之日、說レ事喙長三尺、判レ事手重五斤。【一〇】却須レ呑　東坡の自注に、邦直屢以レ此見レ戒。杜牧之の詩に、撩レ頭雖レ欲レ吐、到レ口卻成レ呑。

【題義】此詩は熙寧十年六月の作である。李清臣が部を按じて徐州に來り、蘇子由を邀へ、南城亭上に對臥して唱和した。此五首は其の諸詩に次韻したのである。王文誥いふ、李清臣、小人之尤者、自後爲二胡越一、不二復合一矣と。

【詩意】夢魂は塵を出で、又、塵に入つて、簿書も夢魂の間に顚倒して居る。是れ我が閑居である。白樂天の詩に、心性疏慵是れ野夫とあるが、簿書を顚倒して居つても、是れ野夫の疎慵だとして、我

は宥されるであらう。かくて我は門を閉ぢて僧舍冷かに、時時翰墨を弄して閒作を試みる。臥して聞くと、海濤は、枕を吹いて喧しい。閒游の我は眞俗の中に在つて、懷を忘れ、人に逢うて杯酒を共にする。又、睡を引いて、臥して書を看るも、文書は手に信せて翻へる。狂言を吐かんと欲して喙三尺、而も口に到つて却つて呑むのは、君が我が狂言を嗔るを怕れるからである。（劉辰翁いふ、以レ我爲二輕率一と。）

城南短李好交遊。
箕踞狂歌不自由。
尊主庇民君有道。
樂天知命我無憂。
醉呼妙舞留連夜。
閒作清詩斷送秋。
瀟灑使君殊不俗。
樽前容我攬須不。

城南の短李交遊を好み、箕踞狂歌自由ならず。主を尊び民を庇ふ君道あり、天を樂み命を知る我憂なし。醉呼妙舞留連の夜、閒作清詩斷送の秋。瀟灑使君殊に俗ならず、樽前我を容れて須を攬るや不や。

【字解】【一】交遊　史記に、朋友交遊、久不二相見一、卒然相覩、歡然道レ故。【二】箕踞　兩足を投げ出して坐る。史記、刺客傳に、倚レ柱而笑、箕踞以罵。劉伶の酒德頌に、奮レ髯箕踞。【三】狂歌　杜子美の詩に、耽レ酒須二微祿一、狂歌託二聖朝一。【四】不二自由一　一本に總自由に作る。【五】尊レ主庇レ民云云　舊唐書に、尊レ主庇レ民者、遭レ時也。王文誥いふ、邦直非二尊レ主庇レ民者一、觀二下句一、似レ有二諷意一。【六】樂レ天知レ命　列子、仲尼篇に、顏回曰、昔聞二之天子一、日、樂レ天知レ命、故不レ憂。【七】醉呼　韓愈が鄭羣墓誌に、歌レ笙彈レ箏、飲レ酒舞歌、詼調醉呼、連二日夜一不レ厭。劉克莊の詩に、醉二呼猪令一爲二倉父一、狂二喚桓公一作二老兵一。【八】妙舞　謝朓の詩に、清歌留二上客一、妙舞送レ將レ歸。杜子美の詩に、妙舞送迎夜未レ休。東坡の自注にいふ、邦直家中、舞者甚多と。【九】留連夜　淮南子に、愚夫蠢婦、皆有二留連之心一。杜子美の詩に、留連春夜舞。【一〇】閒作　謝靈運の詩に、翰墨時閒作。前詩に出づ。【一一】斷送　送り過す意。韓退之の詩に、斷二送一生一唯有レ酒。白樂天の詩に、留連燈下明猶飲、斷送尊前倒卽休。【一二】瀟灑使君　文選、孔稚圭の北山移文に、瀟灑出レ塵之想。使君は刺史をいふ。前に屢〻注す。【一三】殊不レ俗　魏志、公孫度傳の注に、辨而不レ俗。

【詩意】城南の短軀李邦直は、交際好きであるが、兩足を投げ出して坐つたり、狂歌したりすることは自由に出來ない。又、主を尊び、民を庇ふことは、李君に道がある。（諷意がある。君は邦直を指す。邦直は主を尊び民を庇ふものではない。）天を樂み命を知つて居るから、我には心配がない。李邦直の家には歌舞の人が多いので、醉歌し妙舞して、日夜留連する。又、閒作の清詩は、留連の光景を寫して、涼秋を送り過す。そして瀟灑たる使君は、殊に俗でないが、果して樽前に我を容れて須を攬る雅懷があるか。

【餘錄】烏臺の詩案に、李邦直、原唱一首云、東來嘗恨少二朋游一、得レ遇高人蘇子由、已誓不レ言天下事、相看俱遣世間憂、新詩定及三千首、曩別幾成二十秋、南省都臺風雪後、問君還記二劇談一不。（欒城集の和二李邦直見レ邀、終日對二臥南城亭上一二首に、一徑坡陀草木間、孤亭勝絕俯二川原一、青天圖畫四山合、白晝雷霆百步喧、煙柳蕭條漁市遠、汀洲蒼莽白鷗翻、客舟何事來恩草、逆上波濤吐復呑。東來無事得二遨遊一、奉二使清閒一亦自由、撥二棄簿書一成二一飽一、留連笑語失二千憂一、舊書半卷都如レ夢、清簟橫眠似レ欲レ秋、

聞說歸朝今不レ久、塵埃還有二此亭一不。

老弟東來殊寂寞。
故人留飲慰二酸寒一。
草荒二城角一開二新徑一。
雨入二河洪一失二舊灘一。
車馬追陪跡未掃。
唱酬往復字應漫。
此詩更欲二憑君一改。
待與江南子布一看。

老弟東より來つて殊に寂寞、故人留飲して酸寒を慰む。草は城角に荒れて新徑を開き、雨は河洪に入つて舊灘を失ふ。車馬追陪して跡未だ掃はず、唱酬往復して字應に漫すべし。此詩更に君に憑つて改めんと欲す、待つて江南の子布に與へて看しめん。

【字解】【一】寂寞　さびしく靜かなるをいふ。楚辭、劉向の九歎に、幽空虛以寂寞。淮南子に、寂寞者、音之主也。【二】留飲　說苑に、高祖使レ陸賈賜二尉佗印一爲二南越王一。陸生至、尉佗大悅、留飲數月。【三】酸寒　韓退之の薦レ士詩に、酸寒漂陽尉、五十幾何輩。陸游の詩に、野寺秋陰更蕭瑟、書生老瘦轉酸寒。【四】城角　水經注に、淮・泗之會、卽城角也。【五】追陪　陪從といふに同じ。韓退之の詩に、終日相追陪。【六】跡未レ掃　後漢、杜密傳に、劉勝自二蜀郡一告二歸鄉里一、閉レ門掃レ軌、無レ所二干及一。注にいふ、軌、車迹也。【七】唱酬　詩文を互にやり取りする。宋史、沈遼傳に、遼長二於歌詩一、曾鞏・蘇軾・黃庭堅、皆與唱酬相往來。【八】字應レ漫　後漢、禰衡傳に、初達二潁川一、陰懷二一刺一、既無レ所レ之、適至、刺字漫滅。【九】與二江南子布一看　吳志に、張昭、字子布の注に、典略云、余曩聞、劉荊州嘗自作レ書、欲レ與二孫伯符一（孫策の字）以示レ禰正平一（禰衡の字）正平畫レ之言、如レ是、爲レ欲二孫策帳下兒讀レ之邪、將レ使二張子布見一乎、如二正平言一、以爲二子布之才高一乎。

【詩意】老弟の子由は、折角、東から來たが、何も持て爲すこともなく、殊に寂寞を感ずる。幸に舊い友達と留飲することが出來たので、貧しくて苦しい此身を慰める。淮水と泗水と會する處、草が荒れて、道筋も分らなくなつたから、新しい徑を開いた。又、雨は河洪に入つて水嵩が增し、舊の灘も知れなくなつた。車馬が後につき從つて來たが、車迹も掃はない。詩文を唱酬して、往復の際、文字も應に漫滅するであらう。（漫滅の二字の出處をいふと、漢の禰衡、字は正平は、建安の初、許下に遊び、陰に一刺を懷にしたが、既にして適く所もなく、刺字が漫滅するに至つた。或人が之に問うて曰く、何ぞ陳長文・司馬伯達に從はないかと。對へて曰く、卿は我をして屠沽兒輩に從はしめんと欲するかと。又、問ふ、當今の世、誰か賢なるかと。對へていふ、大兒は孔文舉、小兒は楊德祖と。文舉は深く其の才を愛し、上疏して之を薦めたといふことである。）禰衡は文を作るに、筆を援れば立ろに成りて、文に點を加へない。劉荊州は、嘗て自ら書を作り、孫伯符に與へようとし、以て衡に示す。衡はいふ、是の如きは孫策帳下の兒をして之を讀ましめんとするのか、將、張子布をして之を見しめんとするのかと。今、此詩も更に君から添削して貰ひ、之を江南の張子布に看しめようかと思ふ。（紀昀いふ、末句指二邦直一と。）

君雖二爲レ我此遲留一。

君我が爲に此に遲留すと雖も、

【字解】【一】遲留　韓退之の賦

別後淒涼我已憂。
不見便同千里遠。
退歸終作十年游。
恨無揚子一區宅。
懶臥元龍百尺樓。
聞道鵷鸞滿臺閣。
網羅應不到沙鷗。

別後淒涼我已に憂ふ。
見ざれば便ち千里の遠きに同じ、
退歸終に十年の游を作す。
恨むらくは揚子一區の宅なきことを、
臥すに懶し元龍百尺の樓。
聞道らく鵷鸞臺閣に滿つと、
網羅應に沙鷗に到らざるべし。

曰レ郭、有二田一廛一、有二宅一區。左太沖が詩に、寂寂揚雄宅、門無二車騎一。注にいふ、成都府有二揚雄宅一、今草玄亭餘迹尚存と。【五】元龍百尺樓　三國志に、陳登、字元龍、許汜與二劉備一、在二劉表坐一、共論二天下人一、汜曰、陳元龍、湖海之士、豪氣不レ除、昔遭レ亂過二下邳一、見二元龍一、無二客主之意一、久不二相與語一、自上二大牀一、使二客臥二下牀一、劉備曰、今、天下大亂、所レ望レ君、憂レ國忘レ家、有二救レ世之意一、君有二國士之名一、而求レ田問レ舍、言無レ可レ採、是元龍所レ謂也、何緣當二與レ君語一、如レ我、欲下臥二百尺樓上一、臥二君於地一上何但上下牀之間邪。【六】鵷鸞　鵷は鳳凰の一種、劉禹錫の和二蘇十郎中一詩に、左掖鵷鸞到二室中一。【七】臺閣　臺省といふに同じ。蔡邕、陳レ政疏に、網網弛縱、莫二相舉一、察二公府臺閣一、亦復默然。樂府、焦仲卿妻の詩に、仕二官於臺閣一。【八】網羅　後漢、儒林傳に、網二羅遺逸一、博存二衆家一。【九】沙鷗　范仲淹の文に、游鷗翔集、錦鱗游泳。

【詩意】君が我が爲に此地に遲留してくれても、別後の淒涼が思ひ遣られて、我は已に之を憂へるのである。渭北春天の樹、江東日暮の雲、故人相思の情は深いから、相見ざれば、千里の遠きと同じである。それで、故山に退き歸つて、終に十年樹木の游をなさうとする。併し殘念なことには、我に揚子一區の宅地がないことである。三國の許汜は劉備に謂ふ、陳元龍は湖海の士で、豪氣が除けない。昔、亂に遭つて、下邳で、元龍に會つたとき、元龍は暫く言葉も交へなく、自ら大牀に上つて、我を下牀に臥せしめたと。劉備曰く、君は國士の名があつて、而も田を求め舍を問ひ、其の言葉にも採るべきものがないから、元龍に嫌はれたのである。もし、我であつたなら、百尺樓上に臥し、君をば地に臥せしめた筈。何ぞ但に上下牀の間ばかりではないと。田を求め舍を問ふは、劉備の取らない所である。併し揚子の宅がなければ、臥すに懶し元龍百尺の樓である。（宋、邵博の聞見後錄に、百尺樓者、劉備、非二元龍語一也と。）聞けば、鵷や鸞の立派な鳥が臺閣に滿ちて居るといふことであるから、網羅は我等のやうな沙鷗には到らないであらう。（紀昀いふ、此却蘊藉と。唐宋詩醇に、自寫二疎慵、潦倒令二人意惻一と見ゆ。）

【餘錄】以上の二首は、子由が原韻に答へたのである。欒城集、次二韻邦直見レ答一首にいふ、眞能一醉逃二煩暑一、定勝三杯禦二臘寒一、自有二詩書一供二永日一、莫下將二絲竹一亂風灘、舞雩何處歸二春暮一、叩角誰人怨二夜漫一、聞道丹砂近有レ術、錙銖稱レ火共レ君看。烏臺詩案、李邦直の一首にいふ、匙飯盤蔬强少留、相逢何物可レ消レ憂、緣二君未一得二酒中趣一、與レ我漫爲二方外游一、草亂不レ容移二鳥迹一、山雄全欲レ逼二城樓一、濟レ時異日須二公等一、莫レ狎翩翩海上鷗。

五斗塵勞尚足留。
閉關却欲治幽憂。
羞爲毛遂囊中穎。
未許朱雲地下遊。
無事會須成好飲。
思歸時欲賦登樓。
羨君幕府如僧舍。
日向城南看浴鷗。

五斗塵勞尚ほ留まるに足り、
關を閉ぢて却つて幽憂を治めんと欲す。
羞づ毛遂が囊中の穎となるを、
未だ許さず朱雲の地下に遊ぶを。
事無し會ず須らく好飲を成すべし、
歸るを思ふ時に登樓を賦せんと欲す。
羨む君が幕府僧舍の如く、
日に城南に向つて浴鷗を看る。

【字解】【一】五斗　五斗米をいふ。宋書、陶潛傳に、我不レ能爲二五斗米一折レ腰向二鄉里小人一。卽日、解二印綬一去レ職。【二】塵勞　煩惱の意。圓覺經疏鈔に、塵是六塵(色・聲・香・味・觸・法)勞謂二勞倦一、由レ塵成レ勞、故名二塵勞一。【三】閉レ關　文中子に、或問、劉靈何如人也、曰、古之閉レ關人也。韓退之の寄二盧全一詩に、閉レ門不レ出動一紀。注にいふ、十二年歲星一周爲二一紀一と。【四】幽憂　鬱憂といふに同じ。莊子、讓王篇に、我適有二幽憂之病一、方且レ治レ之。【五】毛遂囊中穎　史記、平原君傳に、秦圍二邯鄲一、平原君、求二合從於楚一、取二於門下客一、得二十九人一、有二毛遂者一、自贊備レ員曰、使二遂蚤得レ處二囊中一、乃脫レ穎而出。【六】朱雲地下遊　漢、朱雲傳に、臣願賜二尚方斬馬劍一、斷二佞臣一人一、以厲二其餘一、上問曰、誰也、對曰、安昌侯張禹、上大怒、御史將レ雲下、雲攀二殿檻一、檻折、雲呼曰、得レ從二龍逢・比干一遊レ於地下一足矣。【七】賦二登樓一　盛弘之が荊州記に、富陽縣城樓、王仲宣登レ之而作レ賦。【八】幕府如二僧舍一　世說に、蔡洪赴レ洛、人問曰、幕府初開、羣公辟命。【九】浴鷗　杜子美の詩に、鷺浴自二晴川一。

【詩意】たとひ五斗米薄俸の爲に煩はされて苦勞をなしても、尙ほ留まるに足る。(必ずしも印綬を解いて、職を去るには及ばない。)ただ關門を閉ぢて、鬱憂の病を療治しようとした。秦が邯鄲を圍んだ時、平原君は救を楚に求めんとし、同行のものを門下の客に取つて、十九人を得た。毛遂は自ら薦めて其の員に備はつていふやう、遂をして蚤く囊中に處るを得しめば、穎を脫して出でんものをと。毛遂が所謂囊中の穎となつて、外に見はれるのを羞ぢるも、朱雲が所謂龍逢・比干に從つて地下に遊ぶことは許さない。今は別に事が無いから、宜しく心地よく酒を飲むべきである。又、故鄉に歸りたいから、時に王仲宣が登樓の賦を口吟しようと思ふ。羨ましいのは、君の仕へて居る幕府には面倒な事もなくて、僧舍のやうに靜なことである。そして日に城南に向つて浴鷗を看て居られることである。(紀昀いふ、三四二句、却有レ體と。又いふ、語雖二稍露一、而未レ至二激訐一と。)

【餘錄】烏臺詩案、李淸臣と干涉の事は、此の五斗塵勞尙足レ留の一首である。朱雲、漢成帝時、乞レ斬二張禹一、成帝欲レ誅レ之、雲曰、臣得下從二龍逢・比干一遊上足矣、龍逢、夏桀臣、比干、商紂臣、皆由レ諫而死、軾爲下屢言二新法不便一、不レ蒙二施行一、以二朱雲一自比、意至明之世、無二誅戮之事一、故言、軾未レ許下與二朱雲一地下遊上、王粲、是魏武時人、因二天下亂離一、故粲在二荊州一依託、作二登樓賦一、賦中有二懷レ鄉思レ歸之意一、軾爲下屢言二新法不便一、不レ蒙二施行一、有二罷レ言懷レ鄉之意一、亦欲レ作二此賦一也。又、施注に東坡詩案云、李淸臣答二軾弟轍一詩二首、批云、可レ求二子瞻和一、軾卻作二詩二首一、和二淸臣一、其內一首首句云、五斗塵勞尙足レ留、集中失レ載二此詩一、今附二於後一。又云、軾又用二弟轍韻一、與二李淸臣一六首、蓋東坡次韻、通爲二八首一、集中止有二四首一、今收二詩案一首一、猶逸二其三一也と見ゆ。王文誥いふ、施注所レ收詩案一首、卽五斗塵勞一章、在二欒城集一、乃次二韻邦直之第二首一、而查注以爲下子由鷗字韻已逸、以二公詩一充レ數者、以レ詩論、當二

是公作」と。

司馬君實獨樂園

青山在屋上。流水在屋下。
中有五畝園。花竹秀而野。
花香襲杖履。竹色侵杯斝。
樽酒樂餘春。棋局消長夏。
洛陽古多士。風俗猶爾雅。
先生臥不出。冠蓋傾洛社。
雖云與衆樂。中有獨樂者。
才全德不形。所貴知我寡。
先生獨何事。四海望陶冶。
兒童誦君實。走卒知司馬。
持此欲安歸。造物不我捨。
名聲逐吾輩。此病天所赭。
撫掌笑先生。年來效瘖啞。

司馬君實の獨樂園

青山屋上に在り、流水屋下に在り。
中に五畝の園あり、花竹秀でて野なり。
花香杖履を襲ぎ、竹色杯斝を侵す。
樽酒餘春を樂み、棋局長夏を消す。
洛陽は古より多士、風俗猶ほ雅に爾し。
先生臥して出でず、冠蓋洛社を傾く。
衆と樂むといふと雖も、中に獨り樂むものあり。
才全うして德形れず、貴ぶ所は我を知ることの寡きを。
先生獨り何事ぞ、四海陶冶を望む。
兒童も君實を誦し、走卒も司馬を知る。
此れを持して安くに歸らんと欲する、造物我を捨てず。
名聲我輩を逐ふ、此病天の赭にする所。
掌を撫して先生を笑ふ、年來瘖啞に效ふを。

【字解】【一】司馬君實　司馬光、字は君實。神宗の朝、新法の行はるるや、首として其の害を言ひ、身を以て之を爭ふ。用ひられなく、閑居十五年。熙寧六年、洛陽に家し、田二十畝を買ひ、闢いて園となし、命けて獨樂といふ。爾來、口を絕つて時事を論ぜず。天下、以て相となさんことを望む。哲宗位に卽き、遂に起ちて左僕射に拜せられ、政を爲すこと一年、疾病之に半ばしたが、施設は凜凜として治に向つた。元祐元年、位に薨ず。年六十八。太師溫國公を贈らる。【二】獨樂園　宋の馬永卿の元城語錄に、司馬溫公既居レ洛、於二國子監之側一得二故營地一、創二獨樂園一。獨樂の二字は孟子、梁惠王篇に出づ、溫公取つて園の名とす。邵康節の集中に、獨樂園の詩多く、花庵に牽牛花を植ゑられたこと詩に見ゆ。故營地は、舊宅。【三】青山在二屋上一云云　石季倫の思歸引序に、古木幾二於萬株一、流水周二舍下一。楚辭、屈原、九歌に、烏次兮屋上、水周兮堂下。柳子厚、盩厔縣の食堂記に、高山在レ前、流水在レ下、可二以俯仰一、可二以宴樂一。とある。盩厔は扶風縣である。孟浩然の符公園若の詩に、綠篠夾二路旁一、淸泉流二舍下一。【四】五畝　司馬法に、六尺爲レ步、步百爲レ畝。白樂天の池上篇に、十畝之宅、五畝之園。【五】斝　音賈、玉の爵。【六】棋局消二長夏一　唐、張固の撰んだ幽閒鼓吹に、令狐相公進二李遠一爲二杭州一。宣宗曰、聞李遠詩云、長日惟消一局棋。豈可レ臨レ郡。【七】洛陽古多士　詩、文王の什に、濟濟多士、文王以寧。【八】爾雅　儒雅に適き意。爾は近なり、雅は正なり。一說に、麗靡にして閑雅の義と。【九】冠蓋　冠を戴き蓋を翳す貴官の人。文選、西都の賦に、冠蓋如レ雲、七相五公。【一〇】傾二洛社一　溫公は洛に在りて、眞率會といふを開き、名士多く相會すといふ。天眞にして飾らず、脫粟一飯、酒數行、物薄くして情厚い會合。又、富弼・司馬溫公等老人の會に洛陽耆英會といふがある。これは、白居易が九老會の故事を用ひたものである。唐詩紀事に、白居易致レ仕居レ洛、愛二香山之勝一、與二僧如滿一、結二社於此一。【一一】與レ衆樂　孟子、梁惠王篇に、與レ衆樂樂云云。【一二】才全德不レ形　莊子の全語、德充符に、才全而德不レ形者也。【一三】所レ貴知レ我寡　老子七十章に、知レ我者希、則我貴矣、是以聖人被レ褐懷レ玉。【一四】陶冶　陶は瓦器を作る。冶は鐵を鑄て器を作る。二字を借りて、善政を施し、天下を和化するをいふ。淮南子に、陶二冶萬物一。【一五】兒童誦二君實一云云　二句、姓字を以て對するは、唐賢未だ有

らざる所。然れども本なきにあらず。劉越石の詩に、獲麟悲二宣尼一、西狩泣二孔丘一。謝惠連の詩に、雖レ好二相如達一、不レ學二長卿慢一。正に丘詩の倣ふ所。其他、史傳載する所、萬事不レ理問二伯始一、天下中庸有二胡公一、甑中生レ塵范史雲、釜中生レ魚范萊蕪の類の如き、僂指するに勝へない。紀昀いふ、兒童二句、乃互文、非レ惠連用二相如・長卿一、越石用二宣尼・孔丘一之比。【一六】持レ此欲二安歸一　持レ此は、此の名望を持ちての意。前漢書に、蒯通說二韓信一曰、足下歸レ楚、楚人不レ信、歸レ漢、漢人震恐、足下欲二持レ是安歸一乎。三國志、魏、鍾會傳に、呼二所親一、語レ之曰、我自二淮南一以來、畫無二遺策一、四海所二共知一也、我欲二持レ此安歸一乎。【一七】造物　萬物を造り出すものは、天命であるから、天命を指して造物といふ。人が逃れ去らうとしても、天命は逃れしめない。溫公臥して出でなくしても、天命は必當レ用といふ意。【一八】天所レ赭　名の身を離れないことは、老莊思想より觀れば、一種の病である。名譽の病に侵されるは、天罰を受けて刑された赤衣の人といふべきである。古、刑には赭衣を衣す。所レ赭は所レ罪といふ意。【一九】瘖啞　おし。舊唐書、太宗紀に、一歲再赦、好人喑啞。

【題義】此詩は熙寧十年五月六日、徐州で作つた。仙溪紀年錄に見えて居る。東坡が、溫公に與へた手簡に、久しく公の新文を見なかつたのに、忽ち獨樂園記を領す、誦味して已まない。輒ち自ら揆らず、一詩を作る、聊か一笑を發せんのみとある。又、溫公自作の記に、若し夫れ鷦鷯は林に巢ふも、一枝に過ぎず。偃鼠は河に飲むも、滿腹に過ぎず。各〻其の分を盡くして之に安んず。これ乃ち迂叟の樂しむ所なり。迂叟はじめ、洛陽に家すること五年にして、園を爲り、其の中に堂を爲り、書五千卷を聚め、之を命じて讀書堂といふ。迂叟、平生多く堂中に處りて書を讀む。志倦み體疲るれば、竿を投じて魚を取り、衽を執つて藥を采り、渠を決して花に灌ぎ、斧を操つて竹を剖り、熱を濯うて水に盥し、高きに臨んで目を縱にし、逍遙徜徉、惟、意の適する所、明月時に至り、淸風自ら來る。行くも牽かるる所なく、止まるも扼せらるる所なし。耳目肺腸、卷いて己の有と爲す、踽踽焉たり、洋洋焉たり。知らず天壤の間、復、何の樂あつて此れに代ふべけんや。因りて合せて之を命じて獨樂といふと見えて居る。

【詩意】青山は高く聳えて屋の上を覆ひ、流水は淸く流れて屋の下を行く。（青山以下の四句は、園の全景を概說す。便ち以て圖畫に入るべし。紀昀いふ、直起脫洒と。）其の青山流水の中に、五畝ばかりの園があつて、園中には花竹秀でて、原野の趣がある。（花香二句は、前の花竹の二字を分けて承く。）花の香は、遊人の杖や、履物に薰ずる。（襲は因る意である。）又、竹の色は酒盃を侵して翠にうつる。客が來ると、樽中の酒を酌みて、殘春の美景を樂み、棊局を圍みて、夏日の長きを消遣し、常に從容として園中の樂みをする。（樽酒の二句は、春と夏との樂事を敍する。）洛陽は古より賢哲の士が多い。其の遺風で、今に於ても、士人の風俗が猶ほ儒雅に邇い。先生は此の洛陽に、長く閑臥して外に出でないけれども、冠蓋の貴官名士が聚まつて來ることは、洛社を傾けるばかりである。（從遊の士多きを敍す。）先生は王安石と政治上の意見が合はなく、洛に歸つて十五年、口を絕つて、國事を論じないから、臥不レ出といつたのである。さて客を招き、友を迎へ、酒を酌み、棋を圍んで、衆と共に園中の景を樂しむものの、其の道を悟り得て、心に自適するの樂は、衆人の知り得ない所、そして先生の獨り悅ぶ所であるから、中有二獨樂者一と言つたのである。才が內に全うして、德が外に形はれないときは、外昧くして人が窺ひ易くないから、我を知るもの希である。君子の道は、內、已に足つて、外に形は

れないのを貴ぶ。故に所レ貴は、人の我を知ることが寡きに在る。先生は全才の君子で、其の德が外にあらはれないから、先生に貴ぶ所は、先生を識るもの稀なるに在る。識る者寡き筈であるのに、兒童走卒までも先生を知り、四海の民、皆、先生の宰相となられて、天下を平治されるやうにと望まないものはない。かかる德望の歸した人であるから、何時までも、引籠つて居ることは出來ない。早晩、宰相とならねばならぬ。故に先生獨り何事ぞと咎めたのである。先生には此の名望を持して安くに歸らうと欲するか。造物の神は貴方を捨てないで必ず起し用ひるであらうから、到底逃れ歸ることは出來ない。(我とは溫公を指す)たとひ、世を逃れようとしても、名聲の此身を離れないことは、莊子の所謂影を畏れて日中に走れば、影も亦隨つて疾く走ると同じである。一體、名譽といふものは、大悟徹底したものから觀ると、身の邪魔物で、一種の病といふべきである。言ひ替へれば、罪を天に得たものであるから、之を懲さんが爲に赭い衣服を著せるのである。今、先生も、此の名譽の病に罹つて、罪人として赭い衣を著せられて居る。如何に先生でも、天の黥を息めることは出來ないであらう。卽ち宰相となつて、天下の爲に活動しなければならないと、老莊の思想を以て戲れたのである。(吾輩の二字も溫公を指す。)先生は口を絕つて、時政の得失を言はないで、瘖啞の如くなつて居られる、卽ち莊子の所謂不具の人となつて、獨樂を全うせんと欲して居られる。併し、既に名譽の病に取り付かれた以上は、致し方がない。是非、一度は宰相となられて、天下を陶冶せられよ。赭い衣を著せられて、一はたらきせられよ。此時、王安石は宰相として、新法を行ひ、呂惠卿の徒、權を專にして、政を誤る。それで四海の人は、領を引いて、先生の陶冶を望む。これ當に出でて政を改め民を救ふべき秋である。故に掌を撫して先生の年來瘖啞に效つて口を箝して居られるのを笑ふ譯である。かく東坡が溫公の出でないのを非笑せるは、要するに時の宰相の善人でなく、時の新法の不便であるを譏つた譯である。(紀昀いふ、末二句、終是太露と。)

【餘錄】烏臺詩案に、此詩言四四海望二司馬光執レ政陶二冶天下一、以譏下見任執政不得二其人一。又言二兒童走卒、皆知二其姓字一、終當二進用一、緣二光曾言二新法不便一、軾亦曾言二新法不便、終當二進用一、光意亦譏二新法不便一、終用レ光改二變此法一也。又、言二光却瘖然不レ言、意望二光依然上言攻二擊新法一也とある。司馬光の祖先は河內の人、後、陝州夏縣涑水鄕に家す。進士甲科に中る。仁宗は、知諫院事に擢んで、英宗・神宗は翰林學士・御史中丞となす。王介甫、相と爲り、始めて靑苗・助役・農田・水利を行ひ、之を新法と謂ふ。光、其の害を言ひ、身を以て之を爭ふ。當時、士大夫の新法の不便を言ふもの、皆、倚つて以て重きを爲す。樞密副使に拜せられしが、言、行はれざるを以て命を受けず。端明殿學士に除せられ、出でて永興軍に知たり。力め乞ひて歸る、以て留司御史臺となす。崇福宮に提擧たり。閒居十五年、自ら迂叟と號す。熙寧の四年に當り、始めて洛に家す。六年、田二十畝を尊賢坊の北に買ひ、闢いて以て園となす。之を命けて獨樂といふ。王文誥いふ、謂二首言二其害一者誤、當二呂誨首彈二新參一、光遇二於資善堂一、苦勸二止之一、且自謂先見不レ及二呂誨一、敢言不レ及二蘇軾一云云と。宋の李格非(字は文叔)が洛陽名園記に、司馬溫公在二洛陽一、自號二迂叟一、謂二其園一曰二獨樂園一、園極卑小、不レ可下與二它園一班上、其曰二讀書

堂一者、數十椽屋、澆花亭者益小、弄水種竹軒者、尤小、曰二見山臺一者、高不レ過二尋丈一、曰二釣魚庵一、曰二採藥園一者、又特結二竹杪一、落蕃蔓草爲レ之爾、溫公自爲二之序一、諸亭臺詩、頗行二於世一、所三以爲二人欣慕一者、不レ在二於園一耳、云云。溫公自ら獨樂園記を撰していふ、中有レ堂曰二讀書堂一、堂北爲レ沼、沼上有レ廬曰二釣魚庵一、沼北曰二種竹齋一、沼東曰二采藥圃一、圃南爲二六欄一、欄北曰二澆花亭一、又於二園中一築レ臺作レ屋曰二見山臺一、合而名レ之曰二獨樂園一と。宋の王闢之が澠水燕談錄に、司馬文正公、高才全德、大得二中外之望一、士大夫識與レ不レ識、稱レ之曰二君實一、下至二閭閻畎畝匹夫匹婦一、莫レ不三能道二司馬公一、身退十餘年、而天下之人、日冀二其復用一於朝一、子瞻獨樂園詩、蓋紀レ實也と見ゆ。

送顏復兼寄王鞏

顏復を送り兼ねて王鞏に寄す

彭城官居冷如レ水。
誰從我遊顏氏子。
我衰且病君亦窮。
衰窮相守正二其理一。
胡爲一朝捨レ我去。
輕衫觸レ熱行二千里一。

彭城の官居は冷なること水の如し、
誰か我に從つて遊ぶ顏氏の子。
我衰へ且つ病み君も亦窮す、
衰窮相守つて其理を正す。
胡爲れぞ一朝我を捨てて去り、
輕衫熱に觸れて千里を行く。

【字解】【一】顏復　字は長道、魯の人。父、名は太初、字は醇之。先師兗公四十七世の孫。鳧繹先生と號す。東坡、爲に其文に敍す。元祐の初、入つて太常博士となる。【二】王鞏　字は定國、文正公且の孫。懿敏公素の子。雋才あつて、詩に長ず。東坡、其詩を稱し、清平豐融、藹然として治世の音ありと。【三】彭城

問レ君無二乃求一之與。
答レ我不レ然聊爾耳。
京師萬事日日新。
故人如レ故今有レ幾。
君知二牛行相君宅一。
扣レ門但覓王居士。
清詩草聖俱入レ妙。
別後寄レ我書連レ紙。
苦恨相思不二相見一。
約レ我重陽嗅二霜蘂一。
君歸可二喚與俱來一。
未レ應指二目妨一進擬。
太乙老仙閒不レ出。
踵二門問一道今時矣。

君に問ふ乃ち之を求むるなからんか、
我に答ふ然らず聊か爾るのみと。
京師萬事日に新に、
故人の故の如きは今幾かある。
君は牛行相君の宅を知るならん、
門を扣いて但覓む王居士を。
清詩草聖に妙に入り、
別後我に寄せて書は紙を連ぬ。
苦だ恨む相思うて相見ざるを、
我に約す重陽霜蘂を嗅ぐを。
君歸らば喚びて與に俱に來るべし、
未だ應に指目して進擬を妨ぐべからず。
太乙老仙閒にして出でず、
門に踵りて道を問ふは今時なり。

古の大彭氏の地、今の江蘇銅山縣治。【四】冷如レ氷　白樂天が司馬廬の詩に、官曹冷似レ氷。【五】從レ我遊　漢高帝紀、十一年に、詔曰、有二肯從レ我者一、吾能尊二顯之一。【六】顏氏子　繫辭に、顏氏之子、其殆庶幾乎。【七】捨レ我去　韓退之の贈二張籍一詩に、子又捨レ我去、我懷焉所レ窮。【八】輕衫　衫は單衣の短きころも。白樂天の詩に、輕衫細馬春年少、十字津頭一字行。【九】觸レ熱　杜子美の詩に、借問今何官、觸レ熱向二武威一。藝文類聚に、晉、程曉が伏日詩に、今世襲襪子、觸レ熱到二人家一。【一〇】日日新　湯の盤銘に、苟日新、日日新、又日新。【一一】牛行　王鞏の大父文正公牛行街に居りしこと、徐度の南窗紀談に見ゆ。東京夢華錄に、潘樓東街巷、出二舊曹門一、朱家橋、瓦子下橋、人煙市井、不レ下二州南以東一、牛行街一

因レ行過レ我路幾何。行に因つて我に過ぎる路幾何、
願君推挽加二鞭箠一。願はくは君推挽して鞭箠を加へよ。
吾儕一醉豈易レ得。吾儕一醉豈得易からんや、
買レ羊釀レ酒從レ今始。羊を買ひ酒を釀すは今より始めん。

説レ法、令二其成就一。【四】入レ妙　法書苑に、衞瓘・鍾繇等、章草入二妙品一。【五】不二相見一　古樂府に、道遠不可レ思、宿昔夢見レ之、他卿各異レ縣、展轉不二相見一。【六】重陽　陰曆九月九日の節句。宋、滑大臨の詩に、滿城風雨近二重陽一。【七】與俱來　史記、范雎傳に、鄭安平言二於王稽一曰、臣里中有二張祿先生一、欲二見レ君言二天下事一、其人有レ讎、不二敢晝見一、王稽曰、夜與俱來。定國約、先過二安道一、而以二重陽一謁二公於徐一、故屬二長道一、拉與俱來、然定國過二南京一、竟以レ事不レ至、有レ詩送二梁交一寄レ坡、坡和答、有二花枝不レ共秋蔽レ幄、筆陣空來夜斫レ營之句一、後一歲、始赴二重陽之約一。【八】指目　漢書、陳勝傳に、旦日、卒中往往指二目勝・廣一。【九】妨二進擬一　舊唐書、李玨傳に、文宗語レ玨曰、竇易直勸レ我、凡、宰相進擬五取レ三、二取レ一。詩意は王鞏は已に勒停されて、進擬が出來ないから、徐州に來り遊ぶも、妨げがないといふのである。【一〇】太乙老仙　東坡の自注に、張安道爲二中太一宮使一。王鞏は安道の婿である。日知錄に太乙、北辰神名也、漢立二太乙祠於甘泉泰畤一、宋時、尤崇二祀之一、建二東太乙・西太乙・中太乙各祠一、以二太乙飛在二九宮一、每二四十餘年一而一徙、所レ臨之地、兵役不レ興、水旱不レ作。【一一】踵レ門問レ道云云　莊子、達生篇に、有二孫休者一、踵レ門而詫二子扁慶子一云云。詫は告ぐるなり。子扁慶子、姓は扁、字は慶子、魯の賢人。【一二】推挽　人を推し薦める。左傳、襄公十四年に、臧孫謂二其人一曰、衞君必入、夫二子者、或輓レ之、或推レ之、欲無レ入得乎。【一三】鞭箠　高士傳に、可二食以酒肉一者、可二隨而鞭捶一。【一四】買レ羊釀レ酒　韓退之の詩に、買レ羊酤レ酒謝二不敏一。

【題義】此詩は熙寧十年六月の作。顏復（字は長道）の闕に赴くを送り、兼ねて王鞏（字は定國）に寄せたのである。紀昀いふ、順レ筆直走、以二波瀾縈繞一、故不レ覺二其滑一と。

【詩意】徐州彭城の官居は、冷かなことが水のやうである。此の官居で、我と交り遊ぶは誰であらう、顏長道である。我は衰へ且つ病に臥して居る。君も亦、窮して志を得ないやうである。お互に衰窮を守つて、其の誼を正うして居つたのに、どういふ譯で、忽ち我を棄てて去られるのである。我が懷はまことに窮まりない。君は輕衫を衣て、熱に觸れて千里の遠きに行かるるが、君に問ふ、それは、態求めてするのであるか。君の我に答へるには、求めたのでない、まあ、さうなつたのであると。顧みれば、京師は萬事が日日に新になつて、故人の舊のままであるものは、今は幾人もない。君は王鞏君の祖父にあたつて居る文正公（相君）の居られた牛行街を御存じでせう。今、其門を叩いて見る。只、王居士を覓めるのみであつて、相君は居ない。王居士は、詩も書も、俱に妙に入つたもので、一別後、我に幾枚もの詩と書とを寄せられた。相思うて居りながら相會ふことの出來ないのが殘念である。王居士は書中で我に約す、九月九日の節句には、共に菊を見ようと。今、君が歸つたら、喚びて與に來られよ。王居士は勒停されて居るから、徐州に來り遊ぶとて、其の進擬を妨げることにはなるまいと思ふ。太乙は北辰神で、四十餘年毎に一たび徙り、臨む所の地は、兵役も興らず、水旱も作らないといふことである。王鞏は岳父張安道は中太乙宮使である。閒にして外に出でないから、門に至つて道を問ふは、今がよい。行くときに我が許に過ぎられよ、路程は幾何もない。君から一つ推擧して貰ひたい。そして鞭箠を加へて欲しい。吾が儕の一醉を得ることは、容易でないから、今より羊を買ひ、酒を釀して用意を致さうと思ふ。

蝎虎

黄雞啄レ蝎如啄レ豕。
窗間守宮稱二蝎虎一。
闇中繳尾伺飛蟲一。
巧捷功夫在二腰脅一。
跂跂脈脈善緣レ壁。
陋質從來誰比數。
今年歳旱號二蜥蜴一。
狂走兒童鬧二歌舞一。
能銜渠水作二冰雹一。
便向二蛟龍一覓二雲雨一。
守宮努力搏二蒼蠅一。
明年歳旱當レ求レ汝。

蝎虎

黄雞の蝎を啄むは黍を啄むが如し、
窓間の守宮は蝎虎と稱す。
闇中の繳尾は飛蟲を伺ひ、
巧捷の功夫は腰脅に在り。
跂跂脈脈善く壁に緣り、
陋質從來誰か比數せん。
今年歳旱蜥蜴を號び、
狂走兒童歌舞を鬧がす。
能く渠水を銜んで冰雹を作し、
便ち蛟龍に向つて雲雨を覓む。
守宮は努力して蒼蠅を搏つ、
明年の歳旱當に汝を求むべし。

【字解】【一】蝎虎　方言に、秦晉西夏、謂二之守宮一、又呼二蝘蜓一、其在二澤中一者、謂二之蜥蜴一、南楚謂二之蛇醫一。【二】守宮　蜥蜴とも壁虎ともいふ。王注に、漢武帝、以二端午日一取二蜥蜴一、置二之器一、飼以二丹砂一、至二明年端午一、擣レ之以塗二宮人之臂一、有レ所レ犯、輒消沒、以二其驗一於此一、故得二守宮之名一、李賀所謂玉臼夜舂紅守宮者是也。【三】巧捷　文選、曹子建の樂府に、連翩擊レ鞠壤、巧捷惟萬端。【四】功夫　工夫に同じ。韓偓の詩に、始知名實有二功夫一。【五】腰脅　こしとせぼね。東坡の文に、老病人二腰脅一。【六】跂跂脈脈　跂跂は蟲の行く貌。脈脈は絶えざる貌。漢書、東方朔傳に、上嘗使二諸家射レ覆、置二守宮盂下一、射レ之、皆不レ能レ中、東方朔別レ蓍布レ卦而對曰、臣以爲レ龍、又無レ角、謂レ之爲レ蛇、又有レ足、跂跂脈脈、善緣レ壁、是非二守宮一、卽蜥蜴。【七】陋質　曹植の賦に、以二才薄之陋質一、奉二君子之淸塵一。【八】冰雹　雹は雨冰。禮記、月令に、仲夏行二冬令一、則雹凍傷レ穀。【九】蛟龍　寔二雲雨一　三國志、吳、周瑜傳に、上疏云、劉備・關・張、俱在二疆埸一、恐蛟龍得二雲雨一、終非二池中物一也。【一〇】蒼蠅　歐陽修に憎蒼蠅一賦あり。後漢書、張儆傳に、蒼蠅之飛、不レ過三十步、自託二驥騄之髮一、乃騰二千里之路一。【一一】歳旱當レ求レ汝　楊文公談苑に、魏庠言、昔游二關中佛寺一、値二村民祈レ雨、沙門有レ善二胡法一者、求二得蜥蜴十數一、置二甕中一、以二樹葉一漬レ水、使レ童男女數十衣二青衣一、持二柳枝一、同聲呪レ之、日、蜥蜴蜥蜴、興レ雲吐レ霧、雨今滂沱、放レ汝歸去。歳旱爲レ之頗有レ應。

【題義】續通鑑長編によると、熙寧十年三月、內出二蜥蜴祈雨法一、試レ之、果驗、詔附二宰鵝祈雨法一頒二行之一云云と。此詩は此時の作である。紀昀いふ、寓刺之意與二后山蠅虎詩一略同と。

【詩意】李太白の詩に、黄鷄啄レ黍秋正肥とあるが、黄雞の蝎蟲を啄むは、黍を啄むやうである。守宮は蠍を食ふ所から、蝎虎といふ。倦遊雜記に、熙寧中、久旱、按二古法一、以レ甕貯レ水、插二柳枝一、泛二蜥蜴一、時蜥蜴不レ能二盡得一、往往以二蝎虎一代雩、入レ水卽死云云と見えて居る。（昏沈する蝎虎では、甘雨を得ることが出來ない譯である。）さて蝎虎が闇中に發する繳はよく飛蟲を射る。巧捷と功夫とは、かの腰と脅の處にあるやうに思はれる。蝎虎は跂跂（蟲の行く貌）として行き、脈脈（絶えざる貌）として連つて善く壁に緣るから、壁虎の名を得る。もともと陋質である故に、誰も比べ數へることをしない。（遠ざけて居る。）今年は旱で、蜥蜴を號びて、雨乞をする。兒童は何れも狂走して、歌舞を鬧がして居る。其の應驗があつたと見え、よく渠の水を銜んで冰雹を作し、便ち蛟龍に向つて雲雨を覓める。蛟龍が雲雨を得ば、終に池中の物ではない。（何焯いふ、亦有二諷意一と。）守宮は努力して蒼蠅を搏つが、明年もし歳旱があらば、當に汝を求めて雨乞をしようと思ふ。昔、村民が雨を祈るとき、胡

法を善くする沙門があつて、蜥蜴を甕の中に置いて、童男童女をして青衣を著け、同聲に呪せしめていふ、蜥蜴蜥蜴、雲を興し霧を吐き、雨、今滂沱、汝を放つて歸り去らしむと。旱は忽ち驗があつたといふことである。歳旱の際、特に汝を求める所以である。

子由將(一)赴南都。與余會宿於逍遙堂。作兩絶句。

讀之殆不可爲懷。因和其詩以自解。余觀子由。自少曠達(二)。天資近道。又得至人養生長年之訣(三)。而余亦竊聞其一二。以爲今者宦游相別之日淺。而異時退休相從之日長。既以自解。且以慰子由云

子由將に南都に赴かんとし、余と逍遙堂に會宿し、兩絶句を作る。之を讀むに殆ど懷を爲すべからず。因つて其の詩を和して以て自ら解く。余子由を觀るに、少きより曠達、天資道に近く、又、至人養生長年の訣を得たり。而して余も亦竊に其の一二を聞き、以爲らく今者宦游相別るるの日淺くして、異時退休相從ふの日長し。既に以て自ら解き、且つ以て子由を慰むといふ

別期漸近不堪聞。別期漸く近くして聞くに堪へず、
風雨蕭蕭已斷魂(四)。風雨蕭蕭已に斷魂。
猶勝相逢不相識。猶ほ勝る相逢うて相識らず、
形容變盡語音存(七)。形容變じ盡して語音存するに。

【題義】此詩は熙寧十年七月の作である。紀昀前詩を評していふ、寬一歩、更沈著と。後詩を評していふ、此亦刺當日小人營營終歸於盡、而語意渾然不露と。唐宋詩醇の評に、二詩惟語語解慰、乃益見別恨之深、低回欲絶とある。

【詩意】子由が南都に赴くこととなつて、別れる日もだんだんと近づいた。風雨蕭蕭物さびしくて聞くに堪へない。まことに心を痛ましめるのである。それでも、後漢の夏馥・夏靜の兄弟が相逢うても

【字解】【一】將赴南都　査注にいふ、歸德府、宋爲南京、按、顯濱遺老傳、熙寧中、張文定知睢陽、以學官見辟、從之三年、授齊州掌書記、後二年、改著作佐郎、復從文定、簽書南京判官、今將赴南都、【二】曠達　心が廣くて物に通ずる。晉書、張翰傳に、時人貴其曠達。せる聖人。莊子逍遙遊に、至人無己、神人無功、聖人無名。同じく養生主に、文惠君曰、善哉、吾聞庖丁之言、得養生。長年は長壽といふに同じ。管子に、導血氣、以求長年と見ゆ。【三】至人養生長年　至人は道德の至極既見君子云胡不夷。【五】斷魂　斷腸といふに同じ。韋莊の詩に、自是春愁正斷魂。【六】風雨蕭蕭　風雨にて物さびしい。詩、鄭風に、風雨淒淒、雞鳴喈喈、爲黨魁、及張儉等亡命、皆被收考、辭所連引、布徧天下、馥乃自翦髮變形、匿姓名、爲冶家傭、形貌毀瘁、人無知者、弟靜遇馥不識、聞其言聲、乃覺而拜之。【七】語音存　戰國策に、趙襄子將知伯頭爲飲器、豫讓曰、吾其報知氏之讎矣、乃漆身爲厲、滅鬚去眉、自刑以變其容、爲乞人而往乞、其妻不識曰、狀貌不似吾夫、其音何類吾夫之甚也。又呑炭爲啞、變其音。

相識らず、容貌が全く變つて、言葉だけが以前のままであつたといふ狀態よりも、餘程ましである。後漢の靈帝の時、中常侍曹節等が朝政を專にし、善人を禁錮し、之を黨人といつた。馥は時の官人に交らないが、夙に聲名があつて、節等に憚らる。遂に范滂・張儉等數百人と竝に黨中に入る。詔を郡縣に下して之を捕へた。馥は頓足し、歎じて曰く、一人、死を逃れ、禍、萬家に及ぶ、何を以てか生くるを爲さんと。鬚を剪り、形を變へ、冶家の傭となつた。形貌毀悴、人知るものなく、弟にも判らない。ただ音聲を聞いて、纔に覺つたといふ。此詩は此故事によつたのである。

【餘錄】子由逍遙堂會宿二首幷引にいふ、轍幼從二子瞻一讀レ書、未二嘗一日相捨一、既壯、將レ遊二官四方一、讀二韋蘇州詩一、至二那知風雨夜、復此對レ床眠一、惻然感レ之、乃相約早退爲二閒居之樂一、故子瞻始爲二鳳翔幕府一、留レ詩爲レ別曰、夜雨何時聽二蕭瑟一、眞情藹然可二欽羨一、其後子瞻通二守餘杭一、復移守二膠西一、而轍滯二留於淮陽・濟南一、不レ見者七年、熙寧十年二月、始復會二澶・濮之間一、相二從彭城一、留百餘日、時宿二於逍遙堂一、追二感前約一、爲作二二小詩一曰、逍遙堂後千尋木、長送中宵風雨聲、誤喜對牀尋二舊約一、不レ知漂泊在二彭城一。」秋來東閣涼（一本に冷に作る。）如レ水、客去山公醉似レ泥、困二臥北窓一呼不レ起、（一本に醒に作る。）風吹二松竹一雨淒淒と。玩味するに、不盡の情趣がある。足未だ閾外を出でない人には、其の味を解することが出來ないであらう。

但令[一]朱雀長二金花一。　但朱雀をして金花を長せしむ、

【字解】【一】令二朱雀長二金花一　陰眞君、金液還丹歌に、北方正氣爲二河車一、東方甲乙成二丹砂一、兩情合養歸二一體一、朱雀調護生二金花一。注にいふ、朱雀、火也と。河車は道家、燒鍊の藥。

此別還同一轉車[三]。　此別還同じ一轉車。
五百年間誰復在。　五百年間誰か復在る、
會看二銅狄[三]兩咨嗟[四]。　會ず銅狄を看て兩ながら咨嗟せん。

【三】轉車　賈島の詩に碌碌復碌碌、百年雙轉轂。【三】銅狄　後漢、薊子訓傳に、人於二長安東霸城一見レ之、與二一老翁一共摩二挲銅人一、相謂曰、適見レ鑄レ此、今已近二五百歲一矣。水經注に、魏、黃初元年、徙二長安一、金狄重不レ可レ致、因留二霸城南一。【四】咨嗟　咨歎といふに同じ。孔叢子に、駑驥同レ轅、伯樂爲レ之咨嗟。

【詩意】道家に煉丹の說がある。道士、金石を煉つて藥となし、之を服するときは、仙人となることが出來るといふので、之を金丹といふ。其說は內丹・外丹に分れて居る。外丹は煉る所の金丹を指していひ、一轉より九轉に至るのである。內丹は己の身、精氣煉成の丹をいふ。さて、我弟の子由は、天資道に近く、至人養生長年の訣を得て居るから、時に火力を調護して金丹を長せしめる。それで今は暫し相離れて居ても、此別はまた煉丹の一轉車に外ならない。何も悲しむには足らないのである。併し、又考へると、人が長安の東、霸城に於て、銅狄を見たとき、一老翁と共に銅人を摩擦し、相謂ひて曰く、たまたま此を鑄てから、今已に五百歲に近いといつたさうである。人生五十年、七十古來稀である。五百年、誰かまたある。銅狄を見て、相咨嗟せざるを得ないのである。

留題石經院三首

石經院に留題す　三首

(一)葱蒨門前路。行穿翠(二)密中。
葱蒨門前の路、行いて穿つ翠密の中、
(四)卻來堂上看。巖谷意無窮。
卻來して堂上に看る、巖谷意窮まりなし。

【字解】【一】石經院　臺頭寺中に在る。【二】葱蒨　あをあをと草の盛にしげる。謝朓が登二孫權故城一詩に、文物共蔵蕤、聲明且葱蒨。【三】翠密　孟浩然の詩に、尋レ林采レ芝去、谷轉松翠密。【四】卻來　反るをいふ。孟浩然の詩に、只長却來遲。また、幽賞却來遲。

【題義】此詩は熙寧十年八月四日、子由と同じく石經院に遊んだ時の作である。子由の和した三首は、岩堯山上寺、近在二古城中一、苦恨河流遠、長教二眼力窮一。盤曲山前路、流年向レ此消、興亡須二一弔一、范叟臥二山腰一。孤絶山南寺、僧居無限情、不レ知行レ道處、空聽暮鐘聲といふのである。王文誥いふ、葱蒨門前路、夭矯庭中檜、窈窕山頭井、特有レ意、句法一式、而淺深則別と。

【詩意】門前には、青青と草が茂つて居る。行いて松の翠密の中を通る。(王文誥いふ、此二句、是第一首起法。石經院の幽致を言つたのである。)さて反つて堂上より看るに、煙風は斷えず孤雲繞り、蒼蘚猶ほ凝る萬木の姿と言つたやうな趣がある。まことに、巖谷の意窮まりがない。

(一)夭矯庭中檜。枯(二)枝鵲踏消。
夭矯庭中の檜、枯枝は鵲踏み消す。
瘦皮鶴骨纏。高頂轉(三)龍腰。
瘦皮鶴骨を纏ふ、高頂龍腰を轉ず。

【字解】【一】夭矯　飛び騰る貌。淮南子に、夭矯曾橈。郭璞の江賦に、撫二凌波一而鳧躍、吸二翠霞一而夭矯。【二】枯枝鵲踏消　王文誥いふ、崔駰賦に、幹弱枝弱、末大本消、詩用二其意一、故以二枯枝一代二本字一也と。紀昀いふ、消字未レ詳、觀二子由和詩一、又非二誤字一と。【三】龍腰　檜をいふ。東坡の游二蔣山一詩に、龍腰蟠二故國一。范成大の馬跡石の詩に、跨レ馬凌レ空亦快哉、龍骨鶴背謾徘徊。

【詩意】石經院の庭中には、檜が夭矯として聳えて居るが、其の枯枝は、鵲が消して垂れ、瘦せた皮は、鶴骨のやうな幹を纏うて居る。高い頂は、龍の腰を轉じた姿である。(范成大の詩にも、龍骨鶴背謾徘徊とある。)

【餘錄】檜は說文に、栢葉松身と見えて居る。東坡の詩に、應レ憐四孺子、不レ隨二凡木羣一、體備二松栢姿一、氣含二芝朮薰一、初扶鶴骨立、未レ出龍纏レ筋、巢根白蟻亂、網葉青蟲紛、乃知蔽芾初、甚要二封植勤一、他年皮三寸、狐鼠了不レ聞。

(一)窈窕山(二)頭井。潛(三)通伏澗清。
窈窕山頭の井、潛通伏澗清し。
欲レ知二深幾許一。聽(五)放轆轤聲。
深さの幾許なるかを知らんと欲せば、放てる轆轤の聲に聽け。

【字解】【一】窈窕　山水などの奥深い貌。歸去來の詩に、既窈窕以尋レ壑。文選、王文考の靈光殿賦に、旋室嫋娟以窈窕。【二】

山頭井　名勝志に、石佛井在二雲龍山頂一、雲氣出二其中一、去レ地可二七百餘尺一。【三】潛通　杜子美の秦州雜詩に、萬古仇池穴、潛通小有天。仇池穴に神魚出づ、之を食ふものは仙去す。名山記にいふ、王屋山有レ洞、名曰二小有清虛之天一と。【四】伏澗　澗は爾雅に、山夾レ水とある。細き流である。【五】放轆轤　井上の滑車。梁、簡文帝の詩に、銀牀繫二轆轤一。唐、鄭嵎の津陽門の詩注に、石甕寺飛泉樓中轆轤、斜引二修綆長二百尺一、以引二甕泉一とある。放は一本に轉に作る。

【詩意】奥深い山上の井戸も、石經院にある。名勝志に據ると、石佛井は、雲龍山頂に在つて、雲の氣が其の中から湧き出で、深さは七百餘尺もあるといふことである。井水は地中を流れて澗水に通ずる。澗は細い流である。井水の深さがどれ程であるかを知らうとなら、放てる轆轤の聲を聽いても解かることと思ふ。

過雲龍山人張天驥

郊原雨初足。風日清且好。
病守亦欣然。肩輿白門道。
荒田咽蛩蚓。邨巷懸梨棗。
下有幽人居。閉門空雀噪。
西風高正厲。落葉紛可掃。

雲龍山人張天驥に過ぎる

郊原雨初めて足り、風日清うして且つ好し。
病守亦欣然、肩輿白門の道。
荒田蛩蚓咽び、邨巷梨棗を懸く。
下に幽人の居あり、門を閉ぢて空しく雀噪ぐ。
西風高く正に厲しく、落葉紛として掃ふべし。

孤童臥斜日。病馬放秋草。
墟里通有無。垣墻任摧倒。
君家本冠蓋。絲竹鬧鄰保。
脫身聲利中。道德自濯澡。
躬耕抱羸疾。奉養百歲老。
詩書膏吻頰。菽水媚翁媼。
饑寒天隨子。杞菊自擷芼。
慈孝董邵南。雞狗相乳抱。
吾生如寄耳。歸計失不蚤。
故山豈敢忘。但恐迫華皓。
從君好種秫。斗酒時自勞。

孤童斜日に臥し、病馬秋草に放たる。
墟里無を通じ、垣墻摧倒に任す。
君が家は本冠蓋、絲竹鄰保に鬧し。
身を脫す聲利の中、道德自ら濯澡。
躬耕羸疾を抱き、奉養す百歲の老。
詩書吻頰を膏にし、菽水翁媼に媚ぶ。
饑寒天隨子、杞菊自ら擷芼。
慈孝董邵南、雞狗相乳抱す。
吾が生は寄する如きのみ、歸計失つて蚤からず。
故山豈敢て忘れんや、但華皓に迫らるるを恐る。
君に從つて秫を種うるを好み、斗酒時に自ら勞す。

【字解】【一】雲龍山　名勝志に、雲龍山、在二徐州城西二里一、山出二雲氣一、蜿蜒如レ龍、故名。【二】張天驥　字は聖塗。本集の七寶寺題名に見ゆ。【三】郊原　郊野平原をいふ。唐、祖詠の詩に、「愜レ意在二郊原一。」【四】欣然　莊子、秋水篇に、河伯欣然自喜。【五】肩輿　腰輿とも、筍輿とも、兜子とも稱す。今の轎をいふ。白樂天の游二玉泉一詩に、肩輿半日程。東坡の詩に、肩輿任レ所レ適、過レ勝輒留連。【六】白門　三國、呂布傳に、「魏太祖圍レ沛、布輿二麾下一登二白門樓一。」圍急、乃下降。宋、北征記に、下邳城有三三重一、白

門大城之門、呂布所レ守也。酈道元の水經注に、南門、謂二之白門一。【七】荒田　元稹の詩に、忽憶咸陽原、荒田萬餘頃。【八】蛩蚓　蛩は蟋。淮南子、本經に、飛蛩滿レ野。蚓は蚯蚓。【九】幽人居　文選、顏延年の贈二王太常一詩に、側同二幽人居一、郊扉常晝閉。【一〇】西風　秋風をいふ。李太白の詩に、八月西風起。【一一】墟里　村落をいふ。晁補之詩に、牛羊散二墟里一。【一二】通二有無一　尙書、益稷に懋二遷有無一化居。三國志、周瑜傳に、堅子策、與レ瑜同レ年、相友善、升レ堂拜レ母、有無相共。【一三】垣牆　書、費誓に、踰二垣牆一竊二馬牛一。【一四】冠蓋　仕宦の服乘。班固賦に、冠蓋如レ雪、七相五公。【一五】鄰保　周禮、地官に、五家爲レ鄰。保は互に保證する意。【一六】聲利　名利に同じ。唐書、蕭俛傳に、俛性簡潔、以二聲利一爲レ汙。【一七】羸疾　晉、陶潛傳に、躬耕自資、兼抱二羸疾一。【一八】菽水媚二翁媼一　禮記に、子路曰、傷哉貧也、生無二以爲レ養、夫子曰、啜レ菽飲レ水、盡二其歡一、斯之謂孝。翁媼は、揚雄方言に、周晉秦隴謂レ父曰レ翁。漢、高祖紀に、毋媼の注に、幽州及漢中、皆謂二老嫗一爲レ媼、又曰、媼、女老稱也。陳造の詩に、翁媼鳴社酒香。本集に、題二張希甫墓志後一云、余爲二徐州一、始識二張希甫父子一、元年之冬、李夫人病歿、徐人多言二其賢一、天驥出二其世手書數十紙一、紀二浮屠道家語一、筆迹、不レ類二婦人一、是時希甫年七十、辟レ穀導引、飲レ水百餘日、其病而不レ衰、目瞳子炯然。【一九】杞菊　陸龜蒙は自ら天隨子と號す。常に杞菊を食ひ、夏に及んで五月、枝葉老硬、猶ほ食うて已ます。龜蒙の杞菊賦序に、天隨生宅荒、前後皆樹以二杞菊一、春苗恣肥、得二以采擷一云云。【二〇】擷芼　詩に、采二采芣苢一、薄言擷レ之。又いふ、參差荇菜、左右芼レ之。【二一】慈孝董邵南　韓退之の詩に、嗟哉董生孝且慈、人不レ識惟有二天翁知一、生レ群下瑞無二時期一、家有二狗乳一出求レ食、雞來哺二其兒一、啄啄庭中拾二蟲蟻一、哺レ之不レ食鳴聲悲。全篇は文集に見ゆ。【二二】乳抱　陸龜蒙詩に、譬如レ養二雛鶩一豈不レ容二乳抱一。【二三】吾生如レ寄耳　法苑珠林に、支遁在レ剡、謝安與レ書云、人生如レ寄耳、終日戚戚、遲二君來一、以二晤言一消レ之。【二四】歸計　東坡の詩に、功名眞已矣、歸計亦悠哉。【二五】華皓　白髮をいふ。明皇雜錄に、李林甫曰、食二甘露羹一、縱華皓、亦必變黑。【二六】好レ種レ秫　秫は黏粟、餅や酒を作る。晉書、陶潛傳に、爲二彭澤令一、公田悉令三吏種二秫稻一。一本に、好を學に作る。【二七】斗酒　世說、言語に、戴仲若（名は顒）春日携二雙柑斗酒一、人問二何之一、答曰、往聽二黃鸝聲一、此俗耳鍼砭、詩腸鼓吹。斗酒自勞は楊惲の語。

【題義】此詩も熙寧十年八月の作で、子由と同じく徐州の雲龍山に過り、張天驥を訪問したときの詩である。紀昀いふ、起手洒然而來と。又いふ、言鄰里皆交奬忘レ形、故可レ不レ設二牆垣之限一、然語不二醒豁一と。又いふ、後幅稍嫌二曼衍一と。唐宋詩醇の評に、垣墻任二摧倒一以上、村落園林、羣繪如レ見、昔人謂、詩中有レ畫、畫猶有レ所レ不レ能レ到、詩則無レ所レ不レ到也、然非具二四通六明之力一、亦豈能以達レ之とある。

【詩意】步して郊野平原に出づると、雨霽れて、吹く風は清く、日も暖かで、まことに心地が好い。病める太守（東坡自らいふ）の我も、亦、欣然として自ら喜び、肩輿に乘つて適く所に任せる。大城の南門は白門であるが、其の白門の道のあたり、荒田は萬餘頃、飛蛩は野に滿ち、蚯蚓も鳴いて居る。村巷には梨や棗の樹も多く、其の下に幽人の寓居がある。門は晝も閉ぢて、雀が空しく噪いで居る。顏延年が所謂側きは幽人の居に同じく、郊扉常に晝閉づの趣がある。秋風は高く吹いて厲しく、落葉は紛として掃ふべき程である。孤童は夕日を浴びて臥し、病める馬は放たれて、秋草を食んで居る。村の人だちは、村の內だけで有無相通じ、活計を立てて居る。垣根なども倒れたままである。君の家は、元來、仕宦の家で、車も服も、立派である。そして平生、絲竹の鬧しい鄰保に住まはれたが、名利を離れて、道德で身を濯ひ淸めらるる。かくて躬ら耕やし羸疾を抱いて、老者に事へ、よく養を盡して居る。常に詩書を誦して、吻や頰を膏にし、又、菽を啜り、水を飲み、貧しい生計の內にも、父母の歡を盡して居る。東坡の本集に據るに、東坡が徐州を爲め、始めて張希甫父子を識つた。時に希甫は年七十、穀を辟けて導引し、水を飲む百餘日、甚だ瘠せたが衰へない。目瞳子も炯然であつたといふことである。昔、天隨生は、饑寒に迫つて、宅も荒れたので、前後に杞菊を樹ゑ、之を採り、之を拔

いて、其日を送つたといふことである。又、董邵南は、韓退之から、孝且つ慈と言はれた。雞や狗がするやうに、相乳抱した。我生は寄寓のやうなもの、然るに歸計をなす好機を失つてしまつた。併し故山を忘れたのではない。但、白髮となることを恐れるから、君に從つて秫を種ゑることでも學ばうか。かくて、酒を釀して、時に自ら慰勞をしたいのである。

贈王仲素寺丞

王仲素寺丞に贈る

養氣如養兒。棄官如棄泥。
氣を養ふは兒を養ふが如く、官を棄つるは泥を棄つるが如し。
人皆笑子拙。事定竟誰迷。
人皆子が拙なるを笑ふ、事定まつて竟に誰か迷はん。
歸耕獨患貧。問子何所齎。
歸耕獨り貧を患ふ、子に問ふ何の齎す所ぞ。
尺宅足自庇。寸田有餘畦。
尺宅自ら庇ふに足り、寸田餘畦あり。
明珠照短褐。陋室生虹霓。
明珠短褐を照らし、陋室虹霓を生ず。
雖無孔方兄。顧有法喜妻。
孔方兄なしと雖も、顧ふに法喜の妻あり。
彈琴一長嘯。不答阮與嵇。
琴を彈じて一たび長嘯す、答へず阮と嵇と。
曹南劉夫子。名與子政齊。
曹南の劉夫子、名は子政と齊し。
家有鴻寶書。不鑄金裹蹄。
家に鴻寶の書あり、鑄ず金裹蹄。
促膝問道要。遂蒙分刀圭。
膝を促して道要を問ひ、蒙を遂げて刀圭を分つ。
不忍獨不死。尺書肯見梯。
忍びず獨り死せざるに、尺書肯て梯を見る。
我生本强鄙。少以氣自擠。
我が生は本强鄙、少うして氣を以て自ら擠す。
孤舟倒江河。赤手攬象犀。
孤舟江河を倒にし、赤手象犀を攬る。
年來稍自笑。留氣下暖臍。
年來稍自ら笑ひ、氣を留めて暖臍を下す。
苦恨聞道晚。意象颯已淒。
苦だ恨む道を聞くこと晚く、意象颯として已に淒。
空見孫思邈。區區賦病梨。
空しく見る孫思邈、區區病梨を賦す。

【字解】 【一】 王仲素　東坡自注にいふ、名、景純と。【二】 寺丞　寺は官廳をいふ。唐書、百官表に、後魏以來、卿名雖レ仍レ舊、而所レ莅之局、謂二之寺一。因名二九寺一。大理寺・大常寺・鴻臚寺等。丞は副貳、府丞は府尹の次官、縣丞は知縣の次官。【三】 養氣　老子に、專レ氣致レ柔、能如二嬰兒一乎。【四】 養兒　醫經に、欲レ養レ兒、愼二風池一。風池は人體經穴の名。【五】 如棄泥　莊子、田子方篇に、棄レ隸者、若レ棄二泥塗一。隸は僕隸。【六】 歸耕　歸田・歸農に同じ。致仕の義。漢書、夏侯勝傳に、學レ經不レ明、不レ如二歸耕一。【七】 尺宅、寸田　黃庭經に、寸田尺宅可レ治レ生。兩眉間爲二上丹田一、心爲二絳宮田一、臍下三寸爲二下丹田一。【八】 明珠照二短褐一　老子に、被レ褐懷レ玉。列子、力命篇に、北宮子衣二其短褐一。阮籍の詠懷詩に、被レ褐懷レ珠玉。韓詩外傳に、短褐不レ蔽形。【九】 陋室　韓退之の詩に、陋室有二文史一、高門有二笙竽一。唐、劉禹錫に陋室銘がある。【一〇】 虹霓　霓は蜺に同じ。春秋元命苞に、虹霓者、陰陽之精、陰陽交爲二虹霓一。【一一】 孔方兄　晉、魯褒傳に、作二錢神論一、錢之爲レ體、有二乾坤之象一、親レ之如レ兄、字曰二孔方一。【一二】 法喜妻　維摩經に、

法喜以爲レ妻、慈悲爲二男女一。【一三】長嘯　聲を長くして嘯く。晉書、阮籍、嘗於二蘇門山一遇二孫登一、與商二略終古及棲神導氣之術一、登皆不レ應、籍因長嘯而退、至二半嶺一、聞下有レ聲若二鸞鳳之音一、響二乎巖谷一、乃登嘯也。王維の詩に、獨坐幽篁裏、彈レ琴復長嘯。【一四】不レ答　阮興レ嘗晉、孫登傳に、登好讀レ易、撫二一弦琴一、見者、皆親樂レ之、文帝聞レ之、使二阮籍往與語一、不レ應、嵇康又從レ之游三年、問二其所レ圖、終不レ答。【一五】劉夫子　王注に、劉夫子豈劉宜翁乎、先生在二惠州一時、有レ書與二宜翁一、咨二問道要一、自以爲杜レ門屏居、胷中廓然、實無二荆棘一、有二受道之質一。一曰、劉安世待制字器之、曹南人、得二養生煉丹術一、公嘗師レ之。王文誥いふ、二劉、皆非レ是、宜翁、乃吳興人と。【一六】名與二子政一齊　渼、楚元王傳に、劉向字子政、本名更生、淮南王有二枕中鴻寶祕書一、言下神仙使二鬼物一爲レ金之術上、更生父德、治二淮南獄一、得二其書一、更生幼而讀誦、以爲奇、獻レ之、上令レ典二尚方鑄作事一、費甚多、方不レ驗、乃下二更生吏一。【一七】金裹蹄　漢武帝紀に、太始二年三月、詔曰、有司議曰、朕郊見二上帝一、西登二龍首一、獲二白麟一、以饋二宗廟一、渥注水出二天馬一、泰山見二黃金一、宜レ改二故名一、今更二黃金一爲二麟趾褭蹏一、以協レ瑞焉。渥注は水名。甘肅、安西縣に在り、黨河の支流。【一八】促レ膝　杜子美の相從歌に、夜如何其初促レ膝。【一九】刀圭　藥を盛る匙。韓退之の詩に、金丹別後知二傳得一、乞取刀圭救二病身一。本草に、丸散藥有レ云、刀圭者、十分方寸之一、堆如二梧桐子大一。【二〇】獨不レ死　韓退之の太學博士李君墓誌に、余自二袁州一還二京師一、襄陽乘レ舸邀二我於蘄洲一、屏レ人曰、我得二祕藥一、不レ可二獨不レ死、今遣二子一一器一。注にいふ、襄陽、孟簡也、時爲二節度使一と。【二一】尺書　尺牘に同じ。岑參の詩に、相思難レ見レ面、時展二尺書一看。【二二】見レ梯　合注にいふ、取二梯引一之意と。【二三】倒二江河一　水逆流の意。合注にいふ、此言學レ道修養之訣一と。【二四】赤手攬二象犀一　合注にいふ、此與二上句一同意。【二五】年來　語林に、我年來忍レ饑誦レ經。【二六】意象　李嶠の書に、筌蹄意象。【二七】孫思邈云云　唐書に、盧照鄰得二惡病一、從二孫思邈一、問二養生之道一、作二病梨賦一、以自悲。舊唐書、孫思邈傳に、庭前有二病梨樹一、盧照鄰爲二之賦一、序思邈曰、道合二古今一、學殫二數術一、高談正一、則古之蒙莊子、深入不二、則今之維摩詰、其推二步甲乙一、度二量乾坤一、則洛下閎・安期生之儔也。【二八】區區　李陵の答二蘇武一書に、區區竊慕之耳。

【題義】此詩も熙寧十年八月の作。紀昀いふ、起二句不二甚雅一と。又いふ、對得二工緻一、然古詩對偶太工、則礙レ格と。王文誥いふ、仲素罷レ仕隱二灊山一、其游二彭城一年七十四矣、留三日去、查注謂仲素致仕、將レ歸者、誤と。

【詩意】老子は氣を專にし、柔を致して、能く嬰兒の如くならんかと言つたが、純眞の元氣を抱き守つて、何事も自然の理法に從ふこと、母の懷に抱かれた嬰兒の如くなるを言つたのであらう。君も氣を養ふは、嬰兒を養ふが如くであり、又、官職を棄てることも、泥塗を棄てるが如くである。それで人は皆、君の世に處することの拙なるを笑ふが、事が定まつてからは、竟に誰も君を迷はない。故山に歸つて、田地でも耕さうと思はれるであらうが、ただ貧しきを患へる。君に尋ねるが、故山には何を齎すのか。君の寸田尺宅は立派に生を治めることが出來る。寸田尺宅といふのは、黃庭經に據ると、兩眉の間を上丹田となし、心を絳宮田となし、臍の下三寸を下丹田となすさうである。下丹田に餘裕のあるのを寸田有二餘畦一と言つたのである。又、老子は被レ褐懷レ玉と言つたが、君の歸耕は明珠の短褐を照らし、陋室に虹霓を生ずる如きものである。君は錢がなくても、法喜といふ妻がある。維摩經に法喜以て妻となし、慈悲を男女となすといふことが見えて居る。獨坐已に琴を彈じて、又、聲を長くして嘯く。昔、晉の孫登は、宜陽山に住み、好んで易を讀み、一絃琴を撫でた。見るものが、皆、親みて之を樂しむ。文帝は之を聞いて阮籍をして往いて與に語らしめたが、孫登は之に應へなかつた。嵇康も、亦、之に從つて三年も游學したが、やはり答へられなかつたさうである。さて曹南の劉夫子は昔の劉向と盛名を同うして居る。そして其家には、枕中鴻寶祕書といふがある。道家の書である。昔、渥洼水から天馬が出で、泰山に黃金が見えたので、故の名を改めたが、今、又、黃金を更めて、

麟趾褭蹏となし、以て瑞祥に協へたのである。褭は馬の端綱で褭蹄は金の名である。金褭を鑄ずといふのは、家に道書があつても、丹砂を化して黄金とする術を行はないといふ意である。膝を進め玄談に入つて、道の要を問ふ。そして蒙をば立派になして、仙藥を分つ。刀圭は藥を盛る匙である。仙藥を得て、獨り不死となるに忍びない。尺牘を捧げて見參する。顧れば我が生は、本、木强で鄙野である。年少い時分から氣を以て自らを擠排した。譬へば孤舟に棹して、江河を倒にしようとするやうに、又、赤手で象や犀を攬るやうに、道を學んで修養する。數年來だんだん自分で自分を笑ひ、氣を留めて、暖かい臍を下した。(紀昀いふ、太俚と。)甚だ殘念に思ふのは、道を聞くことが晩かつた爲に、意象は颯として、すさまじく感ずる。それで、空しく孫思邈が區區病梨を賦するを見るのである。昔、盧照鄰は惡疾を得たので、孫思邈の許へ行いて養生の道を問うた。そして病梨賦を作つて自ら悲んだといふことである。今の我も、丁度それである。

陽關詞三首

陽關詞　三首

(一)受降城下紫髯郎。
(二)戲馬臺前古戰場。
(三)恨君不取契丹首。

【字解】【一】陽關詞　陽關曲をいふ。王維の送元二使安西詩に、渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人。この詩の後の三句を二度重れて唱へるより、陽關三疊といふこと、前にも出づ。【二】受降城　漢、匈奴傳に、令因杅將軍築受降城。舊唐書、神龍三年、朔方總管張仁愿、於河北、築三受降城、首尾相應、以絕南寇之路、自是突厥不敢度山放牧。元和郡縣志に、東受降城、漢、雲中郡地、在榆林縣東北八里、中受降城、本、漢五原郡地、今爲天德郡、西受降城、在豐州西北八十里、蓋、漢、朔方郡地。【三】紫髯郎　夷狄の人をいふ。三國志に、張遼問吳降人、尚有紫髯將軍、爲誰、答曰、孫仲謀。李益の胡笳歌に、君不聞胡笳聲最悲、紫髯綠眼胡人吹。【四】戲馬臺　徐州彭城縣に在り、項羽の築きし所、宋武、第舍を建て、重九の日、賓客を引いて、臺に登り、詩を賦す。蕭子顯、齊書に、武帝爲宋公、在彭城、九日、出戲馬臺、至今相承、以爲舊準。春秋より以來、乃ち武を用ひる處。春秋、鄭伯、宋の彭城を取つて、漢の高祖・項羽、皆、此に起る。後漢、呂布、下邳より相持して城を彭城に築く。【五】古戰場　唐、李華、弔古戰場文に、浩浩乎平沙無垠、夐不見人、河水縈帶、羣山糾紛、亭長告余曰、此古戰場也、常覆三軍、往往鬼哭、天陰則聞。【六】契丹　隋書に、契丹之先、與庫莫奚、異種而同類、居黃龍之北。【七】金甲　蔡琰の詩に、金甲耀日光。唐會要に、戈鋋金甲、耀照天地。【八】牙旗　文選、潘安仁の關中詩に、桓桓梁征、高牙乃建。注にいふ、牙、牙旗也と。兵書に、牙旗、將軍之旗。張平子、東京賦に、牙旗繽紛。

(七)金甲牙旗歸故鄉。
右。贈張繼愿

金甲牙旗故鄉に歸る。
右、張繼愿に贈る

【題義】三詩は、各自に事を說いて居るが、東坡は、皆、陽關を以て之を歌ふ。乃ち聚めて一處となし、其の題を標して陽關三絕といふ。江藩いふ、陽關詞、古人但論三疊、不論聲調、以王維一首定此調平仄、此三詩與摩詰一毫髮不爽と。

【詩意】唐、中宗の神龍三年に、朔方總管張仁愿は、河北に三受降城を築いた。三城は首尾相應じて、南寇の路を絕つたので、突厥も敢て山を度つて牧を放たなかつたといふことである。其の受降城

下の紫髯郎は胡人である。又、徐州彭城縣の戲馬臺は、春秋以來、武を用ひた古戰場である。思へば君が契丹の首を取らないで、ただ金甲を日光に耀かし、將軍の旗を推し立てて故郷に還つたことは、何だか物足りなく、殘念である。

濟南春好雪初晴。
行到龍山馬足輕。
使君莫忘雪溪女。
時作陽關腸斷聲。

右。答李公擇

濟南春好く雪初めて晴る、
行いて龍山に到つて馬足輕し。
使君忘るるなかれ雪溪の女を、
時に陽關腸斷の聲を作す。

右、李公擇に答ふ。

【字解】【一】濟南　唐、地理志に、齊州濟南郡。【二】龍山　濟南に、龍山鎭あり、王士禎の漁洋詩話に、濟南郡城東七十里、龍山鎭、卽水經、巨合城也、東坡陽關詞、行到龍山馬足輕。陳後山談叢に、齊之龍山鎭、有平六故城、附城有走馬臺。【三】雪溪　川の名。浙江吳興縣の南に在る。王注に、雪谿在湖州、李公擇、先爲湖州故也。【四】陽關腸斷聲　李義山の詩に、斷腸聲裏唱陽關。郗昂樂府解題に、許永新歌奏慢聲、喜者聞之氣勇、愁者聞之腸斷。【五】李公擇　先に湖州に知となり、湖州より濟南に移つたから、東坡は、雪谿女を以て之に戲れたのである。

【詩意】李公擇は湖州から濟南に移つた。濟南は春景色が好く、雪も初めて晴れる。行いて龍山鎭に到ると、馬の足が輕くなつた。使君（刺史）李公擇には、此度、濟南に移られても、どうか、湖州の雪溪の女をお忘れにならないやうに。雪溪は湖州に在り、そして李公擇は、先に湖州の知事であつたから、かく戲れたのである。さて李義山の詩にも、斷腸聲裏唱陽關とあるが、湖州から濟南へ行く際は、送別の詩、陽關三疊を唱へたのであらうから、定めし腸斷の聲をなしたであらう。

暮雲收盡溢清寒。
銀漢無聲轉玉盤。
此生此夜不長好。
明月明年何處看。

右。中秋月

暮雲收め盡して清寒溢る、
銀漢聲なくして玉盤を轉ず。
此生此夜は長く好からず、
明月明年何れの處にか看む。

右、中秋の月

【字解】【一】銀漢　自帖に、天河謂之銀漢、亦曰銀河。【二】玉盤　李太白の詩に、小時不識月、喚作白玉盤。

【詩意】風月堂詩話に、東坡中秋の詩、紹聖元年、自ら其後に題していふ、予十八年前中秋、與子由觀月彭城、作此詩、以陽關歌之と。暮雲が收まり盡して、清寒が溢れるやうである。仰いで見ると天の川は聲がなく、恰も玉盤を轉じたやうである。我が一生中に、此夜のやうな良い夜は長く續かない。此の明月を明年は何處で看ることであらう。

和孔周翰二絕　孔周翰に和す、二絕

再觀邸園留題　再び邸園を觀て留題す

小園香霧曉蒙籠。
醉守狂詞未必工。
魯叟錄詩應有取。
曲收彤管邶鄘風。

【題義】高密（山東、膠東道）の老儒の言に據るに、邸氏に賢婦があつて、孀居嫁せなかつた。其の貞節が甚だ高かつたから、東坡の此詩に、靜女彤管有レ煒、及び柏舟共姜自誓、邶鄘二國風の事を用ひたのである。柏舟の操は、衞の太子共伯が早く死して、其の妻共姜は義を守る。父母奪つて之を嫁せんとしたから、共姜乃ち柏舟の詩を作つて、自ら誓つたのである。彤管有レ煒の詩は、邶風にあり、柏舟共姜自誓の詩は、鄘風にある。

【詩意】邸氏の小園には、香霧が罩め、曉方に至つて更に覆蔽する。酒に醉うた太守の狂詞は未だ必ずしも工でない。併し、昔、孔夫子は、古詩を刪修して三百五篇となし、皆、之を絃歌せしめたが、其のやうに、今若し孔夫子をして詩を錄せしめば、太守の狂詩も、女史が赤い管の筆を用ひて錄される

【字解】【一】留題　遊覽の後、其地に題詠する。庚溪詩話に毘陵薦福寺紅梅閣、士大夫多二留題一。【二】蒙籠　覆蔽の貌、漢書に、草木蒙籠。【三】狂詞未二必工一　王文誥いふ、自謂二前和詩一也と。【四】魯叟錄レ詩　魯叟は孔子をいふ。叟は長老の稱。同じく東坡の詩に、空餘魯叟乘レ桴意。孔子、古詩を刪修して三百五篇となし、皆、之を絃歌す。王注にいふ、指二言孔宗翰一也と。【五】彤管　女史の用ひる赤い管の筆。詩、邶風に、靜女其孌、貽二我彤管一。傳にいふ、后夫人必有二女史一、事無二大小一、記以成レ法、箋にいふ、赤管煒煒然也と。

小園香霧曉蒙籠、醉守狂詞未だ必ずしも工ならず。魯叟詩を錄す應に取るあるべし、曲に彤管を收む邶鄘風。

靜女其孌の詩を邶風に、柏舟共姜自誓の詩を鄘風に收めたやうになるであらう。孔夫子に借りて孔宗翰のことを言つたのである。

觀淨觀堂效韋蘇州詩

弱羽巢林在一枝。
幽人蝸舍兩相宜。
樂天長短三千首。
卻愛韋郎五字詩。

【詩意】弱羽の鳥が林に巢ふも、一枝に過ぎない。世を避けた隱者の住居には、蝸牛の廬が適當であ

【字解】【一】弱羽　柳子厚の詩に、每憶纖鱗游二尺澤一、翻愁弱羽上二青霄一。【二】巢レ林在二一枝一　莊子、逍遙遊に、鷦鷯巢二於深林一、不レ過二一枝一。唐語林に、貞觀中、蜀人李義府、八歲號二神童一、至二京師一、太宗在二上林苑一、便對、有二得レ鳥者一、上賜二義府一、義府登時、進レ詩曰、日裏揚二朝彩一、琴中伴二夜啼一、上林多許樹、不レ借一枝棲、上笑曰、朕以二全樹一借レ汝、後相二高宗一。【三】幽人　世を避けて居る人。易、履卦に、履レ道坦坦、幽人貞吉。【四】蝸舍　蝸廬に同じ。李商隱の詩に、自喜蝸牛舍。高士傳に、焦先作二蝸牛廬一、呻二吟其中一。【五】兩相宜　魏略に、焦先、字孝然、自作二一瓜牛廬、淨二掃其中一、呻吟獨語。高士傳に、先、常結レ草爲レ廬、後野火燒二其廬一、先露寢、遭二冬雪大至一、祖臥不レ移。【六】樂天長短三千首　白樂天、白氏文集記に、樂天有二文集七帙一、合六十七卷、凡三千四百十七首。【七】韋郎五字詩　舊唐書に、白居易興二元微之一書云、韋蘇州歌行、才麗之外、頗近二興諷一、其五言詩、又、高雅閒澹、自成二一家之體一、今之秉レ筆者、誰能及レ之、然當二蘇州在時一、人亦未二甚愛重一、必待二身後一始貴レ之。杜子美の詩に、同病得二韋郎一。

る。昔、焦孝然は、草を結んで廬となし、其中に呻吟した。一日、野火が其の廬を燒いたので、孝先は詮方なく、露寢をした。折惡しくも冬雪が大に降つて來たが、孝然は袒臥して移らなかつたといふことである。幽人と蝸舍とは、相宜しい。さて白樂天は著作に富んで、文集十帙、合せて六十七卷、凡そ三千四百十七首もある。併し我は卻つて韋蘇州が五字の詩の方を愛するのである。（白樂天も韋蘇州の歌行は、才麗の外、頗る興諷に近し。其の五言詩、又、高雅閒澹、自ら一家の體を成す。今の筆を秉るもの、誰か能く之に及ばんと言つた。）

答任師中家漢公

任師中・家漢公に答ふ

先君昔未仕。杜門皇祐初。
道德無貧賤。風采照鄉閭。
何嘗疎小人。小人自闊疎。
出門無所詣。老史在郊墟。
門前萬竿竹。堂上四庫書。
高樹紅消梨。小池白芙蕖。

先君昔未だ仕へず、門を杜づ皇祐の初。
道德貧賤なく、風采鄉閭を照らす。
何ぞ嘗て小人を疎せん、小人自ら闊疎。
門を出づる詣る所なし、老史郊墟に在り。
門前萬竿の竹、堂上四庫の書。
高樹は紅消梨、小池には白芙蕖。

常呼赤脚婢。雨中擷園蔬。
矯矯任夫子。罷官還舊廬。
是時里中兒。始識長者車。
烹雞酌白酒。相對歡有餘。
有如龐德公。往還葛與徐。
妻子走堂下。主人竟誰歟。
我時年尚幼。作賦慕相如。
侍立看君談。精悍實起予。
歲月曾幾何。耆老逝不居。
史侯最先歿。孤墳拱桑樗。
我亦涉萬里。清血滿襟袪。
漂流二十年。始悟萬緣虛。
獨喜任夫子。老佩刺史魚。
威行烏白蠻。解辯請冠裾。

常に赤脚の婢を呼び、雨中に園蔬を擷む。
矯矯任夫子、官を罷めて舊廬に還る。
是の時里中の兒、始めて識る長者の車。
雞を烹て白酒を酌み、相對して歡餘あり。
龐德公の如きあり、往還葛と徐と。
妻子堂下に走る、主人は竟に誰か。
我時に年尚ほ幼く、賦を作りて相如を慕ふ。
侍立して君が談ずるを看る、精悍實に予を起す。
歲月曾て幾何ぞ、耆老は逝いて居らず。
史侯最も先づ沒す、孤墳桑樗拱に。
我も亦萬里を涉り、清血襟袪に滿つ。
漂流二十年、始めて悟る萬緣の虛なるを。
獨り喜ぶ任夫子、老いて佩ぶ刺史の魚。
威は烏白蠻に行はれ、辯を解いて冠裾を請ふ。

方當(二六)入奏事。清廟陳(二八)璠璵。
胡爲厭(二九)軒冕。歸意不少紓。
上蔡有良田。黃沙走清渠。
罷亞百頃稻。雍容十年儲。
閒隨李丞相。搏射鹿與猪。
蒼鷹十斤重。猛犬如黃驢。
豈比陶淵明。窮苦自把鋤。
我今四十二。衰髮不滿梳。
彭城古名郡。乏人偶見除。
頭顱已可知。幾何不樵漁。
會當相從去。芒鞋老菑畬。
念子瘴江邊。懷抱向誰攄。
賴我同年友。相歡出同輿。
冰盤薦文鮪。玉斝傾浮蛆。

方に當に入つて事を奏すべく、清廟璠璵を陳ぬ。
胡爲ぞ軒冕を厭ひ、歸意少しも紓まざる。
上蔡良田あり、黃沙清渠走る。
罷亞百頃の稻、雍容十年の儲。
閒かに李丞相に隨ひ、搏射す鹿と猪と。
蒼鷹十斤重く、猛犬黃驢の如し。
豈比せん陶淵明、窮苦自ら鋤を把るに。
我今四十二、衰髮梳るに滿たず。
彭城は古の名郡なれども、人に乏しくして偶〻除せらる。
頭顱已に知るべし、幾何か樵漁せざらん。
會ず當に相從ひ去つて、芒鞋菑畬に老ゆべし。
念ふ子瘴江の邊、懷抱誰に向つてか攄べん。
賴に我が同年の友、相歡んで出でて輿を同うす。
冰盤文鮪を薦め、玉斝浮蛆を傾く。

醉中忽思我。清詩綴瓊琚。
知我少所諧。教我時卷舒。
世事日反覆。翩如風中旗。
雀羅弔廷尉。秋扇悲婕妤。
升沈一何速。喜怒紛衆狙。
作詩謝二子。我師窮與蘧。

醉中忽ち我を思ひ、清詩瓊琚を綴る。
我が諧ふ所少きを知り、我をして時に卷舒せしむ。
世事日に反覆し、翩として風中の旗の如し。
雀羅廷尉を弔し、秋扇婕妤悲しむ。
升沈一に何ぞ速かなる、喜怒衆狙紛たり。
詩を作つて二子に謝す、我が師は窮と蘧と。

【字解】【一】任師中　元豐中、知二瀘州一。【二】家漢公　家勤國、字は漢公。東坡と同年。定國の兄である。漢公未だ仕へず。其子愿、進士の第に登りて聲あり。【三】先君　編禮ないふ。【四】杜レ門　漢、司馬相如傳に、卓王孫恥レ之、爲杜レ門不レ出。【五】皇祐　王注に、皇祐、仁宗年號也、慶曆八年歲在二戊子一、次年改二皇祐一、盡二五年一改二至和一。【六】風采　漢書、霍光傳に、天下想二聞其風采一。【七】鄉閭　閭は里門。唐書に、王恭好篤學、教二授鄉閭子弟數百人一。【八】闊疎　事情に疎い。論衡に、周法闊疎、不レ可レ因也。ここは疎隔の意に用ふ。【九】老吏　名は經臣。字は彥輔。眉の老儒。嘗、思子臺賦を作る。東坡、甚だ之を稱す。【一〇】郊墟　墟は大丘。韓退之の詩に、時秋積雨霽、新涼入二郊墟一。【一一】萬竿竹　杜子美の詩に、惡竹應須レ斬二萬竿一。【一二】四庫書　唐、藝文志に、兩都各寫二書四部一、以二甲乙丙丁一爲レ次、列二經史子集四庫一、其本有二正副一、軸帶二牙籤一、皆異レ色、以別レ之。【一三】紅消梨　三秦記に、漢武帝園有二大梨一、如二五升瓶一、落レ地則破、名二含消梨一。【一四】赤脚婢　赤脚は素足をいふ。杜子美の苦熱詩に、安得赤脚蹋二層冰一。【一五】嬌嬌　志の高く超然たる貌。漢書、敍傳に、賈生嬌嬌、弱冠登レ朝。【一六】長者車　漢、陳平傳に、平家貧、席爲レ門、門外多二長者車轍一。杜子美の詩に、門多二長者車一。【一七】烹レ雞酌二白酒一　李太白の詩に、白酒新熟山中歸、黃雞啄レ黍秋正肥、呼レ童烹レ雞酌二白酒一、兒女嬉笑牽二人衣一。【一八】龐德公　襄陽記に、龐德公居二峴山之南一、未二嘗入二城府一、諸葛孔明每レ至二德公家一、獨拜二牀下一、德公初不

レ令レ止、司馬德操嘗謂二德公一、值二其上レ冢、德操徑入二其室一、呼二德公妻子一、使二速作レ黍、徐元直、向云、當二來就一我與二德公一、談二其妻子一、皆羅二拜堂下一、奔走共設、須臾德公還、直入相就、不レ知二何者是客一也。【一九】葛與レ徐　諸葛亮と徐庶（元直）。【二〇】慕相如　漢、揚雄傳に、先レ是、蜀有二司馬相如一、作レ賦甚宏麗温雅、雄心壯レ之、每レ作レ賦、常擬レ之、以爲レ式。杜子美の詩に、草レ玄吾豈敢、賦或似二相如一。【二一】靖悍實起レ予　漢、嚴延年の傳に、爲レ人短小精悍、敏二捷於事一。起レ予の起は、發に同じ。論語、八佾篇に、子曰、起レ予者、商也始可二與言一レ詩已矣。【二二】清血滿二襟袂一　此は老蘇公の憂に丁るを指す。杜牧の詩に、清血灑不レ盡。陸龜蒙の詩に、有レ禍一緹、不レ襟不レ袂。【二三】佩剌史魚　唐書、車服志に、高祖入二長安一、罷二隋竹使符一、頒二銀魚符一。舊唐書、與服志に、武德元年、改二銀魚符一爲二銅魚符一。杜牧詩に、使君四十四、兩佩左二銅魚一。【二四】烏白蠻　唐、南蠻列傳に、蠻有二邛部六姓一、二姓白蠻也、五姓烏蠻也。蜀鑑、西南夷考に、自二曲州・靖州一西南距二龍利城一、通謂二之西爨白蠻一、自二彌鹿・升麻二州一、南至二步頭一、通謂二之東爨烏蠻一、延袤二千餘里。唐會要に、東謝蠻在二黔州之西數百里一、北至二白蠻一。梁益州記に、嶲州嶲山、地接二諸蠻部一、有二烏蠻秋蠻一。杜子美の詩に、山帶烏蠻闊、又、烏蠻瘴遠隨。【二五】解レ辮請二冠裾一　邱希範書に、夜郎濕池、解レ辮請レ職。漢書、終軍傳に、將レ有下解二編髮一、創二左衽一、襲二冠帶一、要二衣裳一而蒙レ化者上焉。顏師古いふ、編讀曰レ辮と。師中は、瀘に在つて、威信大に著はれ、歲滿ち、更ふるに當り、詔して留りて再び任じ、秩を增す。【二六】方當二入奏一レ事　方當は、袁紹傳に、方當二與レ君圖一レ之。史記、李斯傳に、上方閒可レ奏レ事。【二七】清廟　左傳、桓公二年に、清廟茅屋。清は清淨の意。【二八】陳二璠璵一　逸論語に、璠璵、魯之寶玉也、孔子曰、美哉璠璵、遠而望レ之、煥若也、近而視レ之、瑟若也。左傳、定公五年に、陽虎將下以二璵璠一斂上。【二九】軒冕　軒は貴人の乘車、冕は貴人の冠。漢書、揚雄傳に、俄二軒冕一、雜二衣裳一。【三〇】罷亞　禾の名。本、穲稏に作る。【三一】上蔡有二良田一　上蔡は蔡州。任公の田が新息にある。師中、嘗、蔡州新息の令たり、邑人、之を愛し、爲に田を買ふ。【三二】雍容　和げる貌。史記に、南陽行賈、盡法二孔氏之雍容一。班固賦序に、雍容揄揚、著二於後嗣一。【三三】李丞相云云　李斯爲二秦丞相一、下レ吏、顧謂二其中子一曰、吾欲下與レ若復牽二黃犬一、俱出二上蔡東門一、逐上狡兎、豈可レ得乎。師中、蔡州、新息の令となり、邑人、爲に田を買ふ。故に上蔡東門の事を用ふ。【三四】蒼鷹　羽毛蒼白色を帶ぶ。戰國策に、蒼鷹擊二于殿上一。西陽雜俎に、鷹有二荊棄白者一、短身而大五斤云云。【三五】自把レ鋤　陶淵明の歸園田居詩に、晨興理二荒穢一、帶レ月荷レ耡歸。【三六】名郡　晉書、顏含傳に、今莅二名郡一。【三七】頭顱　陸游の詩に、白首功名元未レ晚、笑人四十款二頭顱一。【三八】檻瀛　孔魚の詩に、闌澤伴二檻瀛一。【三九】芒鞋　草鞋に同じ。陳師道の詩に、竹杖芒鞵取次行。鶴林玉露、尼悟道の詩に、芒鞵踏遍隴頭雪。元微之の詩に、騰騰兀兀閒行、竹杖芒鞋稱二野宿一。【四〇】蒼舒　荒地をひらく。易、无妄に、不二耕穫一、不二菑畬一。【四一】瘴江邊　韓退之が示レ湘詩に、知汝遠來應レ有レ意、好收二吾骨一瘴江邊。【四二】懷抱　文選、謝靈運の擬鄴中詩に、歡娛寫二懷抱一。【四三】同年友　劉禹錫、送二張盥赴レ舉詩引に、古人以二偕升レ名爲二同年友一。王文誥いふ、公少與二家漢公一退翁・復禮・兄弟三人一同游學於西社、而與二退翁一爲二同年一、故送二退翁一詩、有下吾州同年友、桑若二參上星一之句上。漢公未レ仕、此同年友、似下因二其弟一連而及レ之、或以二同門一爲二同年一也、據レ詩、漢公在二師中處一、故但言二其相歡一而止、若以二此同年友一、與下送二退翁一之同年友上並解、卽大誤矣云云と。【四四】出同レ輿　晉、夏侯湛傳、與二潘岳一友善、每二行止一、同レ輿接レ茵。【四五】冰盤　韓退之の詩に、冰盤夏薦碧實脆。【四六】文鮪　東坡自注にいふ、鮪、鰒也、戎瀘常有レ之。周禮、天官に、鰒人春獻二王鮪一。【四七】玉斝　玉のさかづき。說文に、玉爵也、と見ゆ。獻酬の禮に用ひる。夏に醆といひ、殷に斝といひ、周に爵といふ。劉孝標、廣絕交論に、霑二玉斝之餘瀝一。【四八】浮蛆　酒の面の浮滓。東坡の詩に、桑落初嘗灑玉虹。【四九】瓊琚　美玉をいふ。詩、衞風に、投レ我以二木瓜一、報レ之以二瓊琚一。【五〇】卷舒　韓退之の詩に、簡編可二卷舒一。【五一】旗　鳥隼を畫いた旗。【五二】雀羅弔二廷尉一　史記に、下邽翟公有レ言、始翟公爲二廷尉一、賓客闐レ門、及レ廢、門外可レ設二雀羅一、翟公復爲二廷尉一、賓客欲レ行、翟公乃大二署其門一曰、一死一生、乃知二交情一、一貧一富、乃知二交態一、一貴一賤、交情乃見。【五三】秋扇悲二婕妤一　文選、趙飛燕妹弟得レ幸、班婕妤失レ寵、作二怨歌行一云、裁爲二合歡扇一、團團似二明月一、常恐秋節至、涼飈奪二炎熱一、棄二捐篋笥中一、恩情中道絕。【五四】紛二衆狙一　莊子、齊物論に、狙公賦レ茅、曰朝三而暮四、衆狙皆怒、曰然則朝四而暮三、衆狙皆悅、名實未レ虧而喜怒爲レ用、亦因レ是也。茅は一名橡子、山栗をいふ。【五五】蕣與レ蘧　蕣武子と蘧伯玉。文選、潘安仁、閑居賦に、雖二吾顏之云厚一、猶內愧二於蕣蘧一。王注に、蕣武子、邦有レ道則知、邦無レ道則愚、蘧伯玉、邦有レ道則仕、邦無レ道則卷而懷レ之。

【題義】任師中（瀘州に知たり）と家漢公（東坡の同年の友）とに答へた詩である。紀昀いふ、此體、瓶レ自二王無功一、而盛二於杜工部一、以レ詩序レ事、而不レ散不レ冗、全由二筆力不レ同、無二大力以運レ之、卽爲二長慶潦倒語一と。潦倒は、老衰の貌である。嵇康が絕交の書に、足下舊知二吾潦倒麤疏不レ切二事情一と見え

て居る。

【詩意】仁宗の皇祐年間の初め頃、我が先考編禮は、未だ仕へないで、常に門を杜ぢて、外へは出でなかつた。そして道德が高いから貧賤に動かされない。風采が立派であるから、鄉里に赫いて居る。何も殊更に小人をば疎じないけれども、小人の方から自ら隔たるのである。そこで歩して門を出づるもさしあたり詣るべき所がない。詣るべきは、眉山の老儒、名は經臣、字は彥輔で、當時、郊墟に居られた。門の前には、萬年の竹があり、堂の上には、經・史・子・集四庫の書が列なつて居る。高く聳えて居る樹は、紅消梨である。小さな池には白い蓮が植ゑてある。常に素足の下女を呼んで、雨中でも園蔬を擷ましめる。(老儒が平生の生活を說く。)さて、任師中は元豐中、瀘州に知となつて居たが、一朝、官を罷めて、舊廬に還つた。矯矯として志が高いから、里中の人も、之を慕つて、始めて長者の車といふことを識つたのである。何れも此の長者を迎へて、雞を烹、白酒を酌み、相對飲して、其の歡びが溢れるばかりであつた。昔、諸葛孔明は、龐德公の家に至る毎に、獨り、牀下に拜した。(牀下に拜するときは、之を止めしめるが禮である。德公は、孔明の拜をば辭しなかつた。)然るに司馬德操は德公に詣り、徑に其の部屋に入り、德公の妻子を呼んで速かに黍を作らしめる。そして徐元直の言を傳へると、妻子は、皆、堂下に羅拜して、奔走もし共設もする。須臾にして德公が還り、直に入つて、座に相就く、かくて何れが主人、何れが賓客であるか判らないといふことである。任師中も亦、龐德公の如き人に遭ひ、諸葛孔明や徐元直が相往還し、妻子堂下に走るやうな所がある。さて我は當時、年がまだ幼く、賦を作つて司馬相如を慕ひ、(相如は蜀の人である)任君の傍らに侍つて其の談話をするを看て居た。(紀昀いふ、插二入自己一、生レ波縈繞と。)君の精悍な態度は、よく我をして奮發せしめたのである。其後幾何の年月も經ない內に、所謂耆老はだんだんと此世をば去られる。前の老儒先生が先づ沒し、孤墳の墓木に充てられた桑も楮も、大さが拱(兩手で合せもつ程の大さ)となつた。そして我も亦、萬里の遠きに行くこととなつた。又、我はたまたま先考の喪に遭つて淸血が襟や袪に滿つる。かくて、諸方を漂流することが、約二十年、備に浮生の轉變を目擊して、始めて人間萬緣の虛なることを悟つた譯である。(紀昀いふ、轉落脈理秩然、筆力亦極二沈鬱頓挫之致一、淸血二字、不レ雅と。)ただ喜ばしいことは任夫子が晩年に出世して刺史となられ、其の身に銅魚符をば佩びたことである。威權は、白蠻や烏蠻に行はれ、何れも其の辮髮(編髮をいふ)を解いて、中國の衣冠を請ふやうになつた。(任師中は瀘州に在つて、威信が大に行はる。)歲が滿ちて、更代の時に當つても、特に優詔があつて再任し、秩祿をも增された。方に入朝して事を奏すべく、淸廟には璠璵を陳ねた。所謂遠く之を望めば煥若、近く之を視れば瑟若、まことに盛んであつた。なぜかかる軒冕の立派な地位を棄てて、故山に向ふのであるか。そして平生の歸意が少しも紓まないのであるか。それは、任君の田地が蔡州にあるからである。任君は嘗て蔡州新息の令であつたとき、邑の人が之を愛し、爲に田を買つて贈つたのである。其の田地をいふと、黃沙に淸渠が走つて居り、罷亞といふ禾稻が百頃もつづいて、十分に十年間の儲がある。昔、李斯は秦の丞相となつて、常に其の子供と俱に上蔡東門に出でて狡兎を逐うた

が、今、任君には蔡州、新息の令となつて、邑人が良田を買つてくれたから、ここに此の故事を用ひたのであらう。任君は李丞相に倣つて遊獵をなし、鹿や猪を搏射することであらう。重さ十斤の蒼鷹や、黄驢のやうな猛犬は、獵用として常に伴つて居る。故にかの陶淵明のやうに、自ら耡を把つて、窮苦はしない。淵明の詩に、晨に興きて荒穢を理め、月を帶び耡を荷つて歸るとある。我は今年四十二歳、衰髮は梳づれなくなつた。彭城は古の名郡であるから、其の長官となるは、まことに名譽である。方今人材が乏しいので、偶然にも此度我がこの名郡の太守となつた。併し陸放翁の所謂、四十歎二頭顱一で、我が頭顱は知るべきである。それで間もなく樵漁に伴はうかと思ふ。必ず相從つて去り、草鞋を穿つて、荒地を開いて、年月を送らうと思ふ。遙に思ふ、君には漳江の邊に歡娛して、其の懷抱を寫されることと思ふが、其の懷抱を誰に向つて攄べるのであらう。幸に我が同年の友なる家漢公には、相歡んで、出でて輿を同うし、茵を接する。（紀昀いふ、搭二入家漢公一、天然湊泊と。）冰盤に文鮪を盛つて薦め、玉の杯には、酒の浮き滓が見える。醉中、忽ち我を思ひ出され、美玉の如き清詩を寄せらる。我が諧ふ所が少いことを知つて、我をして時に卷いたり舒ばしたりさせる。顧れば世事は日に反覆して少しの安定を見ない。翩翩として風中の旗のやうである。昔、下邽の翟公は、廷尉となつた時、賓客が門に闐ちた。廢されると、近寄るもの少く、門外に雀羅を設くべき有樣であつた。後、復、廷尉となり、賓客が復、行かうとすると、翟公は其門に一貴一賤、交情乃ち見はると大書した。又、班婕妤は寵を失つて、怨歌行を作り、秋扇を悲しんだ。人間の浮沈は、一に何ぞ速かなる、忽ち喜び、忽ち怒る。狙公、山栗を分配するに、初めは朝は三、暮は四と言つた。衆狙、皆怒る。そこで、朝は四、暮は三と言つた。衆狙、皆喜ぶ。名實は虧けないが、喜怒用をなす。之を思はなければならない。ここに詩を作つて、任師中・家漢公の二子に謝する。そして、我が師の甯武子と蘧伯玉であることを附け加へる。甯武子は、邦、道あれば則ち知、邦、道なければ則ち愚。蘧伯玉は、邦、道あれば則ち仕へ、邦、道なければ、則ち卷いて之を懷にする。此點を師として、出處行藏を明かにすべきである。

初別子由

初めて子由に別る

我少知子由。天資和而清。
好學老益堅。表裏漸融明。
豈獨爲吾弟。要是賢友生。
不見六七年。微言誰與賡。
常恐坦率性。放縱不自程。
會合亦何事。無言對空枰。
使人之意消。不善無由萌。

我少うして子由を知る、天資和にして清。
學を好み老いて益〻堅く、表裏漸く融明なり。
豈獨り吾弟たるのみならんや、要するに是賢友生。
見ざること六七年、微言誰と與にか賡せん。
常に恐る坦率の性、放縱自ら程らざるを。
會合亦何事ぞ、無言空枰に對す。
人の意をして消せしめ、不善由つて萌すなし。

(一二)森然有六女。(一三)包裹布與荆。
無憂賴賢婦。(一五)藜藿等大烹。
使子得行意。青衫陋公卿。
明日無晨炊。(一七)倒牀作雷鳴。
秋眠我東閣。(一八)夜聽風雨聲。
懸知不久別。(二〇)妙理難細評。
昨日忽出門。(二一)孤舟轉西城。
歸來北堂上。(二二)古屋空崢嶸。
(二四)退食悞相從。入門中自驚。
(二五)南都信繁會。人事水火爭。
念當(二八)閉閣坐。(二九)頽然寄聾盲。
妻子亦細事。文章固虛名。
會須掃白髮。不復用黃精。

【字解】【一】天資　風俗通に、范滂、天資聰叡。【二】融明　融も明の意。甚だ明かなるをいふ。詩、小雅に、昭明有融。【三】

森然として六女あり、包裹す布と荆と。
憂なきは賢婦に賴る、藜藿は大烹に等し。
子をして意を行ふを得しむ、青衫陋公卿。
明日晨炊なく、牀に倒れて雷鳴を作す。
秋は我が東閣に眠り、夜風雨の聲を聽く。
懸に知る久しく別れざるを、妙理細評し難し。
昨日忽ち門を出で、孤舟西城に轉ず。
歸り來る北堂の上、古屋空しく崢嶸。
退食悞つて相從ひ、門に入りて中自ら驚く。
南都は信に繁會、人事水火のごとく爭ふ。
念ふ當に閣を閉ぢて坐し、頽然として聾盲に寄すべし。
妻子亦細事、文章は固より虛名。
會ず須らく白髮を掃ふべし、復黃精を用ひず。

【四】友生　詩、小雅に、雖無旨酒、式燕以敖。【五】微言誰與度　微言は、微妙な言葉。漢書、藝文志に、仲尼沒而微言絕。度は度酬、人と詩を贈答する。【六】坦率　坦易眞率と熟す。さつぱりとして、かざらない意。北史、李廣傳に、廣性質樸、無私。唐、國史補に、宋濟老、於蝸屋、嘗試賦、譔落官韻、撫膺曰、宋五、又坦率矣。官韻は、官定の韻書である。科擧に因つて設け、詩賦用ひる所の韻を限り、皆、之を以て程式となす。宋に禮部韻略あり、明に洪武正韻あり、淸に佩文詩韻あり、皆、官韻である。朝野僉載に、唐、德宗、夏中、微行西明寺、宋濟、葛巾抄書、上曰、措大、茶來二椀、濟曰、鼎水方煎、有茶可自潑之、上又問、作何事業、是何姓行、濟曰、姓宋、第五、應進士擧、須臾聞呼官家、濟惶恐起拜、上曰、宋五大坦率、後聞禮部放榜、上令探、濟無名、曰、宋五又坦率也。【七】放縱　放逸といふに同じ。漢書、王吉傳に、王賀、復放縱自若。【八】自程　廣韻に、程、限也。【九】會合亦何事　文選、曹子建、七哀の詩に、升沈各異勢、會合何時諧。【一〇】空枰　方言に、投博、謂之枰。唐韻に、枰、博局也。文選、韋宏嗣の博奕論に、所志、不出一枰之上、所務、不過方罫之間。【一一】使人之意消　莊子、田子方篇に、東郭順子、其爲人也、眞、物無道、正容以悟之、使人之意消。【三】森然　ならび立つ。舊唐書、禮儀志に、森然在列。【一三】包裹　范成大の詩に、葉貴蠶飢危欲死、尙能包裹一絲窠。絲窠はまゆ。【一四】布與荆　後漢、梁鴻傳に、妻荊釵布裙。南史、范雲傳に、江祏、欲求雲女、婚姻取翦刀爲聘、及祏貴、雲曰、吾與將軍、俱爲黃鵠、今將軍化爲鳳凰、荊布之室、理隔華盛、因出翦刀還之。【一五】賴賢婦　子由の夫人は史氏。【一六】藜藿等大烹　藜藿は、あかざとまめのは。韓非子、五蠹篇に、糲粢之食、藜藿之羹。漢、司馬遷傳に、藜藿之羹。文選、曹子建の七啓に、予甘藜藿、未暇此食也。大烹は、周易に、大烹以養聖賢。禮、樂記に、大羹不和、有遺味者矣。【一七】晨炊　史記、淮陰侯傳に、晨炊蓐食。杜子美の詩に、玉粒是晨炊。【一八】東閣　漢、朱雲傳に、薛宣曰、在田野無事、且留我東閣。【一九】風雨聲　韋應物の詩意を用ふ。韋應物の聞雁詩に、故園渺何處、歸思方悠哉、淮南秋雨夜、高齋聞雁來。【二〇】妙理　文選、曹顏遠の思友人詩に、淸機法妙理。【二一】孤舟　陶淵明の詩に、眇眇孤舟逝。【二二】北堂上　文選、陸士衡の擬古詩に、安寢北堂上、明月入我牖。王文誥いふ、此卽逍遙堂也と。【二三】古屋空崢嶸　杜子美の詩に、古屋畫龍蛇。漢書、西域傳に、臨淵嶸不測之深。班固の西都賦に、金石崢嶸。【二四】退食　詩召南に、委蛇委蛇、退食自公。【二五】爲晉弟　一本に、晉の字を師の字に作る。王注に、子由題先生像贊亦云、人曰吾兄、我曰吾師。【四】友生　詩、小雅に、雖有兄弟、不如友生。【五】微言誰與度　微言は、微妙な言葉。漢書、藝文志に、仲尼沒而微言絕。度は度酬、人と詩を贈答する。張耒の詩に、賴有西隣詩句好、度酬終日自忘機。【六】坦率　坦易眞率と熟す。さつぱりとして、かざらない意。北史、李廣傳に、坦率無私。唐、國史補に、宋濟老、於蝸屋、嘗試賦、譔落官韻、撫膺曰、宋五、又坦率矣。官韻は、官定の韻書である。科擧に因つて設け、詩賦用ひる所の韻を限り、皆、之を以て程式となす。宋に禮部韻略あり、明に洪武正韻あり、淸に佩文詩韻あり、皆、官韻である。朝野僉載に、唐、德宗、夏中、微行西明寺、宋濟、葛巾抄書、上曰、措大、茶來二椀、濟曰、鼎水方煎、有茶可自潑之、上又問、作何事業、是何姓行、濟曰、姓宋、第五、應進士擧、須臾聞呼官家、濟惶恐起拜、上曰、宋五大坦率、後聞禮部放榜、上令探、濟無名、曰、宋五又坦率也。【七】放縱　放逸といふに同じ。漢書、王吉傳に、王賀、復放縱自若。【八】自程　廣韻に、程、限也。【九】會合亦何事　文選、曹子建、七哀の詩に、升沈各異勢、會合何時諧。【一〇】空枰　方言に、投博、謂之枰。唐韻に、枰、博局也。文選、韋宏嗣の博奕論に、所志、不出一枰之上、所務、不過方罫之間。【一一】使人之意消　莊子、田子方篇に、東郭順子、其爲人也、眞、物無道、正容以悟之、使人之意消。【三】森然　ならび立つ。舊唐書、禮儀志に、森然在列。【一三】包裹　范成大の詩に、葉貴蠶飢危欲死、尙能包裹一絲窠。絲窠はまゆ。【一四】布與荆　後漢、梁鴻傳に、妻荊釵布裙。南史、范雲傳に、江祏、欲求雲女、婚姻取翦刀爲聘、及祏貴、雲曰、吾與將軍、俱爲黃鵠、今將軍化爲鳳凰、荊布之室、理隔華盛、因出翦刀還之。【一五】賴賢婦　子由の夫人は史氏。【一六】藜藿等大烹　藜藿は、あかざとまめのは。韓非子、五蠹篇に、糲粢之食、藜藿之羹。漢、司馬遷傳に、藜藿之羹。文選、曹子建の七啓に、予甘藜藿、未暇此食也。大烹は、周易に、大烹以養聖賢。禮、樂記に、大羹不和、有遺味者矣。【一七】晨炊　史記、淮陰侯傳に、晨炊蓐食。杜子美の詩に、玉粒是晨炊。【一八】東閣　漢、朱雲傳に、薛宣曰、在田野無事、且留我東閣。【一九】風雨聲　韋應物の聞雁詩に、故園渺何處、歸思方悠哉、淮南秋雨夜、高齋聞雁來。【二〇】妙理　文選、曹顏遠の思友人詩に、淸機法妙理。【二一】孤舟　陶淵明の詩に、眇眇孤舟逝。【二二】北堂上　文選、陸士衡の擬古詩に、安寢北堂上、明月入我牖。王文誥いふ、此卽逍遙堂也と。【二三】古屋空崢嶸　杜子美の詩に、古屋畫龍蛇。漢書、西域傳に、臨淵嶸不測之深。班固の西都賦に、金石崢嶸。【二四】退食　詩召南に、委蛇委蛇、退食自公。【二五】

南都　李太白の詩に、南都信佳麗。王注に、南都、南京也、時、子由從二張文定一、簽書南京判、爲二此別一也。【二六】繁會　楚辭、九歌に、五音紛兮繁會。【二七】水火爭　韓退之の石鼎聯句詩に、謬當二鼎鼐間一、妄使二水火爭一。五代史、宏肇傳に、會二飲王章第一、蘇逢吉戲之、宏肇大怒、以二醜語一詬二逢吉一、由レ是將相如二水火一。【二八】閉レ閣　漢、韓延壽傳に、入臥二傳舍一、閉レ閣思レ過。【二九】頹然　晉、庾敳傳に、頹然已醉。【三〇】虛名　文選、古詩に、良無二磐石固一、虛名復何益。【三一】黃精　藥草の名。根も莖も、均しく藥とすべし。杜子美の丈人山詩に、掃二除白髮一黃精在、君看他時泳雪容。

【題義】此詩は熙寧十年八月、子由が南京留守簽判の任に赴くときに作つたのである。王文誥いふ、本集、與二劉貢父一書云、王寺丞有レ詩贈レ之、寫呈一笑、子由已赴二南都一、十六日行矣、所レ云、王寺丞卽仲素云云と。合注に、先生烹字韻、子由押二榮字一、句云、學成志益勵、秋霜落二春榮一とある。

【詩意】我は少い時分から、既に我が弟、子由の天資が溫和で、清秀で、人に優れた人物であることを知つた。殊に幼より學問が大好きで、老いてますます志堅く、表裏がだんだん昭明となつて來た。（紀昀いふ、表裏句腐と。）子由は人物からいふと、吾が弟たるだけに留らない、要するに我に取つては賢友生といふべきである。然るに離居相見ないことが六七年に及んだので、まことに神馳に堪へないのである。さて、其の平生の微言は、誰と共に賡酬されることぞ。常に恐れるのは、元來、眞率の性で、萬事我儘に振舞つて、自ら程らないことである。人と會合するも、亦、何事をなすのであらう。ただ無言にして空杯に對し、そして人の心持をして釋然たらしめるものがあるのみ。爲に不善も、由つて萌すことがない。又、子由には森然として六女もある。（紀昀いふ、不善句、亦腐と。）何れも布裙と荆釵とを包裹して、別に心配のないのは、全く子由の賢夫人史氏の力である。家庭が平和であれば、藜や藿（豆の葉）も、大烹の饗に等しく、君をして思ひのままを行ふことを得しめる。之に反し青い衣を著けて陋しい公卿の我は、明日からは晨に炊しぐことも出來ない。それで牀に倒れて鼾が雷鳴をする。秋になると、我が高閣に眠る。風雨の聲を聽くにつけても、いつまでも別れては居られない。韋應物が、故園渺として何れの處ぞ、歸思方に悠なるかな、淮南秋雨の夜、高齋、雁の來るを聞くの詩が思ひ出される。妙理は細に評し難い、昨日、忽ち門を出づる。孤舟は眇眇として西城に轉じ、北堂の上に歸り來る。卽ち逍遙堂である。逍遙堂の古屋は、空しく崢嶸、嶮はしくて深い。我は役所より家に歸つて休息する時、間違つて其の古屋に從つたのである。門に入つて心、自ら驚く。南京は信に繁會の地で、人事は水火の如くに爭つて居る。念ふ當に閣を閉ぢて坐し、頹然として世事に對し、聾となり、盲となつて居るであらう。妻子も亦、細事で、文章は虛名である。（査慎行いふ、亦字、固字、玩二文法一、自當二互換一と。）必ず須らく白髮を拂ふべきである。また、黃精の藥草を用ひる必要もなからう。

次韻呂梁仲屯田[一]

呂梁の仲屯田に次韻す

雨葉風花日夜稀。[二]雨葉風花日夜稀なり、

【字解】【一】呂梁　元和郡縣志

一杯相屬竟何時。
空虛豈敢酬瓊玉。
枯朽猶能出菌芝。
門外呂梁從迅急。
胸中雲夢自逶遲。
待君筆力追靈運。
莫負南臺九日期。

一杯相屬するは竟に何れの時ぞ。
空虛豈敢て瓊玉に酬いんや、
枯朽猶ほ能く菌芝を出だす。
門外の呂梁迅急に從ひ、
胸中の雲夢自ら逶遲。
君が筆力を待つて靈運を追ふ、
負くなかれ南臺九日の期に。

蘋葉涼。庾信の屏風詩に、風花直亂回。唐、孟運懷二鄭洎一詩に、風園舞二幽香一、雨葉墮二寒滴一。【四】豈敢酬二瓊玉一　詩、衞風に、投レ我以二木桃一、報レ之以二瓊瑤一。【五】菌芝　柳子厚、與二蕭俛一書に、雖二朽枿腐敗、不レ能二生殖一、猶足レ蒸二出芝菌一、以爲中瑞物上。【六】迅急　水經注に、水勢迅急。【七】雲夢　澤の名。今、湖北安陸縣の南に在る。本、二澤、雲は江北、夢は江南、後、邑居聚落となる。因て併稱して、雲夢といふ。【八】逶遲　毛詩の注に、逶遲、歷遠之貌と見ゆ。【九】靈運　晉、謝靈運、少うして學を好み、群書を博覽す。文章の美、江左に冠たり。父祖の爵を襲ぎて康樂公に封ぜらる。出でて永嘉の太守となる。郡に名山あり、意を傲遊に肆にす。靈運の父祖、並に始寧縣に葬る。縣に故宅及び別墅あり。遂に籍を會稽に移し、山に傍ひ、江を帶びて別業を修營し、諸隱士等と縱放して娛を爲す。【一〇】南臺九日期　宋武遠征記に、劉裕爲二宋公一、在二彭城一、九月九日出遊、王登二戲馬臺一、宴二百僚一賦レ詩、作者百餘人、謝靈運最爲レ工。（送二孔靖辭レ位歸レ鄉、謝靈運・宣遠等並從作レ詩。）

【題義】呂梁の仲伯達の詩に次韻したのである。王文誥いふ、仲屯田、名伯達、乃承受、無二譏諷文字一に、呂梁在二彭城東南五十七里一、蓋、泗水至二呂縣一、積レ石爲レ梁也。水經に、泗水、又、東過二沛縣東一、又東徑二山陽郡一、又、東南過二彭城縣東北一、又、東南過二呂縣南一。注にいふ、呂、宋邑也、縣對二泗水上一、有二石梁一焉、懸濤湍湃、實爲二泗險一。【二】仲屯田　名は伯達。職官分紀に、工部所屬、有二屯田郎中員外郎一。【三】雨葉風花　陸龜蒙の詩に、閒賓雨過苔花潤、小簟風來

者、見二烏臺詩案一と。

【詩意】雨過ぎて苔花が潤ひ、風來つて蘋葉が涼しいとか、葉は雨に摧け、花も風に落ちて、日夜稀となる。心細いのである。對坐して一杯相屬するのは、竟に何れの時であらう。詩經に、我に投ずるに木桃を以てせば、之に報ゆるに瓊瑤（美玉）を以てするといふ言葉があるが、實際、空虛であつては、瓊玉を酬いることも出來ない。併し、枯れ朽ちて、生殖が出來ない木でも、猶ほ芝菌を蒸出して、瑞物となすに足るのである。門外の呂梁は、水勢が迅急である。泗水は呂縣に至つて、石を積んで梁となす。懸濤湍湃して、（水の相擊つ聲）泗水の險處である。併し、胸中は雲夢の大澤のやうで、自ら逶遲として遠い。それで君が筆力を待つて、昔の謝靈運を追ひ、文章を以て賞會し、共に山澤の游をなしたいものである。就いては宋公劉裕が戲馬臺の期に背かないやうにありたい。宋公は彭城に在つて、九月九日出遊した。王は戲馬臺に登つて、百僚を宴して詩を賦す。作者百餘人、謝靈運が最も工であつたさうである。

王鞏屢約二重九一見訪。既而不レ至。以レ詩送二將官梁一交。且見レ寄。次韻答レ之。交頗文雅。不レ類二武人一。家有二侍者一。甚惠麗

王鞏屢〻重九に訪はるるを約す。既にして至らず、詩を以て將官梁交を

送り、且つ寄せらる。次韻して之に答ふ。交頗る文雅、武人に類せず。家に侍者ありて甚だ惠麗なり。

知君月下見傾城。
破恨懸知酒有兵。
老守亡何惟日飲。
將軍競病自詩鳴。
花枝不共秋敧帽。
筆陣空來夜斫營。
愛惜微官將底用。
他年只好寫銘旌。

知る君月下に傾城を見る、
破恨懸に知る酒に兵あるを。
老守は何も亡く惟日に飲み、
將軍は競病自ら詩に鳴る。
花枝共にせずして秋帽を敧て、
筆陣空しく來つて夜營を斫る。
微官を愛惜して將に底を用ひんとする、
他年只好く銘旌を寫さん。

【字解】【一】王鞏　字は定國。王素の子。餘錄に詳かなり。【二】重九　重陽に同じ。陰曆九月九日の節句。王筠の詩に、重九惟嘉節。【三】將官　職官分紀に、國朝自二河北通レ和、特分二將領一、置二官於河東・京東等處一、以統二領所部兵一、謂之將官一。【四】梁交　字は仲通。欒城集に見ゆ。續通鑑長編に、熙寧四年八月、詔以二文思副使梁交一、副陳繹一爲二遼國母生辰使一。【五】傾城　妖美なる女をいふ。詩、大雅、瞻卬に、哲夫成レ城、哲婦傾レ城。漢書、外戚傳に、北方有二佳人一、絕世而獨立、一顧傾二人城一、再顧傾二人國一。【六】酒有レ兵　南史、陳瑄傳に、江諮議有レ言、酒猶レ兵也、兵可二千日而不レ用、不レ可二一日而不レ備、酒可二千日而不レ飲、不レ可二一飲而不レ醉。杜牧の贈レ酒詩に、與レ愁爭二底事一、要レ爾作二戈矛一。唐、韓偓の詩に、酒衝二愁陣一出二奇兵一。【七】亡何惟日飲　漢書、爰盎傳に、絲（爰盎の字）能日飲、亡レ何、說レ王母レ反而已。師古いふ、無レ何、言、更無二餘事一と。【八】將軍競病云云　南史に、賈景宗、振旅凱入、帝於二華光殿一、宴飲連旬、啓求レ賦レ詩不レ已、帝令二沈約賦一レ韻、時韻已盡、唯餘二競病二字一、景宗便操レ筆、斯須而成、日、去時兒女悲、歸來笳鼓競、借問行路人、何如霍去病。南史、賈景宗傳に、賦成、於レ是拜二領軍將軍一。【九】詩鳴　韓退之、送二孟東野一序に、東野始以二其詩一鳴、其高出二魏・晉一、不レ暇而及二於古一、其他浸浸乎漢氏一矣。【一〇】敧レ帽　陸遊の詩に、萬里西來了宿緣、憑レ鞭敧レ帽過二年年一。【一一】筆陣　杜子美の醉歌行に、筆陣獨掃十人軍。【一二】夜斫レ營　渾日進、知二虜曲折一、夜斫二其營一、斬二千餘級一。吳志、甘寧傳に、受レ敕出斫二敵前營一、至二三更一、時衙レ枚、出斫レ敵、敵驚動遂退。晉、佛圖澄傳に、石勒北過二枋頭一、枋頭人、夜欲レ斫レ營。白樂天の詩に、書聽二笙歌一夜斫レ營。【一三】微官　杜子美の獨酌詩に、苦被二微官縛一、低レ頭媿二野人一。【一四】銘旌　禮記、檀弓に、銘、明旌也、以二死者一爲レ不レ可レ別已、故以二其旌一識レ之。杜牧之の詩に、黃嬰不レ霑新雨露、粉書空換舊銘旌。

【題義】此詩は熙寧十年八月の作である。王鞏が屢〻重九に、訪はれることを約して置きながら、遂に至らず。詩を以て梁交を送り、且つ寄せられたので、次韻して之に答へたのである。欒城集に、王鞏贈らるるに次韻していふ、南都逢二故人一、共二此一樽涤一、初來柳吹レ絮、再見風脫レ木、彭城久相遲、官舍虛二東屋一、重陽試二新釀一、謂子當レ不レ速、胡爲聽二婦言一、婉孌自相逐と。又、王鞏欲下往二徐州一見子瞻上、以レ事不レ成レ行詩に次韻していふ、爲レ婦遲留應レ未レ怪、還レ家倉卒定何營と。王文誥いふ、王鞏爲二張方平壻一、故屢至二南都一、據二子由詩一、鞏必爲二家事所一レ牽、故其婦促使レ還レ京、不レ及レ至レ徐也と。

【詩意】梁交は文雅であつて、武人に類しない。そして家には美しい侍者があるといふことであれば、定めし、月下に傾城の佳人を見て居られることであらう。酒は猶ほ兵の如し、兵は千日も用ひなくてもよいが、一日も備へなければならない。酒は千日も飲まなくてもよいが、一飲して醉はなければならない。懸に知る酒に兵あることを。併し、それは恨めしく思はない。老太守である我は、日に其の酒を飲むことの外には、更に餘事がない。さて將軍は競病の二字を巧に用ひて詩名を揚げた。昔、

曹景宗が凱旋した時、帝は華光殿に於て宴飲し、沈約をして詩を賦せしめたことがある。時に韻が既に盡きて、ただ競病の二字を餘すのみ。景宗は筆を操つて、立ろに詩を成したといふことである。將軍の詩を以て鳴るのも、偶然ではない。春の花の枝は、秋の敍てる帽には上らないが、筆陣は空しく來つて、夜、軍營を斫る。杜子美の詩に、微官に縛せられ、頭を低れて野人に媿づとあるが、微官を愛惜して、將に何をかせんとする。他年、只よく銘旌を書するに過ぎない。銘旌は、銘旗と同じで、死者の官位姓名等を記した旗である。（紀昀いふ、語意不倫と。）

【餘錄】王鞏、字は定國、王素の子である。自ら清虛先生と號す。儁才で、詩に長じて居る。東坡に從つて遊ぶ。東坡の滁州に守であつた時、鞏往いて之を訪ふ。客と泗水に游び、魋山に登り、笛を吹き酒を飲み、月に乘じて歸る。東坡、之を黃樓上に待つ。鞏に謂つて曰く、李太白死して、世に、此樂がないこと三百年と。東坡、罪を得、鞏、亦、賓州に竄せられ、數歲にして、還るを得、豪氣は、少しも挫けなかつたといふことである。後、宗正丞を歷たが、跌蕩、世に傲るを以て、終に顯はれなかつた。

臺頭寺雨中送李邦直赴史館分韻得憶字人

字。兼寄孫巨源二首

臺頭寺雨中に李邦直が史館に赴くを送り、分韻憶の字・人の字を得、兼ねて孫巨源に寄す　二首

霜林日夜西風急。　霜林日夜西風急に、
老送君歸百憂集。　老いて君が歸るを送れば百憂集る。
清歌窈眇入行雲。　清歌窈眇行雲に入り、
雲爲不行天爲泣。　雲爲に行かず天爲に泣く。
紅葉黃花秋正亂。　紅葉黃花秋正に亂れ、
白魚紫蟹君須憶。　白魚紫蟹君須らく憶ふべし。
憑君說向髯將軍。　君に憑つて說き向ふ髯將軍、
衰病相逢應不識。　衰病相逢ふ應に識らざるべし。

【字解】【一】臺頭寺　太平寰宇記に、戲馬臺、宋於其上置寺、曰臺頭寺。【三】李邦直　東都事略に、李清臣以歐陽修薦召試、擢集賢校理、尋爲京東提點刑獄、召充國史院編修官修起居注知制誥。【三】史館　宋史、職官志に、國初有三館、曰昭文館・史館・集賢院、皆仍前代之制、太宗賜名崇文院、端拱中、於崇文院中堂、建祕閣、置直閣校理等員、凡直三館及祕閣、與集賢修撰・史館修撰・直龍圖閣、皆爲高等、次曰集賢校理・祕閣校理、卑者曰館閣校勘・史館檢討、均謂之館職。【四】孫巨源　孫洙、字は巨源、錫の子。進士に擧げられ、制科に應じて、策論五十篇を上る。韓琦歎じて曰く、今の賈誼なりと。【五】百憂集　杜子美の詩に、强將笑語供主人、悲見生涯百憂集。【六】清歌　文選、洛神賦に、女媧清歌。【七】窈眇　漢、元帝紀に、班彪曰、元帝鼓琴瑟、吹洞簫、自度曲、被歌聲、分刌節度、窮極幼眇。外戚傳に、武帝悼李夫人賦に、惟幼眇之相羊。注にいふ、幼眇、猶窈窕と。【八】行雲　列子に、薛譚學謳於秦青、未窮青之技、自謂盡之矣、遂辭去、秦青弗止、餞於郊衢、撫節悲歌、聲振林木、響遏行雲、薛譚乃謝求反、終身不敢言歸。【九】

天爲泣。杜子美の詩に、眞宰上訴天應レ泣。唐書、五行志に、無レ雲而雨、是謂二天泣一。【一〇】紫蟹　杜牧之の出守二吳興一詩に、吳淞紫蟹肥。【一一】將軍　孫巨源を指す。【一二】應レ不レ識　歐陽文忠公詩に、滁人思レ我雖レ未レ忘、見レ我今應レ不レ能レ識。白樂天の詩に、相逢應レ不レ識、滿レ頷白髭須。

【題義】續通鑑長編に據るに、熙寧十年八月、提點京東路刑獄李清臣、國史院編修となる。其時、東坡が送レ行の詩は、此詩である。分韻して憶の字・人の字を得たので、二首を作り、兼ねて孫巨源にも寄せた。紀昀いふ、短章而邊幅不レ狹、尙有二唐人格意一と。

【詩意】霜葉の森には、日夜、秋風が急であつて、一しほ寂しい。年老いて君が歸るを送る我は、百憂が身に集まる。淸らかな歌は、窈眇としてしとやかに、行く雲の中に入る。雲は爲に行かないし、天も爲に泣いた。（歌聲の妙なるをいふ。）昔、薛譚は謳を秦靑に學んだが、未だ靑の技を窮めないで、自ら謂へらく之を盡くせりと、遂に辭し去つた。秦靑は止めもしないで、郊衢に餞した。其時、節を撫して悲歌すると、聲は林木に振ひ、響は行雲を遏める。薛譚、乃ち謝して反らんことを求め、終身敢へて歸ることを言はなかつたさうである。紅葉も、菊の花も、秋は正に咲き亂れ、白魚や紫蟹の美味も、君須らく憶ふべきである。君に憑つて髯將軍孫巨源に傳語する、我は衰病の餘、相逢うても、應に面を識らないであらう。

珥筆西歸近紫宸。筆を珥み西に歸つて紫宸に近く、

【字解】【一】珥筆　魏略に、殿中侍御史、簪二白筆一、側レ階而立、上問曰、此何官也、辛毘曰、御史簪レ筆書レ過。文選、曹植の表に、執レ鞭珥レ筆。注にいふ、戴レ筆也と。潘安仁の贈二陸機一詩に、優二游省闥一、珥筆華軒。漢、趙充國傳に、張安世、本持レ棄簪レ筆。注にいふ、謂レ備二顧問一と。【二】紫宸　上帝の居る所を宸といふ。紫微は天帝の座である。長安志に、唐、龍朔三年、造二宣政・紫宸・蓬萊三殿一。宋史、禮志に、常朝之儀、唐以二宣政一爲二前殿一、紫宸爲二便殿一、宋因二其制一、元豐官制行、詔百司朝官以上、每三五日一朝二紫宸一、在京朝官以上、朔望一朝。【三】典冊　西京雜記に、高文典冊用二相如一。【四】不レ緣レ麟　史記、孔子世家に、西狩獲レ麟、曰、吾道窮矣、乃因二史記一作二春秋一。司馬子長、史記を作る、亦、獲麟を以て起す。杜預、左傳の序に、仲尼絕二筆於獲麟一句一者、所二感而起一、故所二以爲一レ終也。【五】付レ君此事寧論晉　晉、陳壽傳に、壽撰二三國志一、時人稱二其善敍一事、有二良史之才一、張華深善レ之、謂レ壽曰、當レ以二晉書一相付レ耳。合注にいふ、兼レ用陶淵明不レ知レ有レ漢、何論二魏晉一語意一と。【六】載二我當時舊過秦一　烏臺詩案に、熙寧十年九月、內二李淸臣一差二修國史一、軾作レ詩送二淸臣一云、付レ君此事全書レ漢、載二我當時舊過秦一、軾於二仁宗朝一、曾進二論二十五篇一、皆、論二往古得失一。賈誼、漢文帝時人、追二論秦之得失一、作二過秦論一、史記載レ之、軾以二賈誼一自比、意欲レ淸臣於二國史中一、載レ所レ進論一、故將レ詩與二淸臣一、卽不レ係二朝旨一、降到二冊子內一。【七】千斛米　晉、陳壽傳に、丁儀・丁廙、有レ盛二名於魏一、陳壽謂二其子一曰、可レ覓二千斛米一、當レ爲二尊公一作二佳傳一。子不レ與、竟不レ作レ傳。王文誥いふ、三國志一書、非レ比二兩漢之後一、半部、雖二班固輩作一、不レ好者也、以二蔡之鄙陋一而當二此任一、是之爲二負題一、但如二二丁之說一、卽又誣レ之、二丁所二有無一、非二文學一、與二曹植一善而已、壽未二嘗稍沒レ之也、

太平典冊不レ緣レ麟。太平の典冊麟に緣らず。
付レ君此事寧論レ晉。君に付す此事寧ろ晉を論せんや、
載二我當時舊過秦一。我が當時の舊過秦を載せよ。
門外想無二千斛米一。門外想ふに千斛の米なからん、
墓中知有二百年人一。墓中知る百年の人あることを。
看君兩眼明如レ鏡。看る君が兩眼明かに鏡の如くなるを、
休把二春秋一坐二素臣一。春秋を把つて素臣に坐せらるることを休めよ。

若立二專傳一、更有二何事可レ演、此與二舊唐書、杜甫傳、載二飯顆山一一轍、皆、史家庸淺、故肯掇二拾之一也と。【八】墓中知有二百年人一　漢末に前漢の時の冢を發いたものがある。宮人猶ほ活きて居つたので、漢時、宮中の事を問ふに、之を說く了了、皆、次序がある。又、范明友が家奴の冢を發いた。奴も亦、三百五十餘年で、一霍光廢立の際を說く。多く漢書と相似る。集異記に、鄭郊過二一冢上一、有二竹兩竿一、青翠可レ愛、吟曰、墓上兩竿竹、風吹長裊裊。久不レ能續、忽聞冢中人賡レ之曰、下有二百年人一、長眠不レ知レ曉。王注に、詩意言、必不レ如二陳壽之希求一、當レ念二墓中之人一、而發中其潛光也。【九】兩眼明　韓退之が劉秀才に答へて、史を論ずる書に、左邱明紀二春秋時事一、以失レ明、夫爲レ史者、不レ有二人禍一、則有二天刑一。【一〇】把二春秋一坐二素臣一　杜預、左氏傳序に、說者以爲、仲尼自レ衞反レ魯、修二春秋一、立素王、邱明爲二素臣一。漢、昭帝紀に、大將軍、國家忠臣、敢有二譖毀者一坐レ之。

【詩意】李清臣は熙寧十年九月、召されて國史院の編修官となつたから、筆を簪して宮中便殿に近いた。仲尼は筆を獲麟の一句に絕ち、司馬子長の史記を作る、亦、獲麟を以て筆を起す。史と麟とは因緣がある。併し、太平の典策は、必ずしも麟に緣らない。(紀昀いふ、句拙と。)君に付す此事は寧ろ晉を論ぜんや、我が當時の舊過秦を載せよと東坡の言つたのは、漢の賈誼は、文帝の時に、秦の得失を追論して過秦論を作つた。自分(東坡)も仁宗の朝に、曾て論二十五篇を進めたが、皆、往古の得失を論じたものである。そこで、東坡は賈誼を以て自ら比し、此度、李清臣が國史院の編修官となつたからには、國史中に、自分(東坡)の進論する所をも載せるやうに願つて、詩を以て清臣に與へたのである。晉の丁儀・丁廙は、魏に盛名があつた。そこで、陳壽は其の子に謂つていふやう、千斛の米を我に與へば、尊公の爲に、一の佳傳を作らう、與へなければ、竟に傳をば作らないと。門外には想ふに千斛の米はなからう。併し、墓中には、百年の人あることを知る。漢末に、前漢の時の冢を發いたものがあつた。墓中の人、猶ほ生きて居て、漢時の舊を說いた。又、鄭郊といふもの、一冢の上を過ぎると冢上に竹が兩竿あつて、青翠愛すべし。そこで、墓上兩竿竹、風吹長裊裊と吟ずると、忽ち墓中の人が之に賡して、下有二百年人一、長眠不レ知レ曉と言つた。されば、陳壽の希求の如くならなければ、當に墓中の人を念うて其の潛光を發すべきことと思ふ。左丘明は春秋の時事を紀して失明した。君が雙眼は鏡の如く明かである。左丘明に傚ひ、春秋を把つて、之を修め、素臣に坐せられるやうなことは、休めたがよからうと思ふ。

代書答二梁先一

代り書して梁先に答ふ

此身與レ世眞悠悠。
蒼顏華髮誰汝留。
强名太守古徐州。
忘レ歸不レ如楚沐猴。
魯人豈獨不レ知レ丘。
蹸二藉夫子一無二罪尤一。
異哉梁子淸而修。

【字解】【一】悠悠　詩、唐風に、悠悠蒼天、曷其有レ極。【二】蒼顏華髮　歐陽修の醉翁亭記に、蒼顏白髮、頹乎其中一者、太守醉也。晉、傳玄傳に、十五入二君門一、一別終華髮。【三】强名　老子に、吾不レ知二其名一、强名曰レ道。杜牧之の詩に、高人以レ飲爲二忙事一、浮世除レ詩盡强名。陸龜蒙の詩に、檐中若使二常能綠一、兩綬通侯總强名。【四】太守　漢、百

不遠千里從我遊。
瞭然正色懸雙眸。
世之所馳子獨不。
一經通明傳節侯。
小楷精絶規摹歐。
我衰廢學嬾且媮。
畏見問事賈長頭。
別來紅葉黃花秋。
夜夢見之起坐愁。
遺我駮石盆與甌。
黑質白章聲琳球。
謂言山石生澗溝。
追琢尚可王公羞。
感子佳意能無酬。
反將木瓜報珍投。
學如富賈在博收。
仰取俯拾無遺籌。
道大如天不可求。
修其可見致其幽。
願子篤實愼勿浮。
發憤忘食樂忘憂。

千里を遠しとせずして我に從つて遊ぶ。
瞭然として色を正うして雙眸を懸け、
世の馳する所子獨り不らず。
一經通明節侯を傳へ、
小楷精絶にして歐を規摹す。
我衰へて學を廢し嬾く且つ媮に、
見るを畏る事を問ふ賈長頭を。
別來紅葉黃花の秋、
夜夢之を見起坐に愁ふ。
我に遺る駮石盆と甌と、
黑質白章聲琳球。
謂ふ言に山石澗溝に生ずと、
追琢して尚ほ王公に羞むべし。
子が佳意に感じ能く酬ゆるなからんや。
反つて木瓜を將て珍投に報ゆ。
學は富賈の如く博收に在り、
仰ぎて取り俯して拾うて遺籌なし。
道は大にして天の如く求むべからず、
其の見るべきを修めて其の幽を致せ。
願くは子篤實に愼みて浮くことなかれ、
憤を發し食を忘れ樂みて憂を忘る。

官表に、郡守秦官、景帝中二年、更名太守。【五】徐州　古、九州の一。禹貢に、海岱及淮惟徐州。爾雅に、濟東曰徐州。【六】沐猴　獼猴の轉音。史記、項羽紀に、說者曰、人言、楚人沐猴耳、果然。【七】魯人云云　家語に、魯人不識孔子聖人、乃曰、彼東家丘者吾知之矣。【八】蹸藉　蹸は說文に轢也とある。莊子讓王篇に、夫子再逐於魯、殺夫子者、無罪、藉夫子者無禁。注にいふ、藉、毀也。又いふ、陵藉也と。【九】罪尤　曹植詩に、無端獲罪尤。【一〇】清而修　三國志、魏、陳矯傳に、陳登曰、清修疾惡、有識有義、吾敬趙元達。【一一】瞭然　瞭焉といふに同じ。目睛の明かなるをいふ。孟子、離婁に、胸中正則眸子瞭焉。【一二】通明　漢書、劉向傳に、道術通明。【一三】傳節侯　漢、韋賢傳に、號稱鄒魯大儒、諡節侯。【一四】規摹歐　東坡自注に、梁生學歐陽公書。【一五】嬾且媮　漢、韓信傳に、輟作怠惰媮衣靡食。顏師古曰く、媮、苟且也と。【一六】賈長頭　後漢、賈逵傳に、自爲兒童、常在大學、諸儒爲之語曰、問事不休賈長頭。【一七】夜夢見之　白樂天が因夢有寄詩に、平生所厚者、昨夜夢見之。【一八】黑質白章　小盆也とある。【一九】黑質白章　謂言山石澗溝　追琢　毛詩、大雅に、追琢其章、金玉其相、勉勉我王、綱紀四方。左傳、隱公三年に、苟有明信、澗谿沼沚之毛、可薦於鬼神、可羞於王公。左太沖の蜀都賦に、賁實時味、王公羞焉。【二〇】琳球　美しい玉。歐陽修の詩に、篋櫝瓦礫遺琳球。【二一】追琢　毛詩、大雅に、富賈。【二二】仰取俯拾　漢書、貨殖傳に、魯人俗儉嗇、而曹邴氏尤甚、家自父兄子弟、約束有拾、仰有取。【二三】道大如天　家語に、諸弟子之言、孔子曰、道大不可容如天。【二四】發憤云云　論語、述而篇に、其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至。

【題義】道は大であるから、宜しく志を篤くして之を學ぶべく、憤を發して、食事をも忘れ、之を樂んで心の憂をも忘るといふ孔夫子の言を引いて、梁先に答へたのが、此詩である。紀昀いふ、殊乏

精采一と。

【詩意】靜觀すると、此身は此世と、眞に悠悠として其の極る所を知らない。昨日は青年、今日は老齡、誰か汝の蒼顏白髮と變り行くを留めるものぞ。人間が名けた（自然のものでない。）太守と、我はなつたが、其の任地は、古の徐州である。官に羈がれて、故山に歸るを忘れるやうでは、沐猴にして冠すと言はれた項羽にも及ばない。項羽は故鄕を懷かしく思うて、富貴にして故鄕に歸らざれば、繡を衣て夜行くが如し。誰か之を知るものぞと言つた。併し孔子の鄕里の魯の人は、孔子の聖人であることを識らないで、彼、東家の丘なるもの、吾、之を知ると言つたさうである。それで莊子も、孔子は再び魯に逐はる。孔子を殺すもの罪なく、孔子を藉（陵藉の意）するものも禁なしと言つて居る。（紀昀いふ、二句俱不レ倫と。）異なるかな、梁子は心が淸く、身も修まつて、學に志があり、千里を遠しとしないで、我に從つて遊ぶ。孟子は胸中が正しければ眸子が瞭かと言つたが、梁子は瞭然として顏色を正うして雙眸がはつきりして居る。世の馳する所とは全く異つて、古に志がある。一經に通明して鄒魯の大儒節侯の道を傳へて居る。又、小楷にも精絕であつて、歐陽公の書を規摹して居る。黼つて我身を顧ると、我は哀へて學業を廢し、嬾くて諸事兎角苟且に流れる。後漢の賈逵は、兒童であつた時分から、大學に在つて、學を研いた。諸儒は之が爲に語つていふ、事を問うて休まず賈長頭と言つたさうである。今、梁子の學に篤いことは、之に類して居る。一別以來、紅葉、菊の花、秋の時節は一層懷かしく、平生の厚いところは、夜、夢に見え、起きつ坐りつして愁へて居る。君が我に遺られたものは、黑質白章で、美しい玉の聲がする。山石澗溝に生じたといふことである。詩經に、其章を追琢し、其相を金玉にすとあるが、追琢せば、王公にも羞めることが出來る。君が佳意に感じて酬ゆるなからんや、我に投ずるに木瓜を以てす、之に報ゆるに瓊琚を以てすとか、然るに今は反つて木瓜を以て珍投に報ゆるのである。さて、學は富賈の如かるべく、要は博收にあつて、仰いで取り、俯して拾うて遺籌のなきに在る。道は大にして天の如し。いよいよ究めていよいよ盡きる所を知らない。其の見るべきを修めて、其の幽玄を致すやうにしなくてはならない。君よ篤實なれ、浮薄であつてはならない。そして、孔夫子の所謂憤を發して、食事をも忘れ、道を樂しみて憂を忘れ、老の將に至らんとするをも知らないやうにありたい。

九日。邀仲屯田。爲大水所隔。以詩見寄。次其韻

九日、仲屯田を邀へ、大水に隔てられ、詩を以て寄せらる、其の韻に次す

無復龍山對孟嘉。　復龍山の孟嘉に對するなく、
西來河伯意雄夸。　西來の河伯意雄夸。
霜風可レ使吹黃帽。　霜風黃帽を吹かしむべし、
樽酒那能泛浪花。　樽酒那ぞ能く浪花に泛ばん。

【字解】【一】仲屯田　名は伯達。周禮、冬官に、屯部あり、今、屯田司といふ。【二】龍山　湖北、江陵縣西北十五里にある。晉書、孟嘉傳に、孟嘉爲征西桓溫參軍、九月九日、溫燕龍山、寮佐畢集、有風至、吹

漫遣(七)鯉魚傳尺素。　漫に鯉魚をして尺素を傳へしめ、

却將(八)燕石報瓊華。　却つて燕石を將て瓊華に報ゆ。

何時得見(九)悲秋老。　何れの時か見るを得て秋老を悲しまん、

醉裏題詩(一〇)字半斜。　醉裏詩を題して字半斜なり。

嘉帽墜落、不之覺、嘉良久如廁、溫令取還之、令孫盛作文嘲嘉、著嘉坐處、嘉還見、卽答之、其文甚美、四坐歎賞。【三】孟嘉　字は萬年、宗の曾孫、少うして名を知らる。江州太守庾亮、辟して從事となす。【四】河伯　河神をいふ。莊子、秋水篇に、秋水時至、百川灌河、於是河伯欣然自喜、以天下之美爲盡在己、順流而東、行至於北海、東面而視、不見水端、於是焉河伯始旋其面目、望洋向若而嘆云云、若は海若、海神をいふ。【五】黃帽　東坡の自注にいふ、舟人黃帽土勝水也と。【六】浪花　梁元帝の鴛鴦賦に、朝浮兮浪花、夜集兮江沙。杜子美の詩に、閃閃浪花翻。又、纜侵隄柳繫、幔卷浪花浮。【七】鯉魚傳尺素　古詩に、客從遠方來、饋我雙鯉魚、呼童烹鯉魚、中有尺素書、長跪讀素書、書中意何如、上有加飧飯、下有長相憶。【八】燕石報瓊華　詩、國風に、尙之以瓊華乎。而荀子に、宋之愚人、得燕石以爲玉、周人曰、此燕石也、瓦礫不殊。闞子に、宋之愚人、得燕石於梧臺之東、歸而藏之、以爲大寶。【九】悲秋老　杜子美の九日の詩に、老去悲秋强自寬、興來今日盡君歡。【一〇】字半斜　杜子美の詩に、作詩呻吟內、墨淡字敧傾。

【題義】此詩は熙寧十年九月の作である。呂梁の仲屯田を邀へたが、生憎大水に隔てられた爲め、來ないで詩を寄せられた。其の詩に次韻したのである。王文誥いふ、七月河決澶淵、八月二十一日、水及徐州城下と。澶淵は湖澤の名、亦繁淵といふ。今之を澶州陂といひ、直隷の濮陽縣西南に在る。古、澶水が流れて居た所から、此名を得たのである。

【詩意】晉の桓溫が龍山に酒宴を催した時、たまたま風が吹いて來て、孟嘉の帽子を墜落した。嘉は氣付かないで居ると、桓溫は人をして文を爲つて、之を嘲らしめた。嘉は卽ち之に答へたが、其の文は甚だ立派で、四坐のもの、歎賞したといふことである。さて、仲屯田が見えないので、筆を起して、復、龍山の宴、孟嘉に對するなしと言つたのである。西から來た河の神は、意が雄夸であるから、霜風を起して、舟人の黃帽を吹かしめる。それで樽酒を置いて、浪花に泛ぶことも出來なく、漫に鯉魚をして尺素を傳へしめる。これは古詩に客、遠方より來り、我に雙鯉魚を饋る。童を呼んで鯉魚を烹、中に尺素の書あり云云に據つたもので、仲屯田が來ないで、ただ詩を寄せたことを言つたのである。寄せられた君の詩は瓊華の如く立派であるが、次韻した我の詩は、所謂燕石で、瓦礫に異らない。君に御目に懸ることの出來るのは、一體、何時であらう。杜子美が詩の老い去つて秋を悲しみ强ひて自ら寛うし、興來つて今日君の歡を盡くすといふ言葉を思ひ出される。今、醉裏に詩を題したので、書く文字も半は斜となつて居る。

送(一)楊奉禮

楊奉禮を送る

諳(二)牒推(三)關右。風(四)流出(五)靖恭。　諳牒關右を推し、風流靖恭に出づ。

時情任(六)險陂。家法故(七)雍容。　時情險陂に任じ、家法故雍容。

(八)南去河千頃。餘惟酒(九)一鍾。　南河を去る千頃、餘す惟酒一鍾。

更誰哀老子。令得放疎慵。(一〇)　更に誰か老子を哀んで、疎慵を放にするを得しめん。

【字解】【一】楊奉禮　職官分紀に、太常寺官屬、有二奉禮郎一。【二】譜牒　譜系といふに同じ。史記、自序に、取二之譜牒一。唐の柳沖、景龍中に、姓系錄を著はす。唐興つて、譜學を言ふもの、路敬淳を以て宗となす。沖、韋涉と之に次ぐ。唐の柳芳曰く、魏氏立二九品一、置二中正一、晉・宋因レ之、於レ是有司選擧必稽二譜籍一、而考二其眞僞一云云。初、漢に鄧氏官譜あり。應劭に氏族一篇あり。王符の潛夫論、亦、姓氏一篇あり。宋、何承天、姓苑二篇、譜學大抵、此に具はる。【三】關右　後漢、楊震傳に、字伯起、宏農華陰人也、諸儒爲レ之語曰、關西孔子、楊伯起。【四】風流　晉書、樂廣傳に、天下言二風流一者、以二王・樂一爲二稱首一。【五】靖恭　里の名。字面をいふと、共は恭に同じ。詩、小雅に、靖二共爾位一。白樂天の詩に、惟憶靖恭楊閣老。小學紺珠に、唐、楊憑居二履道坊一、於陵居二新昌坊一、汝士居二靖恭坊一、時稱二三楊一。海錄碎事に、汝士父子、竝爲二公卿一、居二靖恭里一、號二靖恭楊家一。長安志に、靖恭楊家爲二冠蓋盛族一。【六】險陂　陂は傾く意。史記、五宗世家に、彭祖險陂。漢書、劉向傳に、放二遠佞邪之黨一、壞二散險陂之娶一。【七】雍容　和げる貌。漢書、司馬相如傳に、從二車騎一、雍容閑雅。【八】南去レ河千頃　東坡の自注にいふ、大水中相別と。世說に、郭林宗曰、叔度汪汪如二千頃之陂一。【九】酒一鍾　後漢書、南蠻傳に、夷犯レ秦、輸二清酒一鍾一。孔叢子に、昔、平原君與二子高一飲、强二子高飲酒一曰、昔有二遺諺一、堯舜千鍾、孔子百觚、子路嗑嗑、尙飲三百榼、古之聖賢、無レ不レ能レ飲、子何辭焉。【一〇】疎慵　白樂天の詩に、世名檢束爲二朝士一、心性疏慵是野夫。

【題義】華陰の楊氏に兩族ある。一は木に從つて楊氏とし、一はすに從つて揚氏とする。相半ばして居り、ここも其の從ふべき所を知らない。此の詩は、楊氏の古を擧げて送る言葉としたのである。

【詩意】後漢の楊震（字は伯起）は、宏農、華陰の人である。經に明かにして、博覽、生徒も千を以て數へたから、諸儒は之が爲に關西の孔子は、楊伯起と言つた。系譜に稽へても、楊氏は關西を推して居り、其の風流も靖恭里に於て秀でて居る。長安志にも、靖恭楊家は、冠蓋盛族たりと見えて居る。

さて、時の世情は、險しくて、傾くままに任せて居るも、家法は故、雍容と和いで居る。大水中に相別れて、河を去ること千頃、餘す所は、惟、酒一鍾あるのみ。鍾は六斛四斗である。更に誰か此の老子を哀んで其の疎慵を放にせしめるものぞ。

【餘錄】後漢の楊震、字は伯起、宏農華陰の人。楊彪傳に、孔融曰、楊公四世、清德、海內所レ瞻。宋の劉攽（字は貢父）曰く、按、楊氏有二兩族一、赤泉氏（赤泉侯楊喜、騎將となつて、項王を追ひしこと、項羽本紀に見ゆ。）從レ木、子雲自敍二其受レ氏、從レ扌、而楊修書、稱二修家子雲一、似二震族一、亦是楊氏、今、書中、華陰之族從レ木從レ扌、相半、未レ知二所レ從、學者辨レ之云云。

河復　并序

河復　并に序

熙寧十年秋。河決澶淵。注二鉅野一。入二淮泗一。自二澶魏一以北。皆絕レ流而濟。楚大被二其害一。彭門城下。水二丈八尺。七十餘日不レ退。吏民疲二於守禦一。十月十三日。澶州大風終日。既止。而河流一枝已復二故道一。聞レ之喜甚。庶幾可レ塞乎。乃作二河復詩一。歌二之道路一。以致二民願一。而迎二神休一。蓋守レ土者之志也。

【訓讀】熙寧十年の秋、河澶淵に決し、鉅野に注ぎ、淮・泗に入る。澶魏より以北、皆流を絕つて濟

る。楚大に其の害を被り、彭門城下、水二丈八尺、七十餘日にして退かず。吏民は守禦に疲る。十月十三日、澶州大風終日、既に止んで、河流一枝已に故道に復す。之を聞いて喜ぶこと甚しく、庶幾くは塞ぐべきか。乃ち河復の詩を作り、之を道路に歌ひて、以て民の願を致して、神休を迎ふ。蓋し土を守るものの志なり。

【字解】【一】河決二澶淵一　澶淵は湖澤の名。今、之を澶州陂といふ。直隷、濮陽縣の西南に在る。前にも出づ。續通鑑長編に、是年七月乙丑、河大決二於澶淵曹村下埽一。宋史には、丙子に作る。【二】鉅野　澤の名。禹貢の大野、山東鉅野縣の北に在る。元末、黄河に決せられ、遂に涸る。困學紀聞に、濟州、鉅野縣東北有二大野澤一、卽鉅野也。名勝志に、黄河有二南北二道一、俱在二鉅野縣境内一。【三】淮泗　淮水は、古の四瀆の一。源は河南省の桐柏山に出で、東流して、安徽の境に入り、江蘇・安徽間の洪澤湖に瀦す。泗河は、山東泗水縣、陪尾山に出づ、四源竝び發す。故に名く。【四】彭門　山の名。四川彭縣の西北に在る。兩峯對立して闕の如し。亦、天彭門と名く。【五】水二丈八尺　欒城集、和二子瞻一詩に、我昔去二彭城一、明日河流至、不レ見二五斗泥一、但見三竿水。【六】澶州　春秋、襄公二十年に、諸侯之卿、會二於澶淵一。元和郡縣志に、河北道澶州、本、漢、頓邱縣地、武德四年、置二澶淵郡一、後避二高祖諱一、改二澶州一、因二澶水一爲レ名、黄河在二州南三十五里一。寰宇記に、漢魏郡、周、大象二年、改二魏州一、後漢、乾祐元年、改爲二大名府一、東至二東京一四百里。

君不レ見西漢元光[一]元封間。
河決二瓠子一二十年。[二]

君見ずや西漢の元光・元封の間、
河瓠子に決する二十年、

【字解】【一】元光元封間　前漢、武帝の元光元年、歲は丁未に在り、元封と改む、歲は辛未に在り。元光より元封に至る、凡そ二十五年。

鉅野東傾淮泗滿。
楚人恣食黄河鱣。[五]
萬里沙回封禪罷。[六]
初遣越巫沈二白馬一。[七]
河公未レ許人力窮。
薪芻萬計隨流下。
吾君盛德如二帝堯一。
百神受レ職河神驕。[八]
帝遣二風師一下二約束一。[九][一〇]
北流夜起澶洲橋。
東風吹レ凍收二微漾一。
神功不レ用淇園竹。
楚人種レ麥滿二河淤一。
仰看浮槎棲二古木一。[一一]

鉅野東に傾き淮泗滿ち、
楚人恣食す黄河の鱣。
萬里沙より回りて封禪罷み、
初めて越巫をして白馬を沈めしむ。
河公未だ許さず人力の窮、
薪芻萬計流に隨つて下る。
吾が君は盛德帝堯の如く、
百神職を受け河神驕る。
帝風師を遣はして約束を下し、
北流夜起る澶州橋。
東風凍を吹いて微漾を收め、
神功用ひず淇園の竹。
楚人麥を種ゑて河淤に滿ち、
仰いで看る浮槎の古木に棲むを。

【一】河決二瓠子一　溝洫志に、孝武帝、元光中、河決二於瓠子東南一。注にいふ、鉅野通二於淮・泗一、上使レ汲黯・鄭當時、興二人徒一塞レ之、輒復壞、後二十餘年、歲因以數不レ登、上既封禪、巡二祭山川一、其明年、乾封（祭に尸を立てざるを乾封といふ。）少雨、乃使レ汲仁・郭昌發二卒數萬一、塞二瓠子決河一、於レ是、上以レ用二事萬里沙一、則還自臨二決河一、湛二白馬玉璧一、令レ羣臣從官、自二將軍一以下、皆負レ薪實二決河一、是時、東郡燒レ草、以レ故薪柴少、而下二淇園之竹一、以爲レ楗、（隄防のきれた所を塞ぐせき）帝悼二功之不レ成、作レ歌曰、皇謂二河公一兮何不仁。又曰、寗二長茭一兮湛二美玉一、河公許兮薪不レ屬、卒塞二瓠子一、築二宮其上一、名曰二宣防一。水經に、瓠子河、出二東郡濮陽縣北一。九域志に、濮州雷澤縣有二瓠子河一。陳後山談叢に、雷澤黄河故道、

今呼爲三沙河一、沙河西北、其迹猶在、土人謂三之瓠岡一也。【三】 鉅野東傾云云　武帝、瓠子の歌を作つていふ。吾山平兮鉅野溢。又いふ、齧桑浮兮淮泗滿。齧桑は邑の名、水に浮漂せらる。査注に、風俗通曰、南陽桐柏・大復山、淮水所レ出也。山南有三淮源廟一、淮水、又、東北至三下邳淮陰縣西一、泗水從三西北一來流注レ之、泗水出三魯卞縣北山東南一、過三彭城縣東北一、又、東南過三下邳縣西一、又、東南入レ淮、淮泗之會、卽城角也、二水決入之所、謂三之泗口一也。【四】 黃河鱣　魏武帝の四時食制に、鱣魚、大如三五斗奩一、長一丈。郭璞注爾雅に、鱣魚大者、長二三丈。【五】 萬里沙云云　萬里沙は神祠。萊州掖縣に在る。名勝志に、萬里沙、夾三萬歲水一、兩岸沙長三百里。漢、元封元年、大旱禱三於此一。【六】 封禪　封は天を祭り、禪は山川を祭る。管子に、封三泰山一、禪三梁父一者、七十二家。【七】 越巫　史記、封禪書に、令三越巫立三越祝詞一、西京賦に、越巫陳レ方。韓退之の郴州祈レ雨詩に、神降越巫言。【八】 百神受レ職　禮記に、禮行三於郊一、而百神受レ職。劉禹錫の平齊行に、開元皇帝東封時、百神受レ職爭奔馳。【九】 風師　風伯といふに同じ。風俗通、祀典に、風師者、箕星也。【一〇】 約束　史記、漢、高祖紀に定三約束一。【一一】 浮槎三古木一　柳子厚の詩に、渡頭水落村徑成、撩亂浮槎在三高樹一。

【題義】 十月五日、水が漸く退く。十三日、澶州に大風起つたが、日を終へないで、河が故道に復した。それで、此詩を作つたのである。

【詩意】 君見ずや、前漢、武帝の元光中、河水が瓠子に決し、二十餘年の後、元封中、又、同じく瓠子に決したことを。武帝は、自ら決河に臨み、羣臣從官をして、將軍より以下、皆、薪を負ひて決河に實かしめた。かくて鉅野澤は河水の爲に決せられて、東方に傾き、淮水も泗水も、水が溢れた。武帝も瓠子之歌を作つていふ、吾山平兮鉅野溢と。又いふ、齧桑浮兮淮泗滿と。又、楚の人は、出水の爲め、思ひ掛もなく、黃河の鱣を十分に味ふことが出來た。萬里沙は、萊州掖縣に在つて、神祠のある所、萬歲水を夾み、兩岸の沙は、長さ三百里もある。漢武帝の元封元年、大旱があつた時、此に禱つたことで名高い。武帝は萬里沙から回つて、封禪の事が罷んだ。封は土を盛り、壇を造つて、天を祭ることであり、禪は地を除いて、山川を祭ることである。そこで初めて越の巫をして白馬を水に沈めしめた。河神に供へる爲である。河の神は、未だ人力の窮するを許さないので、薪も芻も、數限りなく、流に隨つて下る。吾が君は盛德があつて、堯帝の如く、百神職を受けて、爭うて奔馳して居るのに、河神は驕つて居る。天帝は風の神を遣はして、命令を下し、北流は夜、澶州橋に起り、又、東風は凍を吹いて、微澁を收める。武帝の時は、淇園の竹を下して楗となしたが、吾が君の神功は、淇園の竹を用ひない。（其の必要がないのである）そして、楚の人は、麥を種ゑて河泥に滿ち、仰いで浮槎の古木に棲むを看るのである。

【餘錄】 本集墓誌銘にいふ、河決三曹村一、泛三梁山泊一、（古の鉅野澤、下流は汶・濟の二水、會して濼を成す。宋の時、河を決して匯して其中に入り、綿亙數百里、後、大河南に徙る、歲久しく塡淤して、遂に平陸となる。）溢三於南清河一、（古の泗水、）城南兩山環三繞呂梁一、（卽ち梁山）百步扼レ之、匯三於城下一、漲不三時洩一、城將レ敗、富民爭出避レ水、公曰、富民若出、民心動搖、吾誰與守、吾在レ是、水決不レ能レ敗レ城、驅使三復入一、公履レ屨杖レ策、親入三武衞營一、呼三其卒長一、謂レ之曰、河將レ害レ城、事急矣、雖三禁軍一、宜三爲レ我盡レ力、卒長呼曰、大守猶不レ避三塗潦一、吾儕小人效レ命之秋也、執レ挺入三火伍中一、率三其徒一、短衣徒跣、持三畚鍤一以出、築三東南長堤一、首起三戲馬臺一、尾屬三於城一、堤成、水至三堤下一、害不レ及

レ城、民心乃安、然雨日夜不レ止、河勢益暴、城不レ沈者三板、公廬ニ於城上一、過レ家不レ入、使ニ官吏分レ堵而守一、卒完レ城以聞と。武帝の瓠子の歌二首といふのは、瓠子決兮將ニ奈何一、浩浩洋洋兮慮殫爲レ河、殫爲レ河兮地不レ得レ寧、功無ニ已時一兮吾山平、吾山平兮鉅野溢、魚弗鬱(憂へて樂しまない)兮拍ニ冬日一、正道弛兮離ニ常流一、蛟龍騁兮放遠遊、歸ニ舊川一兮神哉沛、不ニ封禪一兮安知レ外、爲レ我謂ニ河伯一兮何不仁、泛濫不レ止兮愁ニ吾人一、齧桑(縣の名)浮兮淮泗滿、久不レ返兮水維緩。」河湯湯兮激潺湲、北渡回兮迅流難、搴ニ長茭一、竹索)兮湛ニ美玉一、河伯許兮薪不レ屬、薪不レ屬兮衞人罪、燒蕭條兮、噫乎何以禦レ水、隤林竹兮楗石菑、宣防塞兮萬福來である。

登ニ望郱亭一　望郱亭に登る

河漲西來失ニ舊郱一。　河漲りて西來舊郱を失ひ、
孤城渾在ニ水光中一。　孤城渾て水光の中に在り。
忽然歸レ壑無ニ尋處一。　忽然として壑に歸りて尋ぬる處なし、
千里禾麻一半空。　千里禾麻一半空し。

【題義】此詩も熙寧十年十月の作。望郱亭に登つて、水の退いた跡を觀たときの所感である。施注にいふ、此詩墨蹟、乃欽宗東宮舊藏、今在ニ曾文清家宿一、嘗刻ニ石餘姚縣治一、東坡題云、僕在ニ彭城一、大水後、登ニ望郱亭一、偶留ニ此詩一、已而忘レ之、其後、徐人有ニ誦レ之者一、徐思レ之、乃知ニ其爲ニ僕詩一也、集中無レ之、以入ニ河復詩後一と。

【詩意】河水は滔滔西より來つて、今迄の大壑も見失つてしまひ、孤城は全く水光の中に沒した。忽ち水も退いて、壑に歸り、尋ねるに處がなく、千里見渡す限り禾も麻も、一半は空しくなつた。

【字解】【一】舊郱　郱は大壑。【二】水光　東坡、赤壁賦に、白露横レ江、水光接レ天　【三】歸レ壑　禮記に、水歸ニ其壑一。東坡の詩に、歲寒霜重水歸レ壑、但見屋瓦留ニ沙痕一。

韓幹馬十四匹　韓幹の馬十四匹

一馬竝驅攢ニ八蹄一。　一馬竝び驅りて八蹄を攢む、
二馬宛レ頸駿尾齊。　二馬頸を宛げて駿尾齊し。
一馬任レ前雙舉後。　一馬前に任じ後を雙舉す、
一馬却避長鳴嘶。　一馬却き避け長く鳴嘶す。
老髯奚官騎且顧。　老髯の奚官騎し且つ顧み、
前身作レ馬通ニ馬語一。　前身馬となつて馬語に通ず。
後有ニ八匹一飲且行。　後に八匹あり飲み且つ行く、
微流赴レ吻若有レ聲。　微流吻に赴きて聲あるが若し。

【字解】【一】韓幹　唐、大梁の人。馬を畫くに工なり。王維、其の畫を見て歎賞すといふ。初、曹霸を師とす、明皇雜錄に、陳人馮紹正・曹霸・鄭虔、皆善ニ繪畫一、時稱ニ神妙一。【二】竝驅　云云　李賀の許公子鄭姬歌に、兩馬八蹄蹋ニ蘭苑一。毛詩に、竝驅從ニ兩肩一兮。【三】宛レ頸　列女傳に、黃鵠歌に、宛レ頸獨宿兮。【四】一馬任レ前云云　馬の性く走るもの。前に任じて後を擧ぐ。韓非子、說林

(八)前者既濟出林鶴。　前なるもの既に濟る林を出づる鶴、
後者欲涉鶴俛啄。　後なるもの涉らんと欲す鶴俛して啄む。
最後一匹馬中龍。(九)　最後の一匹は馬中の龍、
不斷不動尾搖風。(一〇)　斷かず動かず尾風に搖く。
韓生畫馬眞是馬。　韓生馬を畫く眞に是れ馬、
蘇子作詩如見畫。(一一)　蘇子詩を作る畫を見るが如し。
世無伯樂亦無韓。　世に伯樂なく亦韓なし。
此詩此畫誰當看。　此詩此畫誰か當に看るべき。

微流。【八】前者、後者　王文誥いふ、前者後者貫下、最後皆詳敍飲行也と。【九】馬中龍　周禮に、馬八尺以上爲龍。杜子美の丹青引に、須臾九重眞龍出、一洗萬古凡馬空。【一〇】尾搖風　杜子美の天育驃騎歌に、是何意態雄且傑、驟尾蕭梢朔風起。【一一】作詩如見畫　歐陽永叔の盤車圖詩に、古畫畫意不畫形、梅詩詠物無隱情、忘形得意知者寡、不若見詩如見畫。

【題義】此詩は熙寧十年、徐州の作である。七古の詩で、換韻法を用ひて居る。唐宋詩醇の評に、韓子記畫、只是記體、不可以入詩、杜詩觀畫馬圖詩、只是詩體、不可以當記、杜。韓開其端、蘇乃盡其極、敍次歷落、妙言奇趣、觸緒橫生、眞堪獨立千載とある。紀昀いふ、杜公韋諷宅(韋諷が居は成都に在る)觀畫馬詩、獨掫九馬分寫之格、此詩、從彼處得法、更加變化耳と。

【詩意】十四馬の中、二匹は駑け出した狀である。二馬なる故に八蹄をあつめる。(紀昀いふ、直起老橫、東坡慣用此法と。)次なる二馬は、頸を曲げて回顧せるが故に、駿と尾とが相竝んで齊しい。凡そ馬が蹄ようとするときは、全身を前足に委ねて、然る後に、後足を擧げる。それで、其の側にある一馬は、蹄られることを畏れて、却き避ける。そして、長く鳴嘶して之を訴へるのが常である。此の一馬は、後の奚官が乘り居る馬である。此の十四馬は、皆、胡人の馬で、老いて髯のある奚官が騎り且つ顧み、之を操つて居る。此の奚官は、前身が馬と生れて、よく馬の言語を聽き分ける。(以上は、六匹の馬を狀す。馬の語を聽き分けることよ、王充論衡といふ書に、廣漢の楊翁偉は、能く鳥獸の音を聽く。塞馬に乘つて野に之く。田間に馬を放つものがあつた。相去る數里、鳴く聲が相聞える。翁偉其の御に謂つて曰く、彼の放馬は目眇であると。其の御曰く、何を以て之を知る。曰く、此の轅中の馬を罵つて曰く、塞と、此の馬も亦、之を罵つて曰く、眇と。其の御は信じなかつたが、往いて之を視れば、目竟に眇であつたといふ話がある。)後に八匹の馬があつて、水を飲みつつ行く。水が口吻に入るとき、スウスウといふ音が聞えるやうである。(紀昀いふ、微流句傳レ神と、字は是れ畫で、東坡の本色である。)八匹の中で、前なる馬は、水を渡り越した。其の狀は、林を出た鶴のやうである。後なる馬は、水を渡らんと欲して、其の淺いか深いかを窺つて居る。其の狀は、鶴が俯して啄ばめるやうである。凡そ馬が水を渡らうとする時は、必ず頭を垂れる。水の淺深を見る爲めである。八匹の中の一である。最後の馬こそ、非常の名馬で、謂ゆる龍馬である。(以上、八匹の馬を狀す。紀昀いふ、

最後句、有二寓託一と。）韓幹が馬を畫く、眞に是れ馬である。東坡が詩を作る、畫を見るやうである。韓生の畫馬を賞し、又、自ら其の詩を贊する。卽ち自負の語をなして、詩と畫とを總收したのである。（王文誥いふ、此用二飲中八仙法一、以二其板滯一、特下二最後一匹句一、變二其法一也と。凡そ漢土の詩は、淵源・來歷を尙ぶ。此詩は一句の古人の作に淵源するものがない。是れ東坡が自レ我作レ古の意である。）

【餘錄】宋の樓鑰が攻媿集に、題二趙尊道渥洼圖一序云、趙尊道以二龍眠渥洼圖一示レ余、余曰、誤矣、本、韓幹馬、東坡曾爲賦レ詩、此龍眠所レ臨、爲書二坡詩于後一、而次二其韻一、馬實十六、坡詩云、十四疋、豈誤耶。龍眠は宋、李公麟の號である。公麟字は伯時、博雅にして詩に長じ、多く奇字を識る。又、丹青を善くし、妙絕世に冠たり。元符間、歸老して龍眠山莊に居る。樓鑰が次韻した詩は、良馬六十有四蹏、騰驤進止紛不レ齊、權奇倜儻多二不羈一、亦有二顧影一成二驕嘶一、或行或涉更相顧、交レ頸相靡若二相語一、畫出老杜沙苑行、將軍弟子早有レ聲、中聞名種雞羣鶴、無二復瘦瘠烏燕啄一、當時玉花可レ媒レ龍、後日去盡烏呼風、開元四十萬匹馬、俯仰興亡空看レ畫、龍眠妙手欲レ希レ韓、莫レ遣二鐵面關西看一といふのである。宋の洪邁が容齋隨筆に、韓公畫記云、凡馬之事二十有七、馬大小八十有三、而無レ有二同者一焉、秦少游謂、其敍事該而不レ煩、倣レ之作二羅漢記一、坡公賦二十四馬一、詩之與レ記雖レ異、其爲二布置鋪寫一則同、誦二公之語一、蓋不二必見レ畫也。

有レ言。郡東北荆山下。可以溝畎積水。因與吳正字王戶曹。同往相視。以地多亂石不レ果。還遊聖女山。山有石室。如墓而無棺槨。或云。宋司馬桓魋墓。二子有レ詩。次其韻。二首

言ふあり、郡の東北荆山の下、溝畎を以て水を積むべしと。因つて吳正字・王戶曹と同じく往いて相視る。地に亂石多きを以て果さず。還つて聖女山に遊ぶ。山に石室あり、墓の如くして棺槨なし。或はいふ、宋司馬桓魋が墓と。二子詩あり、其韻に次す、二首

側レ手區區豈易遮。手を側てて區區豈遮り易からんや、
奔流一瞬卷二千家一。奔流一瞬千家を卷く。
共疑智伯初圍レ趙。共に疑ふ智伯の初めて趙を圍むを、
猶有二張湯欲二漕斜一。猶ほ張湯の漕斜を欲するあり。
已坐二迂疎一來二此地一。已に迂疎に坐して此地に來る、
分將二勞苦送一生涯。分將に勞苦して生涯を送らんとす。
使君下策眞堪レ笑。使君の下策は眞に笑ふに堪へたり、

【字解】〔一〕荆山　徐州志に、荆山在二懷遠縣西南一。〔二〕溝畎　畎は田中のみぞ。楊倪の皇畿賦に、屈曲溝畎、高低稻畦。〔三〕吳正字　名は琯、字は彥律。正字は其の官。烏臺詩案に、元豐元年、軾知二徐州一、有二本州正字吳琯一、鎖廳得レ解、赴二省試一、軾作二日喩一篇送レ之、卽其人矣。鎖廳は鎖院といふに同じ。宋史に、凡命士應レ舉、謂二之鎖廳試一、

(一五) 隱隱驚雷響踏車。

隱隱驚雷踏車響く。

名不レ詳、卽子高・子立之兄也と。戸曹は民戸を主る屬官。【五】聖女山　徐州志に、桓山下臨二泗水一、舊名、聖女山。【六】棺槨　所レ屬先以レ名聞、得レ旨而後解。【四】王戸曹　王文誥いふ、乃正路之子、棺は屍を斂むる櫃。槨は其の外棺。孟子、梁惠王篇に、棺槨衣衾之美。同じく公孫丑篇に、古者、棺槨無レ度、中古棺七寸、槨稱レ之。【七】桓魋墓　桓魋は、宋の司馬向魋。桓公に出づ、故に桓氏を稱す。太平寰宇記に、桓魋墓在二彭城縣北二十七里一。水經注に、泗水又南、徑二宋大夫桓魋冢西一、山枕レ水、上而盡、石鑿而爲レ冢、今人謂二之石槨一、槨有二二重一、石作工巧。【八】側レ手區區云云　時に河決、水方に退く。諺に側レ手障二黃河一の語あり。淮南子、繆稱訓篇に、是猶レ決二江河之源一而障レ之以レ手也。區區は賈誼、過秦論に、秦以二區區之地一、致二萬乘之權一。【九】奔流一瞬　李太白の詩に、黃河之水天上來、奔流到レ海不二復回一。文選、陸士衡の文賦に、觀古今之須臾、撫二四海於一瞬一。【一〇】智伯初圍レ趙　戰國策に、智伯從二韓魏兵一、以攻レ趙、圍二晉陽一而灌レ之、城不レ浸者三版。【一一】張湯欲二漕斜一　前漢、溝洫志に、人有二上書欲レ通二褒斜道及漕一、(褒斜は二谷の名)事下二御史大夫張湯一、湯問レ之。言抵レ蜀從二故道一、故道多レ阪回遠、今穿二褒斜道一、少レ阪、近四百里、而褒水通レ汧、斜水通レ渭、皆可二以行レ船漕一、上以爲レ然、拜二湯子卬一爲二漢中守一、發二數萬人一、作二褒斜道一、五百餘里、道果便近、而水多二湍石一不レ可レ漕。【一二】迂疎　世事にまはり遠い。迂は事情に遠かる意。論語に有レ是哉子之迂也。【一三】送二生涯一　杜子美の江畔獨步詩に、應須二美酒送二生涯一。【一四】下策　漢書、溝洫志に、待詔賈讓言、治レ河有二上・中・下策一、若廼繕二完故隄一、增レ卑倍レ薄、勞費無レ已、數逢二其害一、此最下策也。【一五】隱隱　大なる聲。晉書、惠帝紀に、赤氣竟レ天、隱隱有レ聲。易林に、雷車不レ藏、隱隱西行。

【題義】此詩も熙寧十年十月の作である。東坡の遊二桓山一記に、元豐二年正月乙亥、春服既成、從二二三子一遊二於泗之上一、登二桓山一、入二石室一とある。

【詩意】諺に、手を側てて黃河を障ふるといふ言葉があるが、凡そ河水の決する勢は、區區赤手の力では、之を遮ることは出來ない。滔滔奔流して、瞬く間に、千家を卷き去つてしまふ。昔、智子は趙襄子を水攻めにし、城の沈まなかつたことが三版(六尺)であると言ひ傳へて居るが、事實とすれば、疑はざるを得ない。水は人力では制することが出來ない。(紀昀いふ、共疑句拙と。)併し前漢の時代に、上書して褒谷・斜谷・及び漕道を通せんと欲したものがあつた。其の時、御史大夫張湯はいふ、蜀に抵るには、故道に從るも、故道には阪が多くて、回遠である。今、褒・斜道を穿てば、阪が少い上に、褒水は汧に通じ、斜水は渭に通じ、皆、以て船を行りて漕ぐべしと。上は以て然りとなし、數萬人を發して褒斜道を作つたといふことである。故に水を制することも出來る。我は已に世事に迂遠で、此地に來る、分、將に勞苦して、一生涯を送らうとする。使君(刺史)が河を治める下策は、眞に笑ふべきである。たとひ故隄を繕つても、驚雷隱隱として踏車が響き、沛雨の忽ち來るとき、到底人の力では、防ぐことは困難であらう。

茫茫清泗遶(一)孤岑(二)。
歸路相將得暫臨。
試著(三)芒鞵(四)穿犖确(五)。
更然(五)松炬照幽深。
縱令司馬(六)能鑱石。

茫茫清泗孤岑を遶り、
歸路相將ゐて暫臨を得。
試に芒鞵を著けて犖确を穿ち、
更に松炬を然やして幽深を照らす。
縱令司馬能く石を鑱むも、

【字解】【一】清泗　九域志に、徐州泗水、今呼二清河一。【二】孤岑　馬融の長笛賦に、託二九成之孤岑一兮。【三】芒鞵　草鞋といふに同じ。陳師道の詩に、竹杖芒鞵取次行。【四】犖确　大石の多い貌である。韓退之の詩に、山石犖确行徑微。【五】然二

奈有中郎解摸金。　奈ぞ中郎の摸金を解することあらん。
強寫蒼崖留歲月。　強ひて蒼崖に寫して歲月を留む、
他年誰識此時心。　他年誰か此時の心を識らん。

因現成石槨云云。燃犀といふは、東晉の溫嶠が犀角をもやして、牛渚磯といふ深い淵の底までを實見した故事。東坡の詩に、我欲燃犀看、龍應抱寶眠。【六】司馬能鑑石　禮記に、孔子居於宋、見桓司馬、自爲石槨、三年而不成、夫子曰、若是其靡也、死不如速朽之愈也。述征記にいふ、石槨、隱鑄金銀、爲龜龍麟鳳之狀。【七】奈　一に會に作る。【八】中郎解摸金　三國、魏志、袁紹傳に、陳琳、爲袁紹作檄文、言、曹操署發邱中郎將・摸金校尉、所過墾突無骸不露。【九】誰識此時心　韓退之の次石頭驛詩に、默然都不語、應識此時情。松炬照幽深　南史に、顧歡好學而貧、夕則燃松節讀書。王文誥いふ、此暗用溫嶠燃犀事、謂察知水中有亂石也、故下有鑑石句。

【詩意】茫茫として徐州、泗水の清い流は、孤岑（岑はみね）を遶つて居る。我は歸り路に、吳君や王君と、相連れ立つて、暫し遊觀を肆にすることが出來た。それで試に草鞋を著けて、大石の多い山路を行き、更に松明をも燃やして、幽深の處を照らしたのである。晉の溫嶠が犀角を燃やして、牛渚磯といふ深い淵を照らし、其の淵底を實見したやうに、我等も水中の亂石を察知した。孔子が宋に居たとき、桓司馬に見えたが、司馬は自ら石槨を爲り、三年を經しも、出來上らないと言つた。孔子は、之を聞いて、是の若くは、死して速に朽ちる方が、餘程よいと言つたさうである。たとひ司馬が能く石を鑑んだにしても、奈ぞ發邱中郎將の摸金校尉を解するやうなことがあらうぞ。昔、陳琳は袁紹の爲に、檄を作つて、曹操を酷詆した。曰く、曹操は發邱中郎將・摸金校尉を置いて、過ぐる所、墾突し、墓を發いて、骸が露はれざるはなしと。此の故事に據つて、石槨に金銀を隱すも、發掘するやうなことがないと言つたのである。それで、強ひて蒼崖に記して、歲月を留める。他年、誰か此時の心を識るものぞ。

贈寫御容妙善師

憶昔射策干先皇。　憶ふ昔策を射て先皇を干す、
珠簾翠幄分兩廂。　珠簾翠幄　兩廂を分つ。
紫衣中使下傳詔。　紫衣の中使下りて　詔を傳ふ、
跪奉冉冉聞天香。　跪き捧ぐれば冉冉天香を聞く。
仰觀眩晃目生暈。　仰ぎ觀れば眩晃目暈を生ず、
但見曉色開扶桑。　但見る曉色扶桑を開くを。
迎陽晚出步就坐。　迎陽晚に出で步して坐に就く、
絳紗玉斧光照廊。　絳紗玉斧光廊を照らす。
野人不識日月角。　野人は識らず日月角、

【字解】【一】御容　仁宗の御容。【二】妙善　宋、鄧椿の畫繼には、妙善に作る。妙善師は、東坡の像を寫したから、末の一段は、專ら之を謝す。【三】射策　漢書晉義にいふ、簡策を作つて、難問する。例に案上に置き、在試者は、意投じ、射取りて之に答ふ。之を射策といふ。若し政化の得失を錄し、顯はして之を問ふときは、之を對策といふ。射策の字面は、前漢に出づ。前漢、蕭望之の傳に、射策甲科爲郎。後世は、賢良に試せらるる時をいふのみ。東

彷彿尚記重瞳光。
三年歸來眞一夢。
橋山松檜淒風霜。
天容玉色誰敢畫。
老師古寺畫閉房。
夢中神授心有得。
覺來信手筆已忘。
幅巾常服儼不動。
孤臣入門涕自滂。
元老侑坐鬚眉古。
虎臣立侍冠劍長。
平生慣寫龍鳳質。
肯顧草間猿與麞。
都人踏破鐵門限。
黃金白璧空堆牀。
爾來摹寫亦到我。
謂是先帝白髮郎。
不須覽鏡坐自了。
明年乞身歸故鄉。

彷彿尚ほ記す重瞳の光。
三年歸來眞に一夢、
橋山の松檜風霜淒たり。
天容玉色誰か敢て畫かん、
老師古寺畫房を閉ぢ。
夢中神授心に得るあり、
覺め來つて手に信せて筆已に忘る。
幅巾常服儼として動かず、
孤臣門に入つて涕自から滂たり。
元老坐を侑め鬚眉古りたり、
虎臣立侍して冠劍長し。
平生寫すに慣る龍鳳の質、
顧みるを肯んぜんや草間の猿と麞と。
都人踏み破る鐵門限、
黃金白璧空しく牀に堆し。
爾來寫亦我に到る、
謂ふ是れ先帝の白髮郎。
鏡を覽るを須ひず坐して自ら了す、
明年身を乞ひて故鄉に歸らん。

玉斧是也。此詩の絳紗玉斧光照ㇾ廊の句を觀れば、駕の莅む所、皆玉斧を持す。亦、宋時、祖宗の舊制なり。【一二】 玉斧 石林燕語に、崇政殿、崇寧初徙、發二舊基一得二玉斧一、大七八寸、制作極工妙、今、乘輿行幸、最近二駕前一所ㇾ持

【一四】 鐵門限 鐵のしきゐ。唐、李綽が尚書故實に、唐、智永禪師住二吳興永福寺一、人來覓ㇾ書并請二題頭一者如ㇾ市、戶限爲ㇾ之穿ㇾ穴、乃用二鐵葉一裹ㇾ之、人謂爲二鐵門限一。【一五】 黃金白璧 謝を爲す所以のもの。虞卿傳に、黃金百鎰、白璧一雙。【一六】 白髮郎 漢の武帝、郎署に至り、一郎の頭髮皓白なるを見、之を問へば、姓は顏、名は駟。帝問ふ何ぞ老ゆるや、對へて曰く、文帝、文を好み、臣武を好む、景帝、美を好み、臣が貌は醜なり。陛下少を好み、臣、已に老ゆ。是を以て三世不遇と。上拜して都尉となす。又、前漢、夢得の石林燕語に、崇政殿、卽舊講武殿、自二延和殿一出降ㇾ階、由二庭中一步至、不ㇾ乘ㇾ輦、遇ㇾ春、然後行二西廊一、皆祖宗之舊也。【一一】 玉斧

坡は仁宗の朝に、賢良科に中る。年譜に據るに、東坡於二仁宗嘉祐六年一、應二制科一、入二第三等一、授二大理寺評事一。【四】 翠幄 文選、左太沖の吳都賦に、靄靄翠幄、【五】 兩廂 廂は序なり。殿閣の東西のひさしをいふ。王文考の靈光殿賦に、西廂踟躕以閒ㇾ宴、東序重深而奧祕とある。注にいふ、爾雅曰、東西廂謂二之序一と。

【六】 紫衣中使 天子の御手もとの使。後漢宦者張讓傳に、凡詔所二徵求一、皆令二西園騶密約敕一、號曰二中使一。【七】 冉冉 香氣をいふ。杜子美の詩に、雨裏紅蕖冉冉香。【八】 開二扶桑一 淮南子に、日出二於暘谷一、登二於扶桑一、入二於虞淵之汜一。楚辭、九歌に、暾將ㇾ出二兮東方一、照二吾檻兮扶桑一。【九】 迎陽 宮中の門名。歐陽修の歸田錄に、邇英閣在二迎陽門一、云云。【一〇】 步就ㇾ坐 宋の業

馮唐傳に、爲二郎中署長一、文帝輦過、問レ唐曰、父老何自爲レ郎、家安在、具以實言。左太沖詠史詩に、馮公豈不レ偉、白首不レ見レ招。

【二七】坐自了　晉書、王敦傳に、迷不二自了一。【二八】乞レ身　歐陽永叔の歸田四時樂歌に、乞レ身當レ及二強健時一。【二九】歸二故鄉一　杜子美の詩に、上疏乞二骸骨一、黃冠歸二故鄉一。

【題義】此詩は熙寧十年、東坡が四十二歳の時、徐州に在つて作つたものである。翰苑遺芳に據ると、東坡は仁宗の嘉祐六年、制科に應じ、茂材の科に中り、冬、鳳翔の任に赴き、後、三年、英宗の治平元年に、任滿ちて京に還つた。此詩は、熙寧中の作であるから、仁宗の時を去る已に十七八年である。紀昀いふ、題目本大、詩亦極用レ意、然却是借レ題寄レ慨、用レ意不レ在二本位上一と。

【詩意】昔の事を憶ひ出すと、我は昔、仁宗の嘉祐六年に、射策に及第した。（紀昀いふ、如レ此起方切實、一篇之骨在レ此と。）其時、陛下は軒に臨んで、御試なさる。珠簾翠幄の處で、紫衣の中使が詔書を渡される。難有くて跪づいて詔書を捧げて受取ると、冉冉として天香を聞く。御試の當時、仰いで御容を窺ひ奉ると、照りかがやいて、目も眩するばかりで、恰も曉日が扶桑から出たやうに光彩を放たれた。（出御の時の狀をいふ。）殿試が畢つて、晚に迎陽門から出られ、平生の御殿へ、お歸りになるとき、廊下を通過せられる。其の有樣を言ふと、廊下の左右に張つた絳紗や玉斧は、其の光が廊下を照らして居る。（玉斧は天子の執る武器で、平生は、廊下に置いてあるから、光照レ廊と言つたのであらう。欒城集の入二侍邇英一詩の自注に、昔舉二制策一、坐二於崇政西廊一、蓋邇英之北也、是日晚、仁皇自二延和一步入二崇政一、過二所レ試幄前一、瞻二望天表一、最爲二親近一とあるを見ても、出御の光景が想見される。）我は野人で、始めて天子に謁し、まことに畏くて、御相貌が額の日月角のやうに、高くあるといふことを見分けなかつたが、定めし舜帝のやうに重瞳子でおはすこととぼんやりと思つた。我は嘉祐六年に及第し、其年の十一月、鳳翔の簽書判官となつて、任に赴いた。同じく嘉祐八年に京に歸つたが、仁宗は既に崩御あつて、橋山に葬り、陵上の松檜も、風霜を帶びて、淒涼であつた。（英宗の治平二年、皇紀一七二五年、西曆一〇六五年に東坡は、朝に還つたから、橋山松檜の句がある。）仁宗の天容玉色は、誰も畫くことは出來まいに、ここに妙善師は、古寺中に在つて、畫も房中に閉ぢ籠つて苦心した。其の效が見はれ、鬼神が來つて、夢の中に、御容を寫す方法を授け、會得する所があつた。夢が覺めて手に信せて寫し取つたのが此の御容の畫である。全く神授で、筆のことは既に忘る。（御容の神筆を斯くいふので、事實と見ては誤である。）仁宗の畫すがたを言ふと、幅巾常服、儼として動かない。孤臣（東坡自らいふ）は妙善師の房の門に入つて、御容を拜觀し、（御容は此寺に在る。）舊事を思ひ出して、滂然として涕を流した。御容の側には鬚や眉の古りたる元老の臣だちが、侑坐として食を侑めて接伴して居る。又、矯矯たる武臣は、長い冠劍を著けて御側に侍立して居る。（以上、御容の周圍を寫す。）妙善師は、平生、天子の御容を寫すに慣れて、草野の間に居る人の像をば畫かない。始めより振り向きもしないのである。妙善師は、御容の外は筆を執らないと言つて居るのに、都人は、己の像を寫してくれよと、師の房の鐵の門限を踏み破つて詰めかける。其が爲に潤筆として、黃金や白璧の貴重なものを贈り來つたが、更に筆を取らないから、空しく床の上に堆く積んであるのみ。先

帝の御容を寫して、それから後に、亦、我（東坡）が肖像をも寫して賜はつた。それは如何なる譯かといふに、此の東坡は、先帝に仕へた白髮郎であるから、序を以て寫してやらうと言ふことであつた。思ひがけない幸である。さて、善師が寫して賜はつた我が肖像を見ると、我の年寄つたことが、すぐわかる。別に鏡を取つて覽るにも及ばない。坐ながらにして身を乞ひ、早く歸隱すべきであると、悟り得たから、明年は早早此の身を乞うて故郷に歸らう。（紀昀いふ、是句、綰合得好と。又いふ、結句、回映起處射策句、多少感慨と。）

【餘錄】許顗詩話にいふ、此詩、美は甚だ美なり、然れども、丹青引の微にして顯はれ、春秋の法を得たるに若かずと。唐宋詩醇に、許顗の此詩を論ずる、深きに似て實は淺し。詩は射策干先皇を以て起し、先帝の白髮郎を以て結ぶ。嘉祐辛丑を致ふるに、軾、制科に應じ、其の冬、鳳翔簽判の任に赴き、治平甲辰に及び、朝に還る。復、仁宗に見ゆるを得ず。故に中に三年歸來眞一夢の語あり。詩は妙善の爲にして作ると雖も而も意は則ち先皇を眷戀す。句として是れ惓惓忠愛の忱ならざるはなし。此れ卽ち軾の所謂發乎情、止乎忠孝、而不僅止乎禮義者也。後村詩話に、唐李遠贈下寫御容李長史上云、乍分隆準山河秀、再點重瞳日月明、極工、及下坡公仰觀眩晃目生暈、但見曉色開扶桑、迎陽晚出步就坐、絳紗玉斧光照廊、野人不識日月角、髣髴尙記重瞳光之篇一出、光焰萬丈、視遠所作、眞小兒語とある。

哭刁景純

讀書想前輩。毎恨生不早。
紛紛少年場。猶得見此老。
此老如松柏。不受霜雪槁。
直從毫末中。自養到合抱。
宏才乏近用。千歲自枯倒。
文章餘正始。風節貫華皓。
平生爲人爾。自爲薄如縞。
是非雖難齊。反覆看愈好。
前年旅吳越。把酒慶壽考。
扣門無晨夜。百過迹未掃。
但知從德公。未省厭邱嫂。
別時公八十。後會知難保。
昨日故人書。連年喪翁媼。

刁景純を哭す

書を讀んで前輩を想ひ、毎に恨む生るる早からざりしを。
紛紛たる少年の場、猶ほ此の老を見るを得。
此の老は松柏の如く、霜雪の槁を受けず。
直に毫末の中より、自ら養うて合抱に到る。
宏才近用に乏しく、千歲自から枯倒す。
文章正始を餘し、風節華皓を貫く。
平生人の爲にするのみ、自ら爲にする薄きこと縞の如し。
是非齊うし難しと雖も、反覆看る愈〻好し。
前年吳越に旅し、酒を把つて壽考を慶す。
門を扣いて晨夜なく、百過迹未だ掃はず。
但德公に從ふを知り、未だ邱嫂を厭ふを省みず。
別るる時は公八十、後會保し難きを知る。
昨日故人の書、連年翁媼を喪ふ。

傷心范橋水。漾漾舞寒藻。
華堂不見人。瘦馬空戀皁。
我欲江東去。匏樽酌行潦。
鏡湖無賀監。慟哭嵇山道。
忍見萬松岡。荒池沒秋草。

心を傷しむ范橋の水、漾漾寒藻を舞はす。
華堂人を見ず、瘦馬空しく皁を戀ふ。
我江東に去つて、匏樽行潦を酌まんと欲す。
鏡湖賀監なく、慟哭す嵇山の道。
見るに忍びんや萬松の岡、荒池秋草に沒するを。

【字解】【一】刁景純　刁約、字は景純、文章を能くす。天聖の進士、寶元中、館閣校理たり、後、史館に直す。治平中、出でて揚州に知たり。冠を掛けて歸り、室を潤州に築き、藏春塢と號し、日に其の中に游息す。前にも出づ。【二】前輩　杜子美の客堂詩に、前輩聲名人、埋沒何所レ得。【三】紛紛少年場　孟子、滕文公篇に、何爲紛紛然、與二百工一交易。漢、尹賞傳に、長安歌曰、安所レ求二子死一、桓東少年場。文選、樂府、鮑明遠に結客少年場行あり。李太白にも、結客少年場行あり。【四】毫末合抱　老子に合抱之木、生二於毫末一。【五】宏材乏二近用一　後漢書、伏侯宋傳に、論曰、器博者、無二近用一、道長者、其功遠。宏材は、晉書、郭璞傳に、景純通秀、夙振二宏材一。【六】餘二正始一　正始は魏、齊王の年號。時に何晏、才秀を以て名を知られ、莊老の言を好み、道德論及び諸文賦數十篇を作り、王弼は好んで儒道を論じ、詞才逸辨、文詞は何晏に如かず。天下翕然として之を宗とし、是に由つて名理の學、盛に行はる。晉、衞玠傳に、與二王敦一相見、敦謂二謝鯤一曰、昔、王輔嗣吐二金聲於中朝一、此子復玉二振於江表一、微言之緒絕而復續、不レ意、永嘉之末、復聞二正始之音一。【七】風節　唐書、張仲方傳に、確正有二風節一。【八】華皓　隋書、李穆傳に、穆子孫一門、執二象笏一者、百餘人、詔曰、呂尙以二期頤一佐レ周、張蒼以二華皓一相レ漢、高才命世、不レ拘二恒禮一。唐の李林甫曰く、食二甘露羹一、縱華皓、亦必鬢黑。【九】薄如レ縞　史記、韓安國の傳に、彊弩之極矢、不レ能レ穿二魯縞一。許愼の注にいふ、魯之縞尤薄と。【一〇】反覆　史記、屈原傳に、欲レ反二覆之一、一篇之中、三致レ意。【一一】把レ酒慶二壽考一　韓退之の詩に、把レ酒對二南山一。壽考は長命をいふ。考は老の意。詩、大雅、行葦篇に、壽考維祺、以介二景福一。同じく小雅、蓼蕭篇に、壽考不レ忘。【一二】迹未レ掃　後漢、范滂傳に、掃レ迹斥逐。【一三】德公　襄陽記に、龐德公、居二峴山之南一、未嘗入二城府一、諸葛孔明、每レ至二德公家一、獨拜二牀下一、德公、初不レ令レ止、司馬德操、嘗謂二德公一、値二其上レ家、德操徑入二其室一、呼二德公妻子一、使二速作レ黍、徐元直、向云、當レ來就レ我與二德公一談上、其妻子、皆、羅二拜堂下一、奔走共設、須臾德公還、直入相就、不レ知二何者是客一也。前に出づ。【一四】厭二邱嫂一　漢、楚元王傳に、高祖微時、常避レ事、時時與二賓客一過二其丘嫂一食、嫂厭二叔與レ客來一、陽爲二羹盡一瞭レ釜、客以レ故去、已而視二釜有レ羹、由レ是怨レ嫂。【一五】後會知難保　文選、謝惠連の雪賦に、怨二年歲之易レ暮、傷二後會之無レ因。【一六】喪二翁媼一　東坡の自注に、景純妻先亡。【一七】范橋　潤州の范公橋は、文正公を以て名を得。一統志に、清風橋在二鎭江府治一、南宋、范仲淹建、俗呼爲二范公橋一。【一八】漾漾　ただよふ。張籍の詩に、漾漾南澗水。宋之問の詩に、漾漾潭際月。【一九】寒藻　柳子厚の詩に、寒藻舞二淪漪一。【二〇】不レ見レ人　劉禹錫の讀二張曲江集一の詩に、魂歸不レ見レ人。【二一】戀レ皁　晉、宣帝紀に、桓範出赴二曹爽一、蔣濟言二於帝一曰、智囊往矣、帝曰、駑馬戀二櫪豆一、必不レ能レ用也。揭雄方言に、梁宋齊楚之間。謂レ櫪曰レ皁。【二二】匏樽　赤壁の賦に、擧二匏樽一以相屬。匏は瓜の類。【二三】行潦　途上の溜水。孟子の公孫丑に、河海之於二行潦一、類也。【二四】鏡湖　今の浙江、紹興縣の南に在る。一名は鑑湖。又の名は、長湖。唐の玄宗、祕書監賀知章に鏡湖一曲を賜ふ、故に又、賀監湖と名く。宋、熙寧の後、湖は漸く廢れて田となつた。王注に、鏡湖、世傳、軒后、鑄二鏡於此一。【二五】賀監　唐書に、賀知章、字、季眞、天寶初、上章請二度爲二道士一、有レ詔賜二鏡湖剡川一曲一。李太白の憶二賀監一詩に、欲レ向二江東一去、定將誰擧レ杯。嵇山無二賀老一、却櫂二酒船一回。【二六】慟哭　晉、阮籍傳に、車迹所レ窮、輒慟哭而回。【二七】萬松岡　景純、藏春塢前の一岡は、皆、松林、命じて萬松岡といふ。司馬溫公の題詩にいふ、藏春在二何許一、鬱鬱萬松林、永日門闌靜、東風花木深と。

【題義】此詩も熙寧十年十月の作。刁約の訃を聞いて、挽詞を作つたのである。紀昀いふ、寫二出偉人氣象胸次一と。唐宋詩醇に、老成凋謝、爲二世道之憂一、不二僅一人交情而已一、此詩言レ之、最爲二眞切沈痛一と。

【詩意】其の詩を誦し、其の書を讀む、其の人を知らずして可ならんやで、書を讀んで、前輩を想ひ、

毎に我が此の世に生れたことの早くなかつたことを殘念に思ふ。紛紛たる少年の場に、此の元氣な老人を見ることが出來た。此の老人は松柏の後凋するが如くであつて、霜雪の爲に枯らされない。直に毫末の中から自ら養つて、遂に一抱もある大木に至る。凡そ宏才は器が博いが、手近い用には役に立たないこと多く、千歳自から枯れて倒れるのが常である。魏の齊王の正始年間には、何晏は才秀を以て知られ、王弼は儒道を論じ、天下翕然として之を宗とし、名理の學が一時に盛であつた。微言の緒、一旦絶えて、復、續ぐものもなかつたが、思掛もなく、晉、懷帝の永嘉の末に、復、正始の音を聞いた。景純（刁景純をいふ。）の風節は其の華皓の髮を貫いて居る。平生、人の爲にして、自ら爲にすることは、魯縞の如く薄い。（魯の縞は薄い）是非する所あるを物論といふ。一體物論の齊しくないのは、各〻我が爲にする心から起る。そして我爲にする心が强ければ、徒らに紛紜を增すのみである。さて是非は齊うし難きも、反覆して看るときは、いよいよ好い。（是非雖レ難レ齊、反覆看愈好、紀昀いふ、相契之深、盡二此十字一と。）我は前年、吳越に旅行し、酒を把つて刁老人の長壽を祝し、其の門を扣いて、晝夜の別もなく、たびたび尋ねたが、毎に迹を掃はれなかつた。昔、龐德公は峴山の南に居つた。諸葛孔明は德公の家に至る毎に、獨り牀下に拜した。德公は答禮をしない。又、司馬德操が德公に詣ると、直に其の室に入る。かくて德操と德公とは、何れが是れ主、何れが是れ客か分らなかつたさうであるが、今、我は德公に從ふやうな心持がする。又、漢、高祖が微なる時、常に事を避け、時時、賓客と其の邱嫂に過ぎつて食した。嫂は叔（高祖を指す）が客と來るを厭ひ、陽はりて羹盡きて釜を

轑すと言つたので、客は去つた。今は、邱嫂の厭ふは構はない。刁老人と別れた時、老人は八十の高齡であるから、後會は請け合はれないのである。昨日、故人の手書があつたが、景純の妻は先だつて亡くなつたさうである。年を連ねて翁と媼とを喪つたので、范公橋下の水、漾漾として、寒藻を漂はすを見るにつけても、我は心を傷ましめるのみである。華堂に人を見ないので、瘦馬は空しく皁櫪を戀つて居る。我は江東に去つて。匏樽に行潦を酌み入れようとする。唐、天寶の初め、賀知章は、上章し、度して道士とならんことを請ふと、玄宗は鏡湖の一曲を賜うた。李太白の賀監を憶ふ詩に、嵇山に賀老（賀知章）なく、却つて酒船に棹して回るとあるが、今、鏡湖に賀監にも比すべき刁景純が居なくて、同じく嵇山の道に慟哭する。景純が藏春塢前の萬松岡も荒れ果てて、庭池も秋草に沒して居る。（紀昀いふ、收得滿足と。）

【餘錄】唐宋詩醇に、刁約、齒長二於軾一者四十二年、而相與爲レ友、忘年之義、不レ同二流俗一、前有下寄二題景純藏春塢一詩上云、白首歸來種二萬松一、又和二岡字韻一贈二景純一詩、有二爲レ翁栽插萬松岡之句一、萬松岡、卽在二所レ居藏春塢前一、是詩、稱二此老如一松栢一、而結レ之以二忍レ見萬松岡一、非二但不レ忘二其居一、亦緣二其人實有二卓爾貞松之操一、故足レ悼也。施注にいふ、刁景純、名約、丹徒人、少卓越有二大志一、刻二苦學問一、能二文章一、始應二舉京師一、與二歐陽永叔、富彥國一、聲譽相高下、天聖二年、登二進士第一、當レ官正レ辭、毅然有二不レ可レ奪之色一、其在二寵祿之際一、泊如也、故屈二於爲レ郎、施不二大耀一、士友歎惜、而景純未二嘗以爲一レ恨、好急二人之難一、海內之人、識與レ不レ識、多歸レ之、不レ治二產業一、賓客故人常滿二其門一、尊酒燕娛無二虛

時、重レ義輕レ施、有二古人之風一、年八十四屬レ疾、王左丞和甫守レ潤、往問焉、隱レ几笑語如二平時一、和甫登レ車已逝矣、妻江氏先二景純一一年卒、東坡此詩、形二容其平生一略盡云と。王文誥いふ、和甫、乃介甫弟安禮也と。

答呂梁仲屯田

呂梁の仲屯田に答ふ

亂山合沓圍彭門。
官居獨在懸水邨。
居民蕭條雜麋鹿。
小市冷落無雞豚。
黃河西來初不覺。
但訝清泗奔流渾。
夜聞沙岸鳴甕盎。
曉看雪浪浮鵬鯤。
呂梁自古喉吻地。
萬頃一抹何由吞。
坐觀人市卷閭井。
吏民走盡餘王尊。
計窮路斷欲安適。
吟詩破屋愁鳶蹲。
歲寒霜重水歸壑。
但見屋瓦留沙痕。
入城相對如夢寐。
我亦僅免爲魚黿。
旋呼歌舞雜詼笑。
不惜飲醑空瓶盆。
念君官舍冰雪冷。
新詩美酒聊相溫。
人生如寄何不樂。

亂山合沓して彭門を圍む、
官居は獨り懸水の邨に在り。
居民は蕭條として麋鹿に雜はり、
小市は冷落して雞豚なし。
黃河西より來るも初めは覺えず、
但訝る清泗の奔流して渾ると。
夜は聞く沙岸に甕盎の鳴くを、
曉に看る雪浪の鵬鯤を浮ぶるを。
呂梁は古より喉吻の地、
萬頃一抹何に由つてか呑む。
坐ろに觀る市に入つて閭井を卷くを、
吏民は走り盡くして王尊を餘す。
計は窮まり路も斷えて安くに適かんと欲す、
詩を吟じ屋を破りて鳶の蹲まるを愁ふ。
歲寒うして霜重く水は壑に歸し、
但見る屋瓦に沙痕を留むるを。
城に入つて相對する夢寐の如し、
我も亦僅に魚黿たるを免る。
旋いで歌舞を呼んで詼笑を雜へ、
惜まず飲醑瓶盆を空しうするを。
念ふ君が官舍冰雪冷かなるを、
新詩美酒聊か相溫む。
人生は寄するが如し何ぞ樂まざる、

【字解】【一】呂梁　彭城郡に在り。東坡自注に、呂梁、地名と。【二】仲屯田　名は伯達、前に出づ。【三】亂山　杜荀鶴の詩に、遊人不レ可レ見、春入二亂山一青。【四】合沓　重疊といふに同じ。文選、沈休文の鍾山詩に、合沓共隱レ天、參差互相望。謝靈運の詩に、巒隱有二合沓一、往來無二蹤轍一。【五】彭門　山の名。四川、彭縣の西北に在る。兩峯對立して闕の如し。亦、天彭門と名く。【六】懸水邨　莊子、達生篇に、孔子觀二於呂梁一、懸水三十仞。懸水は瀑布、仞は八尺、【七】蕭條　物寂しい。班固の西都賦に原野蕭條。【八】麋鹿　麋は鹿の大いなるもの。孟子、梁惠王篇に、王立二於沼上一、顧二鴻雁麋鹿一云云。樂二其有二麋鹿魚鼈一云云。殺二其麋鹿一者、如二殺レ人之罪一云云。【九】小市　宋書、張暢傳に、彭城小市門。【一〇】冷落　寂しくおちぶれる貌。白樂天、琵琶行に、門前冷落鞍馬稀。【一一】奔流渾　唐、太宗の詩に、奔流洒二絡纓一。渾は混に同じ。濁るをいふ。【一二】鳴二甕盎一　韓退之の詩に、餘瀾怒不レ已、喧聒鳴二甕盎一。【一三】雪浪　李商隱の詩に、一條雪浪吼二巫峽一、千里火雲燒二益州一。【一四】浮二鵬鯤一　莊子、逍遙遊に、鯤之大、不レ知二其幾千里一也、化而爲レ鳥、其名爲レ鵬。【一五】自レ古喉吻地　水經に、呂梁、乃自レ古黃河喉襟脣吻之地。漢、嚴延年の傳に、河南、

任使絳蠟燒黃昏。
宣房未築淮泗滿。
故道堙滅瘡痍存。
明年勞苦應更甚。
我當畚鍤先黥髡。
付君萬指伐頑石。
千鎚雷動蒼山根。
高城如鐵洪口快。
談笑却掃看崩奔。
農夫掉臂免狼顧。
秋穀布野如雲屯。
還須更置軟脚酒。
爲君擊鼓行金樽。

任使　絳蠟黃昏に燒くを。
宣房未だ築かず淮泗滿ち、
故道堙滅瘡痍存す。
明年は勞苦應に更に甚だしかるべし、
我畚鍤に當つて黥髡に先つ。
君に付す萬指頑石を伐ち、
千鎚雷動す蒼山の根。
高城の鐵の如く洪口快く、
談笑却つて掃うて崩奔を看る。
農夫臂を掉うて狼顧を免れ、
秋穀野に布いて雲屯の如し。
還須らく更に軟脚酒を置くべし、
君が爲に鼓を擊ちて金樽を行らん。

談笑　嘲り笑ふ。漢書、枚乘傳に、枚皐談笑類ニ俳倡一。【三四】　飲醵　杯の酒を飲み盡くすこと。曲禮に、長者擧ニ未レ醮、少者不ニ敢飲一。

天下喉咽地。顏師古いふ、言其所レ在襟要、如ニ人體之有ニ喉咽一也と。【一六】　何由吞　司馬相如、子虛の賦に、吞ニ雲夢一者八九。【一七】　坐觀云云　後漢、陳蕃傳に、不ニ敢尸祿惜レ生、坐觀ニ成敗一。【一八】　閭井　元稹の文に、因ニ其阡陌一、制ニ之閭井一。【一九】　餘ニ王尊一　漢、王尊傳に、遷ニ東郡太守一、河水盛溢、泛ニ浸瓠子金隄一、老弱奔走、尊投ニ沈白馬一、祀ニ水神河伯一、尊執ニ圭璧一、使ニ巫策祝請一以レ身塡ニ金隄一、因止ニ宿隄上一、隄壞、吏民奔走、惟一主簿、泣在ニ尊傍一、立不レ動、而水波稍卻回還。【二〇】　水歸　經　禮記、郊特牲に、土反ニ其宅一、水歸ニ其壑一。【二一】　如ニ夢寐一　杜子美の羌村詩に、夜闌更秉レ燭、相對如ニ夢寐一。【二二】　爲ニ魚鱉一　左傳、昭公元年に、劉子曰、微レ禹、吾其魚乎。【二三】　注にいふ、盡レ爵曰レ醮と。說文に、醮、飲レ酒盡也。【二五】　瓶盆　禮記に、盛レ於レ盆尊レ於レ缾。杜子美が遭ニ田父一泥飲詩に、叫レ婦開ニ大缾一、盆中爲レ吾取。【二六】　新詩　文選、張茂先が答ニ何劭一詩に、良朋貽ニ新詩一、示レ我以ニ游娛一。【二七】　任使　梅堯臣の詩に、當時任使眞堪レ笑、波上三年學ニ炙レ魚。【二八】　絳蠟　杜牧之の詩に、絳蠟猶封繫ニ臂紗一。【二九】　黃昏　淮南子、天文に、日至ニ于虞淵一、是曰ニ黃昏一。屈原、離騷に、黃昏以爲レ期兮。【三〇】　宣房　卽ち宣防。前の河復詩の注に塞ニ瓠子一、築ニ宮其上一、名曰ニ宣防一云云。【三一】　淮泗滿　瓠子歌に、齧桑浮兮淮泗滿。【三二】　堙滅　湮滅も同じ、史記、伯夷傳に、名堙滅而不レ稱。【三三】　瘡痍　史記季布傳に、瘡痍未レ瘳。韓退之の詩に、天子憫ニ瘡痍一、將軍禁ニ鹵掠一。【三四】　畚鍤　畚は土を運ぶもの。鍤を土を掘るもの。晉書に、畚鍤相尋、干戈不レ息。【三五】　黥髡　黥はいれずみの刑。髡は髮をそり落す刑。【三六】　千鎚雷動　白樂天の開ニ八節灘一詩に、鐵鑿金鎚隱若レ雷。張平子、西京賦に、千乘雷動。【三七】　高城如レ鐵云云　杜子美の詩に、大城鐵不レ如。子由が黃樓賦序に、水既涸、乃請增ニ築徐城一、相ニ水之衝一、以レ隄捍レ之、水雖ニ復至一、不レ能レ病也。【三八】　却掃　文選、江淹の恨賦に、閉レ關卻掃。【三九】　崩奔　謝靈運の詩に、折岸厭崩奔。【四〇】　狼顧　漢書、食貨志に、失レ時不レ雨、民且狼顧。【四一】　雲屯　列子、周穆王篇に、化人之宮、望レ之若ニ屯雲一焉。杜子美の沙苑行に、王有ニ虎臣一司ニ苑門一、入レ門天廐皆雲屯。【四二】　軟脚　唐書、楊國忠傳に、諸楊湯沐館、在ニ華淸宮東垣一、帝臨幸、必遍ニ五家一、賞賚不レ貲、出有レ賜曰ニ餞路一、返有レ勞曰ニ軟脚一。楊妃外傳に、出有ニ餞飲一、還有ニ軟脚一。【四三】　擊レ鼓　毛詩に、擊レ鼓其鏜。漢叔孫通傳に、觴九行。謝靈運の石門詩に、淸醑滿ニ金樽一。

【題義】　呂梁の仲伯達に答へた詩である。紀昀いふ、一氣縱橫、筆筆老健と。又いふ、結一段、淋漓滿足、論レ文不レ如レ此不レ振、論レ事不レ如レ此亦不レ合、若ニ水來卽吟レ詩破レ屋、水退卽歌舞飲醵一、成ニ何政體一と。

【詩意】　亂れて峙つ山山は、重疊して彭門山を圍んで居る。彭門山は、四川、彭縣の西北に在る。兩峯が對立して闕の如きより其の名を得、役所は離れて懸水邨に在る。懸水邨は呂梁をいふのである。

莊子に、孔子、呂梁に觀る、懸水三十仞とあるに據つたのである。其處の居民は物寂しく、大鹿や鹿と雜つて生活して居る。宋書に彭城、小市門と見えて居るが、小市も今は冷落して、雞も豚もない、人の住まなくなつた證據である。黄河は西から流れ來るも、初めは氣付かなかつた。ただ清かるべき泗水の流が、何んでかやうに濁つて居るのかと不思議に思つて居た。夜は沙の岸で、甕盎の鳴いて居るのを聞く、魚類の聲でもあらう。曉は雪の如き浪の上に、鵬鯤のやうな舟が浮んで居るを見る。呂梁は、昔から喉襟脣吻の地として知られて居る。其の所在が、人體の咽喉に於けるやうに要處であるといふ意であらう。意外にも大水が至つて、此の萬頃（百畝を一頃といふ）の廣廣とした土地を何に由つてか一抹して呑み去る。坐ろに觀る河水は市に流れ入つて、町や村里を卷き去るを。役人も人民も、盡く走り去つてしまつた。此時、東郡太守王尊は、白馬を投じて水神河伯を祀り、身を以て瓠子隄に塡めんことを請ひ、因つて隄上に止宿した。隄が壞れて、吏民が爭うて奔走したとき、ただ主簿だけが泣いて王尊の傍に在り、立つて動かなかつたが、水波も稍く卻いて回つたといふことである。さて計は窮まり、路も絶えて、一體何處に行かうとする。今は屋を破つて鳶の蹲れることをば、詩を吟じて愁へて居る。歳も寒くなつて、霜は重く水も其の壑に歸る。そして屋根の瓦には沙の痕を留めるのを見る。水の退いた後、城に入つて相對すると、宛ら夢のやうである。我も亦、幸に水中の魚や黿（大鼈）の餌となることを免れた。尋いで歌舞を催し、詼笑を雜へ、酒を飲み盡くして、瓶盆を空しうすることを惜しまない。念ふに君が官舍は冰雪の如く冷かであるから、新詩と美酒とで、聊か相溫めたいと思ふ。人生は寄寓の如くであるから、何ぞ之を樂しまざる。さもあらばあれ、絳蠟を黄昏に燒いて夜遊をなさう。瓠子を塞いで、家を其の上に築き、宣防と名けたが、其の宣防もまだ築かない中に淮水も泗水も滿ちた。故道は湮滅してしまひ、瘡痍だけが殘つて居る。明年の勞苦は、一層ひどいことと思ふ。そこで我は自ら畚を擔ひ、鍤を手にして、鯨や髡の刑徒勞働者の先に立つて、君の後に從ひ、萬夫を役して頑石を伐つた。鐵の鑿や、金の鎚が蒼山の根に雷の如くに響く、高い城は鐵の如く立ち、洪口は快く水を行り、談笑しながらも、却つて塞げるを掃つて、水勢の崩奔するのを看る。かくて、農夫も臂を掉つて狠顧を免れ、秋穀は野に布いて雲の屯したやうである。また須らく更に軟脚酒を置くべし、君の爲に鼓を擊ちて、金樽を傾けよう。

答孔周翰求書與詩

孔周翰が書と詩とを求むるに答ふ

身閒曷不長閉口。　身閒なれば曷ぞ長く口を閉ぢざる、
天寒正好深藏手。　天寒うして正に好し深く手を藏むるに。
吟詩寫字有底忙。　詩を吟じ字を寫す底の忙はしきかある、
未脫多生宿塵垢。　未だ脫せず多生塵垢を宿するを。
不蒙譏訶子厚疾。　蒙らず子厚が疾を譏訶するを、

【字解】【一】孔周翰　名は宗翰、周翰は字、道輔の子、進士に第し、陝・揚・洪・兗諸州を歷、皆治を以て聞ゆ。哲宗の時、刑部侍郎に累遷し、寶文閣待制を以て徐州に知たり、未だ拜せずして卒す。【二】長閉口　傅休奕（傅玄）の口銘に、病從口入、

反更刻(八)畫無鹽醜。
征西自有(九)家雞肥。
(一〇)太白應驚飯山瘦。
與君相從知幾日。
東風待得花開否。
(一一)撥棄萬事勿復談。
(一二)百觚之後那辭酒。

反つて更に無鹽の醜を刻畫す。
征西自ら家雞の肥えたるあり、
太白應に驚くべし飯山の瘦せたるを。
君と相從ふ知る幾日、
東風待ち得花開くや否や。
萬事を撥棄して復談ずること勿れ、
百觚の後那ぞ酒を辭せん。

氏。【七】子厚病　柳宗元の報崔黯書に、凡人好詞工書、皆病癖也、吾不幸蚤得二病一、學道以來、日思二砭鍼攻熨一、卒不能去、纏結心腑一牢甚、願二斯與忘一之、而不克、竊嘗自毒、吾子乃始欽欽思易二吾病一、不二亦惑一乎。又いふ、吾嘗見病二心腹一之人、昭二土炭一、嗜二酸鹹一者。不レ得則大戚、觀二吾子之意一、亦戚矣。【八】刻二畫無鹽醜一　晉書、周顗傳に、庾亮嘗謂レ顗曰、諸人咸以君方二樂廣一、顗曰、無乃刻二畫無鹽一、唐書、突西子。無鹽は齊の醜婦。【九】家雞　南史、王曾虔傳に、庾征西翼書、少時與二王右軍一齊レ名、右軍後進、庾猶不レ分、在二荊州一、與二都下人書一云、小兒輩、賤二家雞一、皆學二逸少書一。【一〇】太白應レ驚云云　舊唐書、杜甫傳に、李白譏レ甫有二飯顆山之嘲詩一。李太白の詩は、飯顆山前逢二杜甫一。頭戴二笠子一日卓午（正午）、借問因レ何太瘦生、總爲二從前作レ詩苦。【一一】撥棄　はらひ棄てる。杜子美の詩に、撥二棄潭州百斛酒一。【一二】百觚　孔叢子に、昔、平原君與二子高一飲、强二子高酒一曰、昔有二遺諺一、堯舜千鍾、孔、子百觚、子路嗑嗑、尙飲三百榼一、古之賢聖、無不レ能レ飲、子何辭焉。

患從レ口出。史記、張儀傳に、願陳子閉レ口無二復言一。【三】有二底忙一　韓退之の寄二白舍人一詩に、有二底忙一時不二肯來一。【四】多生　張籍の送二閑師一詩に、多生修二律業一、外學得二詩名一。東坡の詩に、多生宿業盡、一夜中氣存。【五】塵垢　淮南子、崑山之玉瑱、而塵垢不レ能レ汙也。莊子に、彷二徨乎塵垢之外一。【六】譏訶　蜀志、孟光傳に、光好二公羊春秋一、而譏二訶左

【題義】此詩は熙寧十年十月の作である。王文誥いふ、孔周翰作二於密州一者也、公罷レ密、過二濟南一、和二孔君亮詩一云云と。紀昀いふ、吟レ詩句太率と。

【詩意】病は口より入り、患は口より出づ。口を閉ぢて居れば、事がなくて、身も長く閒である。身が閒であれば、何ぞ長く口を閉ぢざる。殊に天が寒いので、深く手を藏めて居るのがよいのに、詩を吟じたり、字を書いたりして、何の爲に忙はしいことをするぞ。これでは、まだ此世に塵垢を宿すことを免れない。昔、柳子厚はいふ。凡そ人、詞を好み、書に工なるは、皆、病癖である。吾は不幸にして蚤くから、其の二病を得たと。今、我は子厚の二病とする所の詞を好み、書に工みといふことでは譏訶されないで、書と詩とを求められる。我は之に因つて、反つて更に無鹽の醜を刻畫するものである。無鹽は醜婦である。又、昔、庾征西（翼）は少い時分に、王右軍と書名を齊うした。其の荊州に在つた頃、都下の人に書を與へて、小兒輩は家雞を賤しんで、皆逸少（王右軍羲之）の書を學ぶと言つたさうである。書は學ぶに足らない、李太白も杜子美を嘲つて、借問す何に因つて太だ瘦せたる、總て從前詩を作つて苦んだ爲であると。詩は作るに足らない。さて君と相知つてから幾日であるぞ。東風待ち得て、花が開いたかどうか。既に花があり、酒がある。萬事を撥ひ棄てて、復、談ずるなかれ。昔、遺れる諺がある、堯舜は千鍾（鍾は酒を貯へる大壺）孔子は百觚と、百觚の後はまた酒を辭しない。古の賢聖に、酒を飲むことの出來ないものはない。子、何ぞ辭する。

蘇東坡詩集　卷十六

古今體詩　六十三首

送李公恕赴闕　李公恕闕に赴くを送る

君才有如切玉刀。　君の才は玉を切る刀の如きあり、
見之凜凜寒生毛。　之を見れば凜凜として寒毛を生ず。
願隨壯士斬蛟蜃。　願はくは壯士に隨つて蛟蜃を斬らん。
不願腰間纏錦縧。　願はず腰間錦縧に纏はるることを。
用違其才志不展。　用ゐる其の才に違うて志展びず、
坐與胥吏同疲勞。　坐に胥吏と疲勞を同うす。
忽然眉上有黃氣。　忽然として眉上に黃氣あり、
吾君漸欲收英髦。　吾君漸く英髦を收めんと欲す。
立談左右皆動色。　立談すれば左右皆色を動かす、

【字解】【一】李公恕　時に京東轉運判官となり、召されて闕に赴く。【二】切玉刀　古の名刀、列子、湯問篇に周穆王征西戎、西戎獻昆吾之劍、鍊銅赤刃、用之切玉如切泥。東方朔十洲記亦云。漢武故事に、於建章別造華殿、四夷珍寶充之、火浣布、切玉刀、不可勝數。【三】凜凜　潘岳、寡婦賦に、寒凄凄以凜凜。【四】壯士　漢、樊噲傳に、項羽曰、壯士、賜之巵酒。【五】斬蛟蜃　王粲の刀銘に、陸斷犀兕、水截鯨鯢。呂氏春秋に、荆有俠飛

一語徑破千言牢。
我頃分符在東武。
脫略萬事惟嬉遨。
盡壞屏障通內外。
仍呼騎曹爲馬曹。
君爲使者見不問。
反更對飲持雙螯。
酒酣箕坐語驚衆。
雜以嘲諷窮詩騷。
世上小兒多忌諱。
獨能容我眞賢豪。
爲我買田臨汶水。
逝將歸去誅蓬蒿。
安能終老塵土下。

一語徑に破る千言の牢きを。
我頃符を分つて東武に在り、
萬事を脫略して惟嬉遨す。
盡く屏障を壞つて內外を通じ、
仍つて騎曹を呼んで馬曹と爲す。
君使者と爲つて見て問はず、
反つて更に對飲して雙螯を持す。
酒酣にして箕坐して語衆を驚かし、
雜ふるに嘲諷を以てして詩騷を窮む。
世上の小兒は忌諱多きに、
獨り能く我を容す眞に賢豪。
我が爲に田を買うて汶水に臨み、
逝いて將に歸り去て蓬蒿を誅せんとす。
安んぞ能く老を塵土の下に終へ、

俯仰隨人如桔槔。

俯仰人に隨ふこと桔槔の如くならん。

分レ符。王注に、漢文帝爲ニ竹使符一、與ニ太守一分レ之。【一三】壞ニ屏障一云云。晉、阮籍傳に、文帝輔レ政、籍嘗從容言ニ於帝一曰、籍曾遊ニ東平一、樂ニ其風土一、帝大悅、卽拜ニ東平相一、籍乘レ驢到レ郡、壞ニ府舍屏障一、使ニ內外相望一、法令淸簡、旬日而還。【一五】馬曹。晉書に、王徽之爲ニ桓沖騎兵參軍一、使ニ沖問一、卿署何曹、對曰、似ニ是馬曹一、又問、管幾馬一、曰不レ知レ馬、何由知レ數、又問、馬比死多少、曰、未レ知レ生、焉知レ死。【一六】對飲。曹參の吏舍歌呼の意を用ふ。吏舍歌呼のこと、前にも出づ。【一七】持ニ雙螯一。晉、畢卓、字は茂世、嘗て曰く、酒を得て數百斛船に滿たし、左手に酒盃を持し、右手に蟹螯を持し、酒船中に拍浮せば、便ち一生を了するに足ると。【一八】酒酣。史記、漢、高祖紀に、酒酣擊レ筑。【一九】箕坐。前漢、張耳傳に、高祖箕踞罵詈、甚慢レ之。顏師古の注にいふ、箕踞者、謂下曲ニ兩脚一、其形如レ箕。漢、陸賈傳に、尉佗箕踞見レ賈。【二〇】窮ニ詩騷一。柳子厚、寄ニ韋珩一詩に、君今屹屹又竄逐、詞賦已復窮ニ詩騷一。【二一】世上小兒。杜子美の醉歌行に、世上兒子徒紛紛。紛紛は多い貌。【二二】忌諱。老子に、天下多ニ忌諱一、而民彌貧。【二三】賢豪。杜子美、述古詩に、相率除ニ蓬蒿一。【二四】汶水。山東に在るもの。運河の上源、四川に在るもの、汶江。【二五】誅ニ蓬蒿一。千言牢。韓退之の淮西碑に、萬口附和、并爲ニ一談一、牢不レ可レ破。【二六】桔槔。莊子、天運篇に、子獨不レ見ニ夫桔槔者一乎、引レ之卽俯、舍レ之則仰。

【題義】此詩は元豐元年正月の作。李公恕が召されて闕に赴くを送つたのである。東坡は時に尙書祠部員外郎直史館權知徐州軍政事の任に在つた。紀昀いふ、一應英銳、鋒不レ可レ當、賴ニ骨力蒼健一、故不レ覺ニ其剽一と。

【詩意】昆吾の劍は、鍊鋼赤刃で、之を用ひて玉を切るに、恰も泥を切るがやうであると傳ふ。君の才幹は玉を切る刀の如くで、凜凜として毛髮を竪たしめる。どうか其の才幹は古の佽飛のやうな壯士に隨つて蛟蜃を斬るやうな才幹であつて欲しい。荆の佽飛は、寶劍を江畔に得て、中流を渡ると、兩

得ニ寶劍於江干一、渡ニ中流一、兩蛟夾レ舟、佽飛拔レ劍赴レ江、刺レ蛟殺レ之。王注にいふ、荆佽飛・滕臺滅明・周處・鄧遐・許旌陽、皆、古斬レ蛟者と。【六】纏ニ錦縑一。杜子美の大食寶刀詩に、蒼水使者捫ニ赤縑一。縑は馬の腹帶。【七】用違ニ其才一。晉書、殷浩傳に、桓溫每輕レ浩、嘗謂ニ郗超一曰、浩有レ德有レ言、向使レ作ニ令僕一、(尙書令と僕射)足ニ以儀ニ刑百揆一、朝廷用違ニ其才一耳。唐書、房琯贊曰、用違レ所長。【八】胥吏。周禮に、府史胥徒。注にいふ、胥吏建長、市中給ニ繇役一者と。【九】眉上有ニ黃氣一。韓退之の郾城晩飲詩に、城上赤雲呈ニ勝氣一、眉間黃色見ニ歸期一。玉管照神書に、黃色喜徵とある。【一〇】英髦。英俊といふに同じ、髦は少年の髮形。王韜之の詩に、美哉茲士、世載ニ英髦一。【一一】動色。後漢書、班固傳に、君臣動レ色。【一二】

蛟が舟を繞る。佽飛は劍を拔いて江に赴き蛟を刺して之を殺した。かの才を運らして腰間が錦の縧に纏はれることを願はない。君の今、用ひられるのは、其の長ぜる所の才と違うて居る。(適材が適處に置かれない。)從つて君の平生の志が少しも展びないで、胥吏と伍して、疲勞を同うして居る。然るに忽ち眉上に黃氣が生じた。黃色は喜の徵である。それは、我が君王には、だんだん英俊の士を收められようとすることである。君が立談すれば、左右のもの皆、色を動かす。そして君の一語は、直に千言の牢をも打ち破る。さて、漢の文帝は竹使符を爲つて太守と之を分つたが、今、我も此頃、符を分つて權知徐州軍政事となつて、徐州に在る。併し萬事を脫略して、ただ嬉遊を事として居る。昔、阮籍は東平の相に拜せられ、驢に乘つて郡に到ると、先づ府舍屏障を壞ち、內外をして相望ましめ、法令をば淸簡にし、旬日にして還つた。今、我も盡く屏障を去つて、內外を通じ、騎曹を馬曹と呼んで居る。晉の王徽之は、桓沖の騎兵參軍使であつたが、桓沖が卿の署は何の曹かと問ふと、徽之は馬曹に似たりと對ふ。又、問ふ、然らば幾つの馬を管するかと、曰く、馬を知らないから、其の數を知らないと。又、問ふ、馬は比どれ程死ぬる。曰く、未だ生を知らない、焉んぞ死を知らんと。ここは此の故事に據つたのである。さて君は使者となつて、巡り見られるも役所の事を問はないで、反つて更に對飲するは、漢の曹參が吏舍の役人たちの酒を飲んで歌呼するに任せて居ると同じである。又、雙螯を持するのは、晉の畢卓が左手に酒杯を持ち、右手に蟹螯を持ちて、酒船に拍浮せば、一生を了するに足ると言つたのと同じてある。酒酣にして足を投げ出し、大言を發して衆を驚かし、嘲諷を雜へて詩騷を窮める。世上の兒子は、徒に紛紛として、老子の所謂忌諱の多いものであるのに、(紀昀いふ、世上小兒多忌諱と。)君の獨り、能く我を容されるのは、眞に賢豪である。我が爲に田を買つて、汶水に臨ましめば、我は將に歸つて之に居り、蓬蒿を除いて、遊息の處とする。安んぞ能く塵土の下に老いて、俯仰、人に隨ひ、之を引けば俯し、之を舍てると仰ぐこと桔槔の如くなるを願はうぞ。之を送詩とする。

張寺丞の益齋

張子作齋舍。而以益爲名。
吾聞諸夫子。求益非速成。
譬如遠遊客。日夜事征行。
今年適燕薊。明年走蠻荆。
東觀盡滄海。西涉渭與涇。
歸來閉戶坐。八方在軒庭。
又如學醫人。識病由飽更。

張寺丞の益齋

張子は齋舍を作り、而して益を以て名となす。
吾諸を夫子に聞く、益を求むるは速に成るにあらず。
譬へば遠遊の客の如し、日夜征行を事とす。
今年燕薊に適き、明年蠻荆に走る。
東に觀て滄海を盡し、西に涉る渭と涇と。
歸り來つて戶を閉ぢて坐し、八方軒庭に在り。
又醫を學ぶ人の如し、病を識るは飽更に由る。

(一〇)風雨晦明淫。跛躄瘖聾盲。
(一一)虛實在其脈。(一二)靜躁在其情。
(一四)榮枯在其色。壽夭在其形。
(一五)苟能閱千人。(一六)望見知死生。
(一七)爲學務日益。此言當自程。
爲道貴日損。此理在既盈。
願言書此詩。以爲益齋銘。

風雨晦明淫ぎ、跛躄瘖聾盲。
虛實は其の脈に在り、靜躁は其の情に在り。
榮枯は其の色に在り、壽夭は其の形に在り。
苟くも能く千人を閱すれば、望見して死生を知る。
學を爲むる日に益するを務む、此言は當に自ら程るべし。
道を爲むる日に損するを貴ぶ、此理は既に盈つるに在り。
願はくは言に此詩を書して、以て益齋の銘と爲さん。

【字解】【一】張寺丞　名は恕、字は忠甫。父は樂全先生文定公、字は安道。東坡、嘗て忠甫の爲に字說を作る。本集、張忠甫字說にいふ、張厚之、忠甫、樂全先生子也、先生名レ之曰レ恕、軾推二先生之意一、字レ之曰二厚之一、又曰二忠甫一。天祐の間、將作監丞に擢んでらる。文定、翰林に在る日、英宗立ち、神宗、太子となり、手札して直祕閣に除せられ、齊州に知たり。【二】齋舍　讀書の室、韋應物の詩に、蕭條齋舍秋。【三】求レ益非二速成一　論語、憲問篇に、非二求レ益者一也、欲二速成一者也。【四】燕薊　薊州は漁陽郡治たり。【五】蠻荊　毛詩に蠻荊來威。同じく小雅に、蠢爾蠻荊、大邦爲レ讐。【六】滄海　李商隱の詩に、滄海月明珠有レ淚、藍田日暖玉生レ煙。【七】渭與レ涇　書、禹貢に、涇屬二渭汭一。疏にいふ、涇水出二安定涇陽縣西岸頭山一、東南至二馮翊陽陵縣一入レ渭と。【八】八方在二軒庭一　前漢書、律歷志に、監二八方一被二八荒一。【九】識レ病由二飽更一　劉禹錫の偶作詩に、藥性病多諳。陳與義の詩に、海內艱難各飽更。【一〇】風雨晦明淫　左傳、昭公元年に、天有二六氣一、淫生二六疾一、六氣曰二陰陽風雨晦明一也、分爲二四時一、序爲二五節一、過則爲レ菑、陰淫寒疾、陽淫熱疾、風淫末疾、雨淫腹疾、晦淫惑疾、明淫心疾。【一一】跛躄瘖聾盲　禮記に、瘖聾跛躄、斷者侏儒。【一二】虛實在二其脈一　虛は氣血の足らざるをいふ。傷寒論に、脈、出疾入遲、名曰二內虛外實一也、出遲入疾、名曰二內實外虛一也。【一三】靜躁在二其情一　老子に、躁勝レ寒、靜勝レ熱。【一四】榮枯　李賀の詩に、榮枯遞轉急如レ箭。【一五】閱二千人一　唐、房玄齡傳に、高孝基曰、僕閱レ人多矣、未レ見二此郎者一。【一六】望見知二死生一　史記、扁鵲傳に、扁鵲望二見桓侯一而退走、桓侯使二人問レ故、扁鵲曰、疾在二骨髓一、雖二司命一無二奈レ之何一、臣是以無レ請也、後五日、桓侯體病遂死。【一七】爲レ學務二日益一云云　老子爲レ學日益、爲レ道日損。

【題義】張忠甫が讀書の室である益齋を賦したのである。紀昀いふ、香山門徑、別自一格、自是佳處、而不レ可レ立レ制、若從二此種一入手、則性理諸詩矣と。

與二先生引用一、各自一解と。

【詩意】張忠甫には新に讀書の室を作つて、益齋と名けたが、字面を論語に取つたのである。卽ち論語の闕黨の童子命を將ふ。或、之を問うて曰く、益する者かと。(其の學業が進み益する所あつて、孔子が之をして命を取次ぐことに從はしめたかと疑ひ問ふ)子曰く、吾、其の位に居るを見る。其の先生と竝び行くを見る。益を求むるものにあらず。速に成らんことを欲するものなりとあるに據つたのである。益を求めるは、速成を欲しない。譬へば、遠遊の客の如くで、日夜、步を進めて休まない。今年は北に遊んで、燕薊に適き、明年は南の方蠻荊に走らうとする。又、東に行いて滄海に到り、西は遠く渭水・涇水を涉る。既に四方の人となるも、復、故山に歸り來る。戶を閉ぢて、一室に坐し、臥遊をすると、八方が軒庭に在る。又、譬へば醫を學ぶ人の如くで、病症を知るのは、飽くまでに食ひ、多く事を更るに在る。劉禹錫の詩にも、藥性病多諳とある。醫書に、脈の出づる疾く、入

る遲きを名けて内虛外實といふ。出づる遲く、入る疾きを名けて内實外虛といふ。そして、虛實は氣の作用に在る。陰陽風雨晦明の六氣が淫ぎると、六疾を生ずる。又、跛や躄や瘖、聾、盲、皆陰陽虛實の作用に外ならない。躁は寒に勝ち、靜は熱に勝つといふが、靜躁は其の情に在る。そして榮枯は遞轉して、其の色に見はれ、或は壽となり、或は夭となる。苟も千人を閱して、此の虛實の出入を明かにせば、望見して死生を知ることが出來る。學問の道も同じで、學を爲むるは、日に新にして、益することを務む。道を爲むるは日に損するに在る。學を爲むるものは、未だ知らないことを知り、未だ習はないことを習つて、日に益せんことを欲する。故に學に沒頭すると、自ら知見が外に馳せて、内修の工夫を缺く。道を爲むるものは、之に反し、枝葉を去つて、直に本根を探り、所謂一を求める。故に學びて知るを止め、習ひて熟するを捨て、日に損する、以て自然の大道に入る。要するに、此理は既に盈つるに在る。願はくは、ここに此詩を書して、益齋の銘としよう。

春菜

(一)蔓菁宿根已生葉。
(二)韭芽戴土拳如蕨。
(四)爛蒸香薺白魚肥。
(七)碎點青(八)蒿涼餅滑。
宿酒初消春睡起。
(九)細履幽畦掇芳辣。
(一〇)茵陳甘菊不負渠。
(一一)鱠縷堆盤纖手抹。
北方苦寒今未已。
(一二)雪底波稜如鐵甲。
豈如吾蜀富冬蔬。
(一三)霜葉露芽寒更茁。
(一四)久抛松菊猶細事。
苦筍江豚那忍說。
(一五)明年投劾徑須歸。
(一六)莫待齒搖幷髮脫。

春菜

蔓菁の宿根已に葉を生じ、
韭は土を戴いて拳蕨の如し。
香薺を爛蒸して白魚肥え、
青蒿を碎點して涼餅滑かなり。
宿酒初めて消して春睡より起き、
細に幽畦を履んで芳辣を掇る。
茵陳甘菊渠に負かず、
鱠縷盤に堆く纖手抹す。
北方の苦寒今未だ已まず、
雪底の波稜鐵甲の如し。
豈吾蜀の冬蔬に富むに如かんや、
霜葉露芽寒更に茁。
久しく松菊を抛つは猶ほ細事、
苦筍江豚那ぞ說くに忍びんや。
明年劾を投じ徑に須らく歸るべし、
莫待齒の搖き幷に髮の脫するを待つ莫れ。

【字解】【一】蔓菁　蕪菁に同じ。禮、坊記の注にいふ、葑、蔓菁也、陳宋之間、謂之葑一。陸璣いふ、葑、蕪菁、幽州人謂之芥一。方言に、豐、蔓菁也、陳楚謂之蘴、齊魯謂之蕘、關西謂之蕪菁、趙魏謂之大芥一。其實一物也。劉夢得の嘉話錄に、諸葛亮所レ止、令軍士獨種蔓菁一者、取其才出レ甲可生啟一也、葉舒可煮食一也、久居則隨以滋長三也、棄去不レ惜四也、回則易尋而采レ之五也、冬有レ根可剸食一六也、比諸蔬一、其利甚溥、至レ今、蜀人呼爲諸葛菜一。【二】韭芽　南史、周顒傳に、文惠太子問レ顒、菜食何味最勝、顒曰、春初早韭、秋末晚菘。本草に、韭根名韭黃一韭之美在レ黃、乃未レ出レ土者、豪貴皆珍レ之。【三】如蕨　李太白の詩に、不レ知舊行徑、初拳幾枝蕨。【四】爛蒸　唐の盧懷慎、相となる。客を召して食せしむ。曰く、爛蒸去レ毛、莫レ拗三折項一と。客疑ふ、是れ鵝鴨ならんと、已にして粟米飯・葫蘆一枚を下すのみ。【五】香薺　爾雅翼に、薺菜最甘、故稱三其甘如レ薺一。又、其枝葉細靡、通謂三之靡一。月令に、孟夏之月、靡草死。【六】青蒿　本草に、菰、一名青蒿。【七】細履　杜牧之の晚晴賦に、雨晴秋容新

沐兮、折三繞國一而細履。【八】幽畦　急就篇の注にいふ、田區謂三之畦一、今之種三稻及菜一者取レ名と。【九】茵陳　本草に、茵陳、蒿類也、經レ冬不レ死、更因三舊苗一而生。【一〇】甘菊　菊に二種あり、一種は紫莖にして味甘く、葉は羹と作すべきものを眞菊となす。【一一】纖手　杜子美が立春の詩に、菜傳三纖手一送三青絲一。【一二】波稜　本草に、波稜、一名赤根菜、八九月種者、可レ備三冬食一。劉禹錫の嘉話錄に、菜之波稜者、本、西竺國僧、自三波稜國一、將三其子一來、如下苜蓿因三張騫一而至上也。【一三】茁　生長する貌。孟子、萬章篇に、牛羊茁壯長而已矣。【一四】江豚　文選、江賦注に、南越志を引き、江豚似レ豬。【一五】投劾　官を棄つるをいふ。後漢書、孔融傳に、融卽奪レ謁還レ府、投レ劾而去。【一六】齒搖、髮脫　韓退之の祭三十二郎一文に、吾年未三四十一而視茫茫、而髮蒼蒼、而齒牙動搖、自三今年一來、蒼蒼者、或化而爲レ白矣、動搖者、或脫而落矣。又、齒落詩に、餘在三皆動搖一、盡落應三始止一。

【題義】菜、之を蔬といふ。蕪菁は青甲嫩く、香韮は翠莖長し。此詩は春の蔬菜を賦したのである。紀昀にいふ、駿利無三冗漫之氣一と。又いふ。勢須下生三一波一作上結、不レ然卽可レ不レ作と。

【詩意】蕪菁の宿根には已に葉を生ずる。宿根とは、冬、莖や葉やが枯れて、根のみ生き殘り、翌年に萌芽するものをいふ。韮の芽は土を戴いて、拳の形をなして居る。蕨のやうである。其の未だ土を出ないで、韮の根の黃なる所をば最も美味とする。杜子美の詩にも、夜雨翦三春韮一とある。又、香薺をよく蒸して食に供し、白魚も肥える。青い蒿を碎いて點し、滑かな涼餅を製造する。宿酒も醒めて、春眠より起き、細に幽畦を步いて廻り、香の强い花を掇る、茵陳、(蒿の類)や、甘菊も、渠に負かないで、或は舊苗に因つて生ずるもあり、或は紫の莖もある。味も甘く、葉は羹とすることが出來る。又、縷のやうな鱠は、盤に堆く、纖手で之を一抹する。(王文誥いふ、自三首句一至レ此具三數蜀中春菜、意謂、江北苦寒、春時、菜不レ可レ食、若如三蜀中冬蔬一、則至レ春且如レ此也、但詩不三裝頭一、凸然而至、讀者、往往不レ喻三其故一、而次公謂、自三北方苦寒句一、至三終篇一、皆懷三鄉里物一、如依三次公解一、則前段春菜、既非三北方苦寒所レ有、又係三道何處物一耶、熟讀當三自知レ之と。)北方の苦寒は、未だ已まない、雪中の赤根菜は鐵甲のやうである。所詮、我が蜀の地の冬の野菜に富めるやうにはゆかない。霜露芽は寒くなつて、更に生長する。久しい間、松や菊を打ち棄てて置いたのは、細事である。苦い筍や江豚、今、何ぞ言ふに忍びんや。思へば故鄉は懷しい。明年にもなれば、我は官を棄てて、直に須らく故山に歸臥すべし。齒の搖くやうになつたり、髮の毛の脫けるやうになつたりする老境を待つまでもなからう。

送三鄭戶曹一　鄭戶曹を送る

遊遍錢塘湖上山、　遊ぶこと遍し錢塘湖上の山、
歸來文字帶芳鮮。　歸り來れば文字芳鮮を帶ぶ。
羸童瘦馬從吾飲。　羸童瘦馬吾が飲に從ふ、
陋巷何人似子賢。　陋巷何人か子が賢に似たる。
公業有田常乏食。　公業に田あるも常に食に乏し、

【字解】【一】鄭戶曹　名は僅。字は彥能、彭城の人。徐州志に、鄭彥能、爲三大名府司戶參軍一、歷三知冠氏・福昌二縣一、有三善政一。宋史に、鄭僅第三進士一、屢遷三龍圖閣陝西轉運使一、進三集賢殿修撰、顯謨閣待制一、改知三寧州一、徙三秦州一、召拜三戶部侍郎一、改三吏部一、知三徐州一、以三顯謨閣學士一卒、

廣文好客竟無氈。廣文客を好むも竟に氈なし。
東歸不趁花時節。東歸趁かず花時の節、
開盡春風誰與妍。春風に開き盡くして誰が與に妍なる。

杭縣。浙江通志に、宋以前之錢塘敍城有四、在紀家橋華嚴寺故址、宋縣治也。【三】 陋巷　論語雍也篇に、一簞食、一瓢飲、在陋巷。【四】 有田常乏食　後漢書に、鄭太、字公業、結交賢豪、家富於財、有田四百頃、而食常不足。【五】 廣文好客竟無氈　唐、鄭虔傳に、玄宗置廣文館、以虔爲博士、故號鄭廣文、在官貧約。杜甫贈以詩曰、才名三十年、坐客寒無氈。晉の吳隱之は虔支尙書となり、竹蓬を以て屛風となし、坐に氈席なきこと三十年、此を引いて虔の貧約をいふ。

【題義】 鄭彥能が大名府の戶曹に赴任するを送つた詩である。紀昀いふ、三四究竟不對、而文非平行、便兩不合格と。

【詩意】 杭州西湖の勝地、孤山の林逋が隱居の處、我は遍く遊覽して歸つた。歸り來れば、文字も梅が香をして、自ら芳鮮を帶びて居る。我が飲に從ふものは、羸れた童子や、瘦せた馬だけである。賢なるかな顏回は、平生食ふ所のものは、一簞の食、飲む所のものは、一瓢の飲、其の上に陋巷（狹くきたない小路）に居つた。今、其の陋巷に在つて、何人か子の賢に似たるものぞ。後漢の鄭太字は公業、家富み、田が四百頃もあつたが、交を賢豪に結び、食が常に足らなかつたといふことである。又廣文館の博士鄭虔は才名三十年、客を好んだが、これは家が貧しうして氈を敷くことも出來なかつたさうである。今、鄭戶曹を送るにつけても、客を好む昔の二鄭のことが思はれる。東歸しても、花の季節に趁かない。花は春風に開き盡くして、一體、誰が與に美しいのであるか。

虔州八境圖八首

南康八境圖者。太守孔君之所作也。君既作石城。卽其城上樓觀臺榭之所見。而作是圖也。東望七閩。南望五嶺。覽羣山之參差。俛章貢之奔流。雲烟出沒。草木蕃麗。邑屋相望。雞犬之聲相聞。觀此圖也。可以茫然而思。粲然而笑。慨然而嘆矣。蘇子曰。此南康之一境也。何從而八乎。所自觀之者異也。且子不見夫日乎。其旦如槃。其中如珠。其夕如破璧。此豈三日也哉。苟知夫境之爲八也。則凡寒暑朝夕。雨暘晦冥之異。坐作行立。哀樂喜怒之接於吾目。而感於吾心者。有不可勝數者矣。豈特八乎。如知夫八之出乎一也。則夫四海之外。詼詭譎怪。禹貢之所書。鄒衍之所談。相如之所賦。雖至千萬。未有不一者也。後之君子。必將有感於斯焉。廼作詩八章。題之圖上。

【訓讀】南康八境圖は、太守孔君の作る所なり、君既に石城を作り、其の城上樓觀臺榭の見る所に卽いて、是圖を作るなり。東のかた七閩を望み、南のかた五嶺を望み、羣山の參差を覽、章貢の奔流に俛す。雲烟出沒、草木蕃麗、邑屋相望み、雞犬の聲相聞ゆ。此圖を觀るや、以て茫然として思ひ、粲然として笑ひ、慨然として嘆ずべし。蘇子曰く、此れ南康の一境なり、何に從つて入なるか。自ら之を觀る所のもの異るなり。且子夫の日を見ざるか、(忽出二一喩一甚妙。)其の旦は槃の如く、其の中は珠の如く、其の夕は破璧の如し、此豈三日ならんや。苟もかの境の八たるを知るや、則ち凡そ寒暑朝夕、雨暘晦冥の異、坐作行立、哀樂喜怒の吾目に接して、吾が心に感ずるもの、數ふるに勝ふべからざるものあらん。豈特に八のみならんや。(文勢如二驚濤打レ崖而至一。)如し夫の八の一に出づるを知るや、則ち夫の四海の外、詼詭譎怪、禹貢の書する所、鄒衍の談ずる所、相如の賦する所、千萬に至ると雖も、未だ一ならざるものあらず。(圓活脫灑筆端有レ舌、自是天仙口吻。)後の君子、必ず將に斯に感ずるあらんとす。廼ち詩八章を作りて之を圖上に題す。

【字解】【一】虔州　今、江西贛南道に屬す。漢には章貢といひ、豫章郡に屬す。晉に至つて南康となす。隋・唐の時は虔州に屬す。【二】南康　宋は又、南康軍を置く、今の星子縣は其の舊治、卽ち周濂溪・朱元晦、皆、嘗て守となりしところ、虔州南康と同じからず。南康軍は、元の時路に改め、明は府となし、淸は之に因り、民國となつて廢す。【三】孔君　孔宗翰、字は周翰、進士及第し、陝・揚・洪・兗諸州を歷、皆、治を以て聞ゆ。哲宗の時、刑部侍郎に累遷し、寶文閣待制を以て徐州に知たり。未だ拜せずして卒す。前にも出づ。【四】作二石城一　宋史、孔宗翰傳に、知二虔州一、城濱二章・貢兩江一、鑿爲レ水竇、伐レ石爲レ址、冶レ鐵鎖レ之、由レ是屹然、詔書褒美。【五】樓觀臺榭　北史、宇文愷傳に、殿門、四面門、八觀とある。殿の門は、東西南北四面にありて、門毎に八觀ある。觀は門上の二階。爾雅に、有レ木者、謂二之榭一、土を高く築きたるを臺といひ、木を用ひたるを榭といふ。【六】七閩　東南方の閩・七種ある。周禮、職方氏疏に、叔熊避二難於濮蠻一、隨二其俗一、後分二七種一、故謂二之七閩一と。【七】五嶺　鄧德明、南康記に、大庾嶺、一也、桂陽騎田嶺、二也、九眞都龐嶺、三也、臨賀桃渚嶺、四也、始安越城嶺、五也。【八】參差　長短齊しからざるをいふ。詩、周南、參差荇菜、左右流レ之。【九】章貢　二水の名。章水は江西贛江の西源である。源を聶都山に發し、東北に流れ、大庾・南康を經、貢水と合流して贛江となる。【一〇】雨暘　雨天と晴天、書、洪範に、曰雨、曰暘、曰燠、曰寒。【一一】禹貢　尙書の篇名。【一二】鄒衍　臨淄人。燕の昭王及び惠王に事ふ。時に鄒忌・鄒奭と共に三鄒と稱せらる。【一三】相如　漢の司馬相如、字は長卿、成都の人。

坐看奔湍遶二石樓一。　坐ら看る奔湍の石樓を遶るを、
使君高會百無レ憂。　使君高會百も憂なし。
三犀竊鄙秦太守。　三犀竊に鄙む秦の太守、
八詠聊同沈隱侯。　八詠聊か同うす沈隱侯に。

【字解】【一】奔湍　王炎の詩に轉レ柁涉二奔湍一、支レ筇入二幽塢一。【二】高會　漢、項籍傳に、宋義遣二其子襄一相レ齊、身送二之無鹽一、飲酒高會。【三】三犀　華陽國志に、秦孝文王時、李冰爲二蜀守一、作二石犀牛一、以壓二水精一、穿二石犀谿於江南岸一。石犀渠は、四川の境に在る。卽ち郫江。相傳ふ、秦の李冰、江を導いて渠を穿ち、石犀五を作り、以て水を壓す、因つて名く。【四】八詠　婺州圖經に、八詠樓、在二州南一、碑、宋、沈約文。集中に東陽八詠あり。【五】沈隱侯　南史沈約傳に、字、休文、吳興武康人、謚曰レ隱。

【題義】此の八首は元豐元年正月の作である。此首は開端、章貢臺は、乃ち章・貢二水の合流して贛江となる所に在る。東晉の永和五年、太守高琰、郡城を二水の間に置く、南康郡治である。紀昀い

ふ。此八首起結、與二洋州三十首一同法と。

【詩意】石城は章水・貢水に濱して居る。城上の樓觀からは、坐らにして二水の奔湍が石樓を遶つて居るのを看る。太守孔君は政が閒であつて、しばしば高會を催され、游覽を肆にする。心に少しも憂がない。かの蜀の太守李冰は、江水を導いて、渠を穿ち、石犀五個を作つて水精を壓したといふことであるが、汲汲として心をここに費やすのは、竊に之を鄙しむのである。かの沈約が八詠樓の碑文を書いて名高いやうに、此の虔州にも立派な文字を見るのである。

濤頭寂寞打レ城還。
章貢臺前暮靄寒。
倦客登臨無限思。
孤雲落日是長安。

【字解】【一】濤頭寂寞　劉禹錫が石頭城の詩に、山圍二故國一周遭在、潮打二空城一寂寞回。【二】章貢臺　趙次公いふ、章貢臺、乃章・貢二水合流爲レ贛、東晉、永和五年、太守高琰、置二郡城於二水之間一、南康郡治焉。南康記に、贛縣東南有レ臺、方數丈、有二自然霞一、如二屋形一。太平寰宇記に、貢水源、出二雩都縣潭樂山一、章水源、出二大庾縣聶都山一、至二贛縣一、合流爲二贛水一。趙抃の章貢臺記略にいふ、水別二二派一、合二流城郭一、於レ文爲レ贛。予、嘉祐六年、出守、閒爲二游觀一、治二西北隅一、有二野景亭舊址一、於レ是復臺二其上一、以新二其名一、爲二章貢一、蓋不レ失レ實也。【三】孤雲落日　李太白の詩に、長空去鳥沒、落日孤雲邊。

【詩意】劉禹錫の詩に、潮は空城を打つて寂寞として回るとあるが、此處にも、濤は寂しく、往返して居る。永和五年に、太守高琰は、郡城を章・貢二水の間に置いたが、郡城の東南にある臺が所謂章貢臺で、臺前の暮靄を眺めると、寂しく感せられる。旅に倦んだ客は此に登臨して限りなき思ひに沈むものがある。それは、李太白が詩に、長空去鳥沒し、落日孤雲の邊とある、其の孤雲落日のあたりが是れ長安と思ふと、何となく情に堪へない。（紀昀は此詩を評して、純是唐音と言つた。）

白鵲樓前翠作レ堆。
縈雲嶺路若爲開。
故人應レ在二千山外一。
不レ寄二梅花遠信一來。

【字解】【一】白鵲　贛州志に、八景臺在二郡治東北一、下瞰二奔流一、白鵲樓在二八景臺北一。趙清獻記にいふ、望闕鬱孤、軒二豁於前阜一、蓋白鵲瞰一臨左右一。【二】縈雲嶺路云云　大庾嶺梅、南枝落北枝開、寒暖之候異也。嶺在二虔之西南一。合注に、嶺梅見二白孔六帖一。【三】梅花遠信云云　荊州記にいふ、陸凱、與二范曄一相善、自二江南一寄二梅一枝一、詣二長安一與レ曄、并贈レ詩曰、折レ花逢二驛使一、寄與隴頭人、江南無所有。聊贈一枝春。

【詩意】八景臺は郡治の東北に在つて、下に奔流を瞰る。白鵲樓は八景臺の北に在る。大庾嶺の梅は恰も雲を縈ふが如く、そして南枝が落ちて北枝が開く、これは寒暖の相異である。嶺は虔州の西南にある。遙かに思ふ故人は千山の外にあるべしと。既に故人は千里の外に在る、そして杳として消息が

なく、梅花遠信を寄せても來ない。昔、陸凱は范曄と親しかつたので、遠く江南から、はるばる梅一枝を長安に寄せ、新詩をも添へた。其の詩にいふ、江南無レ所レ有、聊贈一枝春といつた。今は此の風流がないのを遺憾とする。（紀昀は此詩を評して、忽入二情語一、便覺二生動一と言つた。）

(一)朱樓深處日微明。
(二)皁蓋歸時酒半醒。
(三)薄暮漁樵人去盡。
碧溪青嶂遶(四)螺亭。

【詩意】朱樓の深い處、日はまだほの明るい。夕陽の沈まうとする時である。貴人の乘る皁繒覆蓋の車が歸る時分、車中の人は酒が半ばは醒めた。夕暮に、漁人も樵人も去つてしまひ、碧い溪、青い嶂は、南康郡の螺亭を遶つて居る。（紀昀は此詩を評して從二無レ人處一著レ筆、蹊徑不レ俗と言つて居る。）

【餘錄】師民瞻いふ、謝瑞、孑然一身、釣二於江上一、獲二一巨螺一、其大如レ斗、置二之於家一、有二好女子一、具二饌於室一、執而問レ焉、女曰、我乃螺女、水神也、天帝憫二君之孤一、遣爲具レ食、君已悉、我亦當レ去、乃留二空螺一曰、君有レ所レ求、當レ取二於螺中一、後瑞、有レ乏探レ螺、皆如レ意、傳二數世一猶在、號レ江曰二螺女江一、洲曰二螺女洲一、廟曰二螺女廟一、其地在二虔州西南一と。

【字解】【一】朱樓　朱閣といふに同じ。後漢書、馮衍傳に、伏二朱樓一而四望兮。【二】皁蓋　漢の制。千石以上は皁繒覆蓋を用ふ。後漢書に、中二千石、二千石、皆皁蓋、朱兩幡。【三】薄暮　楚辭、屈原天問に、薄暮雷電歸何憂。【四】螺亭　述異記に、螺亭在二南康郡一、昔有二貞女一、採レ螺爲レ業、曾宿二此亭一、螺食二其肉一、故號二螺亭一。

使君那暇日(一)參禪。
一望(二)叢林一悵(三)然。
成佛莫(四)教二靈運後一。
著レ鞭從(五)使二祖生先一。

南虔記に、龔公山在二城北一、今爲二寶華寺一、有二馬祖遺迹一。江西奮志に、馬祖巖在二贛州城東五里一。庭事苑に、譬如二大樹叢叢一、故僧聚處曰二叢林一。大莊嚴論に、如是衆生者、乃勝智叢林、一切諸善行、運集在二其中一。【三】悵然　李太白の詩に、停レ棹悵然憶二遠人一。【四】教二靈運後一　南史、謝靈運傳に、會稽太守孟顗、事レ佛精勤、而爲二謝靈運一所レ輕、嘗謂レ顗曰、得レ道、應レ須二慧業一、丈人生レ天、當レ在二靈運前一、成佛必在二靈運後一。【五】使二祖生先一　晉書、劉琨傳に、劉琨爲二并州刺史一、與二范陽祖逖一爲友、聞二逖被レ用、與二親故書一曰、吾枕レ戈待レ旦、志レ梟二逆虜一、常恐二祖生先レ吾著レ鞭。

【詩意】太守の孔周翰には、何の暇があつて、毎日のやうに、禪の修道をなさつて居られるのか。試みに僧徒の聚る處の叢林を一望すると、悵然としてなげかれる。昔、會稽の太守孟顗は、佛に事へる精勤であつたが、謝靈運に輕んぜられた。靈運は嘗て顗に謂つていふやう、天に生れるは當に靈運の前に在るべく、成佛するのは、必ず靈運の後に在らんと。成佛するに、靈運をして後たらしめてはな

らない。又、昔、劉琨は祖逖と友であつたが、逖が用ひられたと聞き、親故に書を與へて、吾は戈を枕にして旦を待つ、逆虜を梟するを志して居る。常に祖生が吾に先だつて鞭を著けることを恐れると言つた。今我は祖生をして先鞭を著けるに任せる。（紀昀は此詩を評していふ、此則純是宋格、語亦少レ味と。）

却從塵外望塵中。
無限樓臺烟雨濛。
山水照人迷向背。
只尋孤塔認西東。

【字解】【一】塵外　亭の名。虔州志に、馬祖巖上、有二馬禪關及雲端・駒巖・一戀・塵外四亭一。【二】樓臺烟雨濛　杜牧之の江南春詞に、南朝四百八十寺、多少樓臺烟雨中。詩、豳風に、零雨其濛。【三】迷二向背一　唐、皇甫冉の雪の詩に、山川迷二向背一、風霧失二旌旗一。【四】認二西東一　歐陽文忠公詩に、山浦轉レ帆迷二向背一、夜江看レ斗辨二西東一。

【詩意】却つて虔州、馬祖巖の塵外亭から、塵中を望見すると、數限り無い樓臺は、烟雨に籠められて薄濛い。又、山水は人を照らして向背を迷はして居るから、人はただ孤塔を尋ねて西東を認めるのである。（紀昀は此詩を評して實景寫來如レ話と言つて居る。）

【餘錄】釋氏稽古略に、馬祖於二貞元中一示寂、元和八年、賜二謚大寂禪師一、塔曰二大莊嚴之塔一。趙與㬎の娛老堂詩話に、歐陽文忠公詩云、山浦轉レ帆迷二向背一、夜江看レ斗辨二西東一。東坡亦云、山水照レ人迷二向背一、只尋二孤塔一認二西東一。身遊二山水間一、果有二茲理一。二公可レ謂下善二于形容一者上矣。

雲烟縹緲鬱孤臺。
積翠浮空雨半開。
想見之罘觀海市。
絳宮明滅是蓬萊。

【字解】【一】縹緲　李太白の詩に、參差遠天際、縹緲晴霞外。【二】鬱孤臺　江西、贛縣治西南に在る。唐の郡守李勉、登臨して北望す。故に望闕と名く。宋の郡守曾鞏、二臺を增築す、南を鬱孤と爲し、北を望闕と爲す。趙抃、蘇軾皆、詩あり。名勝志に、鬱孤臺、一名賀闕山、在二府治麗譙坤維百步一、隆起鬱然孤峙、故名、唐、李勉爲二刺史一、更二名望闕一、按趙清獻記云、望闕・鬱孤軒、轄於前一、乃二臺名、曾能始謂レ更二名望闕一者誤也。【三】積翠　顏延年の詩に、積翠亦蔥芊、注にいふ、松柏重布云二積翠一。【四】之罘觀二海市一　王注に之罘山、在二登州牟平縣中一、時時有二雲氣、如二宮室、臺觀、城堞、人物、車馬、冠蓋一、歷歷可レ見、謂二之海市一。史記、天官書に、海傍蜃氣象二樓臺一、廣野氣成二宮闕一。漢、郊祀志に、八神、五曰二陽主一、祠二之罘山一。史記、始皇二十九年、登二之罘一、刊レ石紀レ功。【五】絳宮　裴瀍の詩に、神兵出二絳宮一。

【詩意】雲烟は縹緲として遠くかすかに、鬱孤臺は鬱然として、孤峙して居る。積翠は空に浮んで、雨は半ば開けた。人をして之罘山の海市を想はしめる。之罘山は、登州牟平縣中に在る山で、時時雲氣が浮び、宮室があり、臺觀があり、城堞も人物も車馬も冠蓋も歷歷として見えることがある。そして遙か彼方に絳宮の見えつ隱れつして居るのは是れ蓬萊宮である。（紀昀いふ、此首、字句鮮華、而中無二

一物一、所謂金二玉其外一、而敗二絮其中一者と。)

回峰亂嶂鬱參差。
雲外高人世得レ知。
誰向二空山一弄二明月一。
山中木客解吟レ詩。

回峰亂嶂鬱として參差、
雲外高人世知るを得。
誰か空山に向つて明月を弄する、
山中の木客は解く詩を吟ず。

【字解】【一】鬱參差　劉禹錫の詩に、雙檜蒼然古貌奇、含レ煙吐レ霧鬱參差。參差は、長短齊しからざる貌、詩、周南に、參差荇菜、左右流レ之。【三】山中木客　南康記に、贛縣東南山上有レ蠻、風雨之後、景氣明淨、頗聞二山上鼓吹聲一、卽山都木客吟唱也。合注に、赤雅木客形如二小兒一、行坐衣服不レ異二於人一、好爲二近體詩一、無二烟火塵俗氣一。

【詩意】回峰亂嶂は、煙を含み、霧を吐いて、鬱として參差、高く低く、聳えて居る。さて雲外の高人は、世、知るを得。時に民間に就いて酒を飲み、詩を爲るからである。酒が盡く、君、酤ふなかれ、壺が傾く、我、當に發すべし。城市は囂塵が多いから、山に還つて明月を弄しよう。山中の木客は無風流でない、よく詩を吟ずる。(紀昀いふ、此首確是末章と。王文誥いふ、八境圖敍、與二後作九成臺銘一同一手法、此但論二八境之景物一、尙是空中樓閣、彼則言二韶樂之大全一、能於二無何有中一、發二出九成之樂一、若下實有二其事一者上、然非二心靈敏妙一、未レ易レ臻二此境一也、鑪錘雖レ同、而光燄則異、此由二題境不レ同耳と。)

【餘錄】查愼行いふ、太平寰宇記に、上洛山、在二贛縣南九十里一、山多二木客一、能斫二杉枋一、與レ人交易、以レ木易二人刀釜一。と。趙次公いふ、寰宇記所レ載上洛山多二木客一、乃鬼類也、形似レ人、語亦似レ人、而徐鉉小說載、鄱陽山中有二木客一、自言、秦時、造二阿房宮一、采レ木者也、食二木實一、遂得レ不レ死、時就二民間一、飲レ酒爲レ詩、一章云、酒盡君莫レ酤、壺傾我當レ發、城市多二囂塵一、還レ山弄二明月一、然鄱陽則饒州也、非二虔州事一、豈先生因二虔有二木客一、遂用レ此邪と。

南康江水。歲歲壞レ城。孔君宗翰爲レ守。始作二石城一。至レ今賴レ之。軾爲二膠西守一。孔君實見レ代。臨レ行。出二八境圖一。求二文與詩一。以遺二南康人一。使レ刻二諸石一。其後十七年。軾南遷過レ郡。得遍覽二所謂八境者一。則前詩未レ能レ道二其萬一一也。南康士大夫。相與請二於軾一曰。詩文。昔嘗刻二石。或持以去。今亡矣。願復書而刻レ之。時孔君旣沒。不レ忍違二其請一。紹聖元年。八月十九日。眉山蘇軾書。

南康の江水、歲歲城を壞る。孔君宗翰、守と爲り、始めて石城を作り、今に至るまで之に賴る。軾膠西の守となり、孔君實に代らる。行くに臨んで、八境の圖を出だして、文と詩とを求め、以て南康の人に遺り、諸を石に刻せしむ。其の後、十七年、軾南遷して郡を過ぎ、遍く所謂八境なるものを覽るを得、則ち前詩は未だ其の萬一を道ふ能はざるなり。南康の士大夫相與に軾に請うて曰く、詩文は、昔嘗て石に刻みしも、或は持して以て去り、今は亡し。願はくは復書

して之を刻め。時に孔君既に沒して、其の請に違ふに忍びず。紹聖元年（宋、哲宗の九年、皇紀一七五四年、西暦一〇九四年）八月十九日、眉山の蘇軾書す。

讀孟郊詩二首

夜讀孟郊詩。細字如牛毛。
寒燈照昏花。佳處時一遭。
孤芳擢荒穢。苦語餘詩騷。
水清石鑿鑿。湍激不受篙。
初如食小魚。所得不償勞。
又似煑彭蠡。竟日持空螯。
要當鬬僧清。未足當韓豪。
人生如朝露。日夜火消膏。
何苦將兩耳。聽此寒蟲號。
不如且置之。飲我玉色醪。

孟郊の詩を讀む　二首

夜孟郊の詩を讀む、細字牛毛の如し。
寒燈昏花を照らし、佳處時に一たび遭ふ。
孤芳は荒穢に擢んで、苦語は詩騷を餘す。
水清うして石鑿鑿、湍激して篙を受けず。
初めは小魚を食ふが如く、得る所勞を償はず。
又彭蠡を煑るに似たり、竟日空螯を持す。
要は當に僧清と鬬はすべく、未だ韓豪に當るに足らず。
人生は朝露の如く、日夜火膏を消す。
何を苦しんで兩耳を將て、此寒蟲の號くを聽く。
如かず且らく之を置いて、我に玉色の醪を飲ましめんには。

【字解】【一】孟郊　舊唐書に、孟郊少嘗三于嵩山一、稱二處士一、留守鄭餘慶、辟爲二賓客一、性孤僻寡レ合、韓愈一見、以爲二忘レ形交一、常稱二其字一曰二東野一、與レ之唱和。【二】如二牛毛一　杜子美の述古詩に、秦時任二商鞅一、法令如二牛毛一。【三】寒燈照二昏花一　江總の詩に、寒燈作レ花羞二夜短一、霜雁多情恒結レ伴。杜子美の詩に、岸風翻二夕浪一、舟雪洒二寒燈一。方夔雜興に、醉眼昏花迷二野馬一。【四】時一遭　王文誥いふ、孟郊聞レ角詩に、似レ聞二孤月目一、能說落星心。公極賞レ之、是所謂佳處時一遭也。【五】孤芳　沈約の文に、貞操與二日月一俱懸、孤芳隨二山壑一共遠。紀昀いふ、孤芳五字、寫二盡東野一。【六】苦語　韓退之の憶昨行に、危辭苦語感二我耳一。【七】水清　古樂府、艷歌行に、水清石自見。紀昀いふ、水清十字、亦似二東野一、と。【八】石鑿鑿　鮮明なる貌。詩、唐風に、揭之水、白石鑿鑿。【九】彭蠡　王注に、似レ蟹而小者。郭璞、爾雅注に、蟛蜞、蝤蛑也。本草に、蟹之最小者、名二蟛蜞一、音越、吳人謂爲二彭蠡一。【一〇】竟日　晉書、謝安傳に、歎笑竟レ日。【一一】鬬二僧清一　王注に、僧清、指レ如二賈島一者上也、島初爲レ僧、名二無本一、詩才與二郊齊一名。或云、鬬、九僧之徒、亦是也。唐書にいふ、韓愈一見二孟郊一、爲二忘レ形交一。賈島亦、韓門弟子、島初爲二浮屠一、皆附二愈傳一。【一二】未レ足レ當二韓豪一　韓退之與レ郊聯句、郊不レ及レ韓遠甚。【一三】人生如二朝露一　沈約の詩に、朝露待レ日晞。【一四】火消レ膏　漢、董仲舒傳に、積惡在レ身、猶二火之銷レ膏、而人不レ見也。【一五】寒蟲號　本草に、曷旦、一名寒號蟲。爾雅注に、寒號、夜鳴求レ旦之鳥、冬月裸體、盡夜鳴叫、四足有レ肉、翅不レ能二遠飛一。【一六】且置レ之　柳子厚の法華西亭詩に、置レ之勿二復道一、且寄須臾閑。【一七】玉色醪　醪は濁酒。王文誥いふ、公愛二魯直一、而不レ諒二孟郊一。昌黎の東野を愛するは、猶ほ東坡の山谷を愛するが如し。當時の天下に同心の友なきを見るに足る。

【題義】孟郊の詩を讀んで感じた所を述べたのである。葛立方の韻語陽秋にいふ、孟郊詩、楚山相蔽虧、日月無二全輝一、萬株古柳根、挈二此磷磷溪一等句、造語工新、無二一點俗韻一、然其他篇章似レ此者絕少。李觀評二其詩一云、高處在レ古無レ上、平處下二觀二謝一、許レ之太甚、東坡詩、何苦將二兩耳一、聽二此寒蟲號一云云、貶レ之亦甚矣と。紀昀いふ、二首、卽作二東野體一、如二昌黎樊宗師諸例一、意謂、東野體、我固能爲レ之、但不レ爲耳、然東坡以下雄二視百代一之才上、而往往傷レ率、傷レ慢、傷レ放、傷レ露者、正坐レ不二肯爲二郊島一

番苦吟工夫一耳、讀者不レ可レ不レ知と。

【詩意】一夜、燈下に孟郊の詩を讀む。細字は牛毛の如くであつて、視力を費し、寒燈は花を作して、轉轉睡眼を照らして居る。讀んで時に一たび佳處に遭ふと、譬へば孤芳の荒穢に擢んでたやうで、危辭苦語が我が耳を感じて、詩騷を餘すのである。又、孟郊の詩は、清切で、之を譬へると、水清うして、石が自ら見はれ、鑿鑿と鮮かである。そして湍が激しくして簹を受けない。初めは小魚を食ふがやうで、得る所は、其の骨折をば償はない。又、彭蠡魚を煮るがやうで、終日螯の殼を手にして居る。要は當に僧清の一派と技を鬪はすべく、到底、韓退之に當るに足らない。(唐宋詩醇の評に據ると、孟郊佳處、惟此言レ之清切、孤芳水清四句、道二其體格風調一、繼乃比下之食二小魚一、煮二彭蠡一、聽二寒蟲號上者、軾蓋直以二韓豪一自居也と言つて居る。)さて人生は朝露の如くで、朝日の上るを待つて、其の光に乾くと同じである。他の言葉で譬へると、日夜、火の膏を消すやうなものである。何を苦しんで、大切なこの兩耳を此の寒蟲の號くのを聽くに用ひるのか、暫く之を置いて、我に玉色の濁り酒を飲ましたが宜しからう。(王文誥いふ、魯直爲二公所レ壓、故變二矯崛之體一、而郊之避レ韓亦然、是所レ謂得失寸心知者、公愛二魯直一、而不レ諒二孟郊一、無レ怪下紛然學二魯直一者多上、不レ知所レ避何人、可レ發二一笑一、詩話及論詩絶句、往往不レ當と。)

我憎(一)孟郊詩。復作二孟郊語一。我は孟郊の詩を憎んで、復孟郊の語を作す。

飢腸自鳴喚。空壁轉二飢鼠一。飢腸自ら鳴喚、空壁飢鼠を轉ず。

詩從二肺腑一出。出輒愁二肺腑一。詩は肺腑より出で、出づれば輒ち肺腑を愁へしむ。

有レ如二黃河魚一。出レ膏以自煮。黃河の魚、膏を出だして以て自ら煮る如きあり。

尚愛銅斗歌。鄙俚頗近レ古。尚ほ愛す銅斗の歌、鄙俚頗る古に近きを。

桃弓射レ鴨罷。獨速短蓑舞。桃弓鴨を射ること罷んで、獨り速く短蓑の舞。

不レ憂踏レ船翻。踏レ浪不レ踏レ土。憂へず船を踏んで翻へるを、浪を踏んで土を踏まず。

吳姬霜雪白。赤脚浣二白紵一。吳姬霜雪白く、赤脚白紵を浣ふ。

嫁與踏浪兒。不レ識二離別苦一。嫁與す踏浪兒、離別の苦みを識らず。

歌二君江湖曲一。感二我長羈旅一。君が江湖の曲を歌ひ、我が長き羈旅を感ず。

【字解】【一】孟郊詩　王注に、孟郊送二淡公一詩十二首、其一曰、銅斗飲二江水一、手拍二銅斗一歌、儂是拍浪兒、飲則拜二浪婆一、脚踏小船頭、獨速舞二短蓑一、笑伊漁陽操、空恃文章多、閑倚青竹竿、白日奈二我何一。又いふ、短蓑不レ怕レ雨、白鷺相爭飛、短槹畫二菰蒲一、鬪作二豪橫一歸、笑伊水健兒、浪戰求二光輝一、不レ如竹枝弓、射レ鴨無二是非一。又いふ、射レ鴨復射レ鴨、鴨驚菰蒲頭、鴛鴦亦零落、彩色難二相求一、儂是清浪兒、每踏二清浪一游、笑伊鄉貢郎、踏レ土稱二風流一、如レ何卯角翁、至レ死不レ裹頭。數首は皆、古樂府の遺韻を得。宜なり坡翁に愛賞せらるるや。【二】飢腸　韓退之が月蝕詩に、婪酣大肚遭二一飽一、飢腸徹レ死無由レ鳴。東坡の詩に、夜來饑腸如レ轉レ雷、旅愁非レ酒不レ可レ開。紀昀いふ、飢腸十字、神似二東野一と。【三】肺腑　心腹といふに同じ。李格非いふ、淵明歸去來辭、如二肺腑中流出一。【四】鄙俚　五代史、劉岳傳に、事出二鄙俚一、皆、當時、家人女子、傳習所レ見。【五】吳姬霜雪云云　李太白の通塘曲に、浦邊清水明二素足一、別有二浣

紗吳女郎。又、越女詞に、耶谿女如レ雪、屣上足如レ霜。【六】浣二白紵一　白紵は布の細くて潔白なもの、古樂府に、白紵歌あり。【七】嫁與踏浪兒　唐、李益の詩に、早知二潮有レ信、嫁與弄潮兒。【八】江湖曲　東野の詩に、數年伊洛同、一旦江湖乖、江湖有二故莊一、小女嚶喈喈。【九】羈旅　文選、謝靈運、擬應瑒詩に、一旦逢二世難一、淪薄恒羈旅。

【詩意】我は孟郊の詩を憎みながらも、(隱居詩話にいふ、孟郊詩、蹇澁窮僻、琢削不レ暇、眞苦吟而成、觀二其句法格力一、可レ見矣、其自謂、夜吟曉不レ休、苦吟鬼神愁、如何不二自閑一、心與レ身爲レ仇、而退之薦レ士詩云、榮華肖二天秀一、捷疾愈響報、何也と。)又、好みて孟郊の語を作すのである。(王文誥いふ、或以下我憎二孟郊詩一、復作中孟郊語上爲レ譚者。答曰、是所謂惡而知二其美一也。著二此二句一、郊之地位、固在二此詩筆之妙一也、非二子所レ知と。)さて、飢ゑた腸は、雷を轉ずるが如くに、自ら鳴り喚ばはるものである。そして空な壁には、飢ゑた鼠が轉がつて居る。一體、詩といふものは、肺腑中から流れ出づるもので、而も出づれば、輒ち肺腑を愁へしめる。(王文誥いふ、十字絕倒、寫二盡郊寒之狀一と。)譬へば黃河の魚の膏を出し以て自ら煮るやうなものである。尙ほ銅斗の歌は鄙俚でも、頗る古に近いものがある。我はそれを愛する。之を譬へると、桃の弓で鴨を射ることが罷んで、獨り、短蓑の舞を速くやうなものである。又、船を踏んで翻へるを憂へないから、浪を踏んで土を踏まない。(唐宋詩醇の評に、自云レ作二孟郊語一、讀レ之、宛然郊詩、如下詩從二肺腑一出、出輒愁二肺腑一二語上、非レ郊不レ能レ道、觀二銅斗歌、全用二其語一、愛レ之深矣、郊寒島瘦、千古奉二軾語一爲二定評一、顧島豈得二與レ郊抗衡一哉とある。)吳姬は霜雪の如く白く、何時も素足を踏んで白布を浣つて居る。李益が所謂早く潮に信あることを知らば、弄潮兒に嫁與せしものをで、踏浪兒に嫁與して、而も離別の苦を識らない。今は君が江湖の曲を歌つて、我が長い羈旅に感ずるのである。(紀昀いふ、卽借二東野詩一生レ情、綰合無レ迹と。)

訪張山人得山中字二首

張山人を訪うて、山中の字を得たり　二首

魚龍隨二水落一、猿鶴喜二君還一。　魚龍は水の落つるに隨ひ、猿鶴は君の還るを喜ぶ。
舊隱邱墟外、新堂紫翠間。　舊隱邱墟の外、新堂紫翠の間。
野麋馴二杖履一、幽桂出二榛菅一。　野麋は杖履に馴れ、幽桂は榛菅を出づ。
洒掃門前路、山公亦愛山。　洒掃す門前の路、山公亦山を愛す。

【字解】【一】張山人　卽ち張天驥。東坡の自注に、張故居爲二大水所レ壞、新下二此室故居之東一。本集、放鶴亭記に、熙寧十年秋、彭城大水、雲龍山人張君之草堂、水及二其半扉一、明年春、水落遷二於故居之東、東山之麓一、升レ高而望、得二異境一焉、作二亭于其上一、山人有二二鶴一、甚馴而善飛、故名レ之曰二放鶴亭一。【二】魚龍隨二水落一　杜子美の詩に、水落魚龍夜。又いふ、魚龍回二夜水一。【三】邱墟外　晉、桓彝はとなかいといふ鹿。履の字、一本に屨に依る。【四】紫翠　杜牧之の蚤春閣下詩に、千峰橫二紫翠一、雙闕凭二欄干一。【五】野麋馴杖履一　韓退之の雪後寄二崔二十六丞公一詩に、稱レ多量レ少鑒裁密、豈念幽桂遺二榛菅一。【六】洒掃　水を地に洒ぎて掃除する。詩、大雅に、灑二掃庭內一、坎坎鼓我、蹲蹲舞則可矣。【七】山公　王注に、山簡也、公自謂、

【題義】張天驥を訪ひ、分韻して、山の字、中の字を得たので、此二詩を賦した。紀昀いふ、章法從下

工部尋二張氏隱居一二首一得來と。又いふ、二首篇章字句、都入二古法一、然却無二十分出色處一、不二善學一之、便成二空調一と。

【詩意】雲龍山人張天驥の故居は、大水に壞られたので、新に室を故居の東に作つた。かくて魚や龍は水に隨つて落ちるし、猿も鶴も、君の歸り來るを喜んで居る。舊隱の地は、大きな丘の外に在つた。今度の新しい堂は、紫翠の間に建てらる。野の大きな鹿も、人の杖履に馴れて近づき、桂の名木が荆榛菅茅の中から出て居る。門前の路は、よく掃除されて居り、山公も亦、山を愛する。(紀昀いふ、七八句、收到二訪字一、公自謂也と。)

萬木鎖雲龍。天留與戴公。
路迷山向背。人在瀼西東。
薺麥餘春雪。櫻桃落晚風。
入城都不記。歸路醉眠中。

【字解】【一】雲龍　東坡自注に、山名。王注に、雲龍山、則張山人所居之地也、戴公、豈以戴安道一比之耶。【二】與二戴公一　王注に、戴符嘗乞二買山錢一於于頔一、詩意或指此。郡邑志に、潤州有二戴公山一。南史、戴顒傳に、戴顒世居二剡下一、又徙二京口一、止二黃鵠山一、山北有二竹林精舍一、戴憩二於此一、宋文帝每欲レ見レ之、嘗謂二黃門侍郎張敷一曰、東巡之日、當レ宴二戴公山下一。【三】山向背　後漢書、地理志の注に、衡山九向九背。【四】瀼西東　王注に、瀼水在二夔州奉節縣一、出二於山谷間一、南入レ江、楚俗謂二水可レ涉者一爲レ瀼。杜子美の詩に、瀼西瀼東一萬家、江南江北春冬花。子美嘗寓二居瀼西一、復還瀼東一也。【五】薺麥餘二春雪一　韓退之の琴操に、霜雪貿貿、薺麥之茂。薺は野草の一。詩、邶風に誰謂二荼苦一、其甘如レ薺。

【詩意】萬木が鬱蒼として雲龍山を鎖ざして居るのは、天が留めて戴公に與へたのであらう。路は山の向背に迷ひ、人は瀼水の西に寓したり、東に還つたりして居る。薺や麥には春の雪を餘し、櫻も桃も、晩風に落ちて居る。城に入つてからは、都て記憶に存しない。歸路は醉眠の中にある。(紀昀いふ、五六、自是秀句、然專標二此種一、則終身不レ出二九僧門戶一と。又いふ、七八收二拾訪字一と。)

送孔郎中赴陝郊

孔郎中が陝郊に赴くを送る

驚風擊レ面黃沙走。
西出崤函脫塵垢。
使君來自古徐州。
聲震河潼殷關右。
十里長亭聞鼓角。
一川秀色明花柳。
北臨飛檻卷黃流。

驚風面を擊つて黃沙走る、
西崤函を出でて塵垢を脫す。
使君は古の徐州より來り、
聲河潼に震ひ關右に殷なり。
十里の長亭鼓角を聞き、
一川の秀色花柳明かなり。
北に臨めば飛檻は黃流卷き、

【字解】【一】孔郎中　孔宗翰、字は周翰、宣聖五十世の孫。東都事略に、孔周翰、歷二知蘄・密・陝・揚・洪・兗六州一。【二】陝郊　水經に、河水、又西逕二陝縣故城南一。注にいふ、河北對二茅城一、春秋茅津也、河南卽陝城、周召分レ陝以二此城一爲二東西之別一。太平寰宇記に、魏、太和十一年、置二陝州一、九域志に、永興軍路陝州、宋爲二保平軍一、節度理所。薛稷詩に、驅レ車

南望青山如峴首。(一二)　南を望めば青山峴首の如し。
東風吹開錦繡谷。(一三)　東風吹き開く錦繡谷、
涤水翻動葡萄酒。(一四)　涤水翻へり動く葡萄酒。
訟庭生草數開尊。(一五)　訟庭草を生じて數〻尊を開き、
過客如雲牢閉口。(一六)　過客は雲の如きも牢く口を閉ざさん。

秦孝公據崤函之固、崤謂二二殽、函謂二函谷關一。元和郡縣志に、二崤山、又名嶽崑山、自二東崤一至二西崤一三十五里、東崤長阪數里、峻阜絕澗、西崤、全是石阪十二里、峻絕不レ異二東崤一。漢、地理志に、宏農、故秦函谷關也。【六】古徐州　古有二南徐・北徐一、南徐、潤州、北徐、彭城。時自二彭城一而往、故云二古徐一。【七】河潼　潼關は華州。華陰縣に在り。河水は龍門より南流し、華山に激して東す、故に河潼と名く。元和郡縣志に、潼關在二華陰縣東北關西一里、有二潼水一。又いふ、河在二關內一、南流衝激、因謂二之衝關一。名勝志に、潼谷水、經二松果山下一、北流入二黃河一。唐、天授初、置二潼津縣一、長安二年廢、今爲レ驛、有三石橋一、尙名二潼津橋一、卽潼關水所レ經也。【八】十里長亭　庾信の哀江南賦に、十里五里、長亭短亭。王逍珪の注にいふ、秦制五里一亭、十里一堆、一丁主之と。【九】鼓角　吳兢の樂府古題要解に、橫吹曲有二鼓角一。唐樂令に、諸道行車、給二鼓角一、三萬人以上角十四、具二鼓二十四面一。【一〇】一川秀色云云　李太白の寄二元參軍一詩に、一谿初入千花明。【一一】黃流　韓退之の二鳥賦に、窺二黃流之奔猛一。【一二】峴首　王注に、峴首山在二襄州襄陽縣一。陝州去レ郡二十里有レ山、亦名レ峴、以三其狀類二峴首一、故得レ名。名勝志に、峴山在二襄陽一下臨レ漢。【一三】錦繡谷　輿地紀勝に、宋、李觀除二知虔州一不レ赴、自魏二玉谿叟一、於二玉谿洞中一、種二列名花一、名二錦繡谷一。玉谿洞は、今の江西、宜春縣の東、半里に在る。【一四】涤水翻動葡萄酒　錢希白の南部新書に、太宗破二高昌一、收三馬乳・葡萄、種二於苑一、並得二酒法一、仍自損二益之一、造レ酒成二綠色一、長安始識二其味一。【一五】訟庭生草云云　隋書、劉曉傳に、爲二平鄉令一、風敎大治、獄中無二繫囚一、爭訟絕息、囹圄盡皆生レ草、庭可レ張レ羅。【一六】數開レ尊　杜子美の詩に、開レ樽獨酌遲。【一七】過客　韓退之の與二李尙書實一書に、接二過客俗子一、絕レ口不レ挂二

越二陝郊一。【一三】驚風　文選、賈子建の詩に、驚風飄二白日一、忽然歸二西山一。漢、霍去病傳に、大風起、砂礫擊レ面。【一四】黃沙　南史、梁、簡文帝紀に、大寶元年春、天雨二黃沙一。【一五】崤函　崤函は二崤と函關。二崤山在二河南永寧縣一、函谷關在二新安縣一。賈誼、過秦論に、

時事、務爲二崇深一、以拒二止嫉妬之口一。

【題義】此詩は孔周翰が密州より陝州に移つた時の作である。東坡と密州の交代をなし、東坡が未だ至らないうちに、此詩を先にしたのである。紀昀いふ、十里長亭聞二鼓角一、一川秀色明二花柳一、二句寫レ景自好と。又いふ、一連對偶格、始二於齊梁一、而成二於初唐一、或專目爲二四傑體一非也と。又いふ、結句太露と。

【詩意】杜子美の詩にいふ、疾風吹レ塵暗二河縣一、行子隔レ手不二相見一と。此は正しく陝州の離別を寫した詩である。孔君は今、車を驅りて、陝郊に向はれるが、驚風が起つて面を擊ち、又、黃沙をも走らし、まことに暗澹の光景である。さて、西のかた、二崤山を後に、函谷關を出でると、塵垢も、だんだん脫することであらう。一體、使君（刺史）の孔郎中は、古の徐州から來られ、其の聲名は、夙に河潼に震ひ、又、關西にも盛である。潼關の水は、華州に在るが、河水は龍門から南に流れ、やがて華山に激して、東する所から、河潼と名ける。十里の長亭に、鼓角の響くを聞き、漸く谷間に入ると山川は秀色を呈して、花も柳も明かである。北に臨むと、高い欄干は、黃流の奔るを下に瞰る。南を望むと、陝州の青山も、襄州の峴首山の形を成して聳えて居るから、亦、峴と名ける。春風は玉谿洞中を吹いて、名花を翻がへし、錦繡谷の名も、空しくない。昔、太宗は高昌を破つて、馬乳と葡萄とを收め、葡萄は苑に種ゑた。酒法をも得たから、之を損益して新しい酒を造り、涤色をなした。故に涤水翻へり動く葡萄の酒と言つたのである。孔君の赴任する處は、風敎が大に治まつて、また罪を犯すものもなく、囹圄には草を生ずるであらうし、數〻酒樽を開いて快飲もするであらう。ただ訪問の

客、雲の如きも、牢く口を閉ぢて、決して時事などは談じないであらう。

與梁左藏會飲傅國博家

梁左藏と傅國博家に會飲す

將軍破賊自草檄。　將軍賊を破つて自ら檄を草し、
論詩說劍俱第一。　詩を論じ劍を說く俱に第一。
彭城老守本虛名。　彭城の老守本虛名、
識字劣能欺項籍。　字を識りて劣かに能く項籍を欺く。
風流別駕貴公子。　風流別駕貴公子、
欲把笙歌暖鋒鏑。　笙歌を把つて鋒鏑を暖めんと欲す。
紅旆朝開猛士躁。　紅旆朝に開いて猛士躁ぎ、
翠帷暮捲佳人出。　翠帷暮に捲いて佳人出づ。
東堂醉臥呼不起。　東堂に醉臥して呼べども起きず、
啼鳥落花春寂寂。　啼鳥落花春寂寂。
試敎長笛傍耳根。　試みに長笛をして耳根に傍はしめて、
一聲吹裂堦前石。　一聲吹き裂く堦前の石。

【字解】【一】梁左藏　卽ち梁交で、左藏は官名。唐の時、左右藏に、皆、令丞を置く。左藏は錢帛・雜絲・天下の賦調を掌る。宋の初、諸州の貢賦、均しく左藏に輸す。【二】傅國博　傅稺、官は國子博士、時に徐州通判たり。乃ち龍圖閣直學士燕公肅の外曾孫である。職官分紀に、國子監博士有二太學・五經・四門・武學・律學・書學・算學諸名一。【三】草レ檄　北史に、荀濟、知二梁武當レ王、然負レ氣不レ服、謂レ人曰、會楯上磨レ墨作二檄文一。韓退之が上二都統相公一詩に、盡管二諸軍一破レ賊年。【四】彭城　古の大彭氏の地。兩漢の彭城國、今、江蘇銅山縣治。【五】項籍　字は羽。下相の人。下相の故城は、今、江蘇、宿遷縣の西に在る。【六】風流別駕　晉、樂廣傳に、天下言二風流一者、王樂爲二稱首一。晉、庾亮の郭游に與ふる書に、別駕任居二刺史之半一。【七】貴公子　晉康傳に、潁川鍾會、貴公子也。【八】把二笙歌一云云　白樂天の送二三兄一詩に、少年曾管二千兵、貴聽二笙歌一夜斫レ營。【九】紅旆　白樂天の溫尙書莊詩に、白石淸泉拋二濟口一、碧幢紅旆照二河陽一。【一〇】猛士躁　左傳、哀公十七年に、越子爲二左右句卒一、鼓噪而進。【一一】翠帷暮捲　柳子厚が詩に、翠帷雙卷出二傾城一。【一二】啼鳥落花春寂寂　王維の詩に、落花寂寂啼二山鳥一。韋莊詞にいふ、滿院落花春寂寂。李太白の久別離に、東風兮東風、爲レ我吹二行雲一使二西來一、待レ來竟不レ來、落花寂寂委二靑苔一。【一三】一聲吹裂云云　國史補に、李舟嘗得二村舍煙竹一、截以爲レ笛、堅如二鐵石一、以遺二李謩一。謩吹レ笛天下第一、月夜泛レ江吹レ之、餓有レ客、立二於岸一、呼レ船共載、既至、請レ笛而吹、其聲精壯、山石可レ裂、謩未二嘗見一、疑二其蛟龍一也。

【題義】此詩は元豐元年正月、梁交と傅裼の家で、會飲した時の作である。紀昀いふ、雖レ又二深厚一、而自有二秀發之氣一と。

【詩意】昔、荀濟は梁の武帝の當に王たるべきを知つたが、氣を負うて之に服しない。人に對つて、楯上に墨を磨つて、檄文を作らんと言つたさうである。今、將軍は、賊を破つて自ら檄文を草する。そして、詩を論じ、劍を說いて、俱に第一とされて居る。さて彭城の老太守は、もと虛名で、字を識つて、僅によく項籍を欺いただけであつた。又、天下の風流は別駕の任に在る貴公子で、夜は笙歌を聽き、晝は鋒鏑を執つて營を斫つた。彼は碧幢や紅旆を推し立てて鼓噪して進むも、一面には、また翠帷暮に捲いて、佳人の出づるを見て樂んだ。かくて東堂に醉ひ臥して呼べども起きない。既にして啼鳥落花春寂寂の感を興す。試みに長笛をして耳根に傍はしめると一聲吹いて堦前の石を裂く。(昔、

李簒は笛を吹くこと、天下第一であつたが、嘗て、月夜江に泛んで之を吹く。俄かに客が岸に立ち、船を呼んで共に載らうとする。既に至り、笛を請うて吹く。其の聲が精壯で、山石も裂くべきであつた。簒は其の蛟龍ではないかと疑つた。此詩の末句は此の故事に據つたのである。)

寒食日答李公擇三絶次韻

寒食の日、李公擇に答ふる三絶、次韻

從來蘇李得名雙。　從來蘇・李名を得て雙ぶ、
只恐全齊笑陋邦。　只恐る全齊陋邦を笑ふを。
詩似懸河供不辨。　詩は懸河に似て供するも辨せず、
故欺張籍隴頭瀧。　故欺く張籍隴頭の瀧。

【字解】【一】寒食　冬至より一百五日に當る節。鄴中記に、冷食三日、作乾粥一食之、中國以爲寒食。【二】李公擇　李常、字は公擇、皇裕の進士、熙寧中、右正言となる。王安石、之と善し。時に安石、新法を立つ。常、其の不便を極言す。哲宗の時、御史中丞に累拜せらる。王文誥いふ、李公擇罷齊州、以寒食日至徐、公方出督城工於外、公擇立成三詩、以促公還、公和詩全寓此意。【三】蘇・李得名雙　王注に、前漢蘇武・李陵、能詩、謂之蘇李、唐、蘇味道、里人李嶠、俱以文章顯、時亦號蘇・李、又、蘇頲・李乂對掌三文誥、明皇謂頲曰、前朝有李嶠・蘇味道、當時號蘇李、今有卿及李乂、何媿前人哉。【四】全齊笑陋邦　後漢書、耿弇傳に、論尅拔全齊。陋は狹小の意。【五】懸河　晉、郭象傳に、字子元、王衍每云、聽象語、如懸河瀉水、注而不竭。唐、王勃傳に、張說評楊炯曰、文如懸河之不竭。韓退之の石鼓歌に、願借辨口如懸河。【六】供不辨　查注に、似謂詩才敏速、左右供事之人、書寫不及。三國魏志、司馬朗傳に、爲堂陽長、當作船、民恐其不辨、相率助之。【七】隴頭瀧　韓退之の病中贈張十八詩に、君乃崑崙渠、籍乃隴頭瀧。崑崙渠とは崑崙から流れ出る川、卽ち黃河。爾雅に據ると、河は崑崙の墟に出でて色が白い。渠とする所、併せて千七百一川、色黃とある。隴頭瀧、瀧は說文に奔湍とある。

【題義】此詩は元豐元年三月の作である。李公擇は齊州を罷め、寒食の日を以て徐州に至る。東都事略に、李常、時由齊州、徙淮南西路提點刑獄、其來、乃罷齊州任、赴提刑時也。時に東坡は外に在つたので、公擇は立ろに三詩を作つて、其の還るを促した。此三絶は之に和したのである。

【詩意】古來、蘇・李と竝び稱せらる、前漢の蘇武と李陵とは、詩を能くして、之を蘇・李といふ。唐の蘇味道と李嶠とは、俱に文章を以て顯はれ、時に亦、蘇・李と號す。其他、蘇晉と李嶠と、蘇頲と李乂と、當時皆、名を得て雙ぶ。只恐る全齊が、陋邦の狹小なるを笑ふことを。(齊州の大に比して徐州は小である。)君の詩は譬へば懸河の如く、滔滔として竭きない。君の詩才は、敏捷であつて、左右供事の人も、書寫することが、間に合はない。張籍はいふ、君は崑崙より流れ出る黃河の水のやうであるが、我は普通の山から落ちる早瀨の如きものである。とても比較には成らない。どうか、見棄てられないで、終始教を賜はらんと、君も同じやうなことを言はれるが、張籍が所謂隴頭の瀧は、實は當らない。欺いた言葉である。

簿書(一)鼓不知春。　簿書鼓春を知らず、
佳句相呼賴故人。　佳句相呼ぶは故人に賴る。

【字解】【一】簿書　漢書、賈誼傳に、大臣特以簿書不報期會之間、以爲大故。【二】鼓　鼓は大

寒食德公方上冢。寒食德公方に冢に上る、
歸來誰主復誰賓。歸り來る誰か主復誰か賓。

靈運、每有篇章、對惠連、輒得佳語。【四】德公　襄陽記に、龐德公居峴山南、未嘗入城府、諸葛孔明、每至德公家、獨拜牀下、德公初不令止、司馬德操、嘗詣德公、値其上冢、德操徑入其室、呼德公妻子、使速作黍、徐元直向云、當來就我與德公談、其妻子、皆羅拜堂下、奔走共設、須臾德公還、直入相就、不知何者是客也。前にも屢〻見ゆ。

【詩意】官文書の記入、殊に租稅を取り立てて、其の出納を明かにするのは、煩細なる公務の一である。昔は鼓鼓を鼓らして役事を督したものである。簿書の鼓鼓のと、公務に忙はしくて、行く春を知らない。そこで佳句のことは、一に故人に依頼する。謝靈運は篇章ある毎に、惠連に對すれば、輒ち佳語を得た。嘗て永嘉西堂に在つて詩を思うて就らなかつた。忽ち弟惠連を夢み、卽ち池塘生春草の句を得たといふことである。されば文雅のことは、君を賴むのである。龐德公は嘗て、寒食の節、方に冢に上つて家には居なかつた。司馬德操が訪ねて、直に其室に入り、德公の妻子を呼んで、速かに黍を作らしめた。間もなく、德公が還り、直に入つて相就き、誰が是れ主人で、誰が是れ賓客であるかが辨らなかつたといふ話があるが、今、君に對して、此事を思ふのである。

鼓をいふ。周禮、鼓人に、以鼓鼓役事、注にいふ、鼓長丈二尺、亦作皐と。【三】佳句云云　南史に、謝

巡城已困塵埃眯。城を巡りて已に困み塵埃眯す、
執扑仍遭蟣蝨緣。扑を執りて仍ほ遭ふ蟣蝨の緣。

【字解】【一】巡城　左傳、宣公二年に、華元爲植巡功。爲植は、曾請纔奉行となるをいふ。巡功は工事を巡視するをいふ。【二】塵埃眯　眯は塵などが目の中に入ること。莊子、天運篇に、播糠眯目、則天地四方易位。杜子美の詩に、黃土汚人眼易眯。【三】執扑　周禮に、司空執扑。左傳襄公十七年に、宋平公築臺、子罕執扑以行築者、而抉其不勉者。扑は杖である。【四】蟣蝨緣　漢、嚴安傳に、今胥生蟣蝨。【五】布衫　東坡の自注に、來詩謂僕布衫督役。【六】黃連　早春、花を出す、莖の長さ尺許、根は藥となる。四川、雅州に產するもの良し。故に雅連といひ、川連といふ。本草に、黃連出四川、鷹爪者良、點眼赤。

【詩意】普請奉行となつて、城を巡り、工事を視る。我は既に督役に困しみ、黃土は人を汙して、塵埃が目の中に入る。併し尙ほ杖を執つて築く者を巡視し、其の勉めないものを抉つた。介胄に蟣蝨を生ずといふ言葉を聞いたが、我も蟣蝨に緣がある。布衫を脫いで素手を攜へようと欲する。そこで試みに病眼を開いて黃連を點じた。塵壒の中に督役して、疾を致したからである。

欲脫布衫攜素手。布衫を脫して素手を攜へんと欲し、
試開病眼點黃連。試みに病眼を開いて黃連を點ず。

約公擇飲是日大風

公擇に約して飲む、是日大風あり

先生生長匡廬山。先生匡廬山に生長す、
山中讀書三十年。山中書を讀む三十年。
舊聞飲水師顏淵。舊聞く水を飲みて顏淵を師とするを、

【字解】【一】匡廬山　江州、德化南康軍、星子・九江二縣の境に在る。殷周の時、匡俗兄弟七人あつて、廬を此に結ぶ、故に匡廬といふ。廬

不知治劇乃所便。　劇を治むるは乃ち便とする所なるを知らず。
偸兒夜探黑白丸。　偸兒夜探る黑白の丸、
奮髯忽逢朱子元。　髯を奮うて忽ち逢ふ朱子元。
半年羣盜誅七百。　半年に羣盜七百を誅す、
誰信家書藏九千。　誰か信ぜん家書九千を藏するを。
春風無事秋月閒。　春風事なく秋月閒に、
紅妝執樂豪且妍。　紅妝樂を執る豪且つ妍。
紫衫玉帶兩部全。　紫衫玉帶兩部全し、
琵琶一抹四十絃。　琵琶一抹四十絃。
客來留飲不計錢。　客來つて留つて飲み錢を計らず、
齊人愛公如子產。　齊人公を愛する子產の如し。
兒啼臥路呼不還。　兒啼いて路に臥し呼べども還らず、
我慙山郡空留連。　我慙づ山郡に空しく留連するを。
牙兵部吏笑我寒。　牙兵部吏我が寒を笑ふ、

山記に、匡俗生而神靈、廬於此山、世稱廬君、故山取號焉。【二】山中讀書　東坡の李氏山房記に、李公擇、少時讀書於廬山、五老峰下、白石庵之僧舍、公擇既去、而山中人指其居、爲李氏山房、藏書凡九千餘卷。杜子美の詩に、匡山讀書處、頭白早歸來。【三】飲水師顏淵　論語、述而篇に、飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣、不義而富且貴、於我如浮雲。【四】治劇乃所便　漢書、張敞傳に、自請治劇郡。同じく尹賞傳に、薛宣奏賞能治劇。【五】偸兒探黑白丸　前漢、尹賞傳に、永始元延間、長安中、姦猾浸多、閭里少年、羣輩殺吏、受賕、報仇、相與探丸爲彈、得赤丸者、斫武吏、得黑者斫文吏、自者主治喪、長安令追捕甚精。世說に、王獻之曰。偸兒青龍、我家舊

邀公飲酒公無難。　公を邀へて酒を飲ましむる公難ずるなかれ。
約束官奴買花鈿。　官奴に約束して花鈿を買ひ、
薰衣理髮夜不眠。　衣を薰し髮を理めて夜眠らず。
曉來顚風塵暗天。　曉來風を顚じ塵天に暗し、
我思其由豈坐慳。　我其の由を思ふ豈坐ら慳せんや。
作詩媿謝公笑讙。　詩を作つて媿謝し公笑讙す、
歸來瑟縮愈不安。　歸り來つて瑟縮愈〻安からず。
要當啖公八百里。　要は當に公の八百里を啖ふべし、
豪氣一洗儒生酸。　豪氣は儒生の酸を一洗せん。

條。【一〇】客來留飲云云　王文誥いふ、客非沃指、乃自述過齊州時也と。【一一】愛公如子產　韓詩外傳に子產之治鄭、一年而負罰之過省、二年而刑殺之罪亡、三年而庫無拘人、故民歸之如水就下、愛之如孝子敬父母。【一二】兒啼云云　史記、循吏傳に、子產治鄭、二十六年而死、丁壯號哭、老人兒啼曰、子產去我死乎、民將安歸。【一三】臥路　後漢書、侯霸傳に、爲臨淮尹、政理有能名、更始元年、遣使徵霸、百姓老弱相携、號哭遮使者車、或當道而臥曰、願乞侯君、復留朞年。【一四】留連　淮南子に、愚夫蠢婦、皆有留連之心。【一五】花鈿　花模樣の青貝細工で、面上の飾。沈約の麗人賦に、雜錯花鈿。白樂天、長恨歌に、花鈿委地無人收。【一六】薰衣理髮　薰は香草の一、蘭の類、かをるの意に用ふ。古樂府、木蘭歌に、當窗理雲鬢。謝朓詩に、插花理雲髮。【一七】曉來顚風云云　杜子美の詩に、曉來急雨春風顚。【一八】豈坐慳　文酒清話に、東京周默、未嘗作東道、一日物。【一九】奮髯忽逢朱子元　漢、朱博傳に、字子元、遷琅邪太守、奮髯抵几、斥罷病吏。前に見ゆ。【二〇】誅七百　宋史、李常傳に、齊多盜、半歲間、誅七百人、姦無所匿。【二一】紫衫玉帶　唐書、禮樂志に、慶善樂舞、四人紫袍白袴。又いふ、樂工少年文玉帶、立左右。隋書、禮儀志に、紫衫大口袴褶。【二二】一抹四十絃　潘若冲、郡閣雅談に、高從晦好彈胡琴、天成中、王仁裕使于荊渚、從晦出十妓一彈、胡琴以仁裕有詩曰、紅妝齊抱紫檀槽、一抹朱絃四十

請レ客、時久旱、忽風雨交作、宋溫以レ詩戲之曰、驕陽爲レ戾已成レ災、賴有レ開レ筵周秀才、莫レ道上天無二感應一、故交風雨一齊來。蓋謗有二慳値レ風、嗇値レ雨之説一也。【九】　瑟縮　寒くちぢかまる。呂覽に、筋骨瑟縮不レ達。韓退之、孟郊詩に、地祇爲レ之悲、瑟縮久不レ安。【一〇】　啖二公八百里一　晉、王濟傳に、王愷以二帝舅一奢豪、有レ牛名二八百里駁一、嘗瑩二其蹄角一、濟請以二錢十萬一與レ牛對、射而賭レ之、濟一發破的、因據二胡牀一叱二左右一、速探二牛心一來、須臾而至、一割便去。

【題義】　此詩も元豐元年三月の作である。李公擇は齊州に知となる。齊州には盜が多かつた。公擇は黠盜を得て、之を吟味し、藏盜の情を知つて、之を根治したので、州が大に治まつた。此詩に、偸兒夜探黑白丸、奮レ髯忽逢朱子元、半年羣盜誅二七百一の句あるは、是を謂つたのである。紀昀は此詩を評して、邀飲而鋪二敍政事一、未レ免レ遠二於事情一、說來總覺二迂緩一、轉落處、亦不二自然一と言つて居る。

【詩意】　李公擇は匡廬山に生長し、其の五老峯下の白石庵で書を讀むこと三十年であつた。かの疏食を食ひ、水を飲み、肱を曲げて之を枕としても、吾の眞の樂みは、之が爲に少しも減じはしないといふ聖敎を聞いた李君は、平生顏淵を師としたのである。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り、人は其の憂に堪へないが、顏淵は其の樂みを改めなかつた。これは、公擇の共鳴する所である。漢の張敞は、自ら請うて劇郡を治めたといふことであるが、公擇は劇を治めるのは乃ち便とする所なるを知らなかつた。前漢、成帝の永始・元延の間、長安中、姦猾が漸く多くなつて、閭里の不良少年が吏を殺し、賕(賄賂)を受け、仇を報い、相與に丸を探り、赤い丸を得たものは武吏を斫り、黑きを得たものは文吏を斫り、白きものは喪を治めしめた。これは言語道斷で、取締らねばならない。漢の朱子元は、瑯

邪の太守となり、髯を奮つて病吏を斥け罷めたといふが、公擇も其の果斷があつて、半歲の間に、羣盜七百人を誅した。併し公擇が武斷の一面には、文雅があつて、家書九千卷を藏して居るとは誰も思はなかつたであらう。かくて春風秋月、事なく等閑に送つて、時時紅妝の樂を奏するのは、豪であり、且つ妍でもあつた。其の歌舞の有樣をいふと、紫袍白袴、玉帶を文つて左右に立つて居る。王仁裕の詩に、紅妝齊しく抱く紫檀槽、一抹朱絃四十條とあるが、客來つて、留まつて酒を飲み、出錢の多きを計らない。(東坡が自ら齊州を過ぐる時のことを述べたのである。)昔、子產が鄭を治めるや、民の之に歸する、水の下に就くが如く、之を愛する、孝子の父母を敬するが如くであつたといふが、今、齊人の君を愛することは、子產の如くである。後漢の侯霸は、臨淮の尹となつて、政理に名がある。更始元年、朝廷、使を遣はし、霸を徵すと、百姓は老弱相携へて、使者の車を遮ぎり、或は道に當つて臥し、願くは侯君を乞うて、復、留まること朞年ならんと言つた。今、君も亦、然りで、路に臥して呼べども、還つて來ない。さて退いて此身を顧みると、我は山郡に空しく留連するのを慙ぢる。そして將軍旗下の兵や、軍部の役人が我が貧しいのを笑つて居る。今、君を迎へて酒を飲ましめるに對し、君は難じてはならない。官奴に約束して、花鈿を買ひ、衣裳を薰じ、雲髮を理めて、夜もよくは眠られない。曉來風雨が烈しくて、天も暗い。我つらつら其の由を思ふに、決して慳な譯ではない。諺に慳なれば風に値ひ、嗇なれば雨に値ふの說があるから言つたのである。そこで、詩を作つて媿謝すると、君には笑つて讙ばれる。歸つてからは、寒く縮まつて、いよいよ安らかではない。(王文誥いふ、

自二我慙山郡句一起、至レ此、皆自述下在レ齊飲二公擇一事上と。）要は當に君の牛、八百里を啖ふべく、豪氣は儒生が口中の酸を一洗することであらう。晉の王濟は帝の舅なる王愷と牛を賭射し、一發して、愷の愛牛八百里といふを破り、胡牀に據つて左右を叱し、牛心を探り、一割して便ち去つた。此故事に據つたのである。（王文誥いふ、惟此二句、是結、謂當日邀二公擇一、爲二兵吏所レ笑、今當レ作二豪飲一也、時有レ宴、提刑學士致レ語、具見二排場之盛一、所謂一二洗酸氣一者此耳と。）

坐上賦戴花。得二天字一

坐上戴花を賦して天の字を得たり

清明初過酒闌珊。
折得奇葩晩更妍。
春色豈關吾輩事。
老狂聊作坐中先。
醉吟不レ耐レ敧紗帽。
起舞從教落酒船。
結習漸消留不レ住。
却須レ還二與散花天一。

清明初めて過ぐ酒闌珊、
奇葩を折り得て晩更に妍。
春色豈關せんや吾が輩の事、
老狂聊か坐中の先を作す。
醉吟紗帽に敧るに耐へず、
起つて舞ふ從教落酒船に落つるを。
結習漸く消して留むれども住まらず、
却つて須らく散花天に還與すべし。

【字解】【一】清明　春分の次の氣節、四月五日頃。熙朝樂事に、清明前兩日、謂二之寒食一。闌珊、衰へる貌。白樂天の詩に、杯盤狼藉宜レ侵レ夜、風景闌珊欲レ過レ春。李羣玉の詩に、絲管闌珊歸客盡。【二】奇葩　司馬相如、美人賦に、奇葩逸麗。【三】春色豈關吾輩事　王注に、歐陽文忠公詩に、青春故非二老者事一。【四】老狂　吳越春秋に、子胥自謂二老狂一。【五】醉吟　唐、白居易傳に、自號二醉吟先生一。【六】敧紗帽　杜子美が李尚書聯句に、數語敧二紗帽一、高文擲二絲牋一。又、同じく杜子美の詩に、掉レ頭紗帽仄。【七】結習　維摩經に、時維摩詰室有二一天女一、見二諸天人聞二所レ說法一、便現二其身一、卽以二天花一散諸菩薩大弟子上、花至二諸菩薩一、卽皆墮レ地、至二大弟子一、便著不レ墮、天女曰、結習未レ盡花著レ身矣、結習盡者、花不レ著也。【八】散花天　白樂天の詩に、方丈若能來問レ疾、不レ妨兼有二散花天一。

【題義】前詩と同時の作である。李公擇と飲み、坐上で、戴花を賦し、天の字を得た。紀昀いふ、不レ卽不レ離、分際恰好と。又いふ、散花是此題熟典、妙與二三四一相生、便非二窠臼一と。窠臼とは、現成格式の意で、常を蹈み故を襲ふをいふ。

【詩意】李公擇と酒を飲んだが、折しも四月は、清明の節も過ぎ、風景闌珊（衰へる貌）として、春は過ぎんとする。ただ杯盤狼藉の中にも、奇葩を折り得て、晩れ方は更に妍しくあつた。併し歐陽公も言つたやうに、青春は故、老者の事でないから、春色と吾輩とは緣が遠い。昔、伍子胥は自ら老狂と謂つたが、我輩も老狂であるから、聊か此の坐中の先をなすのである。自樂天は自ら醉吟先生と號したが、我も醉うて頭を掉ひ、紗帽も仄いた。起つて舞ふにも、爛醉の後であるから、船に在るがやうで、兎角尻がすわらない。維摩詰の室で、一天女が諸天人の說法を聞いて居るのを見て、便ち其の身を現じた。そこで天華を諸菩薩や大弟子の上に散らした。花は菩薩に至つて、皆、地に墜ち、大弟子に至つて、便ち著いて墮ちない。天女はいふ、結習の未だ盡きないものは、花が身に著き、結習の既に盡きたものは、花が著かないと。我も結習漸く消えて花も住まらない。却つて須らく散花天に還與

すべきである。

夜飲次韻畢推官[一]

夜飲畢推官に次韻す

簿書叢裏過春風[二]。　簿書叢裏春風過ぐ、
酒聖時時且復中[三]。　酒聖時時且つ復中る。
紅燭照庭嘶駿裏[四]。　紅燭庭を照らして駿裏嘶き、
黄雞催曉唱玲瓏[五]。　黄雞曉を催ほして唱ふること玲瓏。
老來漸減金釵興[六]。　老い來つて漸く減ず金釵の興、
醉後空驚玉筯工[七]。　醉後空しく驚く玉筯の工。
月未上時應蚤散[八]。　月未だ上らざる時應に蚤く散ずべし、
免教壑谷問吾公[九]。　壑谷をして吾公を問はしむるを免かる。

【字解】【一】畢推官　畢仲孫、字は景儒、時に徐州の從事たり。本集、游二桓山一記に、同游有二畢仲孫者一、卽景儒之名也。推官は唐の時に置く。節度・觀察兩使の僚屬であつた。其の後、諸州、皆置く。また、軍事推官ともいふ。其次を衙推となす。宋は其の制を沿ふ。【二】簿書　漢書、禮樂志に、簿書期會。同じく賈誼傳に、大臣特以二簿書不レ報二期會之間一、以爲二大故一。前にも出づ。【三】酒聖　時時且復中　魏志に徐邈爲二尚書郎一、時時且復中　時科二酒禁一、而邈私飲、至二於沈醉一、校尉趙達問以二曹事一、邈曰、中二聖人一、達白二太祖一、太祖甚怒、鮮于輔進曰、平日、醉客謂二酒清者一、爲二聖人一、濁者爲二賢人一耳。竟得レ免。後、文帝見レ邈問曰、頗復中二聖人一不、對曰、昔子反斃二於陽穀一、御叔罰二於飲酒一、臣嗜同二二子一、不レ能二自懲一、時復中レ之。徐邈の事は前にも出づ。【四】紅燭　開元天寶遺事に、楊國忠子弟、每レ至二上元夜一、各有二千炬紅燭一、圍二于左右一。【五】駿裏　漢書音義に紬馬也、赤喙黑身。杜子美の詩に、駿馬時看金駿裏。又、願隨二金駿裏一、走置二錦屠蘇一。【六】黄雞催曉　白樂天の玲瓏歌に、誰道使君不レ解レ歌、聽レ唱黄雞與二白日一、黄雞催レ曉丑時鳴、白日催レ年酉前沒、玲瓏玲瓏奈二老何一、使君歌了汝更歌。【七】玲瓏　金玉の聲。班固の東都賦に、和鑾玲瓏。【八】金釵興　韓退之の詩に、金釵半醉坐添レ春。【九】玉筯工　唐文粹に、舒元輿玉筯篆志、秦丞相李斯、變二蒼頡籀文一爲二玉筯篆體一、尙二太古一。【一〇】教二壑谷問二吾公一　左傳、襄公三十年に、鄭伯有嗜レ酒、爲二窟室一、而夜飲レ酒、擊レ鐘焉、朝至未レ已、朝者曰、公焉在、其人曰、吾公在二壑谷一。

【題義】此詩も元豐元年三月の作である。王文誥いふ、時有二三畢一從レ公游、仲遠・仲游・仲孫と。又いふ、畢仲游、元祐初、入レ館、又畢仲遠爲レ令、公在レ黄、有下與二畢仲遠長官一書上、三畢竝從游と。

【詩意】官府の錢穀出納の記入や、日限を定めて租稅を取り立てる煩細な公務の中に、うかうかと春風を送つて來た。昔、徐邈が酒禁を犯して沈醉したとき、人に謂つて曰く、聖人に中てられたと。一體、醉客の或者は酒の清きものを聖人といひ、濁れるものを賢人といふ。文帝は邈に問うて曰く、復、聖人に中てらるるや否やと。邈は對へて曰く、時に復之に中てらるると。紅い燭が庭を照らして、長夜の飲をなし、何時歇むとも分らない。駿馬が嘶き、黄雞は曉を催して唱へる聲も玲瓏。玲瓏は朗かな聲である。韓退之の詩に、金釵半醉坐に春を添へるとあるが、老い來つては、金釵の興も漸く減ずる。そこで醉後に筆を執る。醉筆は奇であつて、玉筯篆體文字の工なるには我ながら驚かされる。月が未だ上らない中に、早く散會すべきである。早く歸ると泥醉を免れて、かの壑谷をして吾が公の何處に居るかを問はしめるやうなことは起らないであらう。鄭の伯有は、大の酒好きで、地の下へ穴倉を掘つて、其中で長夜の飲をなし、鐘を擊ち、樂を奏し、朝になつて、家臣の參朝するものが來て

も、未だ酒宴を已めない。或時、參朝の家臣が我が君は、何處におはすぞと尋ねたところ、伯有の從者が答へて、我君は壑谷の中におはするぞと言つた。此の故事に據つたのである。

芙蓉城　并敍

芙蓉城　并に敍

世傳。王迥子高。與仙人周瑤英遊芙蓉城。元豐元年三月。余始識子高。問之信然。乃作此詩。極其情。而歸之正。亦變風止乎禮義之意也。

【訓讀】世に傳ふ、王迥子高は、仙人周瑤英と芙蓉城に遊ぶと。元豐元年三月、余始めて子高を識る、之を問へば、信に然り。乃ち此詩を作り、其の情を極めて、之を正に歸す。亦、變風禮義に止まるの意なり。

【字解】【一】王迥子高　王子高、芙蓉城傳略（胡微之の作）に、王迥、字子高、虞部員外郎正路之次子、初遇二一女一、自言、周太尉女、謂レ王曰、我於二人間一嗜欲未レ盡、緣以冥契、當レ侍二巾幘一、是以奉尋、非二一朝一夕之分一也。又いふ、王初見レ周、趨而避レ之、懼不二敢褻一、更深困甚、視二牀戸一掩レ關、及二入解レ衣、聞二屏幃間有二喘息聲一、乃適女郎已脫レ衣而臥、天明、衾枕之屬、餘香不レ散、自レ是朝去夕至、凡百餘日。又いふ、一夕夢、周道服至、謂レ王曰、我居二幽僻一、君能一往否、喜而從レ之、但覺二其身飄然與レ周同舉一、須臾過二一嶺一、及二一門一、珍禽佳木、清流怪石、殿閣金碧相照、遂與レ王自二東箱門一入、循レ廊至二一殿亭一、甚雄壯、下有二三樓一相視而聳、亦甚雄麗、廊間半開、周忽入、王少留、須臾周與二一女郎一至、周曰、三山之事息乎、曰、雖二已息一、奈レ情何、於レ是拊レ掌而去、遂二巡東廊之門一、門啓、有二女流道裝而出者百餘人一、立二於庭下一、俄聞、殿上卷レ簾有二美丈夫一人一、朝服憑レ几、而庭下之女、循レ次而上、少頃憑レ几者起、簾復下、諸女流亦復不レ見、周遂命レ王、登二東廂之樓上一、有レ酒具、憑レ欄縱觀、山川清秀、梁上有二碑題一、曰、碧雲、其字則眞誥八龍雲篆、王未及レ下、一女郎、復登二是樓一、年可二十五一、容色嬌媚、亦周之比、周曰、此芳卿也、與レ我最相愛、芳卿蓋其字耳、夢レ之、明日周來、王語以レ夢、周笑曰、芳卿之意、甚勤也、王問何地、周曰、芙蓉城也、曰憑レ几者誰、三山之事何謂、周皆不レ對、問芳卿何姓、曰、與レ我同、王感二其事一、作レ詩遺レ周、周臨レ別留レ詩云、久事二屏幃一不二暫閑一、今朝離意荷闌珊、臨レ行惟有二相思淚一、滴在二羅衣一半斑。【三】變風　詩の周南・召南の二國風は、上の下を風化せるもの、之を正風といひ、自餘の十三國風は、下の上を風刺せるもの、之を變風といふ。

芙蓉城中花冥冥。
誰其主者石與丁。
珠簾玉案翡翠屏。
霞舒雲卷千娉婷。
中有一人長眉青。
炯如微雲淡疎星。
往來三世空鍊形。
竟坐誤讀黃庭經。
天門夜開飛爽靈。

芙蓉城中花冥冥、
誰か其主たるものぞ石と丁と。
珠簾玉案翡翠の屏、
霞は舒び雲は卷いて千娉婷。
中に一人長眉の青きあり、
炯として微雲の如く淡として疎星。
往來三世空しく形を鍊り、
竟に誤りて黃庭經を讀むに坐せらる。
天門夜開いて爽靈を飛ばし、

【字解】【一】花冥冥　詩、小雅に、維塵冥冥。杜子美の詩に、樹擺二離思一花冥冥。冥とはくらくして見とめ難い。【二】誰其主云云、王注に、石曼卿卒後、其故人有二見レ之者一、云、恍惚如二夢中一、言、我所レ主芙蓉城、欲レ呼二故人一共游、不レ諾、憤然騎二一騾一去。又、張師正の括異志に載す、慶曆中有二朝士一、冒レ晨赴二起居一、正逢遇見二美婦三十餘人並レ馬而行一、若二前導者一、俄見二丁觀文度一、按レ轡繼レ之而去一、有二一人一、最後行、朝士問曰、觀文將レ游二何處一、曰非也、諸女御迎一

無復白日乘雲軿。
俗緣千劫磨不盡。
翠被冷落凄餘馨。
因過緱山朝帝廷。
夜聞笙簫弭節聽。
飄然而來誰使令。
皎如明月入窗櫺。
忽然而去不可執。
寒衾虛幌風泠泠。
仙宮洞房本不扃。
夢中同躡鳳凰翎。
徑度萬里如奔霆。
玉樓浮空聳亭亭。
天書雲篆誰所銘。

復白日の雲軿に乘ることなし。
俗緣千劫磨すれども盡きず、
翠被冷落して餘馨凄たり。
緱山を過ぎて帝廷に朝するに因つて、
夜笙簫を聞いて節を弭めて聽く。
飄然として來る誰か使令するぞ、
皎として明月の窗櫺に入るが如し。
忽然として去り執るべからず、
寒衾虛幌風泠泠。
仙宮洞房本扃さず、
夢中同じく躡む鳳凰の翎、
徑に萬里を度つて奔霆の如し。
玉樓空に浮んで聳えて亭亭、
天書雲篆誰か銘する所ぞ。

芙蓉館主耳、時丁已在レ告、頃レ之聞レ卒。王文誥いふ、是所謂美丈夫憑レ几者也。【三】珠簾玉案　鮑照の詩に、珠簾無レ隔レ露、羅幌不レ勝レ風。三輔黃圖に、未央宮漸臺西有二桂宮一、中有二光明殿一、皆、金玉珠璣爲二簾箔一。襄陽記に、龍巢山、鉢帽峯尹喜石室內有二玉案仙經八卷一、在二案上一。【四】翡翠屏　翡翠にて飾れる屏風。かはせみの雄は赤羽雀、雌は青羽雀、漢書、賈山傳に、飾以二翡翠一。【五】嫣婷　美しい貌。杜子美の詩に、不レ嫁惜二嫣婷一。又、赤節引二嫣婷一。白樂天の詩に、嫣婷十五勝二天仙一。【六】中有二一人一　白樂天の長恨歌に、中有二一人一字太眞。異聞集に、龍女曰、紅妝千萬、笑語熙熙、中有二一人一、自然蛾眉。【七】長眉青　韓退之の華山女詩に、洗妝拭レ面著二冠帔一、白嚲紅頰長眉青。【八】如二微雲一　孟

遶レ樓飛步高玲瓏。
仙風鏘然韻流鈴。
蘧蘧形開如酒醒。
芳卿寄謝空丁寧。
一朝覆水不レ返レ瓶。
羅巾別淚空熒熒。
春風花開秋葉零。
世間羅綺紛膻腥。
此身流浪隨二滄溟一。
偶然相値兩浮萍。
願君收視觀二三庭一。
勿レ與二嘉穀一生蝗螟。
從渠一念三千齡。
下作二人間尹與レ邢。

樓を遶りて飛步すれば高うして玲瓏、
仙風鏘然として韻流鈴たり。
蘧蘧として形開いて酒の醒むるが如し、
芳卿寄謝して空しく丁寧。
一朝覆水瓶に返らず、
羅巾の別淚空しく熒熒。
春風に花開き秋に葉零つ、
世間の羅綺紛として膻腥。
此身は流浪して滄溟に隨ひ、
偶然として相値ふ兩浮萍。
願はくは君收視して三庭を觀せよ、
嘉穀と蝗螟を生ずること勿れ。
從せよ渠の一念三千齡、
下人間の尹と邢とに作るに。

浩然の詩に、微雲澹二河漢一、疎雨滴二梧桐一。【九】鍊レ形　酉陽雜俎に、眞元中有二一家一、因二打レ牆掘レ地、遇二石函一、發レ之見二物如レ絲滿レ函、飛出二於外一、驚視レ之、忽有レ人起二於函一、被二白髮一、長丈餘、振レ衣而起、卽失二所在一、方士云、此太陰鍊形人也。梁、陶宏景の眞誥に、魏夫人云、死經二太陰一、暫過二三宮一者、肉脫、脈散、血沈、灰爛、而五臟自生、骨如レ玉、七魄營侍、三魂守レ宅、或三二十年、復レ質成レ形、勝二於昔容一、名二鍊形一。吳筠の步虛詞に、眞化凝二正氣一、鍊形爲二眞仙一。【一〇】誤讀二黃庭經一　集仙錄に、謝自然日誦二黃庭經二十遍一、誦時有二童子一侍立、每二十遍一、卽將レ向二上界一去云、東華夫人曰、誦レ經、先讀二外篇一、大都精思誦讀者、獲レ福、麤行者招レ罪。唐書、藝文志に、老子黃庭經一卷。【一一】天門夜開　盧同の沈

山人詩に、天門九重高崔嵬、夜半醮祭夜半開。【一二】飛二爽靈一　太微靈書に、人有三三魂、一日爽靈、二日台光、三日幽精。【一三】白日乘二雲輧一　南史鄧先生傳に、白日神仙魏夫人忽來臨降曰、君有二仙分一、所二以故來一。輧は婦人の乗る牛車、神人は雲を以て車とする、杜子美の詩に、蓬萊織女廻二雲車一。裴硎封陟傳に、雲輧既去、臆戸遺レ芳。【一四】俗緣千劫磨不レ盡　逸史に、許誼巻卒、三日寤而題レ詩云、曉入二瑤臺一露氣清、坐中惟見許飛瓊、塵心未レ盡俗緣重、千里下レ山空月明。太平廣記に、逸史を引いて許瀍に作り、本事詩に許渾に作る。劫は刹那の反對、極めて永い時間、ここは一世の意に用ふ。【一五】翠被冷落　左傳昭公十二年に、雨レ雪、王皮冠・秦復陶（羽衣）、翠被、豹舄、執レ鞭以出。冷落は零落に同じ。楚辭、離騷に、惟草木之零落兮。注にいふ、皆墮るなり、草に零といひ、木に落といふと。【一六】凄二餘馨一　杜子美の詩に、夢覺有二餘馨一。【一七】過二緱山一朝二帝廷一　劉向列仙傳に、王子喬、周靈王太子晉也、好吹レ笙、作二鳳鳳鳴一、遊二嵩山一、後三十餘年、來二山中一、告二桓良一曰、告二我家一、七月七日、待二我於緱氏山頭一、至レ期、果乘二白鶴一、駐二山頭一、舉手謝二時人一去。【一八】聞二笙簫一　韓退之、謝自然の詩に、如レ聆二笙韻一、來ゝ自二冥冥天一。【一九】弭レ節聽　楚辭に抑レ志而弭レ節兮、注にいふ、按レ節徐行也と。楚辭、屈原九歌に、弭二節兮北渚一。【二〇】欲如二明月入二窗櫺一　江淹の擬悼婦詩に、明月入二綺窗一、彷彿想二蕙質一。宋玉の神女賦に、其少進也、皎如二明月舒二其光一。【二一】寒衾　梁元帝の詩に、寒衾夜夜空。【二二】虛幌　文選、江文通の王徵君詩に、鍊レ藥曬二虛幌一。幌は帷幔。【二三】風泠泠　班倢伃傳賦に、廣室陰兮幃幄暗、房櫳虛兮風泠泠。泠泠とは風の聲。宋玉、風の賦に、清清泠泠、愈レ病析レ酲。王注にいふ、自二天門夜開一、至二風泠泠一、以言二周初一至二時事一と。【二四】洞房　文選、楚辭、宋玉の招魂に、姱容脩態、絙二洞房一些。【二五】鳳凰翎　杜子美、薛判官の詩に、自云帝季女、喂レ雨鳳皇翎。其事は、則ち曲中に所謂夢中共跨二青鸞翼一ある。【二六】徑度　楚辭、遠遊に、凌二天地一以徑度。【二七】奔霆　王勃の尊師讃に、奔霆易レ駭。【二八】玉樓云云　王注に、玉樓亭亭、則曲中所謂一簇樓臺也。東方朔、十洲記に、崑崙山大墉城上安二金臺五所、玉樓十二所一。亭亭は高く聳え立つ。太公兵法に、高山磐上、其上亭亭。左太沖、魏都賦に、藐藐標危、亭亭峻峙。周敦頤の愛蓮說に亭亭淨植。【二九】天書雲篆　王注に、梁上有レ碑、題曰二碧雲一。而其字、則眞誥有二飛天之書、八龍雲篆一也。【三〇】飛步　郭璞の詩に、飛步登二玉闕一。【三一】玲瓏　唐韻に、伶俜を玲瓏に作る。玲瓏は、行いて正しからざるなり。古猛虎行に、少年惶且怖、伶俜到二他鄉一。【三二】仙風鏘然　李太白、大鵬賦序に、有二仙風道骨一、可二與神一遊八極之表一。鏘然は金石の聲。【三三】流鈴　王注に、道家有二流金火鈴一。度人經に、擲レ火萬里、流レ鈴八衝。吳綺、步虛詞に、鏘落制二六天一、流鈴威二百魔一。【三四】蓬蓬　形ある貌。莊子、齊物論に、俄然覺、則蓬蓬然周也。【三五】形開　同じく齊物論に、其寐也魂交、其覺也形開。【三六】寄謝　前漢の趙廣漢傳に、昇上亭長、寄レ聲謝レ我。【三七】丁寧　後漢書、郎顗傳に、丁寧再三、留二神於此一。【三八】覆水不レ返レ瓶　李太白の詩に、覆水卻收不レ滿レ杯。後漢、何進傳に、覆水不レ收、悔將二何及一。李太白の妾蔣命行に、雨露不レ上レ天、水覆難二重收一。【三九】羅巾　劉孝威の詩に、覺二淚溼一羅巾一。【四〇】熒熒　元微之の鶯營傳に、熒熒然猶螢二於菌席一。【四一】春風花開秋葉零　白樂天の長恨歌に、春風桃李花開日、秋雨梧桐葉落時。王文誥いふ、本傳末、原有二春花秋月悽愴悲泣而去一句一。以二其不レ可一聯屬一刪去云云と。【四二】臚腥　魯康の絕交書に、漫之羶腥。禮記に、其臭羶。【四三】滄溟　十洲記に、滄海在二北海中一、水皆蒼色、別有二圓海水一、色正黑、謂二之溟海一。鮑照の詩に、流溟漸冉經二三齡一。武帝內傳に、諸仙玉女聚二居滄溟一。【四四】相值兩浮萍　白樂天の答二微之一詩に、與レ君相遇知何處、兩葉浮萍大海中。【四五】收視　文選、陸士衡の文賦に、皆收視返聽。【四六】觀二三庭一　王注に、此所謂歸二之正一也。三庭は道家の事、黃庭內景經に、黃庭有二內景・外景・中景一。【四七】蝗螟　同じく內景經に、三庭佳穀生二蝗螟一。王注にいふ、言色然之賊レ身如二蝗螟之賊一佳穀一也と。左傳、莊公七年に、秋無二麥苗一、不レ害二嘉穀一也。春秋、隱公四年に、螟、杜預いふ、蟲食二苗心一者と。說文に、蝗蟲也と。【四八】一念三千齡　楊妃外傳に、由二此一念一、又不レ得レ居レ此、復墮二下界一、且結二後緣一。神仙傳に、馬明先生隨二神女一還レ岱、見二安期生一、語二神上皇意一、玉妃因自悲曰、由二此一念一、當二復墮二下界一。陳鴻の長恨歌傳に、方士至二玉眞太妃院一、致二女一曰、昔與二女郎一游二於安息西海之際一、憶此已三千年矣。【四九】尹與レ邢　史記、外戚世家に、漢武帝尹夫人與二邢侈一同時並幸、詔不レ得二相見一、尹自請、願望見邢、帝許レ之、卽令二他夫人飾爲レ邢來前一、尹見レ之曰、此非二邢身一也、其狀貌、不レ足二以當一人主一矣、於レ是帝使レ邢衣二故衣一、獨身前來一、尹見レ之曰、此眞是也、乃俛而泣、自痛二其不レ如也。

【題義】此詩も元豐元年三月の作。王迥の爲に芙蓉城を賦したのである。王荆公も嘗て此詩に和したことがある。首にいふ、神仙出沒藏二杳冥一、帝遣二萬鬼一驅二六丁一と。荆公は嘗て兪紫芝の爲に之を誦す。紫芝は乃ち紙に書せんと請ふと、荆公曰く、此れ戲れのみ、以て訓となすべからずと。故に傳はら

ない。清江、孔毅父集に、呈二王子高殿丞一絶句が一首ある。それは、天上人間事不レ同、相思何日卻相逢、芙蓉城在蓬萊外、海闊波深千萬重といふのであるが、亦、此事を指す。

【詩意】王子高が仙人周瑤英と遊んだといふ芙蓉城は、虛無縹緲、（遠くかすかなる貌）の間にあつて、城中の花も、幽昧にして認め難い。城の主たるものは誰であるか。石曼卿と丁觀文度とである。石曼卿の歿した後、其の故人の中に、之を見たものがある。其の人の言によると、恍惚として夢中に、曼卿はいふ、我の主とする所は芙蓉城であるが、今、故人を呼んで共に遊ばうとすると。其の人は諾しなかつたから、憤然として一騾に騎つて去つたといふことである。又、慶曆中、一朝士が朝早く通衢に三十餘人の美婦が馬を竝べて行き、貴人を前導でもするが若きを見た。俄にして丁觀文度が、手綱を按じて之に繼いて去つた。そこで朝士は列の最後の士に問ふと、諸女御が芙蓉館主を迎へるのであると言つた。時に丁は告に在つたが、（暇を乞うて家に在る）頃くして其の卒するを聞いた。（詩中の美丈夫憑レ几は、丁觀文度である）さて城中は殿閣金碧相照らし、珠の簾は露を隔つる樣子もなく、羅の幌も、吹く風に堪へない。霞は舒び、雲は卷いて一千の娉婷（美しい女）が居る。（以上四句、芙蓉城を寫し出して周瑤英の事に引き入れる。）中に一人、長い青い眉のものが居る。其の容をいふと、炯（光あるをいふ）として微雲の如く、淡として疎星のやうである。彼は三世を往來して、空しく形を鍊り、誤つて黃庭經（道經の名）を讀んで、神仙となつた。天門は高くして九重、夜半に開いて爽靈を飛ばす。人に三魂がある。一に爽靈、二に台光、三に幽精である。復、白日、雲軿車に乘るものがない。

塵心が未だ滅じないで、俗緣千劫磨すれども、盡きない。併し、仙人の翠被もいつしか零落し、夢覺めて餘馨が凄まじきやうである。王子喬は、好んで笙を吹いて、鳳凰鳴を作し、伊・洛二水の間に遊ぶ。道士浮丘生といふもの、之を接引して嵩山に上る。後、白鶴に上り、緱氏山頭に至り、手を擧げて時人に謝し去つたといふことである。其の緱氏山を過ぎ、帝廷に朝するに因つて、夜、笙簫を聞き、節を弭めて聽く。飄然として來るものは、誰が使令するのであるか、皎として明月の窗櫺（窗にとりつける格子）に入るやうで、忽然として去つて之を執へることが出來ない。虛しき帷幔には風が泠泠と淸く吹いて居る。（王文誥いふ、自下中有二一人一句上、至レ此、敍二冥契事一畢と。）仙宮洞房は扃して居ない。（王文誥いふ、此句入レ夢之因と。）夢の中に同じく鳳凰の翎（鳥の羽）を躡んで、直に萬里を度つて雷霆のやうに奔る。玉樓は高く虛空に浮んで、聳えて亭亭たり、梁上の碑は題して碧雲といふ。其の飛天の書、雲篆の書は、誰が銘したのであらう。樓を遶つて飛步すると高くて、步行することも正しくない。仙風が鏘然として韻致があつて、萬里鈴を流す。莊周が所謂蘧蘧として形の開くやうな趣がある。其の寢ぬるや、魂が交はり、其の覺むるや、形が開いて酒の醒めるがやうである。（王文誥いふ、此句夢醒と）芳卿は聲を寄せ、我に謝して、丁寧が過ぎる。一朝相別れると、覆水は、もとの餅には收め難い。羅巾の別淚は、空しく熒熒として光つて居る。（仙宮洞房の句より此に至る。同游及び周と別るるを敍す。本傳の事皆畢る。）春風に花が開き、秋に葉が零らる。世間の羅綺は、我より見ると、紛として韉腥の如くである。此身は此方彼方と流浪して滄海に隨ひ、偶然にも兩葉の浮萍の樣に相

値つた。(以上の四句は、子高の爲に追憶の辭をなしたのである。)どうか、王子高には、收視返聽して内景・外景。中景の三庭を觀ぜられるやうに。そして、蝗螟をして佳穀を害せしめてはならない。螟は苗心を食ひ、蝗は蟲といふ害蟲である。色慾の身を害するは蝗螟の佳穀を賊すると同じやうである。神仙傳に、馬明先生は神女に隨つて岱に還り、安期生を見る。神女に語つていふやう。昔、女郎と安息西海の際に游んだが、此を憶へば已に三千年であると。一念三千年、人間の尹夫人と邢夫人となるに從する。(王注に、正是二夫人耳、謂彼自墮落、勿レ效レ尤也とある。王文誥いふ、自二春風花開句一至レ終、皆斷語、就二子高一作二歸結一也、末二句謂、如不レ能二歸レ之以レ正、則此念終在四必將三牽レ周重會二人間一、而所謂極二其情一者、將三終不レ可レ止矣、公往往以レ開レ筆作レ收、故其餘意無レ窮、而按レ之入レ細、則未レ有下不二一綫穿レ下者上也云云と。)

續麗人行　并引

續麗人行　并に引

李仲謀家。有二周昉畫背面欠伸一。極精。戲作二此詩一。

【訓讀】李仲謀が家に、周昉が畫ける背面欠伸の内人あり。極めて精、戲れに此の詩を作る。

【字解】【一】周昉　張彥遠が名畫記に、周昉、字景玄、官至三宣州長史一。唐朝名畫錄には、周昉、字仲朗、京兆人。【二】欠伸　あくびしのびする。曲禮上に、侍二坐於君子一、君子欠伸、撰二杖屨一、視二日蚤莫一、侍坐者請レ出。【三】内人　宮人といふに同じ。妓女の宜春院に入る、之を内人といふ。

深宮無レ人春日長。
沈香亭北百花香。
美人睡起薄梳洗。
燕舞鶯啼空斷腸。
畫工欲レ畫無レ窮意。
背立東風初破レ睡。
若教回レ首却嫣然。
陽城下蔡俱風靡。
杜陵飢客眼長寒。
蹇驢破帽隨金鞍。
隔レ花臨レ水時一見。
只許腰肢背後看。
心醉歸來茅屋底。
方信人間有二西子一。

深宮人無くして春日長く、
沈香亭北百花香し。
美人睡起して薄か梳洗し、
燕舞ひ鶯啼いて空しく斷腸。
畫工は窮まりなきの意を畫かんと欲し、
東風に背立して初めて睡を破る。
若し首を回して却つて嫣然たらしめば、
陽城下蔡の飢客眼長へに寒く、
杜陵の飢客眼長へに寒く、
蹇驢破帽金鞍に隨ふ。
花を隔て水に臨んで時に一たび見る、
只許す腰肢背後に看ることを。
心醉して歸り來る茅屋の底、
方に信ず人間に西子ある。

【字解】【一】沈香亭　唐の明皇は、外國が沈香材を貢したので、沈香亭を作つた。開元中、禁中では牡丹を重んじ、紅・紫・淺紅・通白四本を得。上は興慶池の東、沈香亭の前に植う。會〻花、方に盛に開く、上は、太眞妃と遊賞し、李龜年に命じて、金花牋を持して、宣して翰林供奉李白に賜うて、清平調を進めしむ。李太白が清平調の三に、名花傾國兩相歡、長得下君王帶レ笑看上、解二釋春風無レ限意一、沈香亭北倚二闌干一。【二】梳洗　崔湜の詩に、梳洗懶無レ情。【三】斷腸　魏・文帝の詩に、念二君客遊一思レ斷レ腸。白樂天、長恨歌に、夜雨聞レ鈴腸斷聲。【四】嫣然　笑ふ貌。宋玉の賦に、臣里之美者、莫レ若二臣東家之子一、嫣然一笑惑二陽城一、迷二下蔡一云云。【五】陽城・下蔡　二縣の名。楚の貴介公子の封ぜられた所。

君不見孟光擧案(一三)　君見ずや孟光案を擧げて眉と齊しきを、
與眉齊。
何曾背面傷春啼。　何ぞ曾て背面春を傷んで啼かん。

【題義】此詩は元豐元年(東坡、四十三歲の時)三月の作。杜子美の麗人行に續いで作つたから、續麗人行といふ。杜子美の麗人行は、專ら虢・秦の二國夫人を指し、東坡の此詩は、獨り、太眞を指す。美人の睡起背面の態を寫すのであるから、起句は、美人の氣倦み、情慵くて、睡味の濃かなるを言つて居る。

【六】杜陵飢客　本注にいふ。杜子美、自謂衣不レ蓋レ體、常寄三食於人一、奔走不レ暇、常恐レ轉三死溝壑一、可レ謂三飢客一矣と。【七】眼長寒　又、詩云、秋山眼冷魂未レ歸。【八】蹇驢　蹇は跛、驢はうさぎ馬。說文に、似レ馬長耳。杜子美が章左丞に贈る長篇の詩に、騎レ驢三十載、旅食京華春、朝控三富兒門一、暮隨三肥馬塵一。【九】只許腰肢云云　杜子美の麗人行に、背後何所レ見、珠壓三腰衩一穩稱レ身。【一〇】心醉　見とれる。莊子、應帝王に、列子見レ之心醉。晉の郭奕、字大業、大原人、高爽有三識量一、少レ所三推先一、見三阮咸一、心醉不レ覺歎焉。【一一】茅屋底　茅屋は、宋書、裴松之傳に、起三茅屋數間一、妻子恒苦三饑寒一。底、一本に裏に作る。【一二】西子　西施といふ美婦人。孟子、離婁篇に、西子蒙三不潔一、則人皆掩レ鼻而過レ之。吳越春秋に、若邪溪傍に、東施家・西施家あり。西施、姓は施にして、西にあり。越王、范蠡の計を用ひて、之を吳王に獻ず。其後、吳を滅し、蠡、復、西施を取り、扁舟に乘り、五湖に遊んで歸らず云云。【一三】孟光擧レ案云云　後漢書、逸民傳に、梁鴻、字は伯鸞、扶風の人。業を大學に受け、鄉里に歸る。勢家、其の高節を慕ひ、多く之に女さんと欲す。鴻、並に娶らず。同縣の孟氏の女、醜きも、對を擇んで嫁せず。父母、其故を問ふ。女曰く、賢なる梁伯鸞の如きを得んと欲すと。鴻、聞いて之を聘す云云。後、共に霸陵山に入る。吳に至つて、梁鴻至つて貧しく、人の爲に賃春す。歸る每に、妻爲に食を具へ、按を擧げて眉に齊うす云云。

【詩意】深宮の中は、寂寥として人も居ない。春の日は遲遲として長く、沈香亭の北は、百花が方に香しい、此時美人は睡から起きたが、情が慵く、體も弱くて、濃い化粧をするに懶く、ただ薄かつて面を洗ふ、梁の上には燕が舞ひ、階の下には鶯が囀つて居る。深宮は轉た日が長く、閨怨結んで解けやらない。空しく腸を斷つのみである。(沈香亭北の句は、李太白が清平調の句を引用したものである。)畫工が美人の形を圖し、閨怨無窮の意態を寫さうとするには、正面に畫いたのでは、必ず盡くし得なからう。それで、特に意匠を用ひ、美人が春風に背き立つて、始めて睡の破れた狀を畫いたのである。背立して面を見せない中に、自ら無窮の意を含んで居る。もし、此の背面美人をして、首を回して嫣然と一笑せしめば、陽城下蔡の貴介公子も、悉く心を迷はして、風の如くに靡くのであらう。(畫工の事は、西京雜記に、元帝、後宮既多、不レ得三常見一、乃使三畫工圖レ形、案レ圖召幸レ之云云と。見えて居る。)杜陵に住める飢客の杜子美は、常に悽悽として面に溫色がなく、眼中は長へにすさまじい。(杜子美の所謂眼冷。)彼は跛の驢馬に乘り、破れた帽を戴き、金色の鞍に跨れる權貴の後に隨ひ、曲江の邊に行く。花を隔てて、水に臨み、一たび美人を瞥見すると、正しく面をば見せないので、ただ背後から腰肢の風態を見るを許した。故に其の詩に、背後のさまを賦して、顏色の美をば說かない。周昉が畫いた背面の美人は、杜子美の麗人行にいへる麗人と、其形が相同じいから、畫を以て子美の所見に擬したのである。杜子美は背後より一たび見てすら、なほ恍惚として心醉ひ、茅屋に歸つた後、嘆ずらく、今の世にも、古の所謂西子の美なきにあらずと。かく信じた子美に、背面美人の首を回

して一笑するさまを見しめば、當に如何なるべきぞ。さて、梁鴻が妻の孟光は、婦道を守つて、其の夫を敬すること賓の如く、食を進めるに、案を擧げて眉と齊うした。今に至るまで、賢婦人と稱せられる。さるを、婦道を修め得ないで、艷情を恣まにし、閨怨を懷いて、背面、春色を傷むのは、孟光の風を聞かば、少しく愧づべきであると、誡めを寓したのであらう。

【餘錄】杜子美の麗人行は、

三月三日天氣新、長安水邊多二麗人一、態濃意遠淑且眞、肌理細膩骨肉勻、繡羅衣裳照二暮春一、蹙金孔雀銀麒麟、頭上何所レ有、翠爲二鬫葉一垂二鬢脣一、背後何所レ見、珠壓二腰衩一（衩は裾の上に繫る帶。）穩稱レ身、就レ中雲幕椒房親、賜レ名大國虢與レ秦、紫駞之峯出二翠釜一、水精之盤行二素鱗一、犀筯厭飫久未レ下、鑾刀縷切空紛綸、黃門飛レ鞚不レ動レ塵、御厨絡繹送二八珍一、簫鼓哀吟感二鬼神一、賓從雜遝實二要津一、後來鞍馬何逡巡、當レ軒下レ馬入二錦茵一、楊花雪落覆二白蘋一、青鳥飛去啣二紅巾一、炙レ手可レ熱勢絕倫、愼莫二近前一丞相嗔。

といふのである。唐の楊太眞は、玄宗皇帝の鍾愛斜めならずして、天寶の初めには、遂に冊せられて、貴妃に進んだ。貴妃に三姉がある。韓・虢・秦の三國に封せられ、何れも國夫人と爲り、宮掖に出入し、恩寵聲焰が天下に震ひ、脂粉の費を賜はる歲毎に錢百萬、楊家一門の榮華は人の羨む所となつた。虢國夫人の品行が修らないで、楊國忠と亂らがましく、人の見る目も憚らなかつた。杜子美は因つて此の麗人行を作つて之を刺る。全篇、富麗の事をいひ、驕貴の氣象を形容して宛然として目に在る。末句は微意を以て諷刺を寄せたのである。

聞李公擇飲傅國博家大醉。二首

李公擇、傅國博の家に飲み、大醉するを聞く　二首

兒童拍レ手鬧黃昏。
應笑山公醉習園。
縱使先生能一石。
主人未肯獨留髡。

襄陽歌に、落日欲レ沒峴山西、倒着二接羅一花下迷、襄陽小兒齊拍レ手、攔レ街爭唱白銅鞮、傍人借問笑何事、笑殺山翁醉似レ泥。【四】黃昏・淮南、天文に、日至二于虞淵一、是曰二黃昏一。【五】山公・晉の山簡をいふ。字は季倫、濤の子。仕へて征南將軍となり、襄陽を鎭す。毎に習家の池上に遊び、酒を置き輒ち醉ひて歸る。之を名けて高陽池といふ、時に兒童あり、歌つて以て之を嘲る。【六】習園・習氏の園をいふ。諸習氏は荊土の豪族で、佳園池あり。簡、出づる毎に、多く池上に之いて置酒す。【七】使二先生能一石一・史記、滑稽傳に、齊威王置二酒後宮一、召二淳于髡一、賜二之酒一、問曰、先生能飲幾何而醉、對曰、臣飲一斗亦醉、一石亦醉、威王曰、先生飲一斗而醉、惡能飲二一石一哉、髡曰、賜二酒大王之前一、執法在レ旁、御史在レ後、髡恐懼俯伏、而飲不レ過二一斗一、徑醉矣、日暮酒闌、合レ尊促レ坐、男女同レ席、履舄交錯、杯盤狼藉、堂上滅レ燭、主人留レ髡而送レ客、羅襦襟解、微聞二薌澤一、當二此之時一、髡心最歡、能飲二一石一。

【字解】【一】李公擇・李常、字は公擇、官は兵部尙書に至る。前に出づ。【二】傅國博・傅楊は龍圖閣直學士禮部侍郎燕公肅の外曾孫で、徐州に守たり。國博は、國子博士をいふ。【三】兒童拍手云云・李太白の

【題義】此詩は元豐元年三月の作。李常が傅楊の家で酒に醉つたが、東坡は偶病氣で行かなかつた

から、此二首を寄せたのである。

【詩意】晉の山簡は、平生酒を嗜み、高陽の習家の園に至る毎に、大に醉ひ、日暮れて倒載して歸る。小供等は黄昏に手を拍つて何事か鬧しくいふのである。應に山公(山簡)の習氏の園に醉ひて、正體もなくなつたことを笑ふのであらう。昔、淳于髡は、一斗飲むも醉ひ、一石も亦醉ふと言つた。たとひ、先生をして能く飲むこと淳于髡のやうに一石ならしめるも、主人は未だ肯て獨り、髡をば留めないであらう。髡はいふ、日暮れて酒闌に、男女席を同うし、杯盤狼藉、堂上燭を滅し、主人は髡を留めて客を送る。此時に當り髡の心は最も歡び、能く一石をも飲むと。此詩の結句は此故事に據つたのである。

不肯惺惺騎馬廻。
玉山知爲玉人頹。
紫雲有語君知否。
莫喚分司御史來。

【字解】【一】惺惺騎馬廻　劉禹錫の揚州春夜詩に、寂寂獨看金燼落、紛紛只見玉山頹、自羞不是高陽倡、一夜惺惺騎馬廻。惺惺は、心のさとき貌。【二】玉山云云　世說、容止に山公稱嵇叔夜之爲人也、巖巖若孤松之獨秀、其醉也忽若玉山之將頹。玉山も玉人も容姿の美しきをいふ。【三】紫雲　唐闕記に、杜牧爲御史、久之、分務洛陽、時、李聰罷鎮閒居、聲妓豪華、爲當時第一、嘗宴客、女妓百餘人、皆殊色、牧瞪目注視、良久問曰、閒有紫雲者、孰是、宜以見惠、李俯而笑、諸妓皆回首破顏、牧自飲三爵、朗吟而起曰、華堂今日綺筵開、誰喚分司御史來、忽發狂言驚滿座、兩行紅粉一時回、意氣閒逸、傍若無人。

【詩意】だんだん夜が更け行き、寂寂として金燼落ち、紛紛として玉山頹る。玉人(美しき人)の酒に醉ひ倒れるは、玉山の將に頹れんとするがやうである。自分は迚も酒豪である高陽、山公の倡とはなれないから、一夜惺惺として心もさとく、馬に騎つて廻る。昔、李聰が客を宴したとき、女妓百餘人皆殊色があつた。杜牧は目を瞪して注視していふ、紫雲といふ美人ありと聞く、どの人か、どうか惠まれよと、李聰は笑ひ、諸妓も皆、頭を回して破顏した。牧は自ら三爵を飲んで、朗吟して起つた。紫雲の言葉を君知るや否や、分司御史の杜牧を喚んで來てはならない。

傅子美召公擇飲。偶以病不及往。公擇有詩。次韻

傅子美公擇を召して飲む、偶病を以て往くに及ばず。公擇詩あり、韻に次す

樊素阿蠻皆已出。
使君應作玉箏歌。
可憐病士西窗下。
一夜丹田手自摩。

【字解】【一】傅子美　子美は傅國博(傅楊)の字である。【二】樊素・阿蠻　共に唐の妓女の名。白樂天の詩に、櫻桃樊素口、楊柳小蠻腰。【三】玉箏　梁元帝の箏詩に、瓊柱動金絲、秦聲發趙曲。常建の詩に、精氣微。太微雲書に、清水鄉敖邱里開玉蘂彈玉箏。【四】丹田　道家では、人身臍下三寸を丹田と稱す。黄庭外景經に、丹田之中、

丹田、名二藏精宮一。

【題義】此詩も前詩と同じ時の作である。東坡は病の爲に傅子美の宅に赴くことが出來なかつた。公擇が詩を示されたから、其韻に次したのである。紀昀いふ、合二起句一觀レ之殊不レ雅と。

【詩意】傅子美には李公擇を招いて、酒宴を開かる。名妓の樊素も阿蠻も、皆已に席に出でて、使君（刺史をいふ、李公擇を指す）は應に玉箏の歌を作ることであらう。ただ憐れむべきは、此の病士で、（東坡自ら言ふ）西窓の下に在つて、一夜臍下丹田の處を手自ら摩する。道家修煉の爲ではなくて、療治の爲である。

觀二子美病中作一嗟歎不レ足因次レ韻

子美病中嗟歎して足らざるを作るを觀、因つて韻に次す

百尺長松澗下摧。百尺の長松澗下に摧く、
知君此意爲レ誰來。知る君が此意誰が爲に來る。
霜枝半折孤根出。霜枝半は折れて孤根出で、
尚有二狂風急雨一催。尚ほ狂風急雨の催ほすあり。

【字解】【一】嗟歎不足　毛詩序に、言レ之、不レ足、故嗟二歎之一、嗟二歎之一不レ足、故永二歌之一云云。【二】澗下摧　左太沖の詠史詩に、鬱鬱澗底松、離離山上苗、以二彼徑寸莖一蔭二此百尺條一。【三】霜枝　陳後主の詩に、霜枝慘柳發。【四】狂風　杜子美の詩に、霹靂罔兩兼二狂風一。

【題義】傅子美が病中の作に次韻したのである。紀昀いふ、即香山不レ知秋雨意、更遺次二如何一意と。

【詩意】病中閑を得て、子美は詩を作る。情が中に動いて言に形はる。之を言つて足らず、之を嗟歎する。之を嗟歎して足らず、之を永歌する。東坡は子美の詩に次韻していふ、子美の永歌は、百尺の長松が澗下に摧ける趣がある。我は知る君が此意は誰が爲に來るかを。霜枝も半は折れるし、孤根も出でる。それを尚ほ狂風急雨が催ほして虐げて居る。

起伏龍行　并敍

起伏龍行　并に敍

徐州城東二十里。有二石潭一。父老云。與二泗水一通。增損清濁。相應不レ差。時有二河魚一出焉。元豐元年春旱。或云置二虎頭潭中一。可二以致雷雨一。用二其說一。作二起伏龍行一。

【訓讀】徐州城東二十里、石潭あり、父老いふ、泗水と通じ、增損清濁、相應じて差はず。時に河魚出づるありと。元豐元年春旱す。或はいふ、虎頭を潭中に置かば、以て雷雨を致すべしと。其說を用ひて、起伏龍行を作る。

【字解】【一】石潭　潭は淵、水の極めて深き處。【二】泗水　即ち泗河、山東泗水縣に出づ、四源并發するが故に名く。今の泗河は、古の泗水の上游。【三】河魚　史記、秦始皇紀に、河魚大上。

古今體詩　觀子美病中作嗟歎不足因次韻　起伏龍行并敍

何年白竹千鈞弩。何れの年か白竹千鈞の弩、
射殺南山雪毛虎。射殺す南山雪毛の虎。
至今顱骨帶霜牙。今に至るまで顱骨霜牙を帶び、
尚作四海毛蟲祖。尚ほ四海毛蟲と祖を作す。
東方久旱千里赤。東方久しく旱す千里の赤、
三月行人口生土。三月行人口土を生ず。
碧潭近在古城東。碧潭は近く古城の東に在り、
神物所蟠誰敢侮。神物蟠る所誰か敢へて侮らん。
上敲蒼石擁巖竇。上蒼石を敲てて巖竇を擁し、
下應清河通水府。下清河に應じて水府に通ず。
眼光作電走金蛇。眼光は電と作りて金蛇を走らし、
鼻息爲雲擢烟縷。鼻息は雲となりて烟縷を擢んづ。
當年負圖傳帝命。當年圖を負うて帝命を傳へ、
左右羲軒詔神禹。羲軒を左右して神禹に詔ぐ。

【字解】【一】千鈞弩　三國志の魏、杜襲傳に、千鈞之弩、不ㇾ爲ㇾ鼠ㇾ發ㇾ機。【二】射殺南山雪毛虎　後漢、南蠻傳に、板楯者、秦昭襄王時、有二一白虎一、常從二羣虎一、數遊二秦蜀巴漢之境一、昭王重募二國中一、能殺ㇾ虎者一、時有二巴郡閬中夷人一、能作二白竹之弩一、登ㇾ樓射二殺白虎一、昭王嘉ㇾ之、乃刻ㇾ石盟要、夷人安ㇾ之。【三】顱骨帶二霜牙一　文選の海賦に、顱骨成ㇾ嶽。【四】毛蟲祖　漢書、五行志に、時則有二毛蟲之孽一。【五】東方久旱　尙書故實に、南中久旱、以ㇾ繩繫二虎頭骨一、投二有ㇾ龍處一、入ㇾ水、卽數人牽制不ㇾ定、俄頃雲起、潭雨亦隨下、龍畏ㇾ虎、雖二枯骨一、能動ㇾ之如ㇾ此。劉禹錫嘉話亦云。【六】千里赤　劉向說苑に、晉平公時、赤地千里。【七】巖竇　巖穴に同じ。徐鉉の詩に、泉鳴細二巖竇一、鶴淚眇二雲濤一。【八】水府　姚合の詩に、探ㇾ玉上二山巔一、探ㇾ珠入二水府一。【九】眼光作ㇾ電　晉書に、王戎眼爛爛、如二巖下電一。【一〇】金蛇　電光の形容、陸游の詩に、百尺金蛇電掣ㇾ空。【一一】擢二烟縷一　杜子美の詩に、如二絲氣或上一、爛漫爲二雲雨一。【一二】負ㇾ圖傳二帝命一　帝王世紀に、龍馬出二圖於河一、伏羲觀ㇾ之、以畫二八卦一、黃帝言、余夢兩龍挺二白圖一、以授二余於河之都一。又、洛出二龜書一、以賜二神禹一、洪範是也。河圖書に、舜以二太尉一卽二帝位一、與二三公一臨觀、黃龍五采負ㇾ圖出二舜前一。左傳、昭公十七年に、郯子曰、太昊氏以ㇾ龍紀、故爲二龍師一而龍名。杜預いふ、太皞伏羲氏以ㇾ龍命ㇾ官と。【一三】羲軒　大昊伏羲氏黃帝軒轅氏をいふ。【一四】懷ㇾ寶但貪ㇾ眠　張華、博物志に、龍抱ㇾ寶而眠、謂二之蟄龍一。【一五】赤龍白虎戰二明日一　東坡の自注に、是月丙辰、明日庚寅。劉禹錫言、以二虎頭一置二龍潭中一、威猛相擊、其勢必鬬、則可二以風雨一、或遇二歲旱一、爲之有ㇾ驗。易林に、白龍赤虎、戰鬬俱怒。【一六】鬬二兩雄一　韓非子、揭櫫篇に、一棲兩雄、其鬬嗷嗷。一棲に兩つの雄がすめば、其の鬬嗷嗷(爭鬬の貌)といふ意。史記、孟嘗君傳に、秦・齊勢不二兩雄一。【一七】煩二一怒一　洞庭靈姻傳に、洞庭龍君謂二柳毅一曰、錢塘君、我愛弟也、其勇過ㇾ人、堯遭二洪水一九年、乃此子一怒耳。

爾來懷寶但貪眠。爾來寶を懷いて但眠を貪り、
滿腹雷霆瘖不吐。滿腹の雷霆瘖として吐かず。
赤龍白虎戰明日。赤龍白虎明日に戰ひ、
倒卷黃河作飛雨。倒に黃河を卷いて飛雨を作す。
嗟我豈樂鬬兩雄。嗟吾豈兩雄を鬬はすを樂まんや、
有事徑須煩一怒。事あれば徑に須らく一怒を煩はすべし。

【題義】此詩も元豐元年三月の作。唐宋詩醇の評に、興ㇾ雨是龍、致ㇾ雨是虎、首四句、從ㇾ虎說起、更不ㇾ說二及雷雨一、次點二出久旱一、次言二龍之神靈一、而以二懷ㇾ寶貪ㇾ眠一句一煞住、突接赤龍白虎鬬二明日一四句、結二盡全篇一、怪怪奇奇、不ㇾ可二方物一とある。

【詩意】元豐元年の春、大に旱した。或はいふ、虎頭を潭中に置けば、以て雷雨を致すことが出來ると。其說を用ひて此詩を作つていふ、南山に白毛の虎が居る。常に羣虎を從へて、秦の蜀巴漢の境に遊ぶ。秦の王は、國中に虎を殺すべきものを募つた。時に巴郡の人、白竹の弩を以て樓に登り、白虎を射殺した。今に至るまで顱骨（頭蓋骨）は嶽を成して、霜牙を帶びる。そして相變らず四海の毛蟲の祖となつて居る。さて東方が久しく旱して、赤地は千里、旅行の人も水を得ないで、口に土を生ずる有樣である。幸に碧潭が近く古城の東に在る。潭中には、神龍が蟠つて居て、誰も之を侮るものはない。神龍は、上は蒼石を敍てて、巖穴を擁し、下は淸河に應じて、水府に通ずる。又、眼の光は爛爛と電光となつて、金蛇を走らす。そして鼻息は雲となつて、縷の如く擺んでで居る。昔、龍馬が圖を負うて黃河から出たが、伏羲は之を觀て、八卦を畫し、又龍師となつて、龍を以て官に命じた。舜帝が帝位に卽くと、黃龍は圖を負うて舜の前に見はれた。又、洛水よりは龜書を出して、上帝の命を傳へる。卽ち神龍は、伏羲氏・軒轅氏を左右して、神禹に詔げる所があつた。それは所謂洪範である。爾來、神龍は寶を懷いて、但、眠を貪り、滿腹の雷霆も、瘖（啞）の如く、聲を吐かない。伏龍を起して、旱を救はうと丙辰の月、虎頭を龍潭に投じた。龍は虎を畏れて居るから、枯骨と雖へも、之に會へば變がある。果して白龍と赤虎と、威猛相擊ち相戰ひ、烈しい風雨が起つた。宛ら黃河を卷いて雨を飛ばしたのである。ああ吾は、猥りに兩雄を鬪はすことを樂まない。ただ事があれば徑に須らく其の一怒を煩はすべきである。（洞庭の龍君は柳毅にいふ、錢塘君は、我の愛弟で、其の勇は人に過ぐる。堯帝が洪水に遭ふこと九年であつたのは、實は此子が一怒の結果であつた。）

聞公擇過雲龍張山人。輒往從之。公擇有詩。戲用其韻

公擇、雲龍張山人に過ぎると聞き、輒ち往いて之に從ふ。公擇詩あり、戲れに其の韻を用ふ

我生固多憂。肉食嘗苦墨。
我が生は固より憂多し、肉食するも嘗に墨を苦しむ。
軒然就一笑。猶得好飲力。
軒然として就いて一笑し、猶ほ好飲の力を得。
聞君過雲龍。對酒兩靜默。
聞く君雲龍に過ぎり、酒に對して兩ながら靜默と。
急攜淸歌女。出郭及未昃。
急に淸歌の女を攜へ、郭を出でて未だ昃かざるに及ぶ。
一歡難力致。邂逅有勝特。
一歡力致し難く、邂逅勝特あり。
喧蜂集晚花。亂雀啅叢棘。
喧蜂は晚花に集まり、亂雀は叢棘に啅し。
山人樂此耳。寂寞誰侍側。
山人此を樂むのみ、寂寞誰か側に侍らん。
何當求好人。聊使治要襋。
何か當に好人を求め、聊か要襋を治めしむべき。
使君自孤僨。此理誰相値。
使君自ら孤僨、此理誰か相値ふ。

不レ如學養生。一氣服二千息一。　如かず養生を學び、一氣に千息を服せんには。

【字解】【一】肉食嘗苦レ墨　左傳、哀公十三年に、公會二單平公・晉定公・吳夫差于黃池一、吳・晉爭レ先、司馬寅曰、請姑視レ之、反曰肉食者無レ墨、今吳王有レ墨、國勝乎。大子死乎。杜預の注にいふ、墨、氣色下也と。氣色がどんよりとして、少しも引き立たない。肉食のものとは爵祿ある人。【三】軒然　笑ふ貌。天祿外史(書名)に韓王軒然仰笑。後漢、蓟子訓傳に、軒渠笑悅、欲二往就レ之。【三】靜默　南史、齊、高帝紀に、深沈靜默、常有二四海之心一。【四】清歌　曹植、洛神賦に、馮夷鳴レ鼓、女媧清歌。【五】及レ未レ戾　易に日中則昃。【六】一歡難二力致一　晉書、劉毅傳に、合二一歡一甚難。韓退之の柳子厚墓志に、其文學詞章、必不レ能二自以力致一、必傳二於後一。【七】邂逅　期せずしてめぐり會ふ。詩、鄭風、野有蔓草篇に、野有二蔓草一、零露漙兮、有二美一人一、清揚婉兮、邂逅相遇、適二我願一兮。【八】勝特　凡そ事物優越するもの、皆、之を勝といふ。形勝・名勝などの類。【九】喧蜂　杜子美の詩に、花暖密蜂喧。【一〇】集二晚花一　杜子美の詩に、疏籬帶二晚花一。【一一】亂雀啅二叢棘一　杜子美の詩に、雀啅二江頭一黃柳花。周易に、寘二於叢棘一。【一二】治二要櫛一　詩、國風に、糾糾葛屨、可二以履レ霜、摻摻(女の手の細く好き貌)女子、可二以縫レ裳一、要レ之襋レ之、好人服レ之。注にいふ、要、褄也、襋、領也、好人、好女手之人と。【一三】孤憤　前漢、匈奴傳に、冒頓爲レ書、遺二高后一曰、陛下獨立、孤憤獨居、兩主不レ樂、無二以自虞一。漢書注にいふ、憤、仆也、猶レ言レ不レ能二自立一也、則獨居無レ偶、可二以言二孤憤一矣。虞は娛と同じ。【一四】一氣服二千息一　晉、許邁傳に、常服レ氣、一氣千餘息。

【題義】李公擇が張雲龍の山居に過ぎつたと聞いて、東坡は直に之に赴いた。公擇が詩を示したから、其の韻を用ひて、之を作つたのである。

【詩意】我が生活は、固より心配が絶えない。所謂肉食するも、常に墨を苦んで居るものである。昔、魯君は周の單平公・晉の定公・吳の夫差とに黃池で會合された。吳と晉と先を爭ふ。(盟のとき、血をす

送二李公擇一　李公擇を送る

嗟予寡二兄弟一。四海一子由。　嗟予兄弟寡く、四海に一の子由。

するの前後を爭ふ)司馬寅、(晉の大夫)曰く、請ふ姑く吳王の許に行いて之を視ようと。出でて反り來つていふ、肉食のもの、卽ち爵祿ある人は、其の氣色の引き立たぬことはないのに、今、吳王の氣色を視ると、何となく憂へて引き立たない容子が見える。これは察するに吳國が敵の爲に勝れしなるか、或は吳の太子が死せしなるか、何れ仔細があらうと。此の故事に據つて、顏色の引き立たないことをいふ。顏色が引き立たないから、軒然としてけば李君には雲龍山人の居に過ぎられ、酒に對し兩人して靜默といふことである。そこで、我も急に清歌の女を携へ、郭を出でて、日のまだ昃かない中に、纔に間に合つた。故に一歡をなすことも出來なく、力も及び難い。ただ期せずして相會ふは、まことに得難いことである。相會ふ處をいふと、あたりには、蜜蜂が喧すしく籬の晚花に集つて居る。亂雀は叢の棘に啅すしく噪いで居る。山人は此の自然を樂しまれる、寂寞として誰も側に侍らない。何か當に好女子を求めて、摻摻(女の手の細く好い貌)たる手を借りて、褄や襋を治めしめたい。使君の李公擇には、自ら立つことが出來なくなつた。此理には誰か相値ふのであらう。要するに養生を學んで、一氣に千餘息なるには如かない。

故人雖云多。出處不我謀。
弓車無停招。逝去勢莫留。
僅存今幾人。各在天一陬。
有如長庚月。到曉爛不收。
宜我與夫子。相好手足侔。
比年兩見之。賓主更獻酬。
樂哉十日飲。衎衎和不流。
論事到深夜。僵仆鈴與騶。
頗嘗見使君。有客如此不。
欲別不忍言。慘慘集百憂。
念我野夫兄。知名三十秋。
已得其爲人。不待風馬牛。
他年林下見。傾蓋如白頭。

故人多しといふと雖も、出處我に謀らず。
弓車招きを停むるなく、逝去勢留むるなし。
僅に存するは今幾人、各天の一陬に在り。
長庚月の、曉に到り爛として收まらざる如きあり。
宜なるかな我は夫子と、相好きこと手足に侔し。
比年兩ながら之を見、賓主更に獻酬す。
樂しいかな十日の飲、衎衎和して流れず。
事を論じて深夜に至り、僵仆す鈴と騶と。
頗る嘗て使君に、客の此の如きあるを見るや不や。
別れんと欲して言ふに忍びず、慘慘百憂集まる。
念ふ我が野夫兄、名を知らる三十秋。
已に其の人と爲りを得、風する馬牛を待たず。
他年林下に見ば、傾蓋白頭の如からん。

【字解】【一】寡兄弟　毛詩に、終鮮兄弟、惟予二人。【二】故人　王文誥いふ、張璁・章惇・李清臣諸人也と。【三】弓車無停招　左傳、莊公二十二年に逸詩を載す、翹翹車乘、招我以弓、豈不欲往、畏我友朋と。【四】逝去勢莫留　文選、曹子建の詩に、義和逝不留。【五】僅存今幾人　司馬光・李師中・范純仁・滕甫・孫覺・錢顗・劉攽・劉摯・楊繪及び李常諸人をいふ。【六】天一陬　杜子美の詩に、各在天一隅。文選、古詩に相去萬餘里、各在天一涯。【七】長庚月云云　李太白の獨酌有懷詩に、孤月滄波河漢清、北斗錯落長庚明。韓退之の詩に、東方未明大星沒、獨有太白配殘月。太白は一名長庚。【八】爛不收　韓退之の劉生詩に、妖歌嫚舞爛不收。【九】與夫子云云　紀昀いふ、相好句、應子由句。【一〇】手足侔　李華の弔古戰場文に、誰無兄弟、如足如手。【一一】比年兩見之　比年は毎年といふに同じ。禮、王制に、諸侯之於天子也、比年一小聘。【一二】獻酬　陶潛の詩に、提壺接賓侶、引滿更獻酬。毛詩に、獻酬交錯。【一三】十日飲　史記、范雎傳に、秦昭王遣平原君書、寡人聞君之高義、願與君爲布衣之交、君幸過寡人、寡人願與君爲十日之飲。【一四】衎衎和不流　柳子厚、序飲に、捨百拜而禮、無叫號而極、不袒裼而逞、非金石而和、去糾逖而密、簡而同、肆而恭、衎衎而從容、於以合山水之樂、成君子之心。衎衎は樂しむ貌。易の漸卦に、飲食衎衎吉。中庸に、君子和而不流。【一五】僵仆鈴與騶　紀昀いふ、此卽倦僕立寐僵屏風一意、而語不明了と。王注に、鈴、守鈴閣者、騶、廐御者。魏志、管輅傳に、烏與鸞鬬、直老鈴下耳。晉、羊祜傳に、鈴閣之下、侍衛者、不過十數人。漢書、東方朔傳に、給騶侏儒。師古いふ、騶、奉廐之御也と。【一六】有客如此不　晉書謝安傳に、桓溫請謝安爲司馬、既到、溫甚喜言平生、歡笑竟日、溫問左右、頗嘗見我有如此客不。【一七】慘慘集百憂　詩、小雅に憂心慘慘。杜子美の詩に、慘慘寸腸悲。王文誥いふ、所憂皆國是也、此詩必如是逐處指出、方是送李公擇詩。【一八】野夫　公擇の兄。名は莘、字は野夫、嘗て江西轉運使となる。東坡、黃より汝に移る、建昌に道して、其の故居を過ぐ。詩ありいふ、何人修水上、種此一雙玉と。蓋し、其の兄弟をいふ。【一九】知名　魏志、曹爽傳に、何晏少以才秀知名。【二〇】得其爲人　孔子世家に、孔子學鼓琴師襄子、有閒曰、有所恰、然高望而遠志焉、曰、邱得其爲人。【二一】風馬牛　書、費誓に、馬牛其風、臣妾逋逃、勿敢越逐。左傳、僖公四年に、唯是風馬牛不相及也。陸游の詩に、醉自醉倒愁自愁、愁與酒如風馬牛。【二二】傾蓋如白頭　鄒陽、獄中上梁王書に、諺曰、有白頭如新、傾蓋如故。家語、致思篇に、孔子之鄒、遭程子於塗、傾蓋而語、終日甚相親。

【題義】公擇と東坡とは、皆、新法を論ずるを以て黜けらる。公擇は濟南に在り、東坡が彭城に赴く

とき、之に過ぎる。公擇は濟南を罷め、復、東坡に彭城に過ぎる。唱酬甚だ多かつたから、故にいふ、比年兩見レ之、賓主更獻酬と。紀昀は此詩を評して、起手從二子由一說入、便親切、末段由二公擇一而愛及二其兄一、則公擇之可レ念、不レ言可レ知、託襯之法、又與二起處子由一、有意無意、互相映發、用筆亦極二縈拂之妙一と言つた。

【詩意】あゝ予(東坡)には兄弟が寡く、四海に唯、一人の子由があるのみである。又、張琥・章惇・李淸臣等親しい友達も多いが、我と出處進退を相談しない。古詩に翹翹(秀起の貌、車の壯なるをいふ)たる車乘、我を招くに弓を以てす。豈往くことを欲せざらんや、我が友朋を畏るとある。翹翹と盛壯な車乘中で、我を招くに弓を以てするものがある。我も之に應じて、行きたい心の起らないのでもないが、行くと、我が朋友に譏り責められる懼があるから、其の招きに應じないといふ意である。今、弓車の招きを停めるのでないが、逝き去つて、其の勢は、留めることがない。僅に存する故人は、今、幾人であらう。而も、各〻天の一隅にある。太白星は一名長庚といふが、殘月に配して曉に到り、爛として收まらざるが如きやうである。之を見るにつけても、我は夫子と相好いこと、足の如く手の如きのも、尤もであると思ふ。每年兩者相見え、賓となり主となつて、滿を引いて更に獻酬する。昔、秦の昭王は、平原君に書を遺つて、願くは君と布衣の交りを爲さん。願くは君と十日の飮を爲さんと言つたが、樂しいかな十日の飮、衎衎(樂しい貌)として和して流れない。王文誥いふ、以上五韻、謂下僅存之人、雖二氣節不レ改、而不レ可二一見一、故與二公擇一相得益深上也と。)さて事を論じて深夜に至り、鈴閣を守るものと、廐御者とを立ち寐むらして僵仆した。嘗て使君(李公擇)に此の如き客を見るや否や。別れようとして言ふに忍びず、慘慘(痛みかなしむ貌)として百憂が集まる。我が野夫兄(公擇の兄)は、名を知られることここに三十秋。既に其の人と爲りが解つた。風する(放のつく)馬牛の牝牡相誘つて、遠く放逸するのを待たない。他年、林下に相見ば、蓋を傾けて語り、終日相親しんで、白頭新なるが如くに致さう。諺にも白頭新なるが如く、傾蓋故の如しとある。

送二筍芍藥與二公擇一二首　筍と芍藥とを送りて公擇に與ふ　二首

久客厭二鹵饌一(一)。梈然思二南烹一(二)。
久客鹵饌を厭ひ、梈然南烹を思ふ。

故人知二我意一。千里寄二竹萌一(三)。
故人は我が意を知り、千里竹萌を寄す。

駢レ頭玉嬰兒(四)。一一脫二錦綳一(五)。
頭を駢ぶ玉嬰兒、一一錦綳を脫す。

庖人應レ未レ識(六)。旅人眼先明。
庖人應に未だ識らざるべし、旅人眼先づ明かなり。

我家拙二廚膳一(七)。彘肉(八)芼蕪菁(九)。
我が家は廚膳拙に、彘肉蕪菁を芼す。

送與二江南客一。燒煮配二香粳一(一〇)。
送りて江南の客に與へ、燒煮して香粳を配す。

【字解】【一】鹵饌　東北人の具食。東坡の自注に、蜀人謂二東北人鹵子一。饌は膳立した食物。【二】梈然　莊子、逍遙遊に、非レ不二呺然大一也。呺然は虛大の貌。【三】竹萌　筍を竹萌といふは、筍譜に出づ。老蘇の詩に、竹萌抱二淨節一。爾雅に、筍、竹萌也。

【四】玉嬰兒　吳筠の竹賦に、一筍明二其胤嗣一、三節獲二乎嬰兒一。【五】錦襖　儲光羲の筍詩に、稚子脫二錦襖一、駢レ頭玉香滑。白樂天の食レ筍詩に、紫籜拆二故錦一、素肌擘二新玉一。【六】庖人　料理人の義。莊子、逍遙遊に、許由曰、庖人雖レ不レ治レ庖、尸祝不下越二樽俎一而代上也。【七】廚膳　文選、張平子の南都賦に、若二其廚膳一、則有二華鄰・重秬・澁皐・香秔一。【八】豨肉　豨は豬。【九】芼蕪菁　芼は芼羹、野菜と肉とをまぜた羹。禮記に、芼羹菽麥。疏にいふ、芼者用レ菜、雜レ肉爲レ羹と。蕪菁は、かぶら。詩、邶風の疏に、葑、蕪菁、幽州人、或謂二之芥一。【一〇】香粳　香のよい米。唐書、地理志に、蘇州吳郡、貢二大小香秔一。

【題義】前首は筍、後主は芍藥。紀昀いふ、此種本是代レ柬、不二以詩論一、編次者、失二於沙汰一、遂成二痕瘢一と。痕は瘢痕の意である。

【詩意】我は客遊して久しく東北に在り、東北人の膳立も厭になつた。腹も何となく虛大となつたやうな心持がするから、南方の調味を思うて已まない。故人は我が意を知つたと見え、千里の遠方から態わざわざ筍を寄せ來つた。竹萌は筍である。其の頭を駢べた形は、玉の嬰兒である。そして一一錦籜を脫した。料理人は未だ識らないであらうが、旅人の我が眼には先づ明かである。我家は兎角、料理が拙であつて、豚の肉や、野菜と肉とを雜せた羹、蕪菁などの類、すべて江南の客に與へ、よく燒き、よく煮て、香粳をも配つた。

今日忽(一)不レ樂。折盡園中花。今日忽ち樂まず、折り盡す園中の花。
園中亦何有。芍藥裊殘葩(二)。園中亦何かある、芍藥裊殘葩。

久旱復遭レ雨。紛披亂(三)泥沙(四)。久しく旱して復雨に遭ひ、紛披泥沙を亂る。
不レ折亦安用。折去還可レ嗟。折らずんば亦安んぞ用ひん、折り去らば還嗟くべし。
棄擲亮未レ能。送與謫(五)仙家。棄擲亮に未だ能はず、送與す謫仙の家。
還將二一枝春(六)一。插向兩髻丫(七)。還一枝の春を將ちて、插んで向ふ兩髻丫。

【字解】【一】忽不レ樂　毛詩に、今我不レ樂、日月其邁。【二】裊殘葩　裊は柔く美しい貌。殘葩は殘花といふに同じ。葩は花びら。柳子厚の詩に、貯レ愁聽二夜雨一、隔レ淚數二殘葩一。【三】紛披　杜子美の寄二李參一詩に、是節東籬菊、紛披爲レ誰秀。【四】泥沙　杜牧之の阿房宮賦に、用レ之如二泥沙一。韓退之の詩に、紛紛落盡泥與レ沙。【五】謫仙家　天上界から人間界にながされた仙人。唐書、李白傳に、賀知章見二其文一嘆曰、子謫仙人也。【六】一枝春　陸凱の寄レ梅詩に、江南無レ所レ有、聊贈一枝春。東坡の詩、特に其字面を借り用ふ。【七】兩髻丫　歐陽文忠公の詩に、小婢立二我前一、赤脚兩髻丫。髻丫はあげまきに結んだ髮。

【詩意】今日忽ち不愉快な心地になつたので、之を慰めんものをと園中の花を折り盡した。園中には亦、何の花もない。ただ芍藥だけが柔かく美しく、花びらを殘して居る。旱が久しくつづいて、雨に遭つたから、花も紛紛落ち盡して、泥と沙とに亂れ込んだ。枝を折らなければ、花の用をなさない。折り去らば、また嗟かはしい。棄て擲つことも、流石に出來ない。それで謫仙人の家に送與する。そして又、一枝の春を將て、兩つのあげまきに插すこととする。

【餘錄】戴凱之の竹譜に、竹之別類、有二六十一焉一、有二桂竹一、甚毒、傷レ人必死、有二箭竹一、節間三尺、堅勁中レ爲レ矢、箘簬、亦皆堪レ爲二矢箭一、大者爲レ筆、鍾龍竹、伶倫所レ伐也。竹の子を笋といふ、笋は

筍に同じ、笋譜に、一名萌、一名蒻竹、一名篁、一名竹胎、一名竹牙、一名茁、一名初篁。芍藥は牡丹の亞、本草に、一名將離、一名可離、相謔則贈、故鄭詩有贈之以芍藥之句。至其色、世傳以黃者爲勝、謂此花獨產於廣陵者、爲得風土之正、亦猶牡丹洛陽之外無傳焉。

和孫莘老次韻

孫莘老に和して韻に次す

去國光陰春雪消。　國を去つて光陰春雪消え、
還家踪跡野雲飄。　家に還つて踪跡野雲飄る。
功名正自妨行樂。　功名正に自ら行樂を妨げ、
迎送纔堪博早朝。　迎送纔に堪へたり早朝を博するに。
雖去友朋親吏卒。　友朋を去ると雖も吏卒に親しみ、
却辭讒謗得風謠。　却つて讒謗を辭して風謠を得。
明年我亦江南去。　明年我亦江南に去らば、
不問雄繁與寂寥。　問はず雄繁と寂寥とを。

【字解】【一】孫莘老　孫覺字は莘老、高郵の人。官、龍圖學士たり。王安石の爲に逐はる。安石退いて、鐘山に居る。覺、扁舟造り訪ふ。其の卒するに及び、文を作りて誄す。談者、覺の雅量を稱す。【二】光陰　云云　文選、江文通の別賦に、光陰往來。【三】踪跡　李太白の詩に、譬如雲中鳥、一去無蹤迹。【四】妨行樂　晉、向秀傳に、秀欲注莊子、嵇康曰、此書詎復須注、正自妨人作樂耳。揚惲の詩に、人生行樂耳、須富貴何時。李太白の詩に、行樂須及春。【五】博早朝　白樂天の詩に、昏昏一覺睡、不博早朝人。また、鷄鳴猶獨睡、不博早朝人。史記、越世家に、君王蚤朝晏罷非爲吳邪。【六】得風謠　後漢、李郃傳に、和帝分遣使者、各至州縣觀採風謠。【七】雄繁　劇郡を指していふ。【八】寂寥　南史、梁元帝の詩に、寂寥千載後、誰畏軒轅臺。山海經に、西王母之山、有軒轅臺、射者不敢西向。

【題義】此詩は元豐元年三月の作である。王文誥いふ、公赴密州、過高郵、莘老方憂居時、已起知蘇州、旋由蘇徙福と。紀昀は此詩を評していふ、露骨太甚と。

【詩意】一別國を去つてから、光陰は春の雪の如くに消え去つた。又、家に還つて蹤跡を尋ねると、野雲の飄へるやうな思がある。人生は行樂のみ、行樂は須らく春に及ぶべきである。功名の事は、自ら行樂を妨げる。白樂天の詩に、雞鳴猶ほ獨り睡る、博せず早朝の人とあるが、迎送の際、纔に早朝を買ふことが出來た。今、我は友朋を去つたが、幸に吏卒と親しみ、却つて讒謗を辭し、州縣に至つて、風謠を觀採することが出來た。明年亦江南の方へ行くことにならば、劇郡であることや、寂寥であることなどは、少しも構はない。

【餘錄】宋、史容（字は公儀、薌室居士と號す、青衣の人、官は太中大夫に至る。山谷外集注あり。）は山谷集に注していふ、莘老前後典郡、自廣德、徙湖州、又徙廬州、持祖母喪、服除、知蘇州、先生倅杭時、莘老自湖移廬、有詩送之と。今、是の詩の作は、當に莘老が、蘇州に知たる時に在るべし。故に結處に、明年我亦江南去の句がある。

遊張山人園

壁間一軸烟蘿子。
盆裏千枝錦被堆。
慣與先生爲酒伴。
不嫌刺史亦顏開。
纖纖入麥黃花亂。
颯颯催詩白雨來。
聞道君家好井水。
歸軒乞得滿瓶回。

壁間の一軸烟蘿子、
盆裏の千枝錦被堆。
先生の與に酒伴と爲るに慣れ、
刺史を嫌はず亦顏開く。
纖纖麥に入つて黃花亂れ、
颯颯詩を催ほして白雨來る。
聞道らく君の家井水好しと、
軒に歸るとき滿瓶を乞ひ得て回らん。

【題義】東坡が張雲龍の花園に遊んだ時の感想である。紀昀いふ、似老而實率と。

【字解】【一】張山人　雲龍山人張天驥のことである。前に出づ。【二】烟蘿子　王注に、今所畫修養者多有之。經籍志に、烟蘿子、內眞通玄歌一卷あり。又、烟蘿子、養神關鎖祕訣圖一卷あり、烟蘿子は蓋し古の仙を學んで道を得たるもの。【三】錦被堆　一名粉團兒。花は月桂の如くにして小粉、紅色或は微黃色、葉も亦、相類して刺あり。枝柯は纖長、高さ丈餘。往往架を作りて之を承く。唐、楊巨源の看花詩に、一林堆錦映千紅。【四】爲酒伴　杜子美の江上尋花詩に、走覓南鄰愛酒伴。韓退之の詩に、多情懷酒伴。【五】顏開　喜びて笑ふ。李太白の詩に、開顏酌美酒、樂極忽成醉。【六】纖纖　細く尖りて鋭い。古詩に、兩頭纖纖月初生。【七】黃花亂　司空圖の郊園詩に、綠樹連邨暗、黃花入麥稀。【八】颯颯催詩　杜子美の詩に、寒雨颯颯枯樹湯。李義山の詩に、颯颯東南細雨來。杜子美の丈八溝納涼詩に、片雲頭上黑、應是雨催詩。【九】白雨　驟雨といふに同じ。東坡の詩に、白雨跳珠亂入船。白樂天の悟眞寺詩に、赤日閒白雨、陰晴同一川。

【詩意】壁間に掛けてある軸物は、烟蘿子の畫像である。烟蘿子は、古の仙を學んで道を得たものである。又、盆裏の千枝は錦被堆、一名を粉團兒と呼ぶ。花は月桂の如くにして小、色は紅、或は微黃で、楊巨源の所謂、一林の堆錦千紅に映ずといふものである。花は張先生と酒伴を爲すことに慣れ、又、此の刺史をも嫌はないで、笑を帶びて開いて居る。纖纖として細く尖つて、麥に入つては黃花が亂れ、颯颯と詩を催して、驟雨が來るかと疑はる。承はれば君が家の井水は味が好いといふことである。我が軒に歸るとき、瓶に一杯、其の井水を乞ひ得て回りたいものである。

杜介熙熙堂

崎嶇世路最先回。
窈窕華堂手自開。
咄咄何曾書怪事。
熙熙長覺似春臺。
白砂碧玉味方永。
黃紙紅旂心已灰。
遙想閉門投轄飲。

杜介の熙熙堂

崎嶇世路最も先に回る、
窈窕華堂手自ら開く。
咄咄何ぞ曾て怪事を書する、
熙熙長く覺ゆ春臺に似たるを。
白砂碧玉味方に永く、
黃紙紅旂心已に灰。
遙に想ふ門を閉ぢ轄を投じて飲むを、

【字解】【一】杜介　字は幾先、揚州の人。查注に、居平山堂、見本集。【二】崎嶇　山路の嶮しきより世路の困難なる義に用ふ。宋史、文天祥傳論に、天祥崎嶇嶺海、兵敗身執。【三】窈窕　深邃の義。歸去來の辭に、既窈窕以尋壑。亦崎嶇而經丘。王文考の靈光殿賦に、旋室嬋娟以窈窕。【四】咄咄何曾書怪事　咄咄は驚き怪む聲。晉書、殷浩傳に、浩被黜、談詠不輟、雖家人不見其

〔一〇〕鵾絃鐵撥響如雷。

鵾絃鐵撥響は雷の如からん。

怪事四字一而已。杜子美の詩に、焉能學二衆口一、咄咄空咨嗟。【五】熙熙長覺似二春臺一　熙は嬉と通ず、悅び樂む貌。衆人熙熙、如享二太牢一、如二春臺一。荀子、儒效篇に、熙熙兮其樂三人之臧一也。【六】碧玉　神仙傳に、殷七七每醉歌曰、琴彈碧玉調、爐養白硃砂。【七】黃紙紅旗　白樂天の劉十九同宿詩に、紅旗破レ賊非二吾事一、黃紙除書無二我名一。勅に黃紙を用ひるは、唐の高宗より始まる。【八】心已灰　心が灰の如く、何の欲望もなき意。莊子、齊物論に、形固可レ使レ如二槁木一、而心固可レ使レ如二死灰一乎。王炎の詩に、百念漸灰冷、有レ牛不レ須レ牧。【九】投レ轄　漢書、遊俠傳に、陳遵每二大飲一、輒關レ門、取二客車轄一、投二井中一、雖レ有レ急、終不レ得レ去、嘗有二部刺史一、奏レ事過レ遵、値二其方飲一、刺史大窮、候二遵霽醉時一、突入見二遵母一、叩首白レ當レ對二尙書一、有二期會一狀、母乃令レ從二後閤一出去。【一〇】鵾絃鐵撥　劉孝綽の烏夜啼樂府に、鵾絃且輟レ弄、鶴操暫停レ徽。五代史補に、馮道之子、能彈二琵琶一、以レ皮爲レ絃、世宗號二繞殿雷一。

【題義】 杜介が熙熙堂を賦したのである。王文誥いふ、杜介嘗官二供奉一時、已歸老、故云二崎嶇世路最先回一也と。

【詩意】 世路は嶮しくて、歩行に難むから、杜幾先は同行の人よりも、最も先に回へつた。官を罷めて歸老しようと欲したからである。かくて窈窕（深邃をいふ）と奥深い地を尋ねて、其處に美しい平山堂といふを手自ら開いたのである。晉の殷浩は放黜されたが、口に怨言がなく、但、終日空に書いて咄咄怪事の四字を作したといふことである。今、幾先は咄咄、何ぞ曾て怪事と書かうぞ、決して書きはしない。ただ嬉嬉として恰も春の長閑な日に、高い樓臺に登つて四方を眺めたときのやうに、心が浮き立つて居るのを覺える。仙人の琴は、碧玉調を彈じ、仙人の爐は、白硃沙を養つて居る。白砂碧玉の味は、眞に盡きないで、所謂不老長生の望がないのでもない。黃紙は昔から敕を書くに用ひる紙であるが、黃紙の任命書には我が名前は見えない。又、紅旗を立てて賊を破るも、吾が事でない。我心は既に灰の如くで、欲望も何も無くなつた。漢の陳遵は大飲酒の催しある每に門を關ぢて、客の車轄を井の中へ投じ、其の家へ歸ることをば許さなかつたといふ。遙に想ふ、君も亦、門を閉ぢ轄を投じて酒を飲んで居られることを。そして席上鵾雞（鵾は雞の類）の絃や、鐵製の撥は、宛ら雷の如くに響いて、人をして盛宴を思はしめる。

次韻答劉涇

次韻して劉涇に答ふ

吟レ詩莫レ作二秋蟲聲一。詩を吟ずるも秋蟲の聲を作すこと莫れ、
天公怪二汝鉤レ物情一。天公汝が物を鉤する情を怪んで、
使二汝未レ老華髮生一。汝をして未だ老いざるに華髮を生ぜし〔む。〕
芝蘭得レ雨蔚青青。芝蘭雨を得て蔚として青青、
何用自燔以出レ馨。何ぞ用ひん自ら燔いて以て馨を出すこ〔とを。〕
細書千紙雜二眞行一。細書千紙眞行を雜へ、
新音百變口如レ鶯。新音百變口鶯の如し。

【字解】 【一】秋蟲聲　韓退之の送二孟東野一序に、以レ蟲鳴レ秋。孟東野の秋懷詩に、吟蟲相唧唧。【二】天公　天帝に同じ。晉書、天文志に天公憒憒。憒憒は、心の亂れる貌。【三】未老　韓退之の河之水詩に、三年不レ見レ汝、使レ我鬢髮、未レ老而先化。【四】華髮　白樂天の洛陽春詩に、中有二老朝客一、華髮映二朱軒一。【五】芝蘭　靈芝と蘭草。孔子家語、六本に、與二善人一居、如レ入二芝蘭之室一、久而不レ聞二其香一、與レ之俱化矣。

異義蜂起弟子爭。
舌翻濤瀾卷齊城。
萬卷堆胸兀相撐。
以病爲樂子未驚。
我有至味非煎烹。
是中之樂吁難名。
綠槐如山闇廣庭。
飛蝨繞耳細而清。
敗席展轉臥見驚。
亦自不嫌翠織成。
意行信足無溝坑。
不識五郎呼作卿。
吏民哀我老不明。
相戒無復煩鞭刑。

異義蜂起して弟子爭ひ、
舌濤瀾を翻へして齊城を卷く。
萬卷胸に堆く兀として相撐へ、
病を以て樂みとなして子未だ驚かず。
我に至味あり煎烹にあらず、
是の中の樂み吁名け難し。
綠槐山の如く廣庭に闇く、
飛蝨を繞つて細かにして清し。
敗席に展轉して臥し見て驚き、
亦自ら翠織の成るを嫌はず。
意行足に信せて溝坑なし、
識らず五郎を呼んで卿となすを。
吏民我が老いて不明なるを哀み、
相戒めて復鞭刑を煩はすことなし。

【六】 蔚青青　陳子昂の詩に、蔚若主春夏、芊蔚何青青。【七】 自燒以出聲　漢、兩龔傳に、薰以香自燒、膏以明自消。【八】 雜眞行　法書苑に、晉世以來、工書者、多以行書著名、兼眞者、謂之眞行、帶草者、謂之行草。雲煙過眼錄に、鮮于伯機藏帖一冊、內有劉涇巨濟墨帖一紙、則涇、固善書也。【九】 蜂起　劉伯倫の酒德頌に、陳說禮法、是非蠭起。【一〇】 舌翻濤瀾卷齊城　漢、蒯通傳に、說信曰、酈生一士、伏軾掉三寸舌、下齊七十餘城。韓退之詩に、挈攜陬維口瀾翻。【一一】 闇廣庭　文選、張平子の東京賦に、并夾旣設、儲乎廣庭。【一二】 飛蝨繞耳　白樂天の蚊詩に、繞耳聲嚶嚶。爾雅翼に、飛蝨、狀如蜜蜂、黃黑色。【一三】 展轉臥見驚　毛詩に、輾轉不寐。同じく國風に、輾轉伏枕。驚の

時臨泗水照星星。
微風不起鏡面平。
安得一舟如葉輕。
臥聞郵籤報水程。
蓴羹羊酪不須評。
一飽且救飢腸鳴。

時に泗水に臨んで星星を照らせば、
微風起らず鏡面平なり。
安んぞ一舟の葉の如く輕きを得て、
臥して郵籤の水程を報ずるを聞かん。
蓴羹羊酪評することを須ひず、
一たび飽き且つ救はん飢腸の鳴るを。

字、一本に經に作る。說苑に、孔子困於陳蔡、居環堵之室、絃三經之席。【一四】 絜綫成　杜子美の張舍人織成褥段詩に、容從西北來、遺我絜織成。【一五】 意行信足　白樂天の野行詩に、信脚望花行。【一六】 五郎呼作卿　唐、宋璟傳に、嘗宴朝堂、二張（張易之・張昌宗）列卿、三品、璟階六品、居下坐、易之詔事璟、盧位揖曰、公第一人、何下坐、璟曰、才劣品卑、卿謂第一何耶、是時朝廷以易之等內寵、不名其官、呼易之五郎、昌宗六郎、鄉善果謂璟曰、公奈何謂五郎爲卿、璟曰、以官正當爲卿、君非其家奴、何郎之云。按するに武承嗣、三思等、易之を謂つて五郎となし、昌宗を六郎となす。郎は、門生・家奴が其の主を呼ぶの稱。【一七】 哀我老　後漢、馬援傳に、顚哀老子、使得遨遊。【一八】 無復煩鞭刑　唐、徐有功傳に、補蒲州司法參軍、爲政仁、不忍杖罰、民服其恩、更相約曰、犯徐參軍杖者、必斥之、訖不解久、星星行復出。歐陽永叔の秋聲賦に、黯然黑者爲星星。黯は黑なり。星は白なり。文選、謝靈運の南亭詩に、戚戚感物歎、星星白髮垂。【一九】 照星星　宋書、謝靈運傳に、何長瑜讀語云、陸展染須髮、欲以媚側室、青青杜子美の詩に、宿槳依農事、郵籤報水程。【二〇】 鏡面平　白樂天の登東樓詩に、水心如鏡面、千里無纖塵。【二一】 郵籤　驛館の更籌。更籌は夜の時を計る器曰、人生貴得適意、何爲羈宦數千里、以要名爵乎。【二二】 蓴羹羊酪　陸機傳に、王濟指羊酪、謂機曰、吳中何以敵此、答曰、千里蓴羹、未下鹽豉。【二四】 一飽且救飢腸　陶淵明の詩に、傾身營一飽、少許便有餘。韓退之の詩に、棼酣大肚遭一飽、飢腸徹死無由鳴。